

東北タイにおける言語と帰属意識

D0855015

山下 明 博

広島大学大学院国際協力研究科博士論文

2003年3月

広島大学大学院国際協力研究科

論文名：東北タイにおける言語と帰属意識

学位の名称：博士（学術）


学生番号：D0855015


氏名：山下明博


2003年2月6日


審査委員会


委員長・教授

松尾雅嗣 

高谷弘夫 

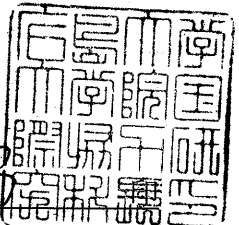
吉田 修 

上原麻子 

中川和仁 

2003年3月3日

研究科長

齊藤公男 

# 目次

## 第1章 東北タイにおける民族と言語

1. 1 東北タイとイサン
1. 2 タイ諸族とその歴史
1. 3 タイ諸語
1. 4 言語名称の整理
1. 5 タイの主要言語とイサン語
1. 6 タイにおける言語の表記体系
  1. 6. 1 タイ国内における表記体系の先行研究
  1. 6. 2 東北タイで使用された表記体系
  1. 6. 3 タイ文字とラオ文字
1. 7 国民国家形成と言語政策
1. 8 イサンのタイ国内における位置付け
1. 9 課題設定
1. 10 論文の構成

## 第2章 東北タイにおける言語調査

2. 1 先行研究
  2. 1. 1 多言語使用についての先行研究
  2. 1. 2 言語間の関係認識についての先行研究
2. 2 調査票の設計：言語生態系調査のための幾つかの前提
  2. 2. 1 ハウゲンの規準との関係
  2. 2. 2 言語の問題
2. 3 調査項目
  2. 3. 1 回答者属性
  2. 3. 2 多言語使用の実態に関する設問群
  2. 3. 3 諸言語の関係についての認識に関する設問群
  2. 3. 4 呼称と帰属意識を問う設問群
  2. 3. 5 その他の設問群
2. 4 調査の実施
  2. 4. 1 スモーリーの調査
  2. 4. 2 東北タイ住民の言語使用と言語認識に関する予備調査
  2. 4. 3 東北タイ住民の言語使用と言語認識に関する本調査

## 第3章 東北タイにおける言語使用の実態

3. 1 多言語使用の指標化
  3. 1. 1 多言語化指標 M (一人当たりの使用言語数)
  3. 1. 2 多言語人口比率 P (2言語以上を使用できる構成員の比率)
  3. 1. 3 内部集団ごとの多言語使用度
3. 2 家庭言語

- 3. 2. 1 父親・母親と話す言語
- 3. 2. 2 父母と話す言語と子どもと話す言語
- 3. 2. 3 家庭言語と母語
- 3. 3 言語能力
  - 3. 3. 1 調査結果
  - 3. 3. 2 東北タイ全体における十分言語能力
  - 3. 3. 3 東北タイにおける言語の浸透度
  - 3. 3. 4 属性
  - 3. 3. 5 言語能力に関する小括
- 3. 4 言語の選択
  - 3. 4. 1 言語使用
  - 3. 4. 2 言語使用域ごとの検討
    - (1) 役人と役場で話す言語
    - (2) 僧侶と話す言語
    - (3) 友人と話す言語
    - (4) 子どもと話す言語
  - 3. 4. 3 言語使用に関する小括

#### 第4章 タイ語・イサン語・ラオ語の関係：異同、包含と階層化

- 4. 1 言語間関係とその認識についての諸指標
  - 4. 1. 1 言語の異同・包含関係
  - 4. 1. 2 認識上の言語間の距離
  - 4. 1. 3 言語集団への言語の浸透度と被浸透度
  - 4. 1. 4 集団ごとの多言語化指標  $M_i$
- 4. 2 東北タイにおける言語間関係の認識
  - 4. 2. 1 異同・包含関係
    - 4. 2. 1. 1 タイ語、ラオ語、イサン語の関係
    - 4. 2. 1. 2 タイ語、イサン語、ラオ語の認識上の距離
  - 4. 2. 2 言語の序列化
    - 4. 2. 2. 1 タイにおける諸言語の序列化
    - 4. 2. 2. 2 序列化の諸基準
  - 4. 2. 3 言語集団への言語の浸透度と被浸透度
  - 4. 2. 4 言語使用域と序列化
  - 4. 2. 5 東北タイにおける言語の階層化

#### 第5章 呼称と帰属意識

- 5. 1 東北タイの民族の呼称と帰属認識
- 5. 2 タイにおけるタイ系3民族<タイ人><コンムアン人><ラオ人>の呼称
  - 5. 2. 1 中央タイのタイ人 (<タイ人>)
  - 5. 2. 2 北タイのコンムアン人 (<コンムアン人>)
  - 5. 2. 3 東北タイのイサン人 (<ラオ人>)
  - 5. 2. 4 新たな「タイ人」の概念の構築とラオに対する蔑視

- 5. 2. 5 タイ人から新たな<タイ人>へ
- 5. 3 東北タイにおける呼称
  - 5. 3. 1 自らの呼称
  - 5. 3. 2 自称間の序列
  - 5. 3. 3 属性ごとの自称の検討
  - 5. 3. 4 小括
- 5. 4 東北タイにおける帰属意識
  - 5. 4. 1 帰属意識の調査結果
  - 5. 4. 2 小括
- 5. 5 言語紛争と民族紛争の不在
- 5. 6 呼称と帰属意識による階層化

## 第6章 コラート人とコラート語

- 6. 1 コラート人とコラート語についての先行研究
- 6. 2 コラート人とコラート語に関する調査結果
  - 6. 2. 1 十分言語能力
  - 6. 2. 2 言語使用域
  - 6. 2. 3 言語の異同・包含関係
  - 6. 2. 4 呼称と帰属意識
  - 6. 2. 5 小括
- 6. 3 言語境界
  - 6. 3. 1 言語境界
  - 6. 3. 2 コラート語の認識
  - 6. 3. 3 言語階層とコラート語
- 6. 4 コラート人の抱く帰属意識

## 第7章 結論

- 7. 1 調査と本論文の意義
- 7. 2 多言語地域としての東北タイ
- 7. 3 東北タイの住民の言語認識
- 7. 4 呼称と帰属意識
- 7. 5 言語と民族の階層化
- 7. 6 コラート人とコラート語
- 7. 7 言語紛争と民族紛争の不在
- 7. 8 将来の検討課題

## 謝辞

## 引用文献

付録A. 東北タイにおける言語認識に関するアンケート調査（調査票）

付録B. 属性とグループ化

- (1) 地域別
- (2) 性別
- (3) 年齢別
- (4) 居住地別
- (5) 家庭言語別

付録C. 単純集計

- (1) 地域別
- (2) 性別
- (3) 年齢別
- (4) 居住地別
- (5) 家庭言語別
- (6) 設問毎の単純集計

付録D. 地域別集計

付録E. 性別集計

付録F. 年齢別集計

付録G. 居住地別集計

付録H. 家庭言語別集計

付録I. タイ語ラオ語仮想キーボードの開発

## 図表等一覧

- (1) 表一覧
- (2) 図一覧
- (3) 地図一覧
- (4) 写真一覧

### (1) 表一覧

- 表1. 1 タイの言語別人口推計(1989年)
- 表1. 2 タイの地域別人口と面積(2000年)
- 表1. 3 「タイ語」の名称の範囲
- 表1. 4 「ラオ語」の名称の範囲
- 表1. 5 ラオ語とイサン語の言語人口の推定値
- 表1. 6 タイ(Tai)諸語の言語分類
- 表1. 7 主要地域言語の名称と分類
- 表1. 8 タイ文字とラオ文字の対応関係
- 表3. 1 父親と話す言語(複数回答あり)
- 表3. 2 母親と話す言語(複数回答あり)
- 表3. 3 父母と話す言語の使用比率の差
- 表3. 4 家庭内で使用される言語
- 表3. 5 十分言語能力(複数回答あり)
- 表3. 6 限定言語能力(複数回答あり)
- 表3. 7 十分言語能力と限定言語能力のピアソンの相関係数
- 表3. 8 一人当たりの自由に話せる言語数
- 表3. 9 自由に話せる言語数
- 表3. 10 東北タイの大学生の理解可能言語(複数回答あり)
- 表3. 11 各言語の浸透度
- 表3. 12 家庭言語としてタイ語のみを使用する者の地域別十分言語能力
- 表3. 13 家庭言語集団ごとの多言語化指標
- 表3. 14 家庭言語集団ごとの多言語人口比率
- 表3. 15 言語使用域と使用比率(複数回答あり)
- 表3. 16 言語使用域と使用比率:タイ語とその他の言語(複数回答あり)
- 表3. 17 東北タイの大学生が公的・私的な言語使用域で使う言語(複数回答あり)
- 表3. 18 役人と役場で話す言語(複数回答あり)

- 表3. 19 地域と家庭言語話者数の関係
- 表3. 20 僧侶と話す言語(複数回答あり)
- 表3. 21 タイ語のみを家庭言語とする者
- 表3. 22 友人と話す言語(複数回答あり)
- 表3. 23 子どもと話す言語(複数回答あり)
- 表3. 24 東北タイの家庭言語と子どもに対する言語の関係
- 表4. 1 a語とb語の関係の定義
- 表4. 2 イサン語とタイ語の関係(1)
- 表4. 3 イサン語とタイ語の関係(2)
- 表4. 4 イサン語とラオ語の関係(1)
- 表4. 5 イサン語とラオ語の関係(2)
- 表4. 6 ラオ語とタイ語の関係(1)
- 表4. 7 ラオ語とタイ語の関係(2)
- 表4. 8 東北タイの大学生のタイ語・イサン語・ラオ語の言語認識
- 表4. 9 タイ語、イサン語、コラート語相互の浸透度
- 表4. 10 各母語集団の多言語化指標
- 表4. 11 イサン語家庭言語集団とコラート家庭言語集団のタイ語を除く多言語化指標
- 表4. 12 シンガポールとマレーシアにおける英語教育を受けた  
華人にとってのポリグロッシアと言語の階層化
- 表4. 13 言語使用域と使用比率(複数回答あり)(表3. 15再掲)
- 表5. 1 「あなたは、自分をラオ人と呼ぶことがありますか？」に対する回答
- 表5. 2 東北タイにおける自称
- 表5. 3 それぞれの自称を使用する回答者
- 表5. 4 地域別の自称の比較
- 表5. 5 家庭言語別の自称の比較
- 表5. 6 年齢別の自称の比較
- 表5. 7 地域別タイ人・イサン人の帰属意識の比較
- 表5. 8 家庭言語別タイ人・イサン人の帰属意識の比較
- 表5. 9 年齢別タイ人・イサン人の帰属意識の比較
- 表5. 10 年齢別ラオ人・タイ人の帰属意識の比較
- 表5. 11 十分言語能力と自称の関係
- 表6. 1 地域別の十分言語能力(複数回答あり)
- 表6. 2 地域別の家庭言語(複数回答あり)
- 表6. 3 コーンケンにおける各言語の浸透度
- 表6. 4 ナコンラチャシマにおける各言語の浸透度



- 表6. 5 ナコンラチャシマ地域における「コラート語を以前より多く使うようになった」者の年齢別集計
- 表6. 6 ナコンラチャシマ地域における言語使用域ごとのコラート語・イサン語の使用比率
- 表6. 7 コーンケン地域における言語使用域ごとのコラート語・イサン語の使用比率
- 表6. 8 コラート語とイサン語の関係(1)
- 表6. 9 コラート語とイサン語の関係(2)
- 表6. 10 コラート語を自称する者の家庭言語別集計

## (2) 図一覧

- 図1. 1 「タイ語」と「ラオ語」の内容規定
- 図1. 2 タイ国内の言語を表記する文字
- 図1. 3 タイ語とラオ語の声調の違い
- 図3. 1 言語使用域と使用比率(複数回答あり)
- 図4. 1 言語の異同・包含関係
- 図4. 2 タイ語・イサン語・ラオ語の同一、方言、独立認識
- 図4. 3 イサン語とタイ語、ラオ語との関係
- 図4. 4 タイ語・イサン語・ラオ語の距離の認識
- 図4. 5 タイにおける言語の階層
- 図4. 6 タイ語、イサン語相互の浸透度
- 図4. 7 タイ語、コラート語相互の浸透度
- 図4. 8 イサン語とコラート語相互の浸透度
- 図4. 9 言語使用域と使用比率(複数回答あり)(図3. 1再掲)
- 図4. 10 東北タイにおける言語の階層
- 図5. 1 タイ人から新たな「タイ人」へ
- 図5. 2 東北タイにおける国家・地域・民族への帰属意識の関係
- 図6. 1 コラート語・タイ語の関係
- 図6. 2 タイ語の言語階層におけるコラート語の位置

## (3) 地図一覧

- 地図1. 1 東北タイの位置
- 地図1. 2 メコン川とチャオプラヤ川

地図1. 3 フランスに割譲した領土

地図1. 4 タイ諸語の分布

地図1. 5 タイの地域言語の分布

地図6. 1 調査地点と言語境界

#### (4) 写真一覧

写真2. 1 調査協力者(コーンケン大学大学生)

写真2. 2 調査協力者(ラチャモンコン工科大学大学生)

写真6. 1 「プレーンコラート」のステージ

写真6. 2 ワットバンライ

## 第1章

# 東北タイにおける言語と民族

## 第1章 東北タイにおける言語と民族

本章では、研究対象である東北タイの言語と民族について論じる。最初に、東北タイとイサンの概要を示す。次に、タイ (Tai) 諸族を中心とする東北タイの民族とその歴史を概観した後、その言語であるタイ諸語を概観する。また、タイにおける言語の名称を整理し、タイ国内の言語分布、及び、その中におけるイサン語の位置付けを論ずる。さらに、タイ政府の国民国家形成における言語政策を中心とする教育政策、及び、文字政策を概観する。最後に、タイにおけるイサンの位置付けを明らかにし、本研究の課題を設定する。

### 1. 1 東北タイとイサン

タイ王国 (Kingdom of Thailand、以下タイと略す) は東南アジアに位置する立憲君主国であり、2000年において、人口6061万人、面積51万4000km<sup>2</sup>である (National Statistical Office 2001: 13)。

タイにおいては、標準タイ語 (Standard Thai) が公用語である。学校教育の現場においても、テレビやラジオといったマスコミにおいても、標準タイ語のみが使用されている。しかしながら、タイは多言語社会であり、現在、約70の言語が国内で使用されている (李 1997: 14)。表1. 1に、スモーリー (William A. Smalley) が作成した、1989年のタイの言語別人口推計を示す。この表からも明らかなように、タイには、標準タイ語とそのもととなったタイ克蘭語 (Thaiklang) を話す集団の他に、数百万の言語人口を有するいくつかの有力な言語集団をはじめとする多くの少数言語集団が存在する。

本論文が対象とするのは、表1. 1のラオ語 (Lao) 集団が集中して居住している東北タイという地域である。

タイの東北地方、通称東北タイは、平均標高100mから200mのコラート (Khorat) 高原と呼ばれる台地を中心とする地域であり、表1. 2に示した、2000年度におけるタイの地域別人口及び面積からもわかるように、人口においてもタイ全体の約3分の1、面積においてもタイの全面積の約3分の1を占める広大な地域である。東北タイの位置を地図1. 1に示す。

東北タイは、タイ国内においてはイサン (Isan) 地方と呼ばれ、ラオ語を母語とする約1220万人のラオ人<sup>1</sup>が住む。タイにおける言語人口をみると、ラオ語人口は、タイ語、

---

<sup>1</sup> 日本語文献では、「～族」という表現が使用されるが、本論文では、すべて「～人」という表記法に統一する。

表1.1 タイの言語別人口推計(1989年)

言語	人口推計	割合 (%)	言語	人口推計	割合 (%)
Thaiklang (not St. Thai)	14,400,000	27.03%	Bru	10,000	0.02%
Lao	12,200,000	22.90%	Languages of India	7,000	0.01%
Standard Thai	10,400,000	19.52%	Lavüa'	7,000	0.01%
Kammüang	4,800,000	9.01%	Mal	7,000	0.01%
Paktay	4,300,000	8.07%	Pray	7,000	0.01%
Teochiu	2,200,000	4.13%	Wiang Papao Lua'	7,000	0.01%
Northern Khmer	1,100,000	2.06%	So Tri	5,000	0.01%
Pattani Malay	1,000,000	1.88%	Chong	4,000	0.01%
Hakka	580,000	1.09%	Nyah Kur	3,000	0.01%
Hainanese	379,000	0.71%	Urak Lawoi'	3,000	0.01%
Cantonese	275,000	0.52%	Hua Hin Pwo	2,500	
Kuy	275,000	0.52%	English	2,000	
Sgaw	252,000	0.47%	Keyeh	2,000	
Hokkien	150,000	0.28%	Mpi	2,000	
Phu Thai	100,000	0.19%	Bwe	1,500	
Vietnamese	88,000	0.17%	Moklen	1,500	
Hmong	82,000	0.15%	Other Karen	1,400	
Phuan	75,000	0.14%	Jingpaw (Kachin)	1,000	
Lahu langauges	60,000	0.11%	Phang	750	
Phlong	50,000	0.09%	Pa'o (Taungthu)	600	
Mon	40,000	0.08%	Moken	500	
So	40,000	0.08%	Palaung	500	
Tai Yai	40,000	0.08%	Nyoe	500	
Phlow	40,000	0.08%	Kensiw	300	
Taiwanese	37,000	0.07%	Mos	300	
Mien	36,000	0.07%	Ugong	300	
Akha	33,500	0.06%	Other European	225	
Lue	30,000	0.06%	Bisu	200	
Nyo	30,000	0.06%	Brao	200	
Yunnameese Chinese	30,000	0.06%	Mla'bri'	150	
Lao Song	25,000	0.05%	Kintao	100	
Lisu	25,000	0.05%	Lamet	100	
Khmu'	18,000	0.04%	Phalok	100	
Other Khmer	14,000	0.03%	Totals	53,280,000	100.00%

出所：Smalley 1994: 365-367

表1.2 タイの地域別人口と面積(2000年)

地域	人口 (千人)	人口比率 (%)	面積 (km <sup>2</sup> )	面積比率 (%)
中央タイ	20,421	33.7	103,901	20.2
東北タイ	20,760	34.3	168,855	32.9
北タイ	11,368	18.8	169,644	33.1
南タイ	8,058	13.2	70,715	13.8
全国	60,607	100.0	513,115	100.0

出所：National Statistical Office 2001: 14



地図1.1 東北タイの位置

正確にはタイクラン語<sup>2</sup>人口の約1440万に次ぐ、第2位の地位を占める<sup>3</sup>。東北タイのラオ人は今日では、自称、他称ともにイサン人という呼び方を使用しており、またラオ人が日常使用する言語は、「ラオ語」ではなく、「イサン語」と呼ばれる。「イサン」は、古代インドの言語であるパーリ語 (Pali) で東北を意味する「イサナ (Isana)」に由来する単語であり、タイ国内では、タイ東北部を指す用語として定着している。本論文でも、原則として、イサン人、イサン語という名称を用いる。

## 1.2 タイ諸族とその歴史

タイには、「タイ諸族」に属する人々が多く居住する。そこで、この節では、タイ諸族とは何かを明らかにするとともに、その歴史を概観する。

タイ諸族とは、タイ人、ラオ人、シャン人 (Shan) などの民族から構成される、東南アジアの大陸部を中心に居住する民族の集合体である。現在タイ国内に居住するタイ人とラオ人は、このタイ諸族の中の西方グループに属する。

11世紀以降、東南アジアの大陸部であるチャオプラヤ (Chao Phraya) 川流域およびメコン (Mekhong) 川流域に、中国南部の雲南省からタイ諸族が南下し、勢力をもつに至った (地図1.2参照)。これ以後の東北タイの歴史は、タイ諸族の歴史である。

<sup>2</sup> タイクラン語、タイ語、標準タイ語といった言語名称については、1.4節を参照。

<sup>3</sup> スモーリーの数値 (Smalley 1994: 365-367)。なお、ラオ語人口の推計については、表1.5を参照。



地図1.2 メコン川とチャオプラヤ川

これは歴史的には「タイ族の沸騰」と呼ばれる（石井・桜井 1985: 148）。このとき、タイ諸族のうち、現在のタイ人の祖先がチャオプラヤ川流域に、現在のラオ人の祖先がメコン川とその支流に沿って定住していった。ラオ人の先祖が定住した地域は、現在の東北タイとラオスに相当する。彼らはもち米を主食とし、天水田による稲作を行っていた。そして、すでに13世紀までに、小規模の独立国家が、東北タイとラオスに存在するようになった。

タイ人の中では、クメール（Khmer）勢力圏の西北辺境にいた首長バーン・クランハオ（Bang Klang Tao）が、1238年頃クメール勢力を駆逐し、現在の中央タイに位置するスコタイ（Sukhothai）に王国を建設した（Syamananda 1990: 20）。これは、現在のタイ国領内にタイ諸族が建設した初めての国家である。また、1280年頃に、中央タイと東北タイの中間に位置するロップブリ（Lopburi）が、クメールの支配を離れ独立した。これ以降、ロップブリと同様、クメールの支配下にあった東北タイの各地域も徐々に独立していった。さらに1351年に建国されたタイ・アユタヤ（Ayutthaya）王朝のウートーン（Somdet Phrachao Uthong）王は、1352年にクメールを攻め、中央タイにおけるタイ諸族の支配権を確立した。

他方、ラオ人の中では、1353年にチャオ・ファー・グム（Chao Fa Ngum）が、現在のラオス領内のルアン普拉バン（Luang Prabang）に、百万頭の象を意味するラーンサーン

(Lan Chang) 王国を建国した(青山 1995: 102)。ラオ人はメコン川流域及びコラート高原の大半を支配すべく、周囲の諸民族と闘争を繰り返し、1358年以降には、東北タイの中央にあるロイエット (Roi Et) を占領した。しかし、その後1574年にラーンサーン王国はビルマ (Burma) の支配下に入った。王国は、1603年にビルマからの独立を果たしたが、その後の王位継承に絡んだ内紛から、1707年から1713年にかけて、ルアンプラバン王国、ヴィエンチャン (Vientiane) 王国、チャンパサック (Champassak) 王国という3つの小王国に分裂した。

18世紀、ラオ人国家は東北タイのコラート高原に進出していたが、タイ・トンブリ (Thonburi) 王朝も同時にコラート高原への勢力の伸張をはかっていた。当時、コラート高原は、権力の空白地帯となっており、そこにタイ人、ラオ人の両民族が進出していったのである。勢いを増すトンブリ王朝は、1770年代末にヴィエンチャン王国とチャンパサック王国を朝貢国とした(小泉 1994: 197)。さらに1778年には、トンブリ王朝がヴィエンチャンを占領し、ラオ人の3つの王国はタイ王朝の支配下に組み込まれた(青山 1995: 104)。この結果、東北タイに居住していたラオ人は完全にタイ人の支配下に入ることとなったのである。また、この当時、ラオスでの政治抗争が原因で、多くのラオ人が東北タイに移住した(重富 1993: 14)。

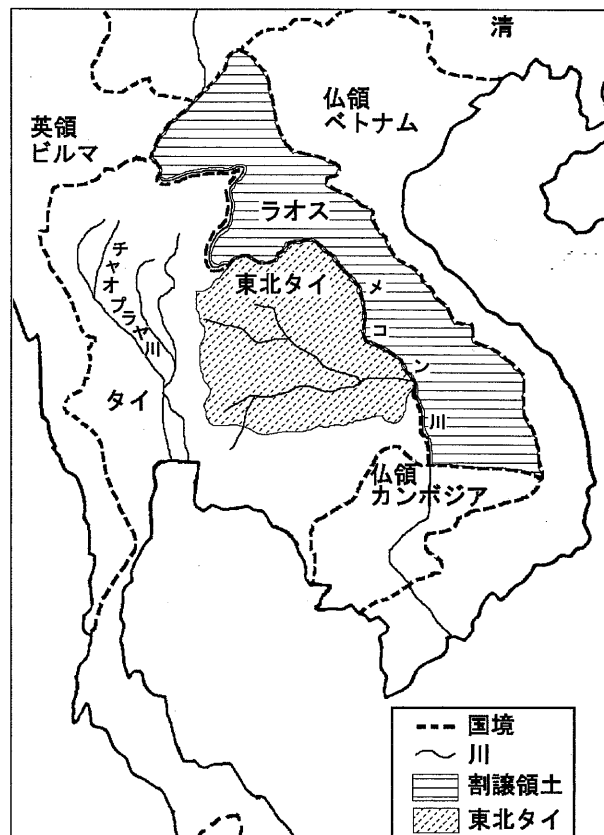
タイ人は、1782年にラタナコーシン (Ratanakosin) 王朝を樹立した。ラタナコーシン王朝初期、すなわち1800年頃のタイの支配圏は、現在のタイ、ラオス (Laos)、カンボジア (Cambodia) に相当する範囲にまで及んでいた。

タイ人の支配下に入った後、東北タイにおいては、1827年に、ラオ人のタイ人に対する反乱が起きた。ラタナコーシン王朝のラマ3世 (King Rama III) の時代、タイ国軍とラオ人勢力が、東北タイとタイ中央部を結ぶ交通の要衝であるナコンラチャシマ (Nakhonratchasima) をめぐり、激しい戦いを繰り返した (Syamananda 1990: 112)。

19世紀に入ると、フランスがインドシナ (Indochina) 植民地獲得に着手した。フランスはタイ王朝に対し、1867年から1907年までの約40年間に5回にわたる領土割譲の要求を認めさせた(赤木 1991: 130-134, Syamananda 1990: 133-145)。ヴェトナム (Vietnam) とカンボジアを獲得した後、フランスは、3回目の要求で、タイの国境はメコン川までであり、ラオスはフランスのものであると主張し始めた。その根拠は、ヴェトナムとカンボジアは、伝統的にラオスに対して宗主権を行使していたが、ヴェトナムもカンボジアもフランスの支配下に入ったからには、ラオスは今やフランスの支配下にあるというものであった。そして1893年、フランスは、チャオプラヤ川河口を砲艦2隻で封鎖し、その軍事力を背景に、現在のラオスを仏領インドシナに併合するフランス・シヤム条約 (The Franco-Siamese Treaty and Convention of 3 October 1893) を、タイとの間に締結した(赤木 1991: 133)。これにより、メコン川がタイと仏領インドシナの国境線になり、ラオ人は、メコン川左岸 (現在のラオス) とメコン川右岸 (現在の東北タイ) に分断され、こ



れ以降、東北タイはイサン、東北タイのラオ人はイサン人と呼ばれ、現在に至る。地図1.3に、1893年にタイがフランスに割譲した領土を示す。



地図1.3 フランスに割譲した領土

出所：Syamananda 1990: 142 より作成

メコン川をはさんで、ラオスの反対側になる東北タイに、フランスに割譲したラオスのラオ人と同じ民族であるラオ人が多く居住しているという状況は、植民地拡張に意欲を燃やす西欧諸国に、干渉の口実を与えかねなかった。タイ政府は、早急に単一民族による国民国家を形成するため、ラオ人をタイ国民として同化することを目的に、「ラオ」のついた地名の排除を行った。また、1899年には、民族名としてのラオ人の使用が法律で禁止され（林 1998: 88）、ラオ人はイサン人、ラオ語はイサン語と呼ばれることになった。西欧の圧力の下でのタイ政府の国民統合政策については、1.7節でさらに検討する。

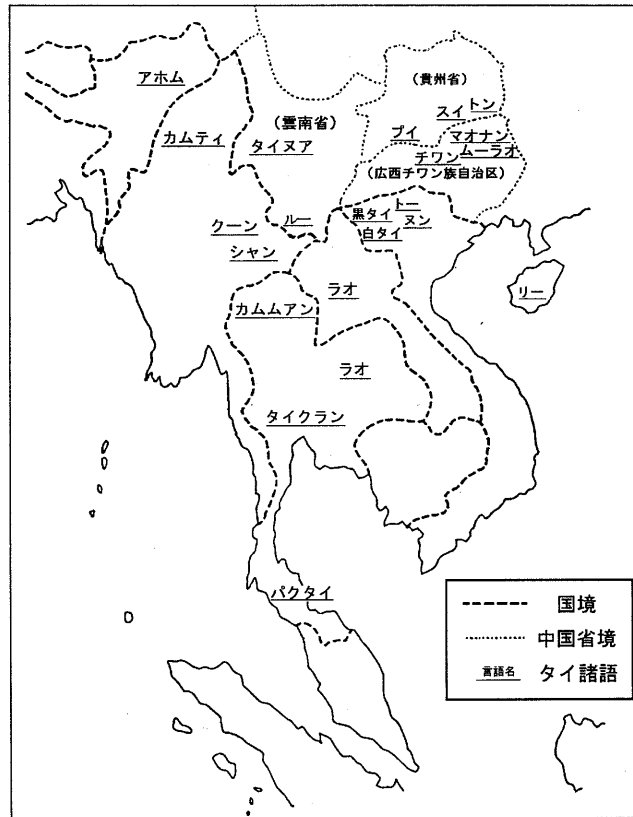
同じタイ諸族に属するタイ人とラオ人は、文化的には共通部分も多い。まず、共にインド文化の影響を強く受け、宗教的には上座部仏教を信仰している。精霊（ピー）信仰も根強く残っており、ピーを祭る祠が、民家の入り口や町の入り口に置いてある点も共通である。また、核家族、双系親族組織を基本としており、男女関係もタイ諸族の東方グループが男権的であるのに対して同権的である点も共通である（桑原 1989: 129）。相違点は、タイ人がうるち米を常食とするのに対し、ラオ人がもち米を常食とする点や、タイ人が結婚すると夫は妻方の両親とは住まないのに対し、ラオ人が結婚すると夫が一時は妻方の両親

と住み、最初の子供が生まれた後独立するか、または夫方の親元と住むという点などが挙げられる (桑原 1989: 38-39, 綾部・綾部 1995: 202)。

なお、タイ諸族の分類については、5. 1 節にて検討する。

### 1. 3 タイ諸語

上述のタイ諸族の言語は、言語学上は「タイ (Tai) 諸語」と呼ばれる。「タイ諸語」は、タイクラン語、ラオ語、カムムアン語 (Kammüang)、パクタイ語 (Paktay)、コラート語などを含むタイ諸族の言語の総称である。タイ諸語は、地図 1. 4 に示すように、中国南部、ヴェトナム、ラオス、タイ、ミャンマー、インド北部などに分布する。東北タイでは、タイ語、イサン語、ラオ語、コラート語といったタイ諸語が使用される。なお、東北タイでは、このほかに、クメール語、中国語、スワイ語 (Suai) などといった、タイ諸語以外の言語も使用されている。



地図1. 4 タイ諸語の分布

出所：桑原 1989: 209 より作成

このように、「タイ諸語」は多くの個別言語から成る集合体とみなされるのが通説であるが、後述のブラウン (David Brown) のように、タイやラオスで使用されているタイ諸語はすべて古タイ語の方言であるという立場も存在する (Brown 1985: 69-254)。

因みに、「タイ諸語」をローマ字書きする場合は Tai と無気音の表記を用い、タイ国のタ

イ人のタイ語は Thai と有気音の表記を用いる (桑原 1989: 29)。

#### 1. 4 言語名称の整理

タイ諸語の研究、分析においては、研究者により、言語の名称がまちまちであるために、無用の混乱をきたしていた面がある。例えば、後述のルーレン (Merritt Ruhlen 1991: 334)、スモーリー (Smalley 1994: 298)、ディラー (Anthony Diller 1992: 128) という 3 人の学者だけを取り上げても、タイ諸語の分類は三者三様であるし、言語の名称も三者三様である。実はこれまでも、言語の名称による混乱をなくすため、「標準タイ語」「中央タイ語」「バンコク・タイ語」といった言語名を整理する試みもあった (Beebe 1974)。しかしながら、これは、東北タイの言語を含む包括的な用語の整理とはなっていない。

東北タイの諸言語に関する先行研究においても、言語や民族の名称について、相当の用語の混乱が見られる。研究者によっては、一つの論文の中において、一つの用語を複数の用途に使う例も散見される。東北タイにおける諸言語の研究のためには、まず、これまで不十分であった用語の再検討を行い、混乱を回避する必要があると考える。それ故、以下の議論の前提として、ここで言語の名称を整理しておく。

まず、言語学分類上、タイ諸語という用語が存在する。すでに述べたように、「タイ諸語」は、タイクラン語、ラオ語、カムムアン語、パクタイ語などを含むタイ諸族の言語の集合を意味する。

「タイ語 (Thai)」という用語については、研究者レベルでも、定義・用法は統一されていない。一般のタイ国民レベルの理解と用法についてもまた同様である。とはいえ、「タイ語」という用語の用法は、表 1. 3 に示すように、3 種類に大別できる。

表 1. 3 「タイ語」の名称の範囲

	標準タイ語	タイクラン語	イサン語	カムムアン語	パクタイ語
タイ語 <sub>1</sub>	○	×	×	×	×
タイ語 <sub>2</sub>		○	×	×	×
タイ語 <sub>3</sub>			○		

○は、タイ語<sub>n</sub> (n = 1, 2, 3) の名称に含まれる言語を、×は含まれない言語を示す。

まず第 1 は、表 1. 3 に「タイ語<sub>1</sub>」として示すように、「タイ語」を標準タイ語とのみ等置する考え方である。この場合、「タイ語」は標準タイ語の別名にすぎず、標準タイ語形成の基盤となったタイクラン語とは峻別される。表 1. 1 のように、タイクラン語を母語とする集団と、日常的に標準タイ語を使用する集団を区別して扱っているスモーリーの扱い (Smalley 1994: 109) は、この例である。

第 2 は、表 1. 3 に「タイ語<sub>2</sub>」として示すように、標準タイ語とタイクラン語を同一

の言語とみなし、「タイ語」として扱う考え方である (Grimes 1988: 603, 桑原 1989: 38-39, Diller 1992: 131)。

第3は、表1. 3に「タイ語<sub>3</sub>」として示すように、タイ国内の主要な地域言語全てを(標準)タイ語の方言と捉え、一括して「タイ語」と扱う考え方である。従って、イサン語(ラオ語)は当然タイ語の方言とみなされる。

他方、「ラオ語」という用語についても、同様の混乱が見られる。例えば、ディラーは、ラオス国内で使用されるラオ語の別名として東北タイ語を挙げているが、タイ国内で使用される言語としてはイサン語(東北タイ語)という用語を使用し、ラオ語にきわめて近い言語と記している (Diller 1992: 130)。ちなみに、東北タイで話されているラオ語の発音と、ラオスのヴィエンチャンで話されているラオ語の発音との間には相違があることが指摘されている (Brown 1985: 174,183)。

ところが、スモーリーは、タイ国内で使用されるラオ語については一貫してラオ語という用語を使用している。グライムズは、ラオス国内で使用されるラオ語の別名として東北タイ語やイサン語を挙げている一方で、タイ国内で使用されるラオ語については東北タイ語(イサン語)という用語を使用しており (Grimes 1988: 545, 603)、名称はともかく、両者の異同については必ずしも明示していない。

このような混乱にもかかわらず、「ラオ語」の意味は、表1. 4に示すように2種類に整理、大別できる。

表1. 4 「ラオ語」の名称の範囲

	ラオス国内のラオ語	タイ国内のイサン語
ラオ語 <sub>1</sub>	○	×
ラオ語 <sub>2</sub>	○	

○は、ラオ語<sub>n</sub> (n = 1, 2) の名称に含まれる言語を、×は含まれない言語を示す。

その第1は、表1. 4に「ラオ語<sub>1</sub>」として示すように、ラオス国内のラオ語と、タイ国内のラオ語、すなわちイサン語を区別する用法である。

第2は、表1. 4に「ラオ語<sub>2</sub>」として示すように、この2つを区別しない考え方である。

表1. 3および表1. 4から、イサン語は、研究者の用法でも、一般国民の用法でも、タイ語にもラオ語にも含まれうることになる。すなわち、「タイ語」でも「ラオ語」でもありうる。

これまでの議論では、タイ語、ラオ語を別個に検討しているが、ラオ語がタイ語の方言であるとみなす立場もあり、議論はさらに複雑になる。しかし、ここではこの点には立ち

入らない。

以上の議論から、「タイ語」と「ラオ語」の用語法は、図1. 1のように整理することができる。東北タイの民族や言語の専門家であるキースもスモーリーも、用語の問題の所在は指摘しながら、このような整理は行っていない。多様な用語法を矛盾なく整合的に整理する以下の試みは、初めてのものである。本論文では、この整理に従って用語を用いることにする。

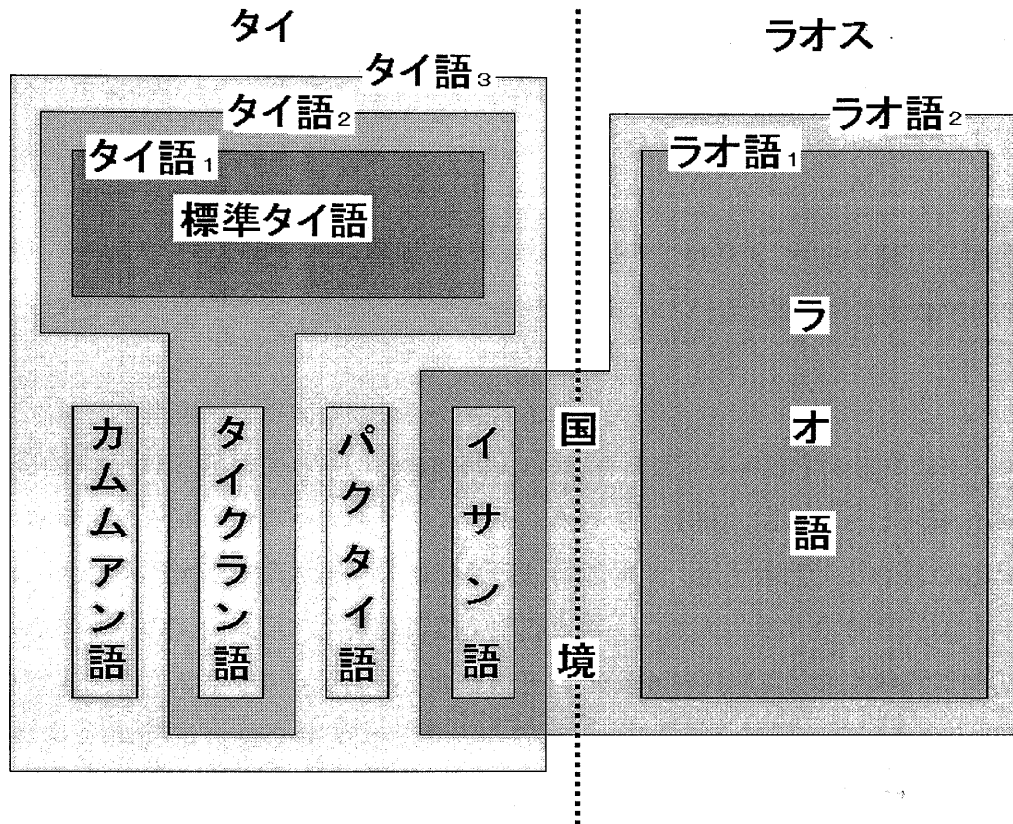


図1. 1 「タイ語」と「ラオ語」の内容規定

注) タイ語<sub>1</sub>～タイ語<sub>3</sub>及びラオ語<sub>1</sub>～ラオ語<sub>2</sub>については、表1. 3、表1. 4を参照。

言語学的分類によるタイ諸語については、そのまま「タイ諸語」と呼ぶ。

タイ語について、以下のように用語法を定める。

- A. 標準タイ語：特に断りがない場合、図1. 1の「タイ語<sub>1</sub>」を「標準タイ語」と呼ぶ。既述のように、これにはタイクラン語は含まれない。もちろん、他のパクタイ語、カムムアン語、イサン語も含まれない。
- B. タイ語：標準タイ語とタイクラン語を併せて「タイ語」と呼ぶ。これは、図1. 1の「タイ語<sub>2</sub>」に対応する。今回の調査、および本論文で使用する「タイ語」は、この意味で用いる。
- C. 広義のタイ語：図1. 1に示すように、標準タイ語、タイクラン語、イサン語、

パクタイ語、カムムアン語すべてを含む。これは、図1. 1の「タイ語<sub>3</sub>」に対応する。広義のタイ語に含まれる各言語については、「タイクラン語」、「イサン語」、「パクタイ語」、「カムムアン語」のように、個々の名称を用いる。

また、ラオ語について、以下の名称を用いる。

- A. ラオ語：ラオス国内のラオ語についてのみ用いる。従って、これにはイサン語は含まれない。
- B. 広義のラオ語：イサン語を含む場合は、「広義のラオ語」と呼ぶ。前者は図1. 1の「ラオ語<sub>1</sub>」、後者は図1. 1の「ラオ語<sub>2</sub>」に対応する。

ただし、引用や、他研究者の用語についてはこの限りではなく、「タイ語」、「ラオ語」等、本論文の用語法と区別する。なお、「コラート語」については、第6章で別途検討する。

ここで、タイ諸語の言語人口について触れておく。

東北タイにおける民族別あるいは言語別人口は、タイ政府が実施する国勢調査において、民族や使用言語を問う設問が存在しないため、今日でも正確に知ることは困難である。

無論、人口を推定する試みは、以前から行われてきた。たとえば、1890年のシャム（現在のタイ）の人口推定で、全人口約1千万人中、シャム人は300万人以上、華僑は300万人、ラオ人は130万人とされている（Landon 1941: 37）。また最近では、前掲表1. 1のように、スモーリーが、タイにおける言語別の話者数を推定している（Smalley 1994: 365-371）。マヒドン大学（Mahidol University）民族言語地図プロジェクトが、東北タイの言語人口を調査した結果もあり、それによれば、東北タイの「イサンラオ語」使用者は、11,153,493人であるという（林 1998: 84より引用、筆者未見）。

表1. 5に、ラオ語とイサン語の言語人口の推定値を示す。

表1. 5 ラオ語とイサン語の言語人口の推定値

(単位：千人)

	Ruhlen	桑原	Grimes	Diller	Smalley
ラオ語 (調査年)	17,000 (不詳)	2,000 (不詳)	3,000 (1987)	3,000 (1989)	—
イサン語 <sup>1)</sup> (調査年)		15,000 (不詳)	15,000 (1983)	15,000 (1983)	12,200 (1989)
合計	17,000	17,000	18,000	18,000	—

1) イサン語の人口には、タイ国内のイサン地方居住者以外も含むものと考えられるが、この点を明示しているのは、Smalley だけである。

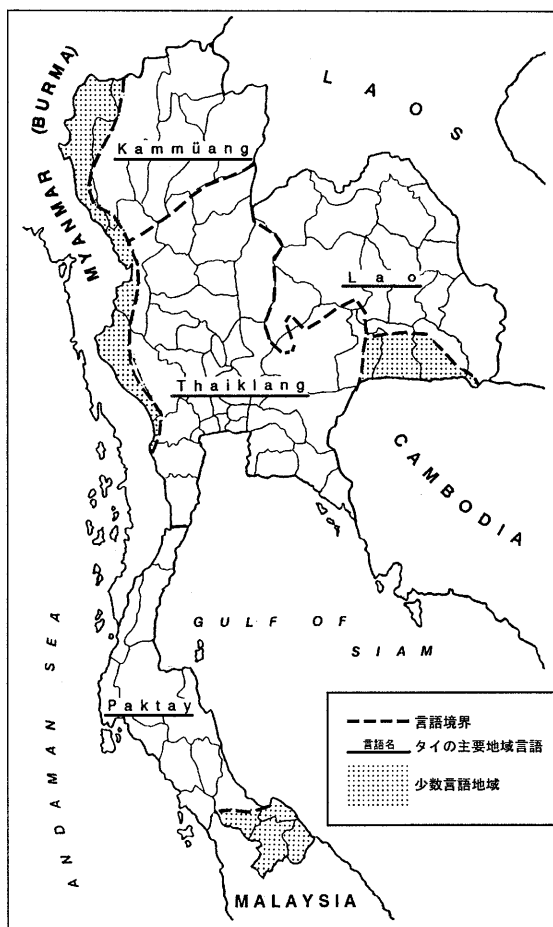
出所：Ruhlen 1991: 149, 桑原 1989: 37, Grimes 1988: 545, 603, Diller 1992: 130, Smalley 1994: 366

これによると、推定には100万人単位の幅があるが、広義のラオ語話者人口は1700万人から1800万人であり、そのうちイサン語話者人口は1220万人から約1500万人であると推定されている。これはすなわち、広義のラオ語話者の約80%がイサン語話者であることを意味する。そして、広義のラオ語という観点からすれば、圧倒的多数がタイ国内に居住することになる。

### 1.5 タイの主要言語とイサン語

本節では、1.4節で整理した言語名称に従って、タイ国内の言語の使用状況を概観するとともに、本論文の主な対象であるイサン語が、言語学的にどのような位置付けにあるのかについて述べる。

スモーリーによれば、タイには、地図1.5に示すように、1つの標準語と4つの主要



地図1.5 タイの地域言語の分布

出所：Smalley 1994: 68 より作成

な地域言語、さらに数多くの地域言語や少数言語が存在する (Smalley 1994: 68)。その中

でも、タイ諸語に属する、タイクラン語、カムムアン語、ラオ語、パクタイ語の4つの地域言語話者が大多数を占める (Smalley 1994: 67)。これら4つの地域言語は、一般には標準タイ語の方言として扱われている。そして、標準タイ語は、国語、公用語、かつ教育言語 (教授語) の役割を担っている。本論文の対象とするイサン語は、主要地域言語の一つであり、広義のラオ語に属する。イサン語は、自称としても、他称としても用いられる。

次に、イサン人の使用するイサン語を論じる前提として、まずイサン語の言語学的位置づけを手短かに検討しておく。タイ諸語の分類については、ルーレン (Ruhlen 1991: 334)、スモーリー (Smalley 1994: 298)、ディラー (Diller 1992: 128) が行っている。

表1. 6に、例として、ルーレンによるタイ諸語の分類を示す。

表1. 6 タイ(Tai)諸語の言語分類

Austric[1,175] <sup>1)</sup> : (略) II TAI[44]: A NORTHERN[18]: (略) B CENTRAL[8]: Man Cao-lan, Nung,Tay, Tho, Tienpao, Ts'un-lao, Yung-chu'un,Lung-chow C SOUTHWESTERN[18]: Khamti, Khün, <u>Lao(=Laotian)</u> , Lü, Maw, Phu Thai, Phuan, Shan, <u>Thai(=Siamese)</u> , <u>Northern Thai</u> <sup>2)</sup> , <u>Southern Thai</u> <sup>3)</sup> , White Tai, Black Tai, Red Tai, Tay Nua, Ya, Yuan, Yunnan Shant'ou
---

1) [ ]内は言語数を示す。

2) 本論文でいう Kammüang に相当する。

3) 本論文でいう Paktay に相当する。

4) 下線は、本論文に関連する言語を示す。

出所： Ruhlen 1991: 334

ルーレン、スモーリー、ディラーの3人とも、タイ諸語を中央タイ語群 (Central Tai)、北タイ語群 (Northern Tai)、南西タイ語群 (Southwestern Tai) の3つに分類している。そして、本論文で論じる言語、タイ語、タイクラン語、カムムアン語、ラオ語、イサン語、コラート語は、すべて南西タイ語群に分類されており、イサン語とコラート語を除き、全て別個の言語とされている。

ただし、前述のブラウンのように、タイ諸語が全て、古タイ語から派生した方言であるという考え方もある。彼は、タイ諸語に属する様々な言語を、79もの方言に細分し、音



韻、声調、語彙の分析から、それらの系譜を示している (Brown 1985: 69-254)。彼の示すタイ語の系譜は、タイ語の祖先である古タイ語から、950年頃ユンナン (Yunnan) 方言に変化分岐し、それが、1150年ごろチェンセン (Chiang Saen) 方言に分岐して現在のバンコク (Bangkok) 方言 (タイクラン語) につながるグループ、1350年ごろラーンサーン方言に分岐し、さらに1550年ごろヴィエンチャン方言に分岐して現在のヴィエンチャン方言につながるグループ、1750年ごろソーラオ (So Lao) 方言に分岐して現在のコーンケン方言 (イサン語) につながるグループ、ラーンサーン方言から1650年ごろサコンナコン (Sakon Nakhon) 方言に分岐して現在のコーラート方言 (本論文でいうコーラート語) につながるグループなどから構成されている。現在東北タイで使用されている諸言語は、すべて古タイ語につながるタイ語の方言というわけである (Brown 1985: 142-145)。

スモーリーは、ルーレンと異なり、南西タイ語群をさらに下位区分している。ディラーは、南西タイ語群の中でカムムアン語を下位区分しているが、その他は下位区分していない。また、ルーレンは、Lao=Laotian、Thai=Siamese としており、ディラーは、Lao=Laotian, along with Isan in Thailand とし、別名を挙げているが、スモーリーは何も記述していない。

スモーリーの主要地域言語を3人がどのように分類、表記しているかを、表1.7に示す。

表1.7 主要地域言語の名称と分類

	ルーレン	ディラー	スモーリー
タイクラン語	Thai(=Siamese)	Central Thai(Siamese)	Thaiklang
カムムアン語	Northern Thai	Northern Thai	Kammüang
ラオ語	Lao(=Laotian)	Lao(Laotian, along with Isan in Thailand)	Lao
パクタイ語	Southern Thai	Southern Thai	Paktay

出所 : Ruhlen 1991: 334, Smalley 1994: 298, Diller 1992: 128

以上のことから、次の3点が明らかである。

- (1) ラオ語、パクタイ語、カムムアン語、タイクラン語は、全て言語学上は明らかに別個の言語とされている。
- (2) イサン語というカテゴリは設けられていない。
- (3) イサン語に言及しているのは、ディラーだけであるが、ラオ語の方言としての扱いである。イサン語を、他の言語に含めるという分類も存在しない。この意味では、イサン語は言語学的には、ラオ語とのみ称すべきである。

言語学的には、ラオ語という用語を使うべきであるが、東北タイで使用される言語学的な意味でのラオ語については、タイ国内では、自称、他称ともに、イサン語という名称が定着している。それ故、本論文では、東北タイのラオ語については、イサン語という名称を用いる。

イサン語のように、言語学が用いる言語名称と、実際に用いられる言語名称が異なる事例は、ないわけではない。マレー語が、インドネシアにおいてはインドネシア語、マレーシアにおいてはマレーシア語と称されるのがその一例である。そして、言語学がしばしば、このような用語法を追認することもまた事実である。

## 1. 6 タイにおける言語の表記体系

### 1. 6. 1 タイ国内における表記体系の先行研究

タイ国内においては、多くの言語が使用され、また、それらが様々な文字で表記されてきた。

キース (Charles F. Keyes) は、タイ諸語を話す人々の系譜に大きな影響を与えたのは文字であり、タイのスコタイ王朝の正書法が、現在のタイ文字、ラオ文字の基礎となって、同じ文字が、互いに接触のない人々を結びつけたと論じている (Keyes 1995: 139)。また彼は、15世紀から19世紀にかけて、タイ北部、ビルマなどに居住していた多くのタイ諸族の間に、タム (Tham) 文字という表記体系を共有する集団で構成される「想像の共同体」が存在したと主張した (Keyes 1995: 140-141)。これは、言語ではなく文字もしくは表記体系が民族を規定するという重要な議論である。

タイ政府は、ラオ語を表記するときにもラオ文字に代わってタイ文字を使用させ、同様に、タイ国内で使用されていたタイ語以外の言語についてもタイ文字表記を強制した。このようなタイ政府の文字政策は、キースの観点からすれば、文字を共有する共同体、すなわち、タイ国民を形成する試みとも理解できる。これは、タイに限らない。例えば、パキスタンにおいて、1956年、ウルドゥー語と並びベンガル語に公用語の地位が与えられたが、政府はその後、ベンガル文字を無視してベンガル語にもウルドゥー語と同様ペルシャアラビア文字を導入しようとした。この試みは、政府に対するベンガル人の不信を増幅する結果となった (Musa 1996: 75-76) が、ここでも、表記体系と国民統合政策や民族意識の密接な関わりを見ることができる<sup>4</sup>。

---

<sup>4</sup> 同様の事例については、松尾 (2000) 参照。

## 1. 6. 2 東北タイで使用された表記体系

1. 7節で述べるように、タイ政府の国民統合政策の結果、標準タイ語以外の言語は、タイ国内において何ら公的な地位を得ていない。同様に、タイ文字以外の文字も、タイ国内において何ら公的な地位を得ていない。そこで、タイの文字政策の問題点を明らかにするために、タイ国内の言語を表記するために使用されている文字について概観するとともに、東北タイで使用されるタイ諸語の中で、タイ語とラオ語の表記体系を比較する。

タイ国内においては、多くの言語が使用されており、そして、それら多くの言語を表記するために、様々な表記体系が使用されてきた。図1. 2に、タイ国内で使用されてきた代表的な文字を示す<sup>5</sup>。

タイ文字は、タイにおいて唯一、公式に使用されている文字であり、主に標準タイ語を記述するために使われている。タイ文字は、1283年にスコタイ王朝のラームカムヘン王 (King of Ramkhamhaeng) が国字として採用したスコタイ文字を元としている。スコタイ文字は、クメール文字を、当時のタイ語の体系に合わせて適合、改変したものである (西田 1981: 254)。このスコタイ文字は、16世紀の末期までタイやラオスの北方で使用されていたが、この字形に手を加え、現在のタイ語の体系に合わせて改変したのが、タイ文字である。しかし、近代に至るまでは、タイ文字がタイの宮廷の排他的な表記体系であったわけではなく、13世紀から18世紀にかけて、宮廷ではクメール文字が書き言葉として用いられた。19世紀にも、パーリ語やタイ語の宗教的文章は、コーム (Kh◻m) 文字が使用されていた (Keyes 1995: 140)。

ラオ文字は、タイの地域言語の一つであり、東北タイで使用されているラオ語を記述するために使用されてきた文字である。ラオ文字は、タイ文字と同じく、スコタイ文字の字形に手を加え、現代のラオ語の体系に合わせて改変したものである。ラオ語を表記するのに使用されたラオ文字は、図1. 2の「ラオ文字」の部分で示すように、タイ文字と類似性が高い。

その他、タイにおいてはいくつかの文字が使用されてきた。チェンマイ・ラオ文字は、タイの地域言語であるカムムアン語を記述するのに使用されてきた文字であり、仏教寺院では、現在でも使用されている。モン文字は、モン人 (Mon) がモン語の記述に使用してきた文字であり、現在では仏教関係でわずかに使用されるだけである (Smalley 1994: 226)。神聖クメール文字は、コーム文字とも呼ばれ、主に、御守り、刺青、魔除けなどに使用されてきた文字である (Smalley 1994: 140)。スゴー・カレン (Sgaw Karen) 文字は、スゴー

<sup>5</sup> 図1. 2の各文字による文章の内容は別であり、あくまでも、文字の比較のために並べている。



ローマ字は、ヨーロッパの宣教師が聖書を記述するため、アカ語 (Akha)、モン語、ラフ語 (Lahu) の表記体系として使用した。

### 1. 6. 3 タイ文字とラオ文字

これまでに示した様々な表記体系の中で、本論文で取り上げる、タイ語を表記するタイ文字、ラオ語を表記するラオ文字は、スコタイ文字という共通の文字から発展したものであり、共通の要素も多い。

東北タイで使用された表記体系については、タムバイア (S. J. Tambiah) が、世俗的、儀式的な文書はタム文字あるいはラオ・タム文字、その他の文書は俗ラオ文字、そして、19世紀にタイの支配下になってからはタイ文字が導入されたと述べている (Tambiah 1968: 90)。また、スモーリーは、ラオ語の記述のために、タム文字、古クメール文字、ラオ文字、標準タイ文字という、4種類の異なる文字が使われ、現在ではほとんど標準タイ文字しか使用されないと述べている (Smalley 1994: 92)。タイ文字とラオ文字を比較すると、共通性も高い (小林 1989: 81, Hoshino & Marcus 1981: 12, 山下 2000b, 358-361) が、タイ語は44の子音を表す文字、ラオ語は33の子音を表す文字をもつなど、相違点も存在する。また、図1.3に示すように、タイ語とラオ語では声調の数と性質が異なる (小林 1989: 4, Hoshino & Marcus 1981: 13)。

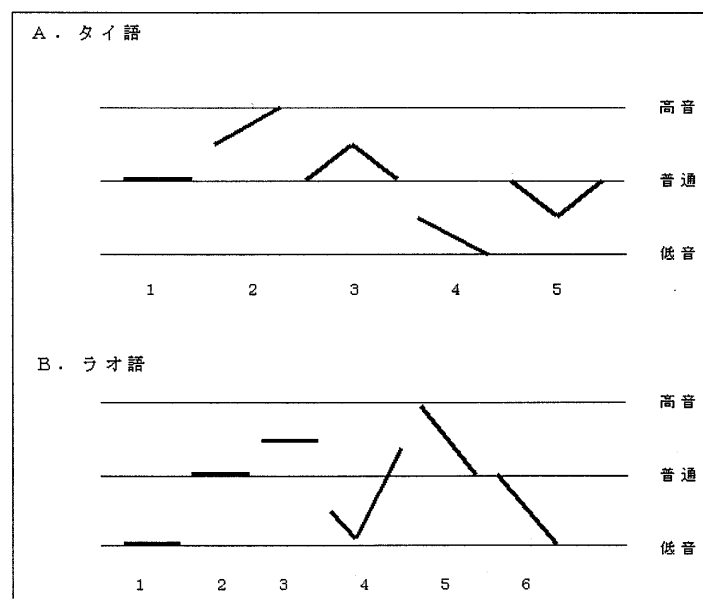


図1.3 タイ語とラオ語の声調の違い

タイ語の1は、「普通」の高さで発音するという声調であることを意味する。  
ラオ語の1は、「低音」の高さで発音するという声調であることを意味する。

出所：小林 1989: 4, Hoshino & Marcus 1981: 13

タイ文字とラオ文字の比較を行うと、両表記体系のうち、対応のある文字・数字・記号と対応のない文字・記号の数は、表1. 8のようになる。

表1. 8 タイ文字とラオ文字の対応関係

	対応あり	対応なし	
		タイ文字のみ	ラオ文字のみ
子音文字	26	18	7
母音文字・音節子母文字	15	4	2
数字	10	0	0
特殊記号・特殊文字	7	1	0

このように、タイ文字とラオ文字は、表記システムの共通性は高いものの、全く同一の表記システムとはいえない。東北タイでは、かつては、ラオ文字が使用されていた。しかし、タイ政府は、ラオ語という名称に代わってイサン語という名称を使用させ、ラオ語を表記するときに、ラオ文字に代わってタイ文字を使用させた。そのため、現在では、東北タイにおいて、もはや日常的にラオ文字が使われることは皆無であり、圧倒的にタイ文字が使用されている。

筆者は1999年に、イサン地方出身の大学生438名を対象に、タイ文字の浸透に関する調査を行った。その内容は、タイ語では正しくないが、イサン語とラオ語とでは共通に正しい「いつでもいいです。」という意味の文章を、タイ文字で記述し、被験者がそれぞれ何語であると思ったかを問うものである。

その結果、イサン語・ラオ語で「いつでもいいです。」という文章をタイ文字で書いて、イサン語と答えた回答者が62.4%、ラオ語と答えた回答者が16.3%となり、合計すると約8割に達した。これは、東北タイにおいて、イサン語・ラオ語をタイ文字で書いても、約8割が理解できるという程度には、タイ文字の浸透が進んでいることを示している。ただし、この調査は対象を学生に限定しているため、その結果を一般化することはできないが、タイ文字の東北タイ住民への浸透は明らかである。

しかしながら、ラオ語をタイ文字で表記する場合、声調を正確に表現することができないという問題があり、本来、ラオ語はラオ文字で表記することが自然であり合理的である。

タイのイサン人にとって、イサン語を文字として記録するためには、パソコン上でラオ文字を表示できること、そして、パソコン上でタイ文字とラオ文字を混在させられることが重要であるが、これまでは、それを容易に実現することができなかった。この問題を解決すべく、筆者は、パソコン上でラオ文字を表示できること、それと同時に、同一文書内で、タイ文字とラオ文字を混在させられることという、2つの目的を実現するソフトウェア環境を開発した(山下1999d, 山下2000b)。これについては、タイ文字とラオ文字を一文書の中で混在させる際に生じる問題とその解決法も含め、付録Iにおいて詳述する。

## 1. 7 国民国家形成と言語政策

東北タイにおける言語状況、特にイサン語に代表される地域言語の実態に関しては、タイ政府の政策、特に国民統合政策を無視することはできない。なぜならば、1. 2節すでに述べたように、19世紀以来タイ政府は、西欧列強進出の圧力下で、国民統合政策を開始し、東北タイもその影響を強くこうむったからである。ラオのつく地名の廃止（前述1. 2節）、東北タイの名称としてのイサンの採用、言語の名称のラオ語からイサン語への変更などが、この政策の例である。以下、この意味で、国民国家を形成するためにタイ政府が採った教育政策を、言語政策を中心に振り返ってみる。

1. 2節で述べたように、フランスは、インドシナ植民地建設の過程で、タイに対し、5回にわたる領土割譲の要求を認めさせた。このような西欧列強に対抗するために、国家体制の近代化が急務であったタイは、国民国家形成のための教育政策と言語政策を打ち出していった。

1884年、ラマ5世は、王立庶民学校を王立寺院の中に開設した（李 1997: 39）。また、教育担当部局の整備もされたが、それまで教育を担当していたサンガ（僧伽）との関係なども絡み、教育行政の一本化は遅々として進まなかった。そこで、1902年の「サンガ統治法」により、教育計画を遂行する責任の一切を教育局に移すことが定められた（綾部・中園 1995: 207-208）。その教育局は、1909年に文部省へと昇格した（李 1997: 39）。

タイにおける義務教育の構想は、1890年代に提案されており、1892年には教員養成学校も開設となった（李 1997: 39）。しかし、財源難や、家庭内労働者として児童を重視する立場からの反対により、義務教育の実施は見送られた。1913年には、国民教育計画が布告され、初等学校は3年の普通勉学課程および2年の職業課程となり、中等教育は8年の課程となった。また、1918年私立学校法が制定され、私立学校にも、国家の統制が行われるようになった（李 1997: 40）。タイにおいて義務教育が実施され始めたのは、1921年の「仏暦2464年教育大綱」と「仏暦2464年初等教育法」以降である（綾部・中園 1995: 208）。ただし、この時点では、初等教育が全国同時に実施されたわけではなく、徐々に実施地域を拡大していく方法がとられた。1921年に義務教育を実施した村は45.7%であったが、1932年には88.7%の村に普及した（綾部・中園 1995: 208）。就学率が100%近くになるのは、1960年代のことである（赤木 1989: 65）。戦後は、1960年に7年の義務教育制へ、1978年に6-3-3制へと移行し、初等教育の就学率が高められた（李 1997: 41）。

タイ政府は、国内民族集団に対する「かなり積極的な国語統一政策」（豊田 1968: 385）を、このような教育政策の根幹に位置付けてきた。1932年の、タイにおける立憲革命において、憲法の中に「国民は全て初等教育を受けねばならない」（第56条）など、教育

を重視したタイ・ナショナリズムと標準タイ語による国民統合の考え方が、国家政策として盛り込まれた（豊田 1968: 385）。憲法上、標準タイ語が国語であるとは記述されていないが、憲法もその他の法律も公文書はすべて標準タイ語で書かれている。これは、標準タイ語だけがタイで公式に使用される言語との意味をもつ。

さらに、1936年の「ラッタニヨム<sup>6</sup>」の発布により、タイ国内での標準タイ語の使用が、強力に押し進められることになった。憲法とは異なり、ここでは、はっきりと標準タイ語使用が謳われている。その過程で、タイ・ナショナリズムの障害になる中国人、パタニ・マレー人（Pattani Malay）に対する標準タイ語学習の強要といった政策がとられ、民族語による教育への弾圧とも重なり、中国人学校は閉鎖され、マレー語地域でも摩擦が起き、その後も長く、紛糾の要因となった（李 1997: 40）。1937年の「私立学校規定」では、華僑がその学校長となる場合に、タイ国に対する忠誠思想や、タイ国の歴史地理などの知識を要求しただけでなく、授業用語について、認可した科目以外は標準タイ語でなければならないとした。この他、1939年の7、8月に、漢字で書かれた華僑新聞に対して大弾圧を加え、一紙を除く全ての華僑新聞を廃刊あるいは無期停刊処分にした（豊田 1968: 387）。

以上概観したように、タイにおける教育政策の根幹には、教育用語は標準タイ語でなければならないという言語政策が存在しており、それは現在も続いている。そして、初等教育からのこのような標準タイ語による教育は、事実成功しているといわれる（豊田 1968: 385）。

このような言語政策が存在するにもかかわらず、タイの憲法には、国語条項が見当たらない。ただ、含意においては強固な言語政策を有するといつてよい。すなわち、タイ王国憲法は1932年制定以来、何度も修正がなされているが、そのいずれもその他の法律も公式文書はすべて標準タイ語で書かれ、英語その他の言語で書かれたものはすべて単なる翻訳とみなされる。

タイにおける教育政策には、初等教育レベルから後期中等教育レベルまで、標準タイ語を標準タイ語によって教えるという方針が厳然と存在する（藤田 1993: 146）。例えば、1978年に制定された憲法の下では、4本の柱からなるタイの教育政策のうち1つが「国家は国民がすべて意思伝達目標に沿ってタイ語を流暢に使えるようになるように教育体制を整えなければならない」である（藤田 1993: 144-146）。

---

<sup>6</sup> 「ラッタニヨム」は、ピブーン首相が1939年から12回にわたり発布した、「国家信条」という意味の、タイ人が従うべき行動基準のことである。ピブーンは、これを使って、国名を「シヤム」から「タイ」へ変更する方針を示したり、タイ国民はタイ語を読み書きできる義務をもつといった行動基準を示すなど、国民意識の高揚を図った。



確かに、標準タイ語以外の言語としては、一部の地域でマレー語、中国語が教えられている場合もないわけではない。マレーシアに接するタイ南部の4つの郡部にはマレー語を教えている148の学校があるが、それはタイ全体の初等・中等学校(4269校)の3.47%に過ぎない。都市部では、中国語を教えている164校の学校があるが、これもタイ全体の初等・中等学校の3.84%に過ぎない。しかも、マレー語、中国語による初等教育は減少しているとみられる。タイでは標準タイ語を使う機会と標準タイ語による教育機関の方が圧倒的に多く、標準タイ語による教育によって教育・職業の機会が開かれることが知られている(藤田 1993: 147)からである。

また、古典語として、高等教育の場で、パーリ語、サンスクリット語、クメール語が教えられている。しかし、これらの古典語は、言語学的価値及び歴史的価値の故に学ばれている(藤田 1993: 143-148)のであり、クメール語を母語とする東北タイの人々の存在とは無関係である。

現在、タイの言語政策を執行しているのは、文部省と大学省、および、郵政省である。郵政省は、ラジオ、テレビ、郵便、電信、電話の各通信機関を直接的に所管しており、その権限において、言語政策の執行に関与している。郵政省は、タイ国内のメディアにおいて、マレー語や中国語といった標準タイ語以外の言語や、標準タイ語以外の方言の使用を認めていない。放送番組は、特に外国語と銘打ったものを除き、すべて標準タイ語によるものである。タイの何百万という聴取者が外国語やタイ語の別の方言による番組を望んでいるという証拠がある(Noss 1967: 199)にもかかわらず、この方針は貫かれている。テレビ、ラジオが国民の全ての階層に行き渡っており、また受信状態が国の辺境地においてさえ極めて良好であることを考えると、言語政策上、この方針は大きな意味をもつ。テレビやラジオは、標準タイ語という国語の普及に、教育に次いで貢献している(藤田 1993: 163)。

以上述べたように、タイの教育政策の根幹には、標準タイ語によって標準タイ語を教育するという言語政策が据えられており、国民統合の手段として、標準タイ語が、あらゆる水準の教育分野で使用されている。イサン語、カムムアン語、パクタイ語といった、非公式には地域言語の地位を獲得している言語ですら、タイの教育に関しては何の役割も与えられていない。そして、タイ国民を形成する最も有効な手段が、標準タイ語のみによる義務教育である。タイにおける近代義務教育である小学校の、標準タイ語普及に果たす役割はきわめて重要である。また、高等教育においても、標準タイ語による国民統合という考え方は徹底していると言えよう。それと同時に、タイ国内のメディアが、標準タイ語の普及に大きく貢献していることも見逃せない。

タイ政府の言語政策に関連して、タイ政府の文字政策についても簡単に振り返っておく。それは、文字政策もまた、国民国家形成に大きな役割を担っているからである。

タイ政府は、タイ国内において、ラオ語、カムムアン語、パクタイ語などといった、タイクラン語以外のタイ諸語を表記するときも含め、国民統合のただ一つの媒体であるタイ文字を使うことを奨励し、この方針を堅持している。これは、国内の少数言語のタイ文字化を積極的に奨励していることを意味する（山下 1999c: 337）。例えば、モン人のミャオ語（Miao）には、タイ文字で記述された聖書が存在する。

タイ政府がこの方針を堅持しているのは、他の表記法を認めることは、タイの統一にとって障害になるのではないかとの危惧があるからである。特に、少数言語のローマ字による出版については、タイ政府は、規制を行うと発言しているほどである（李 1997: 41-2）。また、タイ内務省は、タイで活動する全てのキリスト教宣教師指導者を集め、将来にわたり、スゴー文字を例外として、タイ文字以外の文字で少数言語の本を出版することは許されないということを明言したという（Smalley 1994: 281）。

このような方針を受けて、現在では、ラオ語の表記にラオ文字はほとんど使われず、代わりに、タイ文字が使われる。日本のトヨタ財団の援助で作成された「イサン語・タイ語・英語辞書」は、イサン語をタイ文字で表記したものであり、ラオ文字の代わりにタイ文字を使用する傾向に拍車をかけているとも評される（Phinthong 1989）。

ところが、イサン語をタイ文字で記述する際には、図1. 3のように、タイ語とラオ語で声調の数と性質が異なるため、タイ文字による表記法だけでは、声調を正確に表現できないという問題が発生する（山下 2000a: 310-312）。

また、タイ政府は、アラビア文字、ローマ字といった、タイ文字以外で言語表記を行っている少数言語についても、すべてタイ文字で表記することを推奨している。その結果、クイ語（Kuy）、ルア語（Lavüa'）、ミエン語（Mien）、クメール語、パーリ語、モン語（Hmong）といった言語は、すでにタイ文字による表記がなされるようになった。また、カムムアン語、パクタイ語、アカ語、リス語、マル語（Mal）、ソー語（So）、ウラク・ラウォイ語（Urak Lawoi'）は、タイ文字による言語表記が検討されている（Smalley 1994: 284）。ただし、タイにおけるカレン人の最大勢力であるスゴーが使用する、スゴー語を記述するのに使用されてきたスゴー・カレン文字については、キリスト教の宣教師によって表記体系が作られたものであるとされ（Smalley 1994: 283）、すでに余りにも普及が進んでいるために、例外的にタイ文字で表記することはされていない。

タイ南部のマレー系ムスリム（muslim）の場合、話し言葉としてパタニ・マレー語を使用しているが、マレー語の書物をアルファベットで出版することは行われておらず、マレー語をタイ文字で表記することも行われていない。政府の建てた小学校で子どもがタイ語とタイ文字の教育を受けることに抵抗を感じるマレー人のムスリム伝統主義者の中には、子どもを、マレー語とアルファベットでの教育がなされているマレーシアの小学校に国境

を越えて通わせる者もいるという (Smalley 1994: 169)。出版物についても、マレーシア国内で印刷されたマレー語の書物がタイ国内に持ち込まれており、タイ国内では、マレー語の書物は印刷されていない。

## 1. 8 イサンのタイ国内における位置付け

前節では、タイにおける国民国家形成について、教育政策、特に、言語政策と文字政策という視点から論じた。そして、その中で、タイ国内の民族集団に対して、政府が、かなり積極的な国民統合政策を採ったことも明らかにした。

それでは、現在、タイ国内において、イサン地方、及び、そこに住むイサン人は、どのような位置付けをされているのであろうか。

1. 2節で述べた歴史的経緯からして、タイでは、タイ人 (Thai) が主流集団を形成しており、イサン人をはじめとする他の民族は、非主流集団である。これに加えて、イサン人にとっても、他のタイ国民にとっても、イサン人は、タイとの戦に敗れたラオ人の子孫という認識がある。この歴史的経緯と劣悪な稲作環境から、イサンということばには、貧困と無教養な田舎者の住む辺境地域というネガティブな意味が含まれ、差別されることが多い (林 1993: 51)。特に、タイの首都バンコクでは、東北タイ出身者であるイサン人は、貧乏であるとか田舎者であるという理由で、タイ人から蔑視され、差別されることが多い (Rogers & Soongswang 1996: 207-211) <sup>7</sup>。

また、タイでは、首都バンコクと、東北タイのような地方との間には、経済的に厳然とした格差が存在する。その地方の中でも、東北タイは、タイの中での最貧地帯である (桑原 1989: 191-192)。事実、東北タイにおける一人当たりの平均年収は、1980年の時点でも、タイ全国平均のわずか半分以下であった (Girling 1981: 71)。国民所得について見れば、1989年における一人当たりGDPにおいて、東北タイは、首都バンコクの1/8にしか達しておらず、かつその差が徐々に開いてきている (綾部・中園 1995: 182)。

言語、民族集団という観点からすると、東北タイの特徴は、次の点にまとめることができよう。

- (1) イサン地方が、政治的、経済的に非主流集団の居住地であること
- (2) 言語的には、国語・公用語以外の言語を使用する集団が多数を占め、しかも、東北

---

<sup>7</sup> 次のようなエピソードは決して珍しくない。東北タイのナコンパノム (Nakhon Phanom) の学生を連れてバンコクに研修旅行に行き、その差別的行動に憤った教官の話を知ることができた。彼は、宿泊先の校長が、歓迎の挨拶の中で、学生たちのことを、訳の分からない言葉 (ラオ語) を喋る田舎者という表現をしたり、風呂の代わりにチャオプラー川で体を洗えといわれたことに憤慨していた (山下 1999a: 80)。また、1980年、NHKの一隊が東北タイのドンデーン村に短期滞在したとき、その一隊に同行してきたバンコクの通訳が、東北タイ人を見下した態度をとったことに、村人はかなり憤慨していたという (口羽 1990: 29)。

タイ自体が多言語地域であること

- (3) イサン地方と国境を接して、イサン地方のラオ語（イサン語）と同じラオ語を国語に制定したラオス人民民主共和国（Lao People's Democratic Republic）があり、約300万人のラオ語話者が存在すること

## 1. 9 課題設定

本論文の目的は、これまで述べてきた状況にある東北タイの住民の言語使用の実態や帰属意識を、現地調査に基づいて明らかにすることである。具体的には、以下の3点を明らかにすることを目的とする。

- (1) 東北タイにおいてどの言語が、どの程度、かつ、どのように使用されているか、その実態を明らかにすること
- (2) 東北タイの人々が、そのような言語をどう認識し、また、言語間の関係をどのように認識しているかを明らかにすること
- (3) 東北タイの人々が、自分たちをどのように呼び、どのような帰属意識を抱いているかを明らかにすること

さらに、上記(1)－(3)に関して、多重性、重層性を実証的に明らかにすることも、本論文の目的である。

この3点を明らかにすることは、東北タイの人々の言語と、社会との関わりを明らかにすることでもある。そのような研究の理論的枠組みとして、言語と社会との関わりを明らかにするために、ハウゲン（Einar Haugen）が提唱した「言語の生態系（language ecology）」という概念を援用する。言語の生態系とは、言語と、それをとりまく社会との関係を明らかにすることを意図するものである。

ハウゲンは、ある言語の生態系を明らかにするのに必要な10の規準を提案している。これらの規準は、本論文の研究にも有用な枠組みを与えてくれるものである。以下に、その規準を示す。

- (i) ある言語と他の言語との分類学的関係
- (ii) その言語の使用者
- (iii) その言語の使用域
- (iv) その言語の2言語使用の程度
- (v) その言語の内部的多様性
- (vi) その言語の書き言葉の伝統

- (vii) 標準化された言語との差異
- (viii) 制度上の支援の水準
- (ix) 話し手の態度
- (x) その言語の他の言語との関係

本論文は、言語の生態系という概念に、基本的には従うものである。しかし、以下のようない点において、ハウゲンの議論とは異なる。

第1は、研究の対象言語が異なるという点である。ハウゲンの規準は、規準の(v)にもあるように標準語、方言などの内部的多様性を否定するものではないが、基本的には単一の言語を対象としたものである。しかし、本論文においては、単一の言語の生態系を対象にするのではなく、複数の言語の生態系からなる東北タイ全体の言語的生態系を対象にする。これはおそらく、タイの言語研究を専門とするスモーリーが、タイの諸言語を研究する上で、ハウゲンの考えを採り入れ、言語の生態系の重要性を説き、著書の副題を「タイにおける言語の生態系」とした(Smalley 1994: 5-6)趣旨と同じであろう。

第2は、本論文においては、複数言語間の関係を検討するという点である。複数言語の生態系を考えると、ハウゲンの規準の(x)にある「言語間の関係」が重要な意味をもつ。本論文において、言語間の重層化、序列化の問題を検討するのは、ハウゲンの規準の(x)を拡張したものである。

第3は、本論文が、言語の生態系という概念を基礎としつつも、生態系の概念規定を拡張して、民族(あるいはエスニック集団)をも、特に民族への帰属意識をもこれに含めて考える点である。言語が民族の唯一の規定要因であるはずもないが、言語と民族が相互の生態系の重要な一要因であることは否定できないと考えるからである。

第4は、ハウゲンが言語の実態に重きを置いているのに対し、本論文では、言語の認識にもまた重きを置いている点である。これは、分類(i)ある言語と他の言語との分類学的関係、(v)その言語の内部的多様性、(x)その言語の他の言語との関係と関わる問題である。

もちろん、ハウゲンの示した10の規準に対し、これまで全く批判がなかったわけではない。規準のリストに地理学的な次元といった変数が存在しない、あるいは、歴史的、宗教的、教育的次元といった変数が明確に定義されていないといった批判は存在する(Edwards: 1992: 37)。しかし、本論文の目的である、東北タイで使用される「タイ語」や「イサン語」といった諸言語に関する認識や、住民の帰属意識を明らかにするという視点からは、言語の生態系という概念は有効であると考えられる。

筆者は、このような目的のために、2001年3月と9月に、東北タイにおいて200

0人を超える規模の調査を行った。本論文は、この調査結果に基づいて、目的として掲げた3点を明らかにする。

この調査結果から得られた知見は、東北タイにおける言語使用に関する認識や帰属意識を明らかにするだけではない。東北タイにおいては、言語使用に関する認識や帰属意識に関して、今回の調査のような、広範囲かつ大規模な調査は、未だかつて行われていなかった。本論文で実施した調査は、東北タイ全域と主要言語の全てを対象として東北タイの住民の言語使用の実態を明らかにする初めての試みであり、その意味で、調査結果は、それ自体として今後の研究の基礎データとなり得るものである。

## 1. 10 論文の構成

前節で示した目的を明らかにするために、本論文は、以下のような構成で記述する。

まず、第1章（本章）においては、東北タイの言語と民族の歴史と先行研究を検討した上で、本論文の課題を設定した。第2章においては、東北タイにおいて実施した言語調査の設計とその詳細を述べる。第3章においては、東北タイにおける言語使用の実態を述べる。具体的には、多言語使用の実態とその使い分けの実態を論ずる。第4章においては、このような複数の言語間の関係がどのように認識されているかを論ずる。東北タイの住民の言語認識の問題である。具体的には、2言語の異同、包含関係、言語間の序列がどのように認識されているかを明らかにする。第3章が実態を対象とするのに対し、この章と次章第5章では、もっぱら、認識の問題を対象とする。第5章では、呼称と帰属意識の問題、すなわち、東北タイの人々が自分たちにどのような呼称を使用し、どのような帰属意識をもっているかを明らかにする。第6章では、東北タイの言語や民族への帰属意識の多様性を考察する一つの手がかりとして、コラート語について論ずる。そして、第7章で、本論文の結論を述べる。

末尾に、調査結果の詳細と、パソコン上でラオ文字を表記できる UNICODE 拡張ラオ文字コードについて論じた論文を付録として掲げる。

## 第2章

### 東北タイにおける言語調査

## 第2章 東北タイにおける言語調査

前章で提示した3つの目的を達成するために、東北タイにおいて現地調査を実施した。この章では、まず、現地調査に先立って実施した調査票の設計の際に参考とした先行研究を概観する。次に、調査票の設計について論じた後、調査項目を質問票の設問を中心に論ずる。最後に、東北タイで実施した調査の実施状況について触れる。

### 2. 1 先行研究

#### 2. 1. 1 多言語使用についての先行研究

本論文の研究対象である東北タイは、複数の言語が日常的に使用される「(2言語使用を含む)多言語使用 (multilingualism)」の状況にあり、タイ語、イサン語、ラオ語、コーラト語、クメール語、中国語、スワイ語といった、複数の言語が使用されている地域である。例えば、今回実施した調査において、母親と話す言語が複数あると回答した住民の比率が約23%であることはその一端を示すものである(後掲表3.2参照)。

そして、ここでは、上位言語が公的な場で使用され、その他の言語が下位言語として私的な場で使用される「ダイグロシヤ (diglossia)」という現象が観察される。また、多言語使用の下では、現実の状況によって使用する言語が選択される「言語選択 (language choice)」という現象が観察される。多言語使用の実態を検討するときには、単に複数の言語がどの程度使われているかだけではなくて、諸言語がどのように使い分けられているかを明らかにする必要がある。ここでは、このような多言語使用に関する先行研究を概観する。

多言語使用の実態に関しては、これまでも、多くの研究が行われてきた。

多言語使用について、クライン (Michael Clyne) は、「公式の」多言語使用と、「事実上の」多言語使用を分けて考える必要があるとしている (Clyne 1997: 301)。「公式の」多言語使用の事例として直ちに想起されるのは、カナダ、スイス、ベルギーのように国家レベルで複数の言語を公用語としている例であるが、カナダのニューブランズウィック州 (New Brunswick) のように、州レベルで英語とフランス語の2言語を公用語としたり、インドのグジャラート州 (Gujart) のように、グジャラティー語 (Gujyاراتi) とヒンディー語 (Hindi) の2言語を公用語としている事例もある。

この分類に従うと、東北タイの場合は、タイ語以外は公用語の地位を持たないことからして「事実上の」多言語使用の事例に相当する。



「事実上の」多言語使用の事例は、マカオ (Mann and Wong 1999: 29)、シンガポール、マレーシアの中国語コミュニティ (Platt 1977: 362-366)、パプアニューギニア (Romaine 1992: 229)、ヴァヌアツ (Vanuatu) (Crowley 1994: 5)、コーカサス (Caucasus) のダゲスタン地方 (Daghestan) (Bennigsen and Lemerrier-Quelquejay 1985: 125)、アフリカの多くの地域、例えば、ザンビア (Zambia) (Kashoki 1982: 160)、コート・ジボアール (Côte d'Ivoire) (原口 1980: 60-73) など、枚挙に暇がない。

東北タイにおける多言語使用の研究としては、次の3つが挙げられる。

第1は、プレムスリラット (Suwilai Premsrirat) の研究である。彼は、東北タイ・スリン県 (Surin) の村において、ラオ語、スワイ語、クメール語、標準タイ語、タイチュウ語 (Teochiu, 潮州語) といった複数の言語が使用されている多言語使用の状況を明らかにした (Prasithratsint 1988: 269 より引用、原文未見)。

第2は、スモーリーの研究である。彼は、東北タイに居住する北クメール語話者に関して、北クメール語、タイ語、ラオ語、クイー語 (Kuy) といった多言語使用の状況にあること、および、彼らが他の民族集団と非常に多く接触しているにもかかわらず、固有の言語を維持しているという状況を、調査データに基づき明らかにした (Smalley 1988)。

第3は、林行夫の研究である。彼は、東北タイにあるドンデン村の村人について、世代的に見れば、30代の村人はほぼタイ語とイサン語の2言語使用能力をもっており、50代のイサン人でもタイ語新聞を読むことだけにはできることを報告した。また、標準タイ語教育を受け始めたさらに高齢の第1世代は、タイ語は理解しても読み書きはできず、逆にイサン語はイサン文字で読み書きできると報告した (林 1990: 409)。

東北タイの多言語使用に関する先行研究は乏しい。しかも、特定の地点に限られた調査であり、東北タイの広い範囲を対象としたものではない。

すでに述べたように、「多言語使用」の状況においては、人々は、現実の状況によって使用する言語を使い分ける「言語選択」という現象が観察される。

この、複数言語の使い分けについて明示的に理論付けを行ったのが、ファーガソン (Charles A. Ferguson) である。ファーガソンは、「ダイグロシヤ」という概念を導入し、上位言語は公的な場で、その他の言語は下位言語として私的な場で使い分けられると論じた。ファーガソンのダイグロシヤ概念は、本来はひとつの言語の2つの異なるヴァライアティ<sup>1</sup>、例えば標準ドイツ語とスイス・ドイツ語とが、社会全体を通して公的な場と私的な場で使い分けられる状態を指す (Ferguson 1972: 232) ものであった。そして、2つの異なる言語が、言語共同体全体で、公的な場と私的な場で使い分けられる状況にはこの概

<sup>1</sup> 本論文で、言語という場合には、すべて言語ヴァライアティの意味をも含む。「言語ヴァライアティ」とは、語彙、文法、音声などの言語的諸要素の集合であり、地理的方言および社会的方言、その他に文体と呼ばれるようなものも含まれるものとする。

念は適用されなかった (Ferguson 1972: 233) が、今日では、ひとつの言語の2つの異なるヴァライアティでなくとも、ダイグロッシアという概念に含めるのが普通である。この2つの言語ヴァライアティあるいは2つの言語は、ファーガソンに従い (Ferguson 1972: 234)、それぞれの役割に応じて「上位言語 (ヴァライアティ)」、「下位言語 (ヴァライアティ)」と呼ばれる。

東北タイにおいても、上位言語としての「タイ語」と、下位言語としての「イサン語」といった、ダイグロッシアの状況が存在すると考えられる。また、複数の言語使用域によって、使用される言語が異なる状況も予想される。

タイの言語について、スモーリーは、標準タイ語とタイ克蘭語、あるいはイサン語が全て別言語であるとしており、それ故、タイの諸言語は、ファーガソンの「ダイグロッシア」の元々の用法である、本来はひとつの言語の2つの異なるヴァライアティが、社会全体を通して公的な場と私的な場で使い分けられるという状態には当てはまらないとしている (Smalley 1988: 258)。

ダイグロッシアを広く捉え、2つの異なる言語に対して適用できる概念であると考えたと、東北タイにおけるタイ語とイサン語の関係は、公用語と有力な地域語との間における、広義のダイグロッシアとみなすことができる。このような公用語と有力な地域語とのダイグロッシアの事例は、例えば、カナダのオンタリオ州 (Ontario) における英語とフランス語 (Heller 1995: 124-138)、ガーナにおける英語とアカン語 (Akan) (Laitin 1991: 143-154)、ケニアにおける英語とスワヒリ語 (Swahili) (Muthiani 1979: 378-387)、ザンビアにおける英語とニャンジャ語 (Nyanja) (Siachitema 1991: 474-489)、フリースランド (Friesland) におけるオランダ語 (Dutch) とフリージア語 (Frisian) (Gorter 1987: 122-130) 等に見られる。

さらに、フィッシュマン (Joshua A. Fishman) は、これを精緻化する形で「言語使用域 (domain)」という概念を提唱した (Fishman 1972: 441)。フィッシュマンの言語使用域の概念は、ファーガソンの公と私の二分法を拡張し、政府、職場、家庭、教会、学校など多数の使い分けの場を設定したものである。この言語使用域という概念に基づく言語選択については、フィッシュマンによって提唱された後、多くの研究が蓄積されている。インドのマラティー語 (Marathi) 少数言語集団の、集団内、他集団間といった言語使用域における、マラティー語、ヒンドウスタニー語 (Hindustani)、ヒンディー語 (Hindi) の使い分け (Khubchandani 1977: 41-42)、沿岸地域カダザン児童の、学校、教会、遊びという言語使用域における、カダザン語とマレー語の使い分け (Lasimbang et al 1992: 346)、フィリピンにおける英語とフィリピノ語 (Filipino) に関しての、英語は学校、フィリピノ語は家庭という言語使用域による使い分け (Pascasio 1979: 123)、等の事例が存在する。

言語使用域をさらに細分した研究としては、以下の事例が挙げられる。第1は、インドのボンベイ (Bombay) で、家族とは母語のグジャラティー語の方言、仕事場ではカッチ語

(Kacchi)、市場ではマラティー語、鉄道の駅ではヒンドゥスタニー語 (Hindustani)、飛行機では英語と、言語使用域によって言語が使い分けられている事例 (Edwards 1994: 2) である。第2は、インド・デリー (Delhi) のベンガル人 (Bengalis)、パンジャブ人 (Punjabis)、カンナダ人 (Kannadigas) に対する調査で、家庭言語使用域およびその他の言語使用域として、部下、友人、同僚、上司と分けた事例 (Srivastava 1989: 18) である。第3は、マカオでの調査で、家庭、職場・学校、パーティーという言語使用域で分けた事例 (Mann and Wong 1999: 29) である。第4は、ベルギー (Belgium) のフランダース地方 (Flanders) におけるオランダ語の標準語と方言に関して、配偶者、友人、職場、親子、大人と子ども、学校、マスコミといった言語使用域の順で、前者ほど方言、後者ほど標準語が使われる事例 (van Hout 1988: 108-113) である。第5は、ルクセンブルグ (Luxembourg) における誕生、結婚、死亡という言語使用域において、誕生と結婚ではルクセンブルク語 (Lëtzebuergesch) が、死亡ではフランス語が使われる事例 (Hoffmann 1996: 128-131) である。

プラット (John T. Platt) は、多言語の使い分けについて、シンガポールとマレーシアの英語で教育を受けた華人の事例をもとに、更に詳細なポリグロッシア (Polyglossia) のモデルを提案している (Platt 1977: 368-369)。これについては、言語の階層化との関わりで、4. 2. 4で論ずる。

東北タイにおける言語の使い分けの先行研究については、東北タイのクメール語地域の住民が、地域、被験者の教育水準、性、年齢、世代に応じて複数言語を使い分けていることを明らかにしたスモーリーの研究 (Smalley 1988) が存在する。また、東北タイにおける言語使用域に関する調査としては、チャントラスパワン (Narumol Chantrasupawong) による、ナコンラチャシマ県でのコラート・タイ語に関する、年齢と性による類別詞の用法の違いの分析 (Chantrasupawong 1985) という研究が存在する。この研究は、コラート語に着目している点は特筆されるが、ナコンラチャシマにおけるコラート語や他の言語の使用状況を対象としたものではない。

地域を広げて、タイの諸言語に関して言えば、初めて社会言語学的な視点から検討されたのは、1920年代のことである。ピタヤロンコン (Phitthayalongkorn) は、タイ語が社会変化とともに変化してきたこと、外国との接触がタイ語を成長させたこと、新しい文化概念を表すために新語が造語されたこと、そしてこの変化が、タイにおける諸言語の多様性によってもたらされたことを指摘している (Phitthayalongkorn 1929)。その後、社会言語学的な視点からの研究が本格的に始まったのは、1970年代になってからである。セニスリタント (Rachanee Senisritant) は、ラオプアン語 (Lao Phuan)<sup>2</sup>を使用する地域で若年

<sup>2</sup> ラオプアン語は、プアン語 (Phuan) とも呼ばれ、話者人口は、スモーリーの推定で75,000人 (1989年) とされる (表1.1参照)。彼らは、中央タイのロップブリ周辺に住んでおり、もともとは、ラオスのルアンプラバンから移住させられたという (Brown 1985: 89)。

齢ほどタイ語を使用し、高年齢ほどラオプアン語を使用する傾向があることを指摘した (Prasithratsint 1988: 266-267 に引用)。これ例外の論文は、バンコク・タイ語 (タイクラン語) を扱ったもの (Palakornkul 1972, Beebe 1974)、あるいは南タイの言語を扱ったもの (Diller 1976) であり、現在東北タイで使用される言語を扱ったものではない。

このように、従来の東北タイの言語に関する研究は、特定の地点の特定の言語についての調査が主である。

言語使用域を設定し調査を行う場合、どうしても考慮しておかなければならないことがある。それは、言語を使用する場合の方向性の問題である。

言語使用域は、しばしば話し相手 (addressee)、すなわち、誰を相手にして話をするかによって定義される。このとき、話し手と聞き手の双方向で使用される言語を問題とする場合と、話し手が特定の聞き手に対してどの言語を用いるのか、例えば、母親に対してどの言語を用いるのか、を問題とする場合との二つの場合がある。前者、すなわち双方向の場合は、聞き手と話し手が同じ言語を使用すると仮定されていると考えてよい。しかしながら、後者、すなわち一方向の場合は、この仮定は必ずしも前提とされていない。AがBに対して用いる言語と、BがAに対して用いる言語は異なりうると仮定されているとみなすべきであろう。

また、集団を対象とした場合、一つの言語使用域に対して、一つの言語 (ヴァライアティ) が対応するという仮説は、多言語社会においては成立しない。後述の調査結果から明らかのように、集団の何%かがAという言語を使用し、何%かがBという言語を使用し、残りの何%かが、Cという言語を使用するというのが実情である。

以上、多言語使用に関する先行研究について概観したが、多言語使用の問題は、理論的には必ずしも整理されているとはいえない。例えば、亀井他編の「言語学大辞典」が、多言語使用という項目を掲げていない (亀井他 (編) 1996) ことも、その一つの証拠であろう<sup>3</sup>。

## 2. 1. 2 言語間の関係認識についての先行研究

本論文においては、住民が複数の言語間の関係をどのように認識しているかという「言語認識」も重要であると考えた。

例えば、東北タイで使用される言語に関する従来の研究では、スモーリーや、タムバイアが、タイ国内では「イサン語」とも呼ばれる「ラオ語」と、ラオスの国語である「ラオ語」が、言語学的に同一とみなしうるということを示してきた (Smalley 1988: 249, Tambiah

<sup>3</sup> 「多言語使用」の項目は、「二言語使用」を参照せよとなっている。

1968: 88)。しかしながら、これらの研究では、タイの「イサン語」とも呼ばれる「ラオ語」と、ラオスの「ラオ語」が、同一とみなされているのか、違うものとみなされているのかという認識の問題には全く触れられていなかった。また、それに関する現地調査もこれまで実施されたことがなかった。

複数の言語ヴァリエティが存在するとき、これまで多くの言語学者が指摘したように、個別の言語相互あるいは、個別言語と方言とを区別する普遍的な基準は存在しない (Trudgill 1974: 15-17, Rubin 1976: 392-395, Lyons 1981: 283-284, 田中 1981: 9-10, 松尾 1990: 77)。そして、複数の言語ヴァリエティが、同じ言語であるか、異なる言語であるかは、当該集団に属する住民が、自らの言語を、隣接する集団の言語と同じ言語であると認識するか、別の言語と認識するかという言語認識によって決まる (Rubin 1976: 395)。

それ故、筆者は、東北タイの言語の問題を議論するとき、言語学的に同一か否かではなく、東北タイの住民自身が言語についていかなる認識を抱いているかを考える。

しかしながら、東北タイの住民の言語認識に関する調査は、これまでほとんど実施されたことがなかった。そこで、山下は、1995年に、東北タイのコーンケン (KhonKaen) 県において、少数の大学生に対し、言語使用状況に関する調査を実施し、東北タイが多言語使用の状況にあること、および、住民の言語認識が曖昧であることを明らかにした (山下 1996)。また、1999年には、調査地点を2ヶ所に増やし、438名の大学生に対して、言語認識に関する調査を行った。そして、東北タイの若者が多言語使用であり、言語認識が曖昧であることを数値化して示した (山下 1999b: 121-123)。しかしながら、これらの調査は、対象を大学生に限定しており、また、調査地点も2ヶ所に限定したため、調査結果に、世代や調査地点による偏りが存在していた。

## 2. 2 調査票の設計：言語生態系調査のための幾つかの前提

この節では、東北タイにおける現地調査で使用した調査票の設計に関する幾つかの前提について論ずる。

### 2. 2. 1 ハウゲンの規準との関係

今回、調査票を設計するにあたっては、東北タイにおける諸言語の生態系を明らかにするために、1. 9節に示したハウゲンの提案の多くに則った。調査票に盛り込んだ項目については2. 3節で詳述するが、ここでは、既に議論した事柄に関わる項目について簡単に触れておく。

規準 (i)、「ある言語と他の言語との分類学的関係」

規準 (v) 「その言語の内部的多様性」

規準 (x) 「その言語の他の言語との関係」

この3つの規準に関し、言語学的分類については、既に1. 4節で述べた。しかし、東北タイの諸言語の関係がどのように認識されているかについては、改めていくつかの設問を設けた。設問については後述する。また、「その言語の他の言語との関係」については調査結果の分析の段階で、階層関係の推定を行った。

規準 (vi) 「その言語の書き言葉の伝統」

東北タイで使用されてきた文字については、タイ文字とラオ文字の関係も含め、既に論じた。東北タイにおける現地調査は、2. 4節で述べるように、予備調査と本調査を行っている。このうち、予備調査の段階では、前述のようにタイ文字とラオ文字を併用した設問を設けたが、本調査ではこれに関する設問は設けなかった。

規準 (vii) 「標準化された言語との差異」

規準 (ix) 「話し手の態度」

これらの規準に関しては、今回の調査では対象としなかった。両者とも、認識の面からこれを明らかにすることは、設問数の関係からしても方法論からしても困難であると判断して、今回の設問には、加えなかった。

規準 (viii) 「制度上の支援の水準」については、既に1. 7節で述べたとおりである。

## 2. 2. 2 言語の問題

言語使用の実態についての調査を行う場合、従来異なる言語であるとされてきた複数の言語を、あるいは、同一の言語または一方が他方の方言とされてきた言語を、異なる言語と分類するのか、それとも同じ言語と分類するのかという基本的な問題を議論しておく必要がある。多言語社会であるザンビアを研究したカショキ (Mubanga E. Kashoki) は、住民が多言語使用であり、かつ、言語間の関係が近い環境にあるときには、どのように言語を分類するのかという基本的な問題が存在することを指摘した。例えば、ベンバ語 (Bemba) とニャンジャ語は、従来の意味での異なる「言語」であり、異なる言語とみなせる。他方、従来の意味で異なる「言語」とみられていたイラ語 (Ila)、トンガ語 (Tonga)、レンジェ語 (Lenje)、ソリ語 (Soli) は、1つの「言語」に分類されるべきであるとした (Kashoki 1982:

147-148)。

この問題は、タイにおいて言語調査を行う場合にも妥当する。スモーリーが分類した、4つの地域言語である、タイクラン語(タイ語)、ラオ語、カムムアン語、パクタイ語は、すべてタイ諸語に属する言語である。それでは、イサン語は、ラオ語と異なる言語として扱うべきであろうか、それとも、われわれの言う広義のラオ語と分類し、「ラオ語」として一括して調査すべきであろうか。また、コラート語は、タイ語と異なる言語として扱うべきであろうか、それとも、タイ語の方言として、「タイ語」として一括して調査すべきであろうか。本研究の基になった調査のように、実際の発話を録音するという方法ではなく、自己申告により言語名称を回答させるという方法の場合、この問題は一層重要である。

東北タイで日常的に住民が使用している言語のうち、タイ語とラオ語、及び、タイ諸語とは別の系統に属するクメール語を独立の言語として扱うことは問題がないと言える。しかし、イサン語、コラート語、北タイ出身で東北タイに移り住んだ住民が家庭言語として使用するカムムアン語は、どのように扱うべきであろうか。ここには、従来明示的に提起されてはいないが、次のような実態と認識の乖離という問題も存在する。

それは、複数の言語あるいは方言、正確に言えば言語ヴァリエティが存在するときに、それらが、実態として異なっているのか、認識の上で異なっているのかという問題である。2つの言語が存在するときに、理論的には、以下の4つの場合が考えられる。

- (1) 実態として異なる言語を使用していて、それを異なる言語であると認識している場合
- (2) 実態として異なる言語を使用していて、それを同じ言語(もしくはその方言)であると認識している場合
- (3) 実態として同じ言語(もしくはその方言)を使用していて、それを異なる言語であると認識している場合
- (4) 実態として同じ言語(もしくはその方言)を使用していて、それを同じ言語(もしくはその方言)であると認識している場合

ここで問題になるのは、(2)、(3)の場合である。例えば、インドにおいて、ヒンディー語が、実態としては同じ言語でも、認識として次々と分化し、マイティリ語(Maithili)、ボジョプリ語(Bhojpuri)、マガヒ語(Magahi)、ラジャスタニ語(Rajasthani)、マルワリ語(Marwari)、パハリ語(Pahari)といった別の言語とされるようになった例がある(Chaklader 1990: 231, Kachru & Bhatia 1978: 50)。

タイ語(標準タイ語およびタイクラン語)とコラート語の関係についても同様のことが

考えられる。(2)の場合のように、実態として両者は異なる言語であるが、同一の言語(あるいは言語とその方言)と見なされているのか。あるいは、(3)の場合のように、実態として同じ言語(もしくはその方言)であるが、タイ語とタイ語とは異なるコラート語と認識されているのか。

この問題は、(広義の)タイ語とイサン語、カムムアン語との関係においても、また(広義の)ラオ語とイサン語の関係、(狭義の)ラオ語とイサン語の関係においても存在する。

今回の調査においては、東北タイにおける諸言語の関係を、実態のみならず、認識の面からも探るという意図から、イサン語、コラート語、カムムアン語を、タイ語の方言と位置づけるのではなく、すべて独立した言語であると見なし、調査票における言語の選択肢とした。この結果、言語の選択肢として、タイ語、イサン語、ラオ語、クメール語、カムムアン語、コラート語の6言語を用意した。なお、設問中では、「標準タイ語」とタイクラン語を含む意味で、「タイ語」という表現を用いた。この両者を区別した設問を設けることは、むしろ混乱を招くのではないかと予想したからである。

### 2. 3 調査項目

まず、調査票の記述言語については、英語ではなく、タイ語を使用した。これは、予備調査を実施した際に、欧米の研究者により東北タイで実施された調査における調査票が英語で記述されていたために被験者が質問を正確に理解できなかったという事例を把握していたからである<sup>4</sup>。調査票をタイ語で記述することにより、被験者が質問を正確に理解できないという可能性を減らすことができる。

また、被験者が調査全体の意図を推測することを困難にするために、設問1～31については、ランダムに設問を配したり、2. 3. 5に示すような、ダミーの設問を加えたりした。

東北タイでは、ナコンラチャシマ県を中心にコラート語が使用され、ブリラム県やスリン県などでクメール語が使用されるように、特定の地域で、集中的に使用されている言語が存在する。これは、東北タイにおける言語の内部的多様性の一例と考えられる。それ故、本調査では、コラート語を話すと答えた被験者に対してのみ、設問32～37によって、コラート人およびコラート語に関係する質問を行った。

調査票の質問内容は大別して以下の6項目、すなわち、回答者属性、多言語使用、諸言語の関係、呼称、帰属意識、その他から成る。

---

<sup>4</sup> 1999年8月にコーンケン大学で実施した聞き取り調査に依る。



### 2. 3. 1 回答者属性

調査票は無記名とした。ただし、データ処理上各被験者を区別する必要があるので、調査票回収の都度、各被験者に4桁の通番を振った。

調査票の属性を問う項目は、

年齢

性別

調査実施月日

である。

さらに、直接的な質問事項ではないが、調査協力者が調査地点名を記入し、地域別、居住地別の統計値を求められるようにした。これらの属性は、上掲のハウゲンの規準(ii)「その言語を使用する者」に部分的に答えるためでもある。

### 2. 3. 2 多言語使用の実態に関する設問群

これは、東北タイにおいてどのような言語がどのように使用されているかを知るための設問群であり、言語能力を問う設問と言語の使い分けを問う設問の2種類に分けられる。

住民が、どのような言語を話す能力があるのかを知るため、次の二つの設問を設けた。

「あなたが自由に話せるのは何語ですか。(複数回答あり)」

「あなたが少しでも話せるのは何語ですか。(複数回答あり)」

この設問からも明らかなように、本論文では、識字能力の問題は考慮せず、言語能力というときには、もっぱら、話せるか否かを問題にする。

また、この2つの設問については、自己申告による調査の場合、被験者の考える「自由に」「少しでも」がどの程度かという重大な問題が残る。そのため、厳密には、客観的な言語能力として扱うことはできないが、ここでは、この点の検討は控え、客観的な言語能力として議論を進める。

次に、住民が、話す相手によってどのような言語を使用しているか、すなわち、住民の言語使用域を調べるために、話し相手に応じた言語使用域を用意し、様々な使用域において、それぞれの言語がどの程度使用されるのかを調べることにした。

2. 1. 1で概観した言語使用域に関する先行研究においては、多様な言語使用域が設定されており、ある言語使用域が、さらに細分される場合もあれば、複数の言語使用域が、一つの言語使用域として扱われる場合もある。しかし、どのような言語使用域を設定する

かについての明示的な合意は存在しない。ただし、多くの先行研究が、家庭、友人、宗教的な場、政府といった言語使用域を設定している。それ故、本調査においては、公的な使用域から私的な使用域に対応するものとして、話し相手を規準に「役人」「僧侶」「友人」「父親」「母親」「子ども」の6つの言語使用域を用意した。「僧侶」という言語使用域を用意したのは、タイ社会における上座部仏教の重要性（Suksamran 1993: 46-54）を考慮したためである。また、言語を使用する場合の方向性については、双方向でなく、一方向で設計を行った。これらの設問は、ハウゲンの規準（iii）「その言語の使用域」を明らかにするためのものである。

「あなたは役場で役人と何語で話しますか。（複数回答あり）」

「あなたは僧侶と何語で話しますか。（複数回答あり）」

「あなたは友人と何語で話しますか。（複数回答あり）」

「あなたは父親と何語で話しますか。（複数回答あり）」

「あなたは母親と何語で話しますか。（複数回答あり）」

「あなたは子どもと何語で話しますか。（複数回答あり）」

役人の場合、公的な場であることを確実にするために、設問に「役場で」という表現を入れた。

言語能力と言語の使い分けに関する設問においては、「タイ語」、「イサン語」、「ラオ語」、「クメール語」、「カムムアン語」、「コラート語」という、東北タイで使用されている複数の言語名を選択肢として用意し、その中から選択させる形式をとり、複数回答を可能とした。また、選択肢に存在しない言語を話す能力がある場合には、「その他」という選択肢が選べるようにし、「その他」の欄に続いて、それが何という言語であるかを記述できるようにした。

このように、各設問に対して、複数言語の回答が可能な設計にしたのは、東北タイの住民の多くが、2言語使用を含む多言語使用者であると仮定したからである。後述のように調査結果はこの仮定を裏付けるものであった。言語使用域に関する設問についても同様である。

調査票では、言語使用と言語の使い分けに加えて、住民がタイ語、イサン語、ラオ語を使用する頻度が、以前から多くなったか否かを調べるために、以下の3つの付加的な設問を設けた。

「あなたは以前よりタイ語を多く使うようになりましたか。」

「あなたは以前よりイサン語を多く使うようになりましたか。」

「あなたは以前よりラオ語を多く使うようになりましたか。」

また、コラート語を話すとは回答した被験者に対しては、次の設問を設けた。

「あなたは以前よりコラート語を多く使うようになりましたか。」

これらの設問に対する回答は本論文では分析できていない。他の設問に対する回答との関係を含め今後の課題である。

### 2. 3. 3 諸言語の関係についての認識に関する設問群

今回の調査においては、東北タイで使用される主要言語の関係に関する認識を問う設問を設けた。具体的には、言語の異同を問う設問群と一方が他方の方言である関係（以下、これを包含関係と呼ぶ）を問う設問群である。

これらの設問は、ハウゲンの規準 (x) 「その言語の他の言語との関係」について、2言語の関係を、異同と包含という2つの関係に単純化して認識のレベルで明らかにすることを意図したものである。

これらの設問に対する回答から、第4章で説明するように、言語間の関係を、「同一」、「包含（方言関係）」、「独立」という3つの関係に還元することができる。

まず異同については、東北タイで使用される諸言語について、その異同がどう認識されているかを知るため、二つの言語XとYの組み合わせに関してそれぞれ次の2組の設問を設けた。設問には「・・・と思いますか (คุณคิดงักร)」と、回答者の判断を求める形とした。

「あなたはX語とY語は同じ言語だと思いますか。」

「あなたはY語がX語の方言だと思いますか。」

前者は、二つの言語の異同を問う設問であり、後者は包含関係を問う設問である。後者については、理論的には、この逆の

「あなたはX語がY語の方言だと思いますか。」

と問う設問も考えられるが、後述の理由により設けなかった。

調査で対象としたのは、タイ語、イサン語、ラオ語の3言語である。東北タイの家庭で最も多く使用されるイサン語がタイ語とラオ語とどのような関係にあると認識されているかを知ることが第一義的目的としたからである。それ故、タイ語、イサン語、ラオ語の3つの対にそれぞれ2つの設問、合計6個の設問を設けた。

<タイ語とラオ語について>

「あなたはタイ語とイサン語は同じ言語だと思いますか。」

「あなたはイサン語がタイ語の方言だと思いますか。」

<イサン語とラオ語について>

「あなたはイサン語とラオ語は同じ言語だと思いますか。」

「あなたはイサン語がラオ語の方言だと思いますか。」

<タイ語とラオ語について>

「あなたはラオ語とタイ語は同じ言語だと思いますか。」

「あなたはラオ語がタイ語の方言だと思いますか。」

前述のように、包含関係に関しては、これらの設問に加え、以下の設問も設ける必要があろう。実際、予備調査においては、包含関係に関して逆の質問、すなわち、

「あなたはタイ語がイサン語の方言だと思いますか。」

「あなたはラオ語がイサン語の方言だと思いますか。」

「あなたはタイ語がラオ語の方言だと思いますか。」

という設問も設けた。しかし、これら3つの設問に対し、「はい」と答えた回答が極めて少なかったため、本調査では、これら3つの設問は使用しなかった。

さらに、2つの言語の異同に関しては、どの程度の確からしさがあるかを調べるために、念のため、タイ語とラオ語の異同に関する

「あなたはラオ語とタイ語は同じ言語だと思いますか。」

という設問に対して、次のような逆の質問を、質問票の別の箇所で用意した。

「あなたはラオ語とタイ語は異なる言語だと思いますか。」

この2つの設問に対する回答を比較することにより、住民のこの2つの言語の異同認識の揺れを知ることができるかと想定したからである。

予備調査においては、タイ語とイサン語の異同とイサン語、ラオ語の異同についても同様に

「あなたはタイ語とイサン語は異なる言語だと思いますか。」

「あなたはイサン語とラオ語は異なる言語だと思いますか。」

という質問も行い、ラオ語とタイ語間の異同認識だけでなく、タイ語とイサン語、イサン語とラオ語についても、異同認識の確からしさを求めたが、4. 2. 1. 2に述べるように、認識の揺れという点ではほとんど差が認められなかった。比較すべき調査結果もなく、また認識の不確定性を知る方法としても今後さらに改善する必要があると判断し、本調査の設問には加えなかった。このような設問は、4. 2. 1. 2に示したように言語間の認識上の距離を知る手法とみなすべきであるかもしれない。

また、コラート語を話すと回答する被験者が相当数あると想定し、この回答者に対しては、イサン語とコラート語の関係について、同様の設問を用意した。これらは、今後の詳細な調査の前提として試験的に用意したものである。

「あなたはイサン語とコラート語は同じ言語だと思いますか。」

「あなたはコラート語がイサン語の方言だと思いますか。」

今回、タイ語もしくはタイクラン語とコラート語の関係を問う設問を用意しなかったのは、設問の総数を抑制するためでもあるが、基本的にはタイ語－イサン語－コラート語という階層的な関係を仮定し、階層的にも近いイサン語との関係をまず調べておく必要があると考えたからである。

#### 2. 3. 4 呼称と帰属意識を問う設問群

今回の調査では、住民の自称と帰属意識に関する設問も設けた。

ハウゲンの議論からすれば、このような事柄を取り上げることは、言語の生態系を構成する一要因とみなすことにほかならない。調査項目にこのような項目を加え、本論文で分析の対象としたのは、次の理由からである。

第1に、キースの指摘するように、東北タイにおいては民族の呼称が重層化し、かつ帰属意識に重要な関わりをもつことから、その実態を明らかにすることを意図したからである。第2に、すでに見たように、東北タイでは、民族名、地名や言語名が政府により強制された経緯があり、その実態がどのようなものであるかを明らかにしておくことが必要と考えたからである。第3に、自称と帰属意識が、言語使用や言語認識と強い関わりを示すと見なしうるからである。

具体的には、自称について、以下の3つの設問を用意した。

「あなたは自分をタイ人と呼ぶことがありますか。」

「あなたは自分をイサン人と呼ぶことがありますか。」

「あなたは自分をラオ人と呼ぶことがありますか。」

また、コラート語を話すと回答した被験者に対しては、次の設問を設定した。

「あなたは自分をコラート人と呼ぶことがありますか。」

また、帰属意識については、次の3つの設問を行った。

「あなたはタイ人というよりむしろイサン人だと思いますか。」

「あなたはイサン人というよりむしろラオ人だと思いますか。」

「あなたはラオ人というよりむしろタイ人だと思いますか。」

また、コラート語を話すと回答した被験者に対しては、

「あなたはイサン人というよりむしろコラート人だと思いますか。」  
という設問を用意した。帰属意識を調査するに当たっては、  
「あなたはイサン人というよりむしろタイ人だと思いますか。」  
「あなたはラオ人というよりむしろイサン人だと思いますか。」  
「あなたはタイ人というよりむしろラオ人だと思いますか。」  
という設問も使用すべきではあるが、設問の総数を抑制する目的で、これら3つの設問は使用しなかった。

さらに、住民の使用する複数の呼称について、住民が同じと認識しているか、異なると認識しているかを調べる目的で、3種類の設問を用意した。

「あなたはタイ人はイサン人だと思いますか。」  
「あなたはイサン人はラオ人だと思いますか。」  
「あなたはラオ人はタイ人だと思いますか。」  
また、コラート語を話すときと回答した被験者に対しては、  
「あなたはコラート人はイサン人だと思いますか。」  
という設問を用意した。

ただし、帰属意識については、このような設問の設定で十分であるとは言えない。それは、以下に示すような、2つの問題が存在するからである。

第1は、設問とその回答について、それらが、国民としての国家への帰属、地域への帰属、民族への帰属のいずれを表すのか、あるいは他の集団への帰属を表すのか、解釈が困難であるという問題である。国家・地域・民族への帰属意識を厳密に分離できる詳細な設問を設計し、調査を実施することは可能であろう。しかし、帰属意識という非常に繊細な問題を扱う場合、過度に詳細な設問は、被験者に対し、調査に対する無用の警戒感を与えることになりかねない。そして、その結果として、回答にバイアスがかかり、調査結果が実態を反映しないものになる可能性を否定できない。

第2は、設問の設定法が難しいという技術的な問題である。今回の調査は、上述のように、

「あなたはX人というよりむしろY人だと思いますか。」  
という設問に対し、「はい」「いいえ」「その他」という3つの選択肢の中から一つを選択する方式を採用した。

しかし、この方式よりも、  
「あなたはX人というよりむしろY人だと思う。」  
「あなたはX人でもありY人でもあると思う。」  
「あなたはY人というよりむしろX人だと思う。」

という3つの選択肢の中から、被験者がもっともふさわしいと思うもの一つを選択する方式の方が、より正確に、帰属意識を知ることができるかもしれない。この点については、今後の検討課題としたい。

### 2. 3. 5 その他の設問群

言語と帰属意識以外の異種の設問を用意した。これらは主に、ラオ人の生活習慣や歴史に関する設問である。

「あなたは都市と農村とどちらに住みたいですか。」

「あなたはうるち米ともち米とどちらが好きですか。」

「あなたは夫が結婚後妻方の両親と住むべきと思いますか。」

「あなたはチャオファーム伝説を知っていますか。」

これらの設問は、被験者が調査全体の意図を推測することを困難にすることと、言語使用などの変数との関わりの有無を知ることが意図されたものであるが、現在、まだ結果を分析するに至っていない。

## 2. 4 調査の実施

### 2. 4. 1 スモーリーの調査

今回の調査と類似の調査は、東北タイの北クメール語使用地域において、スモーリーが実施している。彼が実施した現地調査の内容は、以下のようなものである。実施時期は1988年であり、東北タイに居住する北クメール語話者に対し、世代毎の多言語使用の状況を知るために、2409人の被験者を対象に調査を行っている。彼は、

「あなた自身は何語を話しますか」

「父は何語を話しますか」

「母は何語を話しますか」

「祖父は何語を話しますか」

「祖母は何語を話しますか」

という設問を用意し、被験者にアンケート調査を行っている。その結果、クメール語、タイ語、ラオ語、クイ語による多言語使用の状況が認められたとしている (Smalley 1994: 142)。ただし、彼の実施した調査の目的は、北クメール語話者に限定して世代毎の多言語使用の状況を知るものであり、本調査とは目的が異なる。また、彼の調査地域が北クメール語使用地域に限定されている点も相違点である。

## 2. 4. 2 東北タイ住民の言語使用と言語認識に関する予備調査

東北タイの住民の言語使用と言語認識の傾向を知るために、1999年8月に、東北タイにおいて、大学生を対象とした予備調査を実施した。本論文においても、補足的に、この予備調査の結果を使用する。

以下に、その概要を示す。

- (1) 調査目的：東北タイ出身の学生が、タイ語、イサン語といった主要言語に対して抱く言語認識の傾向を知る
- (2) 調査期間：1999年8月5日（木）～8月9日（月）
- (3) 調査対象：コーンケン大学、ラチャモンコン（Rajamangara）工科大学在学中の東北タイ出身の学生
- (4) 被験者数：398名
- (5) 調査方法：無記名の質問票へ記入する非面談形式
- (6) 質問票：出身県、年齢、性別、設問1～32（一部複数回答可能な選択式）  
タイ語、イサン語、ラオ語に関する設問を、タイ文字、ラオ文字を使用して記述

予備調査を実施した大学には、東北タイ出身の学生が多い。それ故、彼らの抱く言語認識を調査することにより、調査対象の年齢層が若年層に偏るという問題は存在するものの、東北タイの住民の抱く言語認識の傾向を知ることができると考えた。そして、調査の結果、東北タイの多言語使用の実態、および、複数言語の異同、包含関係の認識等を知ることができた。この調査結果の分析の一部は、本論文の中でも、4. 2. 1. 2等で使用している（山下 2000a: 307-315）。

## 2. 4. 3 東北タイ住民の言語使用と言語認識に関する本調査

2. 4. 2に示した予備調査の結果を踏まえ、2001年に、東北タイの広範な地域において、様々な世代の住民を対象に調査を行い、彼らの言語使用と言語認識をより正確に把握する本調査を実施した。本論文では、この本調査の結果を主に使用している。

本調査の調査方法は、タイ語で記述した調査票に基づき、タイ語を話す調査協力者が個人面談形式で住民に質問を行うというものである。

調査は、34ヶ所の地点で実施し、これを、地理的に、東北タイの中央部に位置する「コーンケン地域」と、東北タイの南西部に位置する「ナコンラチャシマ地域」（ナコンラチャ



シマ県、ブリラム (BuriRam) 県、チャイヤプーン (Chaiyaphum) 県) に分類した。

コーンケン地域では、タイ語を話すことができる調査協力者として、コーンケン大学の学生7名に調査の実施を依頼した。彼らは、イサン語も理解することができた。

また、ナコンラチャシマ地域では、調査協力者として、ラチャモンコン工科大学の学生6名に調査の実施を依頼した。彼らの大半はコラート語を理解することができ、1名の学生は、北クメール語も理解することができた。

両地域での調査とも、大学を拠点に、調査地点から調査地点へと自動車で移動し、調査協力者が被験者に面談を行う方式を採った。

回収した調査票は、SPSSに入力し、各種統計処理を行った。

以下に、本調査の概要を示す。

- (1) 調査目的：東北タイの住民がどのような言語を使用し、どのような言語認識をもっているかを知る
- (2) 調査期間：2001年3月3日(土)～3月9日(金)  
2001年9月3日(月)～9月9日(日)
- (3) 調査対象：コーンケン県、ナコンラチャシマ県、ブリラム県、チャイヤプーン県の住民
- (4) 被験者数：2375名
- (5) 調査方法：あらかじめ用意した質問票に基づき、調査協力者が個人面談形式で実施する無記名調査
- (6) 質問票<sup>5</sup>：年齢、性別、調査年月日、設問1～37(一部複数回答可能な選択式)  
設問32～37は被験者がコラート語を話す時のみ回答を求める
- (7) 調査協力者：コーンケン大学の大学生7名(チャローン氏、チュタマド氏、ニチサク氏、ラチャサク氏、ウィサワ氏、ウェイキン氏、ウィラチャニー氏)  
ラチャモンコン工科大学の大学生6名(ラチャサク氏、サカリン氏、タネット氏、ナッタノン氏、チュンポン氏、パイサン氏)
- (8) 調査月日・調査地点：  
本調査は、東北タイ内のコーンケン県、ナコンラチャシマ県、ブリラム県、チャイヤプーン県の、計33ヶ所において実施した。調査月日と調査地点は以下の通りである。

・コーンケン県

---

<sup>5</sup> 質問票の詳細については、2.2節参照。

- 3月3日(土) Muang Khon Kaen (Klangmuang通り、Langmuang通り)
- 3月4日(日) Muang Khon Kaen (Nanuang通り、Srichan通り)
- 3月5日(月) Ban Muang、Ban Nong Kung
- 3月6日(火) Kut Kuang、Tha Phra
- 3月7日(水) Phra Thad Kham Kaen
- 3月8日(木) Ban Non Sawan
- 3月9日(金) Ban Lau
- ・ナコンラチャシマ県、ブリラム県、チャイヤブーン県
- 9月3日(月) Phimai
- 9月4日(火) Chokchai、Khon Buri、Pak Thong Chai
- 9月5日(水) Ban Prasat、Ban Wat、Khong、Bua Yai、Ban Sida
- 9月6日(木) Huai Thalaeng、Buri Ram、Krasang、Prakhon Chai、Nang Rong、  
Nong Ki
- 9月7日(金) Pak Thong Chai、Sikhiu、Dan Khun Thot、Non Thai
- 9月8日(土) Nong Bua Khok、Chatturat、Nong Bua Rawae、Thep Sathit、  
Ban Kham Ping
- 9月9日(日) Muang Korat

写真2. 1は、2001年3月3日(土)～3月9日(金)の期間に調査協力を依頼した、コーンケン大学の大学生7名、写真2. 2は、2001年9月3日(月)～9月9日



写真2. 1 調査協力者(コーンケン大学大学生)

2001年3月3日筆者撮影

(日)の期間に調査協力を依頼した、ラチャモンコン工科大学の大学生6名である。



**写真2.2 調査協力者(ラチャモンコン工科大学大学生)**

2001年9月3日筆者撮影

## 第3章

### 東北タイにおける言語使用の実態

### 第3章 東北タイにおける言語使用の実態

本章では、調査結果を基に、東北タイの住民の言語使用の実態を明らかにする。まず、多言語使用の指標化を行う。次に、東北タイの住民に対する調査結果を、家庭言語、言語能力、言語の浸透度、属性、言語使用域毎の言語使用の順に検討する。

#### 3. 1 多言語使用の指標化

多言語使用の先行研究については前章において概観した。この章では、多言語使用の実態を検討する前提として、若干の理論的整理を行っておく。

任意の社会や集団を想定したとき、その社会や集団の構成員<sup>1</sup>の多言語使用はどの程度であるかを示す2つの指標を考える。

一つは、社会の構成員一人あたり平均していくつの言語を話せるかを示すものである。これを「多言語化指標」と名付ける。他の一つは、複数の言語を話せるものが構成員のうちどれくらいいるかを示すものである。これを「多言語人口比率」と名付ける。なお、特定の言語に着目したときの多言語化指標と多言語人口比率についても定義する。

また、以下の議論では、識字能力はまったく考慮せず、もっぱら話せるか否かを問題にするが、識字能力を言語能力に含めるとしても、まったく同様の手法を適用できる。

##### 3. 1. 1 多言語化指標 M (一人当たりの使用言語数)

多言語化指標 M は、社会の構成員すべての個人が一つの言語を話せるという前提のもとに、その他に平均して一人あたりいくつの言語を話せるかを示す指標であり、以下のように定義される。

$$M = \text{個人が話せる言語数の総和} / \text{人口} - 1 \quad (3. 1)$$

これは実際には、一人当たりの「自由に話せる言語数」の平均から1を減じたものである。1を減ずるのは、個人が1言語ではなく2言語あるいはそれ以上を自由に話せるのが多言語使用の定義に合致するからである。なお、本論文において多言語使用というときには、2言語使用の場合も含むものとする。

---

<sup>1</sup> ここで、構成員は特定の年齢以上、例えば15歳以上、の構成員を指すものとする。以下で「総人口」、「人口比」などと称するときは、この意味での構成員の総数を指すものとする。

本論文では、この指標は、次の値で近似する。

$$M \doteq \text{自由に話せる言語回答総数} / \text{回答者総数} - 1 \quad (3. 2)$$

例えば、後述のように、今回の調査による東北タイの事例では、 $M = 4277 / 2375 - 1 = 0.80$  になる。

この指標は、あくまで社会全体の平均値であって、内部の母語集団ごと、地域ごと、階層ごとなどの偏り、ばらつきを十分に表現できない。また、どの言語がどの程度話されているかといった当該社会で使用される諸言語の関係は当然表現できない。これについては、後の 3. 1. 3 で取り上げ検討する。

### 3. 1. 2 多言語人口比率 P (2 言語以上を使用できる構成員の比率)

多言語人口比率 P は、複数の言語を話せる人が社会の中にどのくらいいるかを示す指標であり、以下のように定義される。多言語化指標が算出できる場合、多言語人口比率 P は、常に同一のデータから算出できる。しかし、必要なデータが存在しない場合もあるので、多言語人口比率を定義しておく意味はある。

$$P = \text{2 言語以上を話せる構成員数} / \text{人口} \quad (3. 3)$$

調査データの分析では、以下の近似値を使用する。

$$P \doteq \text{2 言語以上を話せる回答者数} / \text{回答者総数} \quad (3. 4)$$

今回の調査によると、東北タイの事例では、 $P = 0.60$  である。

ちなみに、3 言語以上を使用できる構成員が存在する場合、P の値は、M の値より常に小さくなる。また、3 言語以上を使用できる構成員が全く存在しない場合、P の値と M の値は一致する。

### 3. 1. 3 内部集団ごとの多言語使用度

上記の多言語使用指標、すなわち、多言語化指標 M、および、多言語人口比率 P は、当該の社会全体だけでなく、その内部集団にも適用できる。後掲のザンビア、マレーシア、ヴァヌアツ等の事例は、この例に他ならない。

任意の集団  $i$  の多言語化指標を  $M_i$ 、集団  $i$  の人口を  $F_i$  とする。集団  $i$  の多言語化指標  $M_i$  は、以下のように算出できる。

$$M_i = \text{集団 } i \text{ の構成員が話せる言語数の総和} / F_i - 1 \quad (3.5)$$

本論文では、次の近似値を用いる。

$$M_i \approx \text{集団 } i \text{ の構成員が話せる言語数の総和} / H_i - 1 \quad (3.6)$$

ただし、 $H_i$  は家庭言語集団<sup>2</sup>  $i$  の回答者数とする。

同様にして、各内部集団ごとの多言語人口比率  $P_i$  も算出できる。

$$P_i = \text{集団 } i \text{ 中の 2 言語以上を話せる構成員数} / \text{集団 } i \text{ の人口} \quad (3.7)$$

本論文では、以下の近似値を使用する。

$$P_i \approx \text{2 言語以上を話せる回答者数} / H_i \quad (3.8)$$

このように、集団ごとの多言語化の指標を定義し、その値を求めることにより、社会の内部集団間、特に、言語集団間の関係、あるいは、言語間関係を明らかにする手がかりとすることができる。

上で定義した2つの多言語化の指標の意味を少し別の観点から考えてみよう。2言語使用を含めた多言語使用の実態に関して、議論の便のため、一国家あるいは一地域における2言語使用の場合を想定する。この場合、理論的には2つの極が想定可能である。一方の極として、異なる言語を使用する2つの集団が存在し、それぞれの集団は基本的に単一言語使用である状況を想定することができる。これを、社会レベルの多言語使用と呼ぶことにする。この場合、国家あるいは地域は、全体としては2言語使用である。もちろん現実には、2つの集団の間に言語コミュニケーションがまったく存在しないことはありえないから、それぞれの集団の特定社会層、たとえばエリートや商人層は、共通語や他集団の言語を使用する。部分的にはこのような2言語使用、多言語使用が存在するとしても、単一

---

<sup>2</sup> 家庭言語集団については、3.2節にて定義する。

言語使用集団が複数並存するという状況を一方の極として想定することができる。この場合、上で定義した多言語化指標  $M$  も、多言語人口比率  $P$  も、限りなく 0 に近い。他方の極には、一国家あるいは一地域の全ての住民が複数の言語を使用するという状況を想定することができる。この場合、多言語化指標  $M$  は常に 1 以上、多言語人口比率  $P$  は常に 1 となる。これを、個人レベルの多言語使用と呼ぶことにする。東北タイにおける多言語使用がこの両極の間のどのような位置にあるかを明らかにすることもまた、本節の目的である。

上述の  $M$  と  $P$  という 2 つの指標は、従来の研究においては明示的に定義されたことがない。実質的には同一のものであるが、多言語使用の度合いを単純な数値で示すことができること、計算が容易であることという利点をもつ。

### 3. 2 家庭言語

調査票においては、「役人」、「友人」、「僧侶」、「父親」、「母親」、「子ども」という 6 つの言語使用域を設定した。ここでは、その中で、「父親」、「母親」、「子ども」という言語使用域をまとめて「家庭」という言語使用域を定義する。また、言語能力を議論する前提として、本論文における家庭言語の概念について整理を行う。

#### 3. 2. 1 父親・母親と話す言語

言語能力を議論する前提として、本論文における家庭言語の概念を定義しておく。

今回の調査では、家族の中で、父親、母親と話す言語を問う設問を用意した。父親と話す言語に関する調査結果を表 3. 1、母親と話す言語に関する調査結果を表 3. 2 に示す。なお、表の中の数値は、各カテゴリーの被験者数全体に対する百分比である。複数回答ゆえ、合計は 100% を超える。

表3. 1 父親と話す言語(複数回答あり)

		タイ語	イサン語	コラート語	ラオ語
全被験者		36.6	54.2	25.1	4.3
地域別	コーンケン地域	23.9	87.7	0.0	3.3
	ナコンラチャシマ地域	47.5	25.3	46.7	5.1
性別	男性	37.7	52.1	25.8	4.6
	女性	35.5	56.4	24.3	3.9
年齢別	24歳以下	51.0	41.3	29.6	4.6
	25～44歳	31.2	58.0	24.5	2.7
	45歳以上	19.7	70.8	18.4	5.6
居住地別	都市部	53.1	49.5	16.6	5.0
	中間部	37.3	41.2	38.8	4.5
	農村部	24.5	71.9	15.7	3.5



表3. 2 母親と話す言語(複数回答あり)

		タイ語	イサン語	コラート語	ラオ語
全被験者		38.8	54.1	26.3	4.2
地域別	コーンケン地域	26.5	87.5	0.0	3.5
	ナコンラチャシマ地域	49.4	25.2	48.9	4.8
性別	男性	40.2	52.0	26.3	4.3
	女性	37.4	56.2	26.2	4.1
年齢別	24歳以下	54.7	40.4	31.7	4.5
	25～44歳	32.1	58.4	25.3	3.3
	45歳以上	21.0	71.1	18.5	4.7
居住地別	都市部	55.7	49.8	17.5	5.5
	中間部	39.0	41.3	40.1	4.4
	農村部	27.0	71.0	17.1	3.0

表3. 1、表3. 2を比較すれば、父親に対して使用する言語と、母親に対して使用する言語の比率が極めて近いことが窺われる。このことは、使用比率の差の絶対値をとってみれば、一目瞭然である。これを、表3. 3に示す。

表3. 3 父母と話す言語の使用比率の差

		タイ語	イサン語	コラート語	ラオ語
全被験者		2.2	0.1	1.2	0.1
地域別	コーンケン地域	2.6	0.2	0.0	0.2
	ナコンラチャシマ地域	1.9	0.1	2.2	0.3
性別	男性	2.5	0.1	0.5	0.3
	女性	1.9	0.2	1.9	0.2
年齢別	24歳以下	3.7	0.9	2.1	0.1
	25～44歳	0.9	0.4	0.8	0.6
	45歳以上	1.3	0.3	0.1	0.9
居住地別	都市部	2.6	0.3	0.9	0.5
	中間部	1.7	0.1	1.3	0.1
	農村部	2.5	0.9	1.4	0.5

(数値は%)

表3. 3から、父親と話す言語の使用比率と、母親と話す言語の使用比率がほぼ一致していることが明らかである。それ故、本論文では、父親と話す言語と、母親と話す言語とを同一視し、これを「家庭言語」と定義する。

### 3. 2. 2 父母と話す言語と子どもと話す言語

本論文における家庭言語の定義には、子どもと話す言語が含まれない。家庭言語 (home language, household language) というときに、従来の研究においては、受け手を分けて考える場合と、分けなくて考える場合がある。

受け手を分けて考える場合というのは、話し相手を、父母、祖父母、兄弟、姉妹等の言

語使用域に細分する場合である<sup>3</sup>。この場合には、一方向および双方向両方の調査方向があり得る。他方、受け手を分けずに考える場合というのは、家庭内で話す言語を一つの言語使用域と考える場合である<sup>4</sup>。

今回の調査においては、既に述べたように、話し手が特定の聞き手に対してどの言語を用いるのか、例えば、母親に対してどの言語を用いるのか、を問題とする一方向で実施することにした。また、今回の調査においては、聞き手によって、父、母、子どもという3つの言語使用域に分けた。しかしすでに述べたように、父に対して使用される言語と、母に対して使用される言語との比率にはほとんど差異がなかった。そこで、全被験者に関し、家庭内で使用される言語をまとめたのが表3.4である。

表3.4 家庭内で使用される言語

	タイ語	イサン語	コラート語	ラオ語
父親に対して	37	54	25	4
母親に対して	39	54	26	4
子どもに対して	60	45	23	4

(数値は%)

この表からも、父親と話す言語と、母親と話す言語とは事実上区別できない。他方、父母と話す言語と、子どもと話す言語とを比較すると、タイ語は子どもと話す場合のほうが使用頻度が高く、イサン語は子どもと話す場合のほうが使用頻度が低いという明らかな差異が見られ、受け手によって分けて考えたほうが、より詳しく分析できると考えられる。従って、本論文では、父母と話す言語を「父母」という一つの言語使用域、子どもと話す言語を「子ども」という一つの言語使用域として、別の言語使用域と考える。

### 3.2.3 家庭言語と母語

家庭言語という概念は一般に、家庭の中で通常使用する言語と定義され、母語という概念は一般に、人生の中で最初に母親から学ぶ言語と定義される(亀井他(編)1996:1304-1305)。多くの場合、家庭言語と母語は、一致するとみなされる。

しかし、多言語社会においては、家庭言語と母語は一致するとは限らない<sup>5</sup>。カナダ、パ

<sup>3</sup> この事例には、シンガポール華人に対する主要言語の、配偶者に限定した調査(Gupta and Siew 1995: 305)、旧ソ連のマリ(Mari)自治共和国において、両親、配偶者、子どもと分けた家庭言語の調査(Lallukka 1990: 212)、モロッコのベルベル人に対して、祖父母、父母、兄弟姉妹と分けた調査(Bentahila and Davies 1992: 200)、等がある。

<sup>4</sup> この事例には、シンガポールのエスニック集団に対する支配的家庭言語(Vasil 1995: 5)、カザフ(Kazakhstan)の学校児童に対する家庭言語(Crisp 1991: 100)、アフリカ北西部州における高校生の家庭言語(Verhoef 1998: 189)、沿岸地域カザダン児童の家庭言語(Lasimbang et al 1992: 345)、ザンビアの家庭言語(Siachitema 1991: 485)、等の調査がある。

<sup>5</sup> 例えば、1981年のカナダの国勢調査によれば、フランス語のみを母語とする人口は約635万人である

キスタン、オーストラリアなどでは、この2つを区別して、国勢調査が行なわれてきた。そこでは、「母語は何か」「家庭言語は何か」を問う設問が独立して設けられている(Laponce 1992: 270, Baker 1998: 347-350)。

今回の我々の調査では、母語の概念を使用しなかった。母語と家庭言語は異なりうることと、家庭でどの言語が使用されているかを重視したからである。実際の調査結果は、父母に対して使用される言語の使用比率と、子どもに対して使用される言語の使用比率との間に、明らかな差異が存在する場合があることを示した。本論文では、「母語」の概念を使用せず、父母に対して使用する言語をもって「家庭言語」として定義した所以である。以下の議論においては、父母に対して使用される言語の使用比率がほぼ同じであることから、「母」に対して使用される言語を以下「家庭言語」と称し、母親と何語で話すかという設問の回答をデータとして使用する。

ところで、従来の調査の多くには、一つの問題が存在する。それは、人々の母語と家庭言語が、ただ一つであると想定していることである。しかし、実態としては、亀井他が指摘するように、母語や家庭言語が複数存在することはあり得ることである。今回の調査で、複数回答を可能とした所以である。

### 3. 3 言語能力

#### 3. 3. 1 調査結果

ここでは、東北タイの住民がどのような言語を話すことができるかについて、十分言語能力、限定言語能力、多言語化指標、多言語人口比率といった概念を用いて明らかにする。

十分言語能力、すなわち、自由に言語を話せる能力を問う設問に対する回答をまとめたのが、表3. 5である。なお、表の中の数値は、各カテゴリーの被験者数全体に対する百分比である。複数回答ゆえ、合計は100%を超える。

---

が、フランス語のみを家庭言語とする人口は約602万人である (Joy 1992: 124)。また、オランダのフリースランドにおいて、フリージア語を母語とする者のうちフリージア語が家庭言語である者が90%という調査結果が存在する (van der Plank 1987: 15)。

表3.5 十分言語能力(複数回答あり)

		タイ語	イサン語	コラート語	ラオ語
全被験者		83.7	54.6	27.8	9.4
地域別	コーンケン地域	86.3	80.0	0.0	11.1
	ナコンラチャシマ地域	81.6	32.7	51.8	8.0
性別	男性	83.5	56.3	29.4	10.3
	女性	84.0	52.9	26.2	8.6
年齢別	24歳以下	85.5	38.4	32.2	4.9
	25～44歳	84.2	58.8	27.0	9.2
	45歳以上	80.3	76.0	21.6	17.1
居住地別	都市部	90.8	50.5	19.0	9.2
	中間部	83.5	45.4	39.8	9.7
	農村部	79.2	67.5	20.8	9.3
家庭言語別	タイ語のみ	—	23.7	19.2	4.0
	イサン語のみ	79.7	—	4.6	10.3
	コラート語のみ	68.8	20.8	—	5.6

同様に、表3.6に限定言語能力に関する結果を示す。

表3.6 限定言語能力(複数回答あり)

		タイ語	イサン語	コラート語	ラオ語
全被験者		93.6	74.5	38.3	35.2
地域別	コーンケン地域	95.5	92.4	0.0	41.2
	ナコンラチャシマ地域	91.8	59.1	71.4	30.0
性別	男性	92.6	75.5	39.9	35.6
	女性	94.5	73.5	36.7	34.8
年齢別	24歳以下	94.2	65.8	46.6	27.5
	25～44歳	92.6	76.6	36.5	34.7
	45歳以上	93.5	86.3	26.9	48.4
居住地別	都市部	95.2	73.5	30.0	32.4
	中間部	93.0	68.2	49.9	36.4
	農村部	93.1	82.2	31.3	35.9
家庭言語別	タイ語のみ	—	56.1	39.2	19.7
	イサン語のみ	92.4	—	9.4	40.9
	コラート語のみ	84.8	51.4	—	31.5

表3.5と表3.6を概観すると、十分言語能力と限定言語能力との間に、高い相関が予想される。

全被験者について、タイ語の十分言語能力を0, 1の二値に、タイ語の限定言語能力を0, 1の二値に置換し、ピアソンの相関係数を求めた。また、イサン語、コラート語についても、タイ語と同様に十分言語能力と限定言語能力を二値に置換し、ピアソンの相関係数を計算した。タイ語、イサン語、コラート語の十分言語能力と限定言語能力の、ピアソンの相関係数を表3.7に示す。なお、ラオ語についてはサンプル数が少ないので対象からはずした。また、家庭言語別の能力についても、対象からはずした。

表3. 7 十分言語能力と限定言語能力のピアソンの相関係数

		タイ語	イサン語	コラート語
全被験者		0.60	0.64	0.79
地域別	コーンケン地域	0.54	0.58	(計算不能)
	ナコンラチャシマ地域	0.63	0.58	0.66
性別	男性	0.64	0.65	0.79
	女性	0.55	0.64	0.78
年齢別	24歳以下	0.60	0.57	0.74
	25～44歳	0.65	0.66	0.80
	45歳以上	0.53	0.71	0.87
居住地別	都市部	0.70	0.61	0.74
	中間部	0.62	0.62	0.81
	農村部	0.53	0.67	0.76

当然予想されることではあるが、表3. 7から、十分言語能力と限定言語能力との間には、高い相関があることが明らかである。それ故、本論文においては、言語能力を、十分言語能力で代表させて論を進める。

### 3. 3. 2 東北タイ全体における十分言語能力

東北タイでは、全回答者の8割以上がタイ語を自由に話せる。スモーリーなどが指摘するように、東北タイは、ラオ語、あるいはイサン語地域であった (Smalley 1994: 87)。また、イサン語のみ、あるいは、コラート語のみを家庭言語とする回答者が多くいることから示されるように、もともと、東北タイはタイ語地域ではない。それにもかかわらず、全体の8割以上がタイ語を自由に話せるという事実は、東北タイにおいてタイ語の普及が非常に進んでいることを意味している。それと同時に、その他の言語を自由に話せる住民も多い。イサン語は全体の約5割、コラート語は全体の約3割、ラオ語は全体の約1割の住民が、自由に話せると答えている。

タイ語、イサン語、コラート語、ラオ語を自由に話す住民の比率を合計すると、約17.6%になる。

ここで、回答に基づき、表3. 8に、一人の被験者が平均いくつの言語を自由に話せるかを示す。

表3. 8 一人当たりの自由に話せる言語数

全被験者数	2375
自由に話せる言語数の合計	4277
自由に話せる言語数の平均	1.80

表3. 8で明らかなように、東北タイでは、一人当たり平均約1.8個の異なる言語を

自由に話せる。

次に、被験者が自由に話せると回答した言語数を数え、言語数ごとの回答者の全被験者数に対する比率を求め、これを表 3. 9 に示す。

表 3. 9 自由に話せる言語数

自由に話せる言語数	1	2	3 以上
比率(%)	39.8	43.9	16.1

表 3. 9 において、1 言語のみ自由に話せるという回答は約 4 割であることから、約 6 割の住民が、複数言語を自由に話せることになる。

上掲の (3. 2) 式で定義した多言語化指標  $M$  と、(3. 4) で定義した多言語人口比率  $P$  は、それぞれ次のようになる。

$$\text{多言語化指標 } M = 0.80$$

$$\text{多言語人口比率 } P = 0.60$$

この数値を、既存の他の地域の調査結果と比較してみよう。

パプア・ニューギニア	1966	$M=0.58$	
	1971	$M=0.74$	(いずれも Laycock 1979: 86)
コート・ジボアール	1972	$M=1.05$	(原口 1980: 65 より算出)
ザンビア	1970-73		
	全国	$M=1.2$	
	都市部	$M=1.8$	
	農村部	$M=0.9$	(いずれも Kashoki 1982: 160)
半島部マレーシア	マレー人集団	$M=0.03$	
	インド人集団	$M=0.28$	(いずれも Mauzy 1985: 169) <sup>6</sup>
ヴァヌアツ	農村部：男性	$M=1.40$	
	女性	$M=1.22$	
	都市部：男性	$M=1.79$	
	女性	$M=1.70$	(いずれも Crowley 1994: 5)

これらの事例には、東北タイにおける多言語化指標  $M$  の値 0.80 と比べて、ヴァヌアツ

<sup>6</sup> このデータは特定の 4 言語についてのみの能力を問うた調査結果から算出したものであり、データとして不完全であり、値は低く出る。

のように非常に大きな値もあるが、東北タイが、多言語地域であることは、これらの地域の値との比較からも明らかである。

次に、多言語人口比率  $P$  についてであるが、既存のデータは極めて乏しい。コート・ジボアールで、 $P=0.74$  (原口 1980: 65 より算出)、南アフリカ北西部州における高校生の家庭言語調査で、 $P=0.24$  (Verhoef 1998: 189) という結果がある。比較の対象が少ないので、断定はできないが、東北タイの値は、決して小さいとはいえないであろう。

以上の考察から、東北タイが多言語使用地域であることは明らかである。

1999年の予備調査結果も、このデータを補強するものである。

表3. 10は、東北タイの大学生に対し、理解可能な言語は何かについて質問した結果である。括弧内は、回答者数に対する比率を表す。

表3. 10 東北タイの大学生の理解可能言語 (複数回答あり)

言語名	人数
タイ語	375(94.2)
イサン語	236(59.3)
ラオ語	32( 8.0)
コラート語	13( 3.3)

その結果、タイ語は9割以上の者が理解可能とし、イサン語も約6割の者が理解可能とした。ラオ語が理解可能とした者も1割弱おり、これらの和だけでも約160%に達することから、東北タイが多言語使用地域であることが確かめられた。

また、データは少ないが、家庭言語毎に見ると、イサン語が家庭言語である者はタイ語とイサン語の2言語使用、クメール語が家庭言語である者はクメール語とタイ語とイサン語の3言語使用、コラート語が家庭言語である者はコラート語とタイ語とイサン語の3言語使用の状況にあることも推定される (山下 1999b: 121-123)。

### 3. 3. 3 東北タイにおける言語の浸透度

これまでは、東北タイにおいて、人々がどの言語の使用能力をもつかを明らかにした。多言語社会の実態を明らかにするためには、これに加えて、特定の言語が、当該の社会にどのように浸透しているか、どの程度習得されているかを明らかにする必要がある。それ故、ここで、任意の言語の当該社会への普及度もしくは浸透度を考える。この指標は、多言語社会における言語能力から見た言語相互の関係、言語集団間を示す指標でもある。

任意の言語  $i$  の社会全体への普及度もしくは浸透度  $S_i$  を考える。用語を次のように定義する。

$L_i$  : 言語  $i$  の十分言語能力を有する者の総数 (母語話者を含む)

$F_i$  : 言語  $i$  の母語話者総数 (本論文では、家庭言語話者総数  $H_i$  を以って代用する)

言語  $i$  の社会全体への普及度  $S_i$  は以下のように定義される。

$$S_i = (L_i - F_i) / (n - F_i) \quad (3.9)$$

但し、 $n$  は、社会の総人口 (あるいは回答者総数)。

ここで定義した任意の言語の社会への浸透度、あるいは社会における普及度  $S_i$  は、社会全体で、家庭言語話者もしくは母語話者以外の話者が、任意の言語についてどの程度いるかを示す指標である。この定義では、当該社会に母語話者が存在しないか極めて少ない場合でも計算可能である。また、圧倒的多数を占める言語集団が存在するときにも、浸透度を算出することができる。

表3. 11に、東北タイにおける各言語の浸透度を示す。

表3. 11 各言語の浸透度

n = 2375

	家庭言語話者総数 $F_i$	十分言語能力保有者総数 $L_i$	言語の浸透度 $S_i$
タイ語	426	1989	0.80
イサン語	987	1297	0.22
コラート語	356	661	0.15

タイ語については、表3. 5から、居住地、性、年齢に関わらず、住民の8割以上が、タイ語を自由に話せる。これは、東北タイにおけるタイ語の浸透を表している。同様に、この表からも、イサン語、コラート語に比べて、タイ語の浸透度の高さは明らかである。しかも、タイ語のみを家庭言語とする回答者が2割弱、タイ語をも使用する回答者を含めても4割弱しかないことを考慮すれば、まさに、「普及」、「浸透」の語が妥当する。

イサン語については、住民全体の約半数がイサン語を自由に使用できる。これは、東北タイにおいて、イサン語が無視できない言語である所以である。イサン語の東北タイ社会への浸透度は、タイ語に比べれば大きくはないが、それでも、東北タイにおいて一定程度の役割を果たしている。

コラート語については、全体の約3割がコラート語を自由に使用できる。コラート語も同様、東北タイにおいてある程度の役割を果たしているが、コラート語話者は、表3. 1



2に示すように、コーンケン地域にはほとんどいない。

### 3. 3. 4 属性

以下、東北タイ全体における十分言語能力に関して、属性による差異のうち注目すべき点を指摘しておく。

地域に関しては、イサン語、コラート語能力に明らかな差異がある。表3. 5に示したように、コーンケン地域ではイサン語能力がコラート語能力に比べて格段に高く、逆に、ナコンラチャシマ地域では、コラート語能力がイサン語能力に比べて格段に高い。これは、後にコラート語に関して詳述するように、2つの地域が言語的に異なる地域であることの反映であると考えられる。

2つの地域の言語的差異は、次のような現象も説明できる。表3. 5に見るように家庭言語としてタイ語のみを使用する者では、イサン語の十分言語能力をもつ者の比率が23.7%、コラート語の十分言語能力をもつ者の比率が19.2%と、東北タイ全体の値と大きく異なり、ほぼ同じ値を示している。家庭言語としてタイ語のみを使用する者の十分言語能力を地域別に比較してみよう。

表3. 12 家庭言語としてタイ語のみを使用する者の地域別十分言語能力

	イサン語	コラート語
コーンケン地域	62.3	0.0
ナコンラチャシマ地域	18.1	27.0

表3. 12に示すように、コーンケン地域では、イサン語の十分言語能力もある者の方が、コラート語の十分言語能力もある者より格段に多い。これに対して、ナコンラチャシマ地域では、コラート語の十分言語能力もある者の方が、イサン語の十分言語能力もある者よりはるかに多い。両地域全体で捉えると、イサン語の十分言語能力をもつ者とコラート語の十分言語能力をもつ者の比率がほぼ同じになる。すなわち、タイ語のみを家庭言語とするものは、地域で優勢な言語の能力を獲得しており、コーンケン地域ならイサン語、ナコンラチャシマ地域ならコラート語の能力を獲得していることになる。

性別に関しては、差異が認められない。これは、一般的に性別での差が存在するという調査結果 (Fasold 1988: 242) や、パプアニューギニアの国勢調査において、一人当たりの使用言語数が、男性で1.95、女性で1.51と大きな差がある (Laycock 1979: 86) 等の、一般の言語調査における結果とは反対である。もちろん、上掲のヴァヌアツの事例のように、性別の差異がさほど認められない事例も存在する。

年齢に関して、タイ語能力は若年層が高く、高年層が低い。また、イサン語、ラオ語能力は高年層が高く、若年層が低い。フランスのブルターニュ地方において、若年層ほどフランス語をより使用し、ブルトン語 (Breton) を使用しなくなるという傾向 (Dressler & Wodak-Leodolter 1977: 34) が見られるように、一般的には、威信のある言語が若年層でより使われ、そうでない言語が若年層では使われなくなるという傾向がある。東北タイにおけるタイ語、イサン語、ラオ語能力も、この傾向と一致していると言えよう。

家庭言語集団を単位として、(3. 6) 式で定義した、集団ごとの多言語化指標  $M_i$  を求めると、表 3. 13 のようになる。

表 3. 13 家庭言語集団ごとの多言語化指標

n=1769

	回答者数	自由に話せる言語数の総和	多言語化指標 $M_i$
家庭言語タイ語のみ	426	592	0.39
家庭言語イサン語のみ	987	1753	0.78
家庭言語コラート語のみ	356	613	0.72

タイ語のみを家庭言語とするものと、他の言語のみを家庭言語とするものの値には、大きな差があることは明らかである。タイ語のみを家庭言語とする者のうち、他の言語の十分言語能力を有する者は、イサン語、あるいはコラート語のみを家庭言語とするものの半分に過ぎない。東北タイにおいて、イサン語、および、コラート語集団の多言語化が、タイ語集団の多言語化よりもはるかに進んでいることを示すものといえよう。

また、(3. 8) 式により、東北タイにおける家庭言語集団ごとの多言語人口比率  $P_i$  を求めると、以下の表 3. 14 になる。

表 3. 14 家庭言語集団ごとの多言語人口比率

n=1769

	回答者数	2言語以上を話せる回答者数	多言語人口比率 $P_i$
家庭言語タイ語のみ	426	125	0.29
家庭言語イサン語のみ	987	636	0.64
家庭言語コラート語のみ	356	190	0.53

タイ語のみを家庭言語とするものと、イサン語、あるいは、コラート語のみを家庭言語とするものの差異は、多言語化指標の場合と同様、きわめて大きい。タイ語がイサン語とコラート語を家庭言語とする集団に浸透していることは、以上の考察から明らかである。

### 3. 3. 5 言語能力に関する小括

以上の調査結果の考察から、東北タイにおける言語能力に関して、以下の4つの暫定的結論が得られる。

- (1) 東北タイは、個人レベルで多言語使用の状況にある。東北タイ全体の多言語化指標の値が、0.80と1に近いこと、東北タイ全体の多言語人口比率の値が0.60であることは、これを示すものである。
- (2) 家庭言語集団別で多言語使用の状況を見た場合、家庭言語がタイ語のみである被験者が2割弱、家庭言語にタイ語が含まれる被験者でも4割弱しかいない。スモーリーが指摘するように、東北タイはもともと、タイ語地域でないにもかかわらず、全体の8割がタイ語を自由に話せるということは、国家の公用語であるタイ語が、東北タイに文字通り浸透していることを意味する。表3.11に示したタイ語の浸透度の大きさは、その証である。
- (3) タイ語以外の主要言語について、十分言語能力が、イサン語は約5割、コラート語は約3割、ラオ語は約1割となっている。イサン語とコラート語も、東北タイ社会で一定の地位を占め、かつ、一定程度の浸透度がある。
- (4) 言語能力は、居住地、年齢、地域による差異がある。

### 3. 4 言語の選択

#### 3. 4. 1 言語使用

3.3節においては、東北タイが多言語地域であることを明らかにした。ここでは、東北タイの諸言語が、実際にどのように使い分けられているかを論ずる。なお、東北タイを地域的にさらに細分した検討は後に行う。

今回の調査では、ファーガソンのダイグロッシアの提唱以来行われている公的な領域と私的な領域の区分に従う。さらにそれを細分化し、フィッシュマンの提唱した言語使用域の連続体を想定し、役人との会話と家庭内の会話を両極に置き、その中間に友人と僧侶を位置付けた。

これらの言語使用域のうち、「役人」、「僧侶」、「友人」、「父母」については、公的な度合いがこの順になると考えられる。「友人」と「僧侶」に関しては、東北タイ社会における位置づけに問題なしとしないが、双方とも、「役人」に比べより私的であり、「父母」に比べより公的であることは明らかである。ただし、「子ども」という言語使用域は例外であり、家庭内にもかかわらず、公的な言語が使用される比率が高い。これについては後述する。

東北タイ全体について、言語使用域ごとの主要言語の使用率を、表3. 15に示す。

表3. 15 言語使用域と使用比率(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	コラート語	ラオ語
役人	90	20 ▲	10	2
僧侶	56	45	21	4
友人	60	55	29	6
父母	39 ▼	54	26	4
子ども	60	45	23	4

(値は%であり、表中の矢印は使用比率の低下方向を示す)

上述のように、子どもに対して使用する言語に関して若干の例外はあるが、公的な場ほどタイ語が使用され、私的な場ほどその他の言語が使用される傾向は明らかである。このことは、タイ語と他の言語の使用比率を比較した図3. 1から一層明らかである。換言すれば、公的-私的スペクトラムにおいては、タイ語の使用比率はその他の言語の使用比率と逆の傾向を示す。公と私を両極とするスペクトラムを考えると、タイ語は公の側に、イ

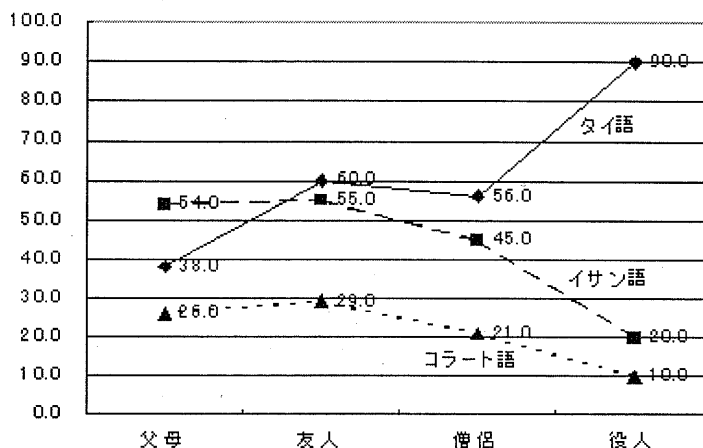


図3. 1 言語使用域と使用比率(複数回答あり)

サン語とコラート語は私の側に傾く。これは、この3言語の東北タイにおけるファーガソンの意味での上位下位の地位を示すと考えられる。

この傾向は、次のような方法によっても確かめられる。各言語使用域において、タイ語を使用すると回答した被験者と、タイ語を使用すると回答せず、かつ、それ以外の少なくとも一つの言語を使用すると回答した被験者(同一被験者がイサン語+ラオ語を回答したときも1と計算)を比較した表を、表3. 16に示す。

表3. 16 言語使用域と使用比率:タイ語とその他の言語(複数回答あり)

	タイ語	その他の言語
役人	90	10
僧侶	56	44
友人	60	40
父母	39	61
子ども	60	40

(値は%であり、表中の矢印は使用比率の低下方向を示す)

表3. 16からも、公的な極ほどタイ語、私的な極ほど、比較的その他の言語が使用される比率が高いことがわかる。グレビッチ (Robert Gurevich) は、東北タイのノンヤイ村 (Nong Yai) で、タイ語が、政府、教育、エリートの言語であり、高い地位と威信をもつのに対し、イサン語が村の日常生活や商談などで使用され、公式な場、式典では使われない、低い地位しかもっていない (Gurevich 1976: 140) ことを明らかにしたが、これは、表3. 16の結果と合致する。

また、ナコンラチャシマ県に赴任したJICA派遣の青年海外協力隊員に対し、そのカウンターパートである教育機関の先生が、コラート語やイサン語は一切使わず、タイ語のみを覚えるように指導した<sup>7</sup>ことも、公的な側面の強いタイ語の地位、それに対する私的な側面の強いコラート語、イサン語の地位を示しているものであろう。

また、前述の予備調査の結果も、この結果を裏付ける。表3. 17は、東北タイの大学生が、公的な言語使用域である大学で教師と話す場合と、私的な言語使用域である大学で友人と話す場合に、どの言語を使用するかという質問に対する回答結果である。

表3. 17 東北タイの大学生が公的・私的言語使用域で使う言語 (複数回答あり)

言語名	大学で教師に対して	大学で友人に対して
タイ語	396(99.5)	374(94.0)
イサン語	32( 8.0)	222(55.8)
ラオ語	2( 0.5)	32( 8.0)
コラート語	4( 1.0)	18( 4.5)

(括弧内は、回答者全体に対する比率)

東北タイの大学生の間では、公的な言語使用域において、圧倒的にタイ語を使う傾向にあることが明らかである。次に、私的な言語使用域においても、大学においてはタイ語を使う傾向が約9割に達する。この値は、表3. 16に示した、東北タイの住民の、私的な言語使用域におけるタイ語の比率よりかなり高い。これは、タイの大学には全国から学生が集うため、タイ全体の共通語であるタイ語でないと、友人という言語使用域においてコ

<sup>7</sup> 2002年9月7日、ナコンラチャシマ工科大学の教員に対するインタビューによる。

コミュニケーションができないという事情があるためである。しかしながら、大学で教師に対して約1割しか使用されないイサン語が、大学で友人に対して話すという言語使用域において約6割使用されている事実は、公的な言語使用域でタイ語、私的な言語使用域でイサン語を使うという、公私による言語の選択が行われていることを示している。なお、大学の教員は、公的な状況である講義の際には、出身地に関わらず、タイ語を使用することが多い<sup>8</sup>。

### 3. 4. 2 言語使用域ごとの検討

本論文で使用する、4つの言語使用域のうち、家庭内で父母と話す言語についてはすでに検討した。ここでは、残り3つの言語使用域、すなわち、役場で役人と話す言語、僧侶と話す言語、友人と話す言語について検討を行う。さらに、家庭内で子どもと話す言語についても検討する。

#### (1) 役人と役場で話す言語

役場で役人と話す言語を問う設問の結果を表3. 18に示す。なお、表の中の数値は、各被験者数に対する百分比である。

表3. 18 役人と役場で話す言語(複数回答あり)

		タイ語	イサン語	コラート語	ラオ語
全被験者		89.8	20.3	9.9	1.8
地域別	コーンケン地域	88.5	37.6	0.0	2.8
	ナコンラチャシマ地域	90.9	5.3	18.5	0.9
性別	男性	91.1	19.0	11.0	1.8
	女性	88.5	21.6	8.8	1.9
年齢別	24歳以下	97.0	6.2	9.3	0.9
	25～44歳	91.0	21.2	10.7	1.6
	45歳以上	76.6	42.3	10.0	3.5
居住地別	都市部	95.4	15.6	6.0	2.7
	中間部	88.1	15.1	15.6	1.4
	農村部	87.9	29.2	6.4	1.6
家庭言語別	タイ語のみ	97.2	2.1	3.1	0.2
	イサン語のみ	86.8	35.9	0.4	1.2
	コラート語のみ	80.1	0.6	30.3	0.0

以下、主要言語について、調査結果をまとめておく。

タイ語については、役人と役場で話す場合、全被験者を通じて、約9割がタイ語を使用する。この傾向は、居住地、性、地域、家庭言語にかかわらず、一定している。ただ、例外的に、年齢については、高齢層ほど、タイ語の使用比率が低くなり、若齢層ほど、タイ

<sup>8</sup> 2002年9月7日、ナコンラチャシマ工科大学の教員に対するインタビューによる。

語の使用比率が高くなる。また、都市部では、タイ語の使用比率が極端に高く、家庭言語別で、コラート語のみを家庭言語とする者は、タイ語の使用比率が低くなる。

イサン語は、タイ語に次いで使用頻度が高く、約2割がイサン語で役人と役場で話す。家庭言語がイサン語のみの場合、役場で役人と話す言語にイサン語が使われる可能性が高くなる。性による差異はない。また、イサン語の使用比率は、高齢者ほど、農村部ほど、高くなる。地域では、コーンケン地域とナコンラチャシマ地域とでは明らかに使用比率が異なり、コーンケン地域の方がイサン語の使用比率が高い。

コラート語は、東北タイ全体では、役人に対して、約1割の使用率がある。これは、地域的偏りがあるにせよ、東北タイにおけるコラート語の一定の地位を示すものである。性による差異はない。地域では、コーンケン地域でコラート語が使用されず、ナコンラチャシマ地域で使用比率が高くなる。コラート語のみを家庭言語とするものは、コラート語の使用比率が高い。

役人に対しては、ラオ語が使用される場合も多少はあるが、きわめて少ない。

役人に対して使用する言語は基本的にタイ語である。地域、性、年齢、居住地、家庭言語に関わらず、使用率は1、2の例外を除き、90%近い。このことは、タイ語がまさに公用語であることを示す。もちろん、イサン語、コラート語の順でタイ語の代わりに使用されることもある。

役人に対してタイ語が使用される比率は、年齢、地域及び家庭言語によって多少の相違が生ずる。都市部ほど、タイ語の使用比率が高く、農村部ほど、タイ語の使用比率は低い。逆にイサン語の使用比率は上昇する。コラート語については、この増加傾向は明白ではない。

このように、都市部で威信のある言語がより多く使用され、農村部でその他の言語の使用比率が高くなる現象は、東北タイ以外の地域でも見られる。ヴァヌアツでは、英語、フランス語話者は、都市部に多く、地域言語話者は農村部に多い (Crowley 1994: 5)。また、プエルトリコでは、英語話者は農村部より都市部に多い (Ramirez-Gonzalez & Torres-Gonzalez 1996: 181)。ウズベキスタンでは、ロシア語能力をもつ者は、農村部より、都市部にはるかに多い (Crisp 1991: 96) <sup>9</sup>。

また、高年層であるほど、タイ語の使用比率は低下し、逆にイサン語の使用比率は上昇する。コラート語については、この傾向は認められない。

同様に、セニスリタントによると、タイのラオプアン語を使用する地域では、若年層ほどタイ語 (Thai) を使用し、高年層ほどラオプアン語を使用する傾向がある (Prasithrathsint 1988: 266-267 に引用)。フィンランドのサーミ人は、若年層ほどフィンランド語を使用し、

---

<sup>9</sup> その他、フリースランドでも、オランダ語が都市部でより多く使用され、フリージア語が農村部でより多く使用される現象 (Gorter and Ytsma 1988: 61)、旧ソ連のマリ自治共和国において、ロシア語が共和国首都でより多く使用され、マリ語が村落でより多く使用される現象 (Lallukka 1990: 213) は、その例である。

高年層ほど、サーミ語 (Sami, Sámi, Saami) を使用する傾向がある (Aikio 1990: 398-400)。フランスのブルターニュでは、若年層ほどフランス語を使用し、高年層ほど、ブルトン語 (Breton) を使用する傾向がある (Dressler & Wodak-Leodolter 1977: 34)。

圧倒的多数の場合、役人に対しては、タイ語が使用されるというのは事実である。それと同時に、タイ語に代わる、あるいはタイ語を補う言語としてのイサン語とコラート語の使用比率は、家庭言語によって決まる。家庭言語がイサン語であればイサン語が、コラート語であればコラート語が使用される比率が上昇する。

それでは、地域も同様に代替言語を決める変数とも解されるであろうか。すなわち、コーンケン地域であればイサン語、ナコンラチャシマ地域であればコラート語が使用される比率が上昇するのであろうか。

これについて、次の表3. 19に見るように、コーンケン地域については、地域と家庭言語は同一の変数とみなしうるが、ナコンラチャシマ地域には、家庭言語をコラート語のみとする者だけでなく、イサン語のみとする者も相当数存在する。ナコンラチャシマ地域の場合、地域と家庭言語は対応しない。

表3. 19 地域と家庭言語話者数の関係

	家庭言語 イサン語のみ	家庭言語 コラート語のみ
コーンケン地域	785	0
ナコンラチャシマ地域	202	356

仮に、タイ語が使用されない場合、役人に対して使用する言語が、地域によって決まるとするならば、家庭言語をイサン語のみとする、ナコンラチャシマ地域の人々の役人に対するコラート語使用率は、相当に高くなるはずである。しかし、ナコンラチャシマのイサン語のみを家庭言語とする者のうち、役人と、コラート語で話す者は、2%にすぎない。これに対して、役人と、イサン語で話す者は、約15%である。

従って、タイ語以外の言語が役人に対して使用されるとき、どの言語が使用されるかを決めるのは、地域ではなく、むしろ、家庭言語であるといえる。

## (2) 僧侶と話す言語

僧侶と話す言語を問う設問の結果を表3. 20に示す。なお、表の中の数値は、各被験者数に対する百分比である。



表3. 20 僧侶と話す言語(複数回答あり)

		タイ語	イサン語	コラート語	ラオ語
全被験者		55.5	44.5	21.3	3.7
地域別	コーンケン地域	42.5	78.8	0.0	2.7
	ナコンラチャシマ地域	66.7	14.9	39.7	4.5
性別	男性	57.7	44.0	22.6	3.3
	女性	53.2	45.0	20.0	4.0
年齢別	24歳以下	75.0	25.5	22.5	2.7
	25～44歳	49.7	51.3	21.2	3.7
	45歳以上	30.8	67.3	19.5	5.2
居住地別	都市部	76.9	36.5	13.5	6.0
	中間部	54.3	34.6	32.5	3.0
	農村部	42.2	60.8	14.3	2.8
家庭言語別	タイ語のみ	91.8	8.9	7.0	2.1
	イサン語のみ	32.9	82.4	2.7	3.0
	コラート語のみ	43.3	2.8	73.3	0.6

まず、主要言語について個別に検討する。

僧侶と話す場合、全被験者を通じて、約6割がタイ語を使用する。タイ語の使用比率が最も高いことは、他の言語使用域と変わりはないが、役場で役人と話す場合に比べれば、すべての場合で明らかに使用比率が低下する。また、性を除く属性により、使用比率が異なる。

地域については、コーンケン地域よりナコンラチャシマ地域のほうがタイ語を使用する比率が高い。これは、タイ語のみを家庭言語とする者の数が、表3. 21に示すように、コーンケン地域で122人、ナコンラチャシマ地域で304人と、ナコンラチャシマ地域の方がはるかに多いからである。なぜなら、表3. 20からも明らかなように、タイ語のみを家庭言語とする者が、僧侶に対してタイ語以外を使う可能性は非常に小さいからである。

表3. 21 タイ語のみを家庭言語とする者

地域	人数
コーンケン地域	122
ナコンラチャシマ地域	304

年齢については、若年層ほどタイ語を使用する比率が高い。居住地については、都市部ほどタイ語を使用する比率が高い。これは、役人に対する言語と、同じ傾向である。

イサン語は、タイ語に次いで使用比率が高く、約4割がイサン語で僧侶と話す。役人に対するよりも使用比率が高い。性という変数を除き、変数により使用比率が異なる。

地域別では、ナコンラチャシマ地域よりコーンケン地域のほうが、イサン語を使用する比率が高い。また、高年層ほどイサン語を使用する比率が高く、農村部ほどイサン語を使用する比率が高い。これは、タイ語と逆の傾向である。

僧侶に対してコラート語で話すのは、約3割である。これはタイ語、イサン語に次ぐ比率である。また、イサン語の場合と同様、役人に対するよりも使用比率が高い。性という

変数を除き、変数により使用比率が異なる。年齢、居住地については、大きな差異は認められない。

ラオ語は、全体としても、また属性の如何にも関わらず、約5%程度の被験者が僧侶に対して使用する。これは、イサン語との異同の問題があるにせよ、東北タイにおける（実態としてのあるいは認識の上での）ラオ語の一定の地位を示すものである。

次に、属性については、性による差は認められない。その他の変数では、タイ語とイサン語の使用比率については、明らかに差異が認められる。

コーンケン地域と、ナコンラチャシマ地域では、タイ語、イサン語、コラート語が、僧侶に対して使用される比率が大きく異なる。この理由は、タイ語について述べたように、家庭言語の差異によって説明される。

表3. 20に見るように、イサン語のみを家庭言語とする被験者も、コラート語のみを家庭言語とする被験者も、僧侶と話す場合は、役人と話す場合に比べて、タイ語を使用する比率が極端に低くなり、それぞれの家庭言語の使用比率が、極端に高くなる。

宗教にかかわる言語使用域の先行研究においては、言語選択に関する一般的な結論は得られていないようである。例えば、オランダのフリースランドにおいて、それまでオランダ語で行われていた教会の説教が、母語であるフリージア語に変わったとき、説教が喜劇のように感じられたという事例が報告されている (Zondag 1987: 79)。これは、フリースランドにおいて、オランダ語のほうがフリージア語よりも権威ある言語とされており、宗教にかかわる言語使用域において、より権威のある言語が適切と感じられたことを意味している。同様に、東北タイにおいても、仏教寺院がタマユット派 (Thamayut) の僧侶によるタイ語教育の拠点となっていた (林 2000: 315)。これは、フリースランドと同じ事例である。他方、東北タイにおいては、これと正反対の事例もある。たとえば、ナコンラチャシマ地域の仏教寺院において、高僧が、権威のあるタイ語ではなく、コラート語で説教を行っている事例も存在する (山下 2002: 228-229)。これは、前二者と逆の事例である。

東北タイの場合、僧侶に対する、タイ語、イサン語、および、コラート語の使用がどのように意味付けされるかは、今後の検討課題である。

僧侶という言語使用域においては、役人の場合と比較して、タイ語以外の言語の使用比率が高まる。また、このとき、タイ語がどの程度使われるか、タイ語以外のどの言語がどの程度使われるかは、居住地 (都市、農村)、年齢、家庭言語によって決まる。

### (3) 友人と話す言語

友人と話す言語を問う設問の結果を表3. 22に示す。なお、表の中の数値は、各被験者数に対する百分比である。

表3. 22 友人と話す言語(複数回答あり)

		タイ語	イサン語	コラート語	ラオ語
全被験者		60.4	55.0	28.7	5.6
地域別	コーンケン地域	50.1	87.6	0.0	4.6
	ナコンラチャシマ地域	69.3	26.8	53.4	6.4
性別	男性	61.1	56.0	29.7	5.8
	女性	59.7	54.0	27.7	5.3
年齢別	24歳以下	76.9	42.4	34.6	5.9
	25～44歳	57.3	58.5	28.2	4.6
	45歳以上	37.3	71.3	19.5	6.5
居住地別	都市部	77.4	53.3	19.9	6.5
	中間部	60.4	41.5	40.7	5.2
	農村部	48.7	71.0	21.5	5.4
家庭言語別	タイ語のみ	91.1	22.5	16.7	4.2
	イサン語のみ	40.2	91.3	3.4	3.2
	コラート語のみ	43.0	7.3	87.6	2.5

友人と話す場合、全被験者を通じて、約6割がタイ語を使用する。タイ語の使用比率が最も高いことは、他の言語使用域と変わりはないが、役場で役人と話す場合に比べれば、すべての場合で明らかに使用比率が低下する。また、性を除く属性により、使用比率が異なる。その傾向は、僧侶の場合とほぼ同じである。

また、コーンケン地域よりナコンラチャシマ地域のほうが、友人とタイ語を使用する比率が高いが、これは、僧侶と話す言語に関して述べたのと同様の理由による。年齢、居住地についても、僧侶と話す言語と全く同様の傾向を示す。若年層ほどタイ語を使用する比率が高く、都市部ほどタイ語を使用する比率が高い。

イサン語は、タイ語に次いで使用比率が高く、約6割がイサン語で友人と話す。また、表3. 2と比較すると、イサン語は、父母に対する使用比率よりも友人に対する使用比率の方が低い。性という変数を除き、変数により使用比率が異なる。

地域別に見れば、ナコンラチャシマ地域よりコーンケン地域のほうがタイ語を使用する比率が高い。高年層ほど、農村部ほど、イサン語を使用する度数が高い。これは、タイ語と逆の傾向である。

コラート語の場合は、約3割が友人とコラート語で話す。これはタイ語、イサン語に次ぐ比率である。この比率は、また、父母に対する比率とほとんど変わらない。

コラート語の場合、若年層ほど友人に対するコラート語の使用率が高い。僧侶に対しても、表3. 20に見るように、わずかながらではあるが、同様の傾向が認められる。この傾向は、イサン語と全く逆の傾向である。この理由については、後に検討する。

ラオ語は、全体としても、また属性にも関わらず約4%程度が友人に対して使用する。

属性について言えば、コーンケンとナコンラチャシマでは、友人に対してタイ語、イサン語、コラート語を使用する比率が大きく異なる。同様に、家庭言語別によっても、大き

く異なる。この2つについては、すでに述べたように、家庭言語が何であるかによって説明できる。年齢と居住地については、友人に対して使う言語は、役人に対する場合、僧侶に対する場合と同様の傾向が明らかである。しかし、コラート語については、若年層のほうが、コラート語の使用比率が高いという結果が得られた。

単なる儀礼上の知り合いから数十年來の隣人まで、「友人」の範囲は広くかつ曖昧ではあるが、この点を念頭に置いた上で、役人と比較してより私的である友人に対する時には、タイ語以外の言語の使用比率が高まる。このことは、タイ語と他の言語で使い分けが行われており、タイ語が最も公的な言語であり、他の言語はより私的であることを意味する。

タイ語がどの程度使用され、タイ語以外のどの言語がどの程度使用されるかは、年齢、居住地（都市、農村）、家庭言語によって決まる。

#### (4) 子どもと話す言語

ここでは、家庭という言語使用域を構成する父、母、子どもと話す言語のうち、未だ検討を加えていなかった、子どもと話す言語について分析する。

子どもと話す言語を問う設問の結果を表3. 23に示す。なお、表の中の数値は、各被験者数に対する百分比である。

表3. 23 子どもと話す言語(複数回答あり)

		タイ語	イサン語	コラート語	ラオ語
全被験者		56.9	44.5	22.9	3.5
地域別	コーンケン地域	48.7	75.3	0.0	3.2
	ナコンラチャシマ地域	64.0	18.0	42.7	3.7
性別	男性	57.2	43.3	24.2	3.6
	女性	56.6	45.8	21.6	3.3
年齢別	24歳以下	73.4	27.3	25.8	3.3
	25～44歳	54.5	49.5	22.8	3.1
	45歳以上	33.1	66.5	18.4	4.2
居住地別	都市部	53.1	49.5	16.6	5.0
	中間部	37.3	41.2	38.8	4.5
	農村部	24.5	71.9	15.7	3.5

子どもと話す場合、全被験者を通じて、約6割がタイ語を使用する。タイ語の使用比率が最も高いことは、他の言語使用域と変わりはないが、父母と話す場合に比べれば、どの変数をとっても、明らかに使用比率が高い。性別を除く他の属性は、他の言語使用域と同じ傾向を示す。

イサン語は、タイ語に次いで使用比率が高く、約4割がイサン語で子どもと話す。しかし、表3. 2と比較すると、父母と話す場合よりも子どもと話す場合の方が、イサン語の使用比率は低い。性別を除いて、他の変数による使用比率の差異は、他の言語使用域と同じ傾向、すなわち、タイ語と逆の傾向を示す。

約2割が子どもとコラート語で話す。これはタイ語、イサン語に次ぐ比率である。コラート語の場合、タイ語、イサン語と異なり、父母と話すのとほぼ同じ使用比率である。

地域別に見ると、タイ語、イサン語、およびコラート語の使用比率は、他の言語使用域と全く同じ傾向を示す。ナコンラチャシマの方が、タイ語の使用率が高く、コーンケンでは、イサン語の使用率が、ナコンラチャシマでは、コラート語の使用率が高い。家庭言語との関係は、すでに説明した通りである。

東北タイの家庭において、使用される比率が高いのが、タイ語とイサン語である。これら2言語については、表3.4に示したように、父母に対する使用比率と子どもに対する使用比率が明らかに異なる。子どもに対しては、父母に対するよりも、タイ語の使用比率が高く、父母に対しては、子どもに対するよりも、イサン語の使用比率が高い。

この現象については、親の子どもに対する教育面での配慮という点を考える必要がある。たとえば、家庭では、親が将来子どもの利益になると考える言語で話すという面があり、フランスのオクシタン (Occitan) において、オクシタン語を家庭言語とする家庭で、両親に対してはオクシタン語で話す比率が高いのに対し、子どもに対してはほとんどフランス語で話すという事例が報告されている (宮島 1990: 381)。また、香港においては、威信のある言語である英語について、両親に対する使用よりも、子どもに対する使用の頻度の方が高い (Tsou 1997: 31)。また、ケニア (Kenya) のナイロビ (Nairobi) のインド系グジャラティー語集団について、グジャラティー語のみを通常の家言とする家族で約40%、英語とグジャラティー語を通常の家言とする家族で約70%が、子どもに対しては何らかの形で英語を使用する (Liebersohn and McCabe 1978: 75)<sup>10</sup>。

東北タイの場合も、子どもに対してタイ語を使用する比率が高いという現象は、オクシタン、香港の事例と同様である。

家庭言語と子どもに対する言語の関係を、タイ語とイサン語に注目して考察する。まず、タイ語のみを家庭言語とする、すなわち、父母に対して、タイ語のみを使用する場合、子どもに対してイサン語のみを使用する比率は、426人中、わずか3%である。イサン語と併用する比率を加えても、6%に満たない。従って、東北タイのタイ語家庭言語話者は、基本的にはタイ語を子どもに対して使用している。

他方、イサン語のみを家庭言語とする、すなわち、父母に対してイサン語のみを使用する被験者の場合、子どもに対してイサン語のみを使用する比率は、表3.24に示すように、987人中60%を超えるが、約35%は、何らかの形で子どもにタイ語を使用して

---

<sup>10</sup> その他、旧ソ連のマリ自治共和国においても、両親や配偶者に対してよりも、子どもに対しての方が、ロシア語を使用する比率が高く、マリ語を使用する比率が低い (Lallukka 1990: 213)。

いる。父母に対してタイ語とイサン語をともに使用する被験者の場合には、何らかの形で子どもに対してタイ語を使用する比率は、90%に達する。

表3. 24 東北タイの家庭言語と子どもに対する言語の関係

		子どもに対する言語			N
		タイ語のみ	タイ語とイサン語	イサン語のみ	
父母に 対する 言語	タイ語とイサン語	25.7	63.9	7.9	191
	イサン語のみ	16.5	17.9	61.6	987

逆に、表3. 24から、子どもに対して、イサン語が全く使用されない比率は、父母に対してイサン語のみ使用する被験者の場合で約17%、父母に対してタイ語とイサン語をともに使用する被験者の場合では約26%に達する。これらの結果から、イサン語が家庭言語の場合でも、親は子どもに対し、なるべく、威信のあるタイ語を使おうとしていると考えられる。

### 3. 4. 3 言語使用に関する小括

これまで示した言語使用に関する調査結果から、東北タイにおける言語使用に関して、以下のような5つの暫定的結論が得られた。

- (1) 東北タイにおいては、タイ語が、検討したほとんど全ての言語使用域で優勢を占めている。しかし、他方で、タイ語、イサン語、コラート語が、言語使用域によって、一定程度使い分けられていることも確かである。
- (2) タイ語は、若干の例外を除き、公的な言語使用域ほど使用される比率が高く、私的な言語使用域ほど使用される比率が低い。このことは、東北タイにおいて、タイ語が最も公的な言語であることを意味する。
- (3) イサン語、コラート語は、私的な言語使用域ほど使用される比率が高く、公的な言語使用域ほど使用される比率が低い。このことは、東北タイにおいて、タイ語以外の言語は、タイ語よりも、より私的な言語であることを意味する。
- (4) タイ語、イサン語、コラート語という主要言語の使用比率は、年齢、居住地、家庭言語により異なる。タイ語がどの程度使用されるか、タイ語以外のどの言語がどの程度使用されるかは、年齢、居住地、家庭言語によって決まる。
- (5) 言語使用域の公私にかかわらず、タイ語は、若年層、都市部で使用比率が高く、逆に、イサン語は、高年層、農村部で使用比率が相対的に高い。これは他の地域での、より威信のある言語とそうでない言語との関係に相当する。しかし、コラート語は、むしろ逆の傾向を示す。これについては、後述する。

## 第4章

タイ語・ラオ語・イサン語の関係

: 異同、包含と階層化

## 第4章 タイ語・イサン語・ラオ語の関係：異同、包含と階層化

### 4. 1 言語間関係とその認識についての諸指標

この章では、東北タイにおけるタイ語・イサン語・ラオ語の関係についての住民の認識を、調査結果に基づいて論ずる。まず、言語間関係認識についての4つの指標を定義する。次に、異同と包含の関係、序列化、言語集団への言語の浸透度と被浸透度、言語使用域と序列化、言語の階層化の問題について、調査結果に基づき検討する。

#### 4. 1. 1 言語の異同・包含関係

住民の抱く、複数の言語の異同と包含関係について、以下のように定義する。

今回の調査では、東北タイの複数の言語について、それらの関係がどのように認識されているかを調べた。具体的には、A、Bという2つの言語があるとき、質問票に、「あなたは、A語とB語は同じ言語だと思いますか?」という設問と、「あなたは、B語はA語の方言だと思いますか?」という二つの設問を設けた。

この2つの設問の回答を整理するために、言語の包含関係に着目して、言語の異同・包含関係を類型化する。異同・包含関係は、方向を考えない場合、以下の3種類に類型化できる。

第1は、2つの言語の関係が包含関係、すなわち、一方が他方の方言である場合である。これは、次のように定義される。

方言： $(A \supset B)$  …①

この場合、2つの言語が同一であるという回答も、同一でないという回答も含まれる。

次に、2つの言語の関係が包含関係にない、すなわち、一方が他方の方言でない場合を考える。これはさらに、2つの言語が同じであるかどうかによって、2つに分けられる。

第2は、2つの言語の関係が包含関係になく、かつ同一である場合、すなわち、2つの言語が完全な同一の場合である。これは、次のように定義される。

同一： $(\text{NOT } A \supset B) \text{ AND } (A = B)$  …②

第3は、2つの言語の関係が包含関係になく、かつ同一でない場合、すなわち、2つの言語が完全に独立の場合である。これは、次のように定義される。

独立： $(\text{NOT } A \supset B) \text{ AND } (\text{NOT } A = B)$  …③

以上の関係をまとめると、図4. 1のように示すことができる。



② $A = B$ (同一)	① $A \supset B$ (方言)	③ $A \neq B$ (独立)
----------------	----------------------	-------------------

図4. 1 言語の異同・包含関係

この表記に従えば、既に1. 4節で定義した、「標準タイ語」については、  
標準タイ語  $\neq$  タイ克蘭語  
標準タイ語  $\neq$  イサン語  
となる。また、「広義のタイ語」、「広義のラオ語」、「イサン語」については、  
広義のタイ語  $\supset$  イサン語  
広義のラオ語  $\supset$  イサン語  
となる。1. 4節で定義した狭義の「ラオ語」と「イサン語」については、  
ラオ語  $\neq$  イサン語  
と表記できる。以下、この分類により、3つの言語間の関係を明らかにする。

#### 4. 1. 2 認識上の言語間の距離

従来、複数の言語に対して、住民が同じ言語であると認識しているか、あるいは別個の言語であると認識しているかということについて、定性的な把握はされてきたものの、定量的な把握がされることは皆無であった。それ故、本論文では、複数の言語に対して適用できる「認識上の言語間の距離」という指標を導入し、住民の複数言語に対する言語認識を明らかにする。

調査対象者の総数を  $S$  とする。そのとき、 $a$  語- $b$  語という言語の組合せに対して、以下の2つの質問を行う。

- ①  $a$  語と  $b$  語は同じ言語だと思いますか？
- ②  $a$  語と  $b$  語は違う言語だと思いますか？

この①の質問に対し「はい」、②の質問に「はい」以外の答えをした人数を  $I(a,b)$ 、②の質問に対し、「はい」と答えた人数を  $D(a,b)$ 、①と②の両方に「はい」と答えた人数を  $Cy(a,b)$ 、①と②の両方に「はい」以外の答えをした人数を  $Cn(a,b)$  とする。 $Cy(a,b)$  および  $Cn(a,b)$  は、質問に対する答えが矛盾している人数である。 $a$  語と  $b$  語についてのこれらの定義を、表4. 1に示す。

表4.1 a語とb語の関係の定義

		②a語とb語は違う言語	
		「はい」	「はい」以外
①a語とb語 は同じ言語	「はい」	Cy(a,b)	I(a,b)
	「はい」以外	D(a,b)	Cn(a,b)

ここで、a語-b語の認識上の言語間の距離を  $L(a,b)$  とし、

$$L(a,b) = \{I(a,b) - D(a,b)\} / \{I(a,b) + D(a,b)\} \quad (4.1)$$

と定義する。

そのとき、 $L(a,b)$ は、 $-1 \leq L(a,b) \leq 1$ の範囲の値をとる。 $L(a,b)$ が1の場合はa語とb語は全く同じ言語、-1の場合はa語とb語は全く違う言語であることを意味し、1に近ければ、a語とb語の距離は近く、-1に近ければ、a語とb語の距離は遠いことを意味する。また、 $L(a,b)$ という指標からは、 $Cy(a,b)$ と $Cn(a,b)$ という、言語異同認識に関する矛盾の影響が除去されており、調査対象者が言語異同認識に関して混乱している場合にも、正確に言語間の遠近を求めることができる。

ここで、a語-b語の認識の確からしさを  $V(a,b)$  とし、

$$V(a,b) = 1 - \{Cy(a,b) + Cn(a,b)\} / S \quad (4.2)$$

と定義する。

そのとき、 $V(a,b)$ は $0 \leq V(a,b) \leq 1$ の範囲の値をとる。 $V(a,b)$ が1に近ければ、a語とb語の認識は、より確からしく、-1に近ければ、a語とb語の認識は、より不確かであることを意味する。

この指標は、後述の3言語間の関係を考えるときにも適用できる。

#### 4.1.3 言語集団への言語の浸透度と被浸透度

前章では、社会の多言語化指標と、言語の社会への浸透度を定義した。ここでは、社会を構成する集団、例えば言語集団、単位で、多言語化指標と言語の浸透度の指標を考える。まず、言語集団への言語の浸透度を次のように定義する。この指標は、2つの言語、および、2つの言語集団の関係を理解する指標である。

ここで、記号を次のように定義する。(記号の用法は、第3章における言語の社会への浸

透度の場合と同じである。)

$C_{ik}$  = 言語集団  $i$  中の言語  $k$  の十分言語能力保有者数

$F_i$  = 言語集団  $i$  の人口

$S_{ik}$  = 言語集団  $i$  への言語  $k$  の浸透度

$H_i$  = 言語  $i$  のみを家庭言語とする回答者数

言語集団  $i$  への言語  $k$  の浸透度  $S_{ik}$  は、以下の式により算出される。

$$S_{ik} = C_{ik} / F_i \quad (4. 3)$$

本論文では、近似値として、次の式を使用する。

$$S_{ik} \doteq C_{ik} / H_i \quad (4. 4)$$

この指標は、言語集団  $i$  中の言語  $k$  の能力をもつものの比率に他ならない。

任意の2つの言語集団  $i$  と  $k$  について、 $S_{ik}$  と  $S_{ki}$  の大小を比較することができる。 $S_{ik}$  と  $S_{ki}$  の大小関係は両言語あるいは両言語集団の関係を理解するひとつの指標である。

#### 4. 1. 4 集団ごとの多言語化指標 $M_i$

次に、多言語使用についての指標を考える。多言語化指標  $M$  および、多言語人口比率  $P$  については、前章で述べた。この指標の問題点は、あくまでこの指標が、社会全体の平均値であって、母語集団ごとの偏り、ばらつきを十分に表現できないことにある。そこで、集団ごとに多言語化指標  $M_i$  を考える。社会の多言語化指標  $M$  の場合と同じく、記号を次のように定義する。

$N$  : 対象言語数

$i$  : 母語 (実際には家庭言語)

$M_i$  : 任意の母語集団  $i$  の多言語化指標

$H_i$  : 母語集団  $i$  の人口

$C_{ik}$  : 言語集団  $i$  中の言語  $k$  の十分言語能力保有者数

このとき、任意の言語集団  $i$  の多言語化指標  $M_i$  は、次のように定義される。

$$M_i = \sum(C_{ik}) / H_{i-1} \quad (\text{where } k = 1, \dots, N) \quad (4.5)$$

#### 4.2 東北タイにおける言語間関係の認識

4.1節で論じた、言語の異同・包含関係の類型化に基づき、東北タイにおける言語認識の実態に関する調査結果を、異同と包含の関係、序列化、階層化の問題の順に論ずる。

##### 4.2.1 異同・包含関係

##### 4.2.1.1 タイ語、ラオ語、イサン語の関係

今回の調査では、タイ語、ラオ語、イサン語の3言語を選び、それらの関係がどのように認識されているかをたずねた。具体的には、2.3.3で述べたように「あなたはX語とY語は同じ言語だと思いますか。」という設問と、「あなたはY語がX語の方言だと思いますか。」という二つの設問を設けた。

先に挙げた3言語の関係について、イサン語とタイ語の関係、イサン語とラオ語の関係、ラオ語とタイ語の関係の順に、順次検討する。

まず、イサン語とタイ語の関係について論ずる。「イサン語はタイ語の方言である」と「イサン語とタイ語は同じ言語である」という設問に対する回答のクロス集計結果を、表4.2に示す。なお、値は百分比である。

**表4.2 イサン語とタイ語の関係(1)**

		イサン語とタイ語は同じ言語である	
		はい	いいえ・その他
イサン語はタイ語の方言である	はい	36.5	38.5
	いいえ・その他	9.1	15.9

上述の定義から、「同一」には、方言を含まないから、イサン語とタイ語が同じ言語であると回答した者のうち、イサン語がタイ語の方言であると回答した者は、同一というカテゴリから除き、方言というカテゴリに加える。この結果、イサン語とタイ語の関係は、表4.3のように認識されているといえる。

**表4.3 イサン語とタイ語の関係(2)**

	%
同一	9.1
イサン語はタイ語の方言	75.0
独立	15.9

イサン語とタイ語を別個の言語とみなすものは約16%、イサン語がタイ語の方言であるとみなすものは約75%、イサン語とタイ語を完全に同一の言語とみなすものは約9%である。イサン語は、ラオ語の場合と比較すれば、明らかにタイ語の方言とみなされている。

イサン語とラオ語の関係についての回答のクロス集計結果は、表4.4の通りである。なお、値は百分比である。

**表4.4 イサン語とラオ語の関係(1)**

		イサン語とラオ語は同じ言語である	
		はい	いいえ・その他
イサン語はラオ語の方言である	はい	33.0	18.3
	いいえ・その他	20.0	28.8

これを、上述の①～③で分類すると、イサン語とラオ語の関係は、表4.5のように認識されているといえる。

**表4.5 イサン語とラオ語の関係(2)**

	%
同一	20.0
イサン語はラオ語の方言	51.3
独立	28.8

イサン語とラオ語を別個の言語とみなすものは約29%、イサン語がラオ語の方言であるとみなすものは約51%、イサン語とラオ語を完全に同一の言語とみなすものは約20%である。

イサン語とラオ語の関係についての回答のクロス集計結果を、次の表4.6に示す。なお、値は百分比である。

**表4.6 ラオ語とタイ語の関係(1)**

		ラオ語とタイ語は同じ言語である	
		はい	いいえ・その他
ラオ語はタイ語の方言である	はい	16.9	22.1
	いいえ・その他	11.2	49.8

また同様に、4.1.1の分類①～③に従うと、ラオ語とタイ語の関係は、表4.7のようになる。

表4.7 ラオ語とタイ語の関係(2)

	%
同一	11.2
ラオ語はタイ語の方言	39.0
独立	49.8

タイ語とラオ語を別個の言語とみなすものは約50%、ラオ語がタイ語の方言であるとみなすものは約39%、ラオ語とタイ語を同一の言語とみなすものは約11%である。

以上の3言語の関係をまとめると、タイ語、イサン語、ラオ語相互の関係は、図4.2に示されよう。

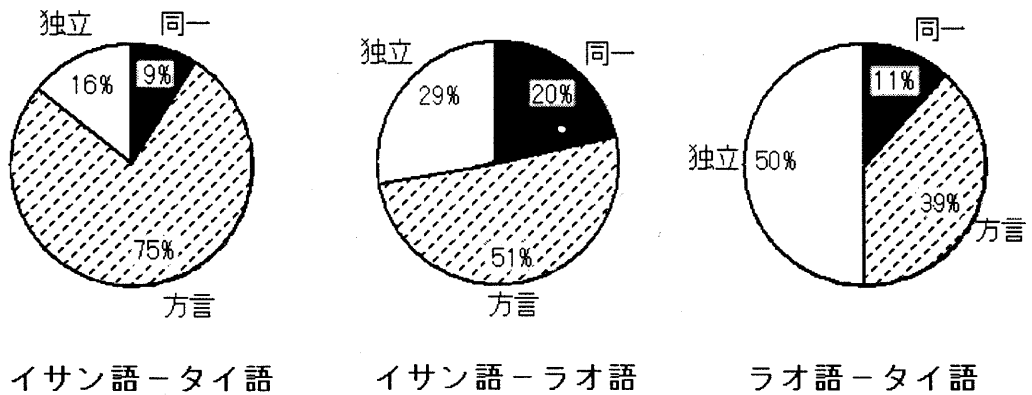


図4.2 タイ語・イサン語・ラオ語の同一、方言、独立認識

東北タイの主要3言語、タイ語、イサン語、ラオ語間の関係は、次のように認識されているといえる。

第1に、イサン語は、タイ語の方言と認識されている。すなわち、イサン語は、我々のいう「広義のタイ語」に含まれると認識されている。

第2に、イサン語とラオ語の関係については、イサン語とラオ語が別個の言語であるとみなすものが約3割、イサン語とラオ語が完全に同一の言語であるとみなすものが約2割、イサン語はラオ語の方言であるとみなすものが、約5割存在し、両者の関係に関する認識が分かれている。

第3に、ラオ語とタイ語の関係については、この2言語は独立した言語であるという認識が最も強いが、ラオ語がタイ語の方言であるという認識も相当に強い。

このように、調査結果は、イサン語がタイ語の方言でもあり、ラオ語の方言でもあるという認識が広く行きわたっていることを示している。また、これと比較すると、ラオ語は、

タイ語とはどちらかといえば独立の言語とみなされている。

タイ語とラオ語は独立であると認識している人が約5割存在することから、タイ語とラオ語の関係を除外し、イサン語を中心に、イサン語とタイ語、およびイサン語とラオ語の関係性を求めたものを、図4.3に示す。なお、数値は、全回答者総数に対する比率である。

この図から、東北タイの住民の6割は、イサン語が、タイ語の方言あるいは同一の言語でもあるし、ラオ語の方言あるいは同一の言語でもあると認識していることがわかる。

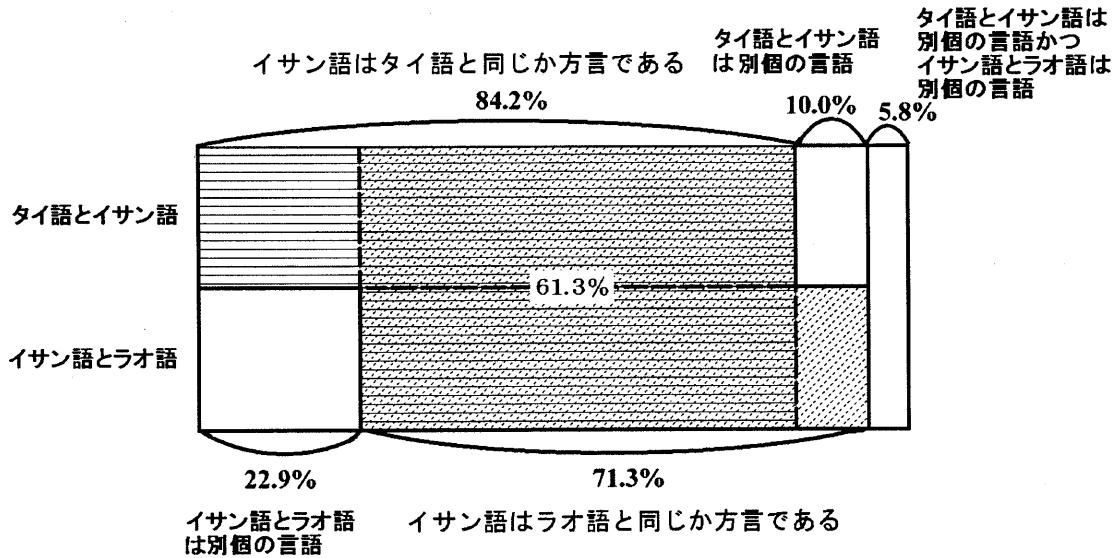


図4.3 イサン語とタイ語、ラオ語との関係

換言すれば、東北タイの住民の6割にとっては、イサン語はタイ語でもラオ語でもあり得るのである。この認識については、モアマン (Michael Moerman) の議論が示唆的である。

モアマンは、東南アジアの民族の呼称が、動的かつ重層的なものであると指摘した (Moerman 1965: 1215-1230)。その考え方に従えば、東北タイの住民にとって、イサン語という呼称をもつ言語の存在は、文脈によって動的に変化するものであり、かつ、タイ語、ラオ語という、タイとラオスという国家の国語である言語の方言としても重層的に住民に認識されている。

おそらく、東南アジアの他の地域や世界の他の地域でも、タイ語、イサン語、ラオ語のこのような関係は、存在すると思われるが、そのような調査は詳らかにしない。これは、今後の検討課題とする。

#### 4. 2. 1. 2 タイ語・イサン語・ラオ語の認識上の距離

この節では、補足的に、1999年に実施した東北タイの住民の言語認識に関する予備調査の結果を用い、彼らが抱く、タイ語・イサン語・ラオ語の認識上の距離について考察

する。

表4. 8は、東北タイの大学生に対し、タイ語・イサン語・ラオ語という3つの言語について、同じであると思うか、異なる言語であると思うかについて質問した結果と、そこから求めた言語間の認識上の距離、そして、確からしさを示したものである。なお、括弧内は、全回答者に対する比率を表す。

表4. 8 東北タイの大学生のタイ語・イサン語・ラオ語の言語認識

	同じ言語(I)	異なる言語(D)	言語間の距離(L)	確からしさ(V)
タイ語とイサン語	126(31.7)	146(36.7)	-0.07	0.68
タイ語とラオ語	60(15.1)	224(56.3)	-0.58	0.71
イサン語とラオ語	126(31.7)	121(30.4)	0.02	0.62

また、図4. 4は、認識上の3言語間の距離に関する認識を図示したものである。

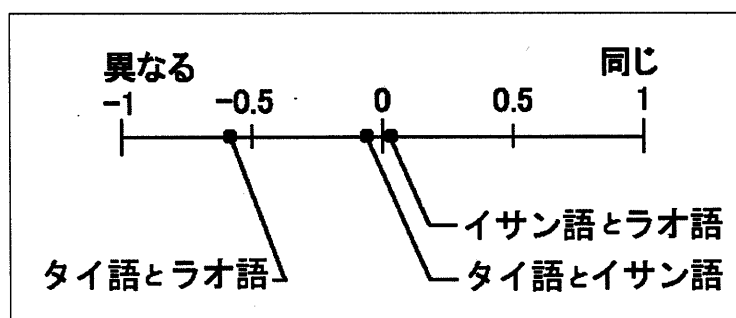


図4. 4 タイ語・イサン語・ラオ語の距離の認識

この図は、東北タイの大学生が認識した、タイ語とイサン語間の距離については、ほぼ同一であるか異なるか判定できないでいることを示している。イサン語とラオ語間の距離についても、タイ語とイサン語間の距離と同様である。これに対して、タイ語とラオ語間の距離は、どちらかといえば異なると認識している。

これらの認識の確からしさについては、3言語間の距離の認識とも、0.62から0.71という値を示す。ただし、確からしさについては、他に比較するデータがないため、ここでは値を示すのみとする。

#### 4. 2. 2 言語の序列化

##### 4. 2. 2. 1 タイにおける諸言語の序列化

スモーリーは、タイ全体における諸言語の序列化を論じ、タイにおける言語の階層を、図4. 5のように表した (Smalley 1994: 69)。



スモーリーの表したこの序列は、第2言語話者を含む、それぞれの言語の話者人口、および、それぞれの言語を学習したいと思うものの人口に基づくものである (Smalley 1994: 69)。換言すれば、それぞれの言語の社会的威信もしくは効用に基づくものであると言える。あるいは、社会的威信もしくは効用の結果としての第2言語話者を含む話者人口を基準とするものということもできよう。

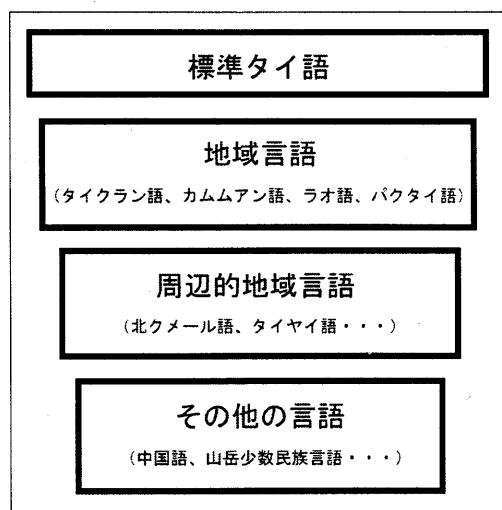


図4.5 タイにおける言語の階層

出所：Smalley 1994: 69 より作成

ただし、この図はあくまで、タイ全体における諸言語の序列を示したものである。従って、北タイで主に使用される地域言語であるカムムアン語や、南タイで主に使用される地域言語であるパクタイ語が使用されない東北タイでは、当然事情が異なり、東北タイの住民にとっての言語の階層は、存在するとしても、タイ全体における言語の階層とは異なるものになる。

また、言語の序列化をさらに詳しく検討するためには、ある地域、宗教、言語集団にとっての序列化も論じる必要がある。すなわち、タイ全国における序列化、東北タイ全体における序列化、イサン語集団における序列化、コラート語集団における序列化などと、分けて論ずる必要がある。

ここでは、東北タイにおける言語の序列化、および、ナコンラチャシマ地域とその周辺における言語の序列化を考える。

#### 4. 2. 2. 2 序列化の諸基準

前述のように、スモーリーは、第2言語話者を含めた言語人口を基準とし、序列化を行った。スモーリーのこの言語人口は、当該言語の社会的威信と効用を反映するものであり、

その意味で、社会的序列として意味をもつものであると言える。

話者人口という観点からすれば、3. 3節で明らかにしたように、十分言語能力をもつ話者数は、タイ語が84%、イサン語が55%、コラート語が28%、ラオ語が9%であり（表3. 5参照）、タイ語、イサン語、コラート語、ラオ語という序列が成立しているといえる。

東北タイ社会への浸透度という観点からすれば、タイ語が0. 80、イサン語が0. 22、コラート語が0. 15である（表3. 11参照）。この場合、イサン語とコラート語の差はわずかであるが、タイ語と他の言語の序列は明らかである<sup>1</sup>。

家庭言語話者数を基準とすれば、タイ語が39%、イサン語が54%、コラート語が26%、ラオ語が4%の順となる（表3. 15参照）。社会的威信や効用ではなく、例えば、愛着、帰属意識といった観点からすれば、このような序列も考えられよう。

言語間関係からすれば、4. 2. 1. 1で述べたように、イサン語はタイ語とラオ語に包含されると認識されている。このような序列を考えることも可能である。

社会において、言語が序列化される基準としては、このように、多くの基準を考えることができる。本論文では、社会的威信と効用、あるいは話者人口を主たる基準として、東北タイにおける言語の序列を検討する。

この基準を補うものとして、さらに、言語の浸透度と言語使用域による機能分化を検討する。

#### 4. 2. 3 言語集団への言語の浸透度と被浸透度

ここでは、4. 1. 3で定義した言語集団への言語の浸透度と被浸透度を、タイ語、イサン語、コラート語について、(4. 4)式から算出する。タイ語、イサン語、コラート語相互の浸透度を、表4. 9に示す。

表4. 9 タイ語、イサン語、コラート語相互の浸透度

	タイ語	イサン語	コラート語
タイ語のみ家庭言語		0.24	0.19
イサン語のみ家庭言語	0.80		0.05
コラート語のみ家庭言語	0.69	0.50	

この表より、

- (1) タイ語のイサン語家庭言語話者への浸透度(0. 80)は、イサン語のタイ語家庭言語話者への浸透度(0. 24)より、はるかに大である。
- (2) タイ語のコラート語家庭言語話者への浸透度(0. 69)は、コラート語のタイ語

家庭言語話者への浸透度（0.19）より、はるかに大である。

(3) イサン語のコラート語家庭言語話者への浸透度（0.50）は、コラート語のイサン語家庭言語話者への浸透度（0.05）より、はるかに大である。

という関係が歴然としている。

これらのデータから、タイ語、イサン語、コラート語相互の浸透度を2言語毎に、図4.6、図4.7、図4.8にそれぞれ図式化する。

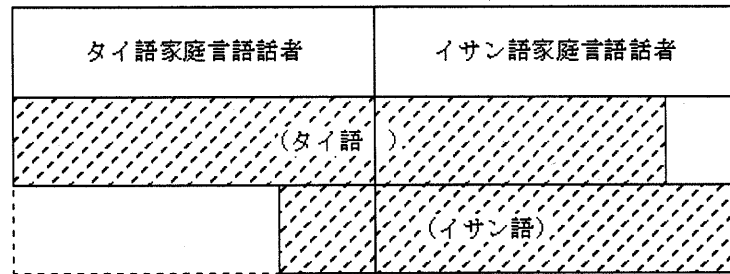


図4.6 タイ語、イサン語相互の浸透度

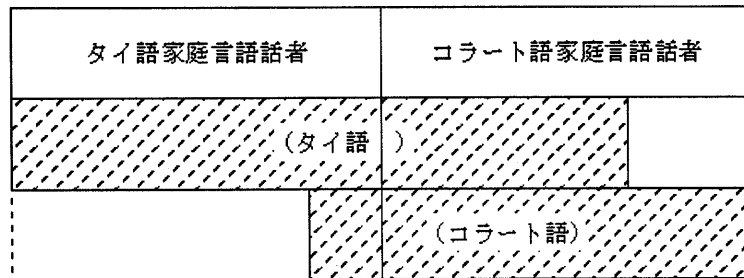


図4.7 タイ語、コラート語相互の浸透度

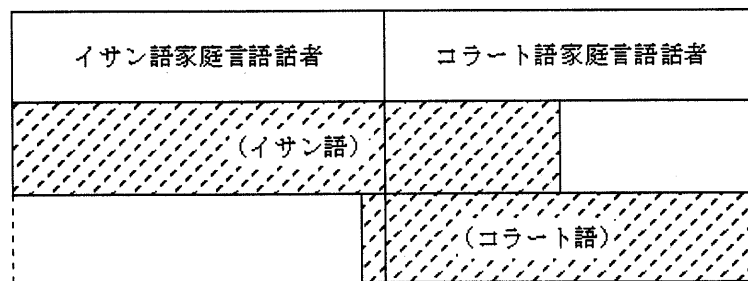


図4.8 イサン語とコラート語相互の浸透度

浸透度の大小が直ちに言語間の序列を定めるものではないが<sup>2</sup>、このことから、3言語の

<sup>1</sup> ラオ語については、値が極めて小さいので、ここでは無視する。

<sup>2</sup> 支配的集団(特に少数支配集団)が(多数派である)従属的集団を言語能力によって排除する、所謂 elite closure

間に明らかな階層関係を見ることができよう。

次に、多言語使用についての指標として、4. 1. 4で定義した、集団ごとの多言語化指標  $M_i$  を考える。

東北タイの場合、対象言語数は、タイ語、イサン語、コラート語、ラオ語の4言語とする。このとき、母語集団  $i$  の多言語化指標  $M_i$  は、表4. 10のようになる<sup>3</sup>。

**表4. 10 各母語集団の多言語化指標**

数値は合計欄と  $M_i$  欄を除き  $C_{ik}$  の値を示す。

	タイ語	イサン語	ラオ語	コラート語	その他	合計	$M_i$
家庭言語タイ語のみ	426	101	17	82	13	639	0.50
家庭言語イサン語のみ	787	987	102	45	13	1934	0.96
家庭言語コラート語のみ	245	74	20	356	7	702	0.97

タイ語家庭言語使用者と他の言語の家庭言語使用者では大きな差があることは明白である。イサン語あるいはコラート語のみを家庭言語とするものがほぼ100%他の何らかの言語の十分言語能力をもつのに対し、タイ語のみを家庭言語とする者のうち、他の言語の十分言語能力を有する者は、50%に過ぎない。前述の浸透度との比較で言えば、この指標は、被浸透度の指標と考えることができる。

タイ語は、前述のように、浸透度が最も高いが、タイ語家庭言語集団は、最も被浸透度が低い。イサン語とコラート語、イサン語家庭言語集団とコラート家庭言語集団は、これと全く逆の傾向を示す。ここにも、序列を見ることができる。

タイ語家庭言語集団は、イサン語あるいはコラート語のみを家庭言語とするものに比べ、家庭言語以外の言語を習得する必要があるに小さいと言える。社会的に上位にある言語の話者が、社会的に下位にある言語を習得する必要は一般に低いからである。例えば、カナダのケベック州において、英語系であるがフランス語も使用する管理職・行政官が28%に過ぎないのに対し、フランス語系であるが英語も使用する管理職・行政官は45%であること（宮島 1992: 123）、エストニアにおいて、ロシア人でエストニア語を話せる者が13.7%であるのに対し、エストニア人でロシア語を話せる者が33.6%であること、

にあつては、支配的集団は通常従属的集団の言語をも使用できる多言語使用であつて、支配的集団の内部で使用される言語は、従属的集団への普及をむしろ意図的に妨げられる。このような場合、支配的集団を特徴付ける言語の、従属的集団への浸透度はきわめて小さい。従つて、浸透度が小であることは、必ずしも言語の序列のより下位にあることを意味しない。

<sup>3</sup>また、このデータで計算すると

$$\frac{\sum (C_{ik})}{\sum (H_i)} - 1 = \frac{3275}{1769} - 1 = 0.85$$

社会全体の多言語使用度とほぼ等しくなる。(理論的には一致するはずであるが、このデータでは、家庭言語の単一言語使用者のみを対象としているため、値が若干異なっている)

ラトビアにおいて、ロシア人でラトビア語を話せる者が21.1%であるのに対し、ラトビア人でロシア語を話せる者が65.7%であること (Raun 1994: 166) 等の例がある。

ここで、イサン語家庭言語集団と、コラート語家庭言語集団の関係を考えてみよう。タイ語を除いて考えると、イサン語家庭言語集団と、コラート語家庭言語集団について、タイ語以外の多言語化指標を考えることができる。この結果を、表4.11に示す。

**表4.11 イサン語家庭言語集団とコラート家庭言語集団のタイ語を除く多言語化指標**

数値は合計欄とMi欄を除きCikの値を示す。

	イサン語	ラオ語	コラート語	その他	合計	Mi
家庭言語イサン語のみ	987	102	45	13	1147	0.16
家庭言語コラート語のみ	74	20	356	7	457	0.28

この結果からも、コラート語家庭言語集団の方が、イサン語家庭言語集団に比べ、他の言語の浸透をより被っていると言える。換言すれば、イサン語家庭言語集団に比べ、コラート語家庭言語集団は、タイ語以外の言語を、より多く習得していると言えよう。

#### 4.2.4 言語使用域と序列化

東北タイは多言語使用の状況にあるが、住民の中で、複数の言語がまったく平等に使用されているわけではなく、複数の言語間に一定の序列が存在することが観察できる。

プラットは、シンガポールとマレーシアの英語で教育を受けた華人の事例をもとに、上述(2.1節)のファーガソンのダイグロシヤ概念とフィッシュマンの言語使用域概念を拡張した多言語の使い分けのモデル、即ちポリグロシヤのモデルを提起している。彼は、フィッシュマンの言語使用域の概念をさらに一般化し、フィッシュマンの提案した言語使用域を最も公的なものと最も私的なものを両極とするスペクトラム上に位置づけることを提案する (Platt 1977: 368-369)。

プラットのこの提案は、2つの意味をもつ。一つは、これにより、任意の言語使用域を、状況に応じて理論的には無限に下位区分することが可能になることである。家庭という言語使用域を受信者という基準によって対祖父母、対両親、対兄弟姉妹、対子女、対配偶者などと細分するのがその例である。他の一つは、すべての言語使用域を、それが占める範囲の大小や重なり合いといった問題はあるにせよ、公の極と私の極を両極とする連続体上のいずれかの場所に位置づけることが可能になることである。

ファーガソンの上位言語と下位言語の区分が、上述のように公と私という二つの大別された言語使用域に基づくものであると同様、言語使用域が公と私を二極とする多数に分割されるときには、上位言語と下位言語の区分もこれに対応する形で細分化されることになる。従って、プラットは、次のような区分の導入を提案した。プラットの提案は、多言

語社会においては多言語の使い分けが行われること、この使い分けを記述する枠組が必要であることという2つの前提に基づく。

- (1) 上位言語と下位言語は下位区分する。この区分は、言語使用域の区分に対応し、サブスクリプトにより行われる。数字が小さいほど上位、即ち公の極に近いものとする (Platt 1977: 367)。
- (2) 上位言語と下位言語の中間に中位言語 (Medium varieties) というカテゴリーを設ける。中位言語も同様に下位区分される (Platt 1977: 367)。
- (3) 上位言語と中位言語の間にダミーの上位言語 (Dummy High) というカテゴリーを設定する。この言語 (ヴァライアティ) は、「象徴的上位言語」とも訳すべきものであり、地位は高いが、その地位の示唆する場では現実には必ずしも使用されない言語 (ヴァライアティ) を指す。シンガポール華人にとってのマレー語やタミール語がこれである (Platt 1977: 373-374)。アイルランドにおける国語であるアイルランド語もこれに近いと言えよう (Fennel 1990: 36)。

上述の枠組を用いて、シンガポールとマレーシアの英語で教育を受けた華人の多言語使用を示したものが、表4. 12である。

**表4. 12 シンガポールとマレーシアにおける英語教育を受けた華人にとってのポリグロシヤと言語の階層化**

	シンガポール	マレーシア
上位言語 <sub>1</sub>	公式シンガポール英語	(標準)マレーシア語
上位言語 <sub>2</sub>	標準中国語	公式マレーシア英語
名目的上位言語 <sub>1</sub>	標準マレー語	標準中国語
名目的上位言語 <sub>2</sub>	タミール語	
中位言語 <sub>1</sub>	口語シンガポール英語	口語マレーシア英語
中位言語 <sub>2</sub>		福建語及び広東語
下位言語 <sub>1</sub>	福建語及び広東語	母語としての中国語方言
下位言語 <sub>2</sub>	他の中国語方言	他の中国語方言
下位言語 <sub>3</sub>	市場のムラユ語 (Bahasa Pasar)	市場のムラユ語 (Bahasa Pasar)

出所： Platt: (1977), 375

例えば、マレーシアの場合、標準マレーシア語は、政府、官庁、教育で使用され、マレーシア英語は、私企業、教育、宗教 (ただしクリスチャンの場合のみ) で使用され、共通語としての中国語方言(福建語、広東語など)は、友人との間で使用され、家庭では、主として、母語である中国語方言 (海南語、潮州語など) が使用される。

プラットのこの研究結果は、多くの言語 (ヴァライアティ) が使用される社会において

は、言語使用域に応じた使い分けが行われていることを示すだけではない。任意の言語使用域は、公の極と私の極を両極とするスペクトラムのどこかに位置付けられることにより、公と私の序列に組み込まれる。任意の言語使用域は、また、一般に（ひとつとは限らないが）特定の言語（ヴァライアティ）の使用と結び付けられる。このことは、任意の言語（ヴァライアティ）が公と私の序列に組み込まれることを意味する。かくして、多言語社会で使用される言語は、表4. 12のプラットの用語が端的に示すように、公と私を極として序列化されることになる。

本論文では、プラットのように、言語使用域を極端に細分化することはせず、「役人」、「僧侶」、「友人」、「家庭」という4つの領域に分割した。3. 4. 1ですでに明らかにしたように、それぞれの言語使用域に一つの言語が対応するのではなく、言語使用域の差異は、使用比率の差異として理解される。これは、プラットが言う、公と私の序列のスペクトラムという概念の妥当性を示すものである。序列化という観点から、言語使用域毎の主要言語の使用比率を、再度検討してみよう。次に、表3. 15と図3. 1を、それぞれ表4. 13と図4. 9として、再び掲げる。

表4. 13 言語使用域と使用比率(複数回答あり)(表3. 15再掲)

	タイ語	イサン語	コラート語	ラオ語
役人	90	20 ▲	10	2
僧侶	56	45	21	4
友人	60	55	29	6
父母	39 ▼	54	26	4
子ども	60	45	23	4

(値は%)

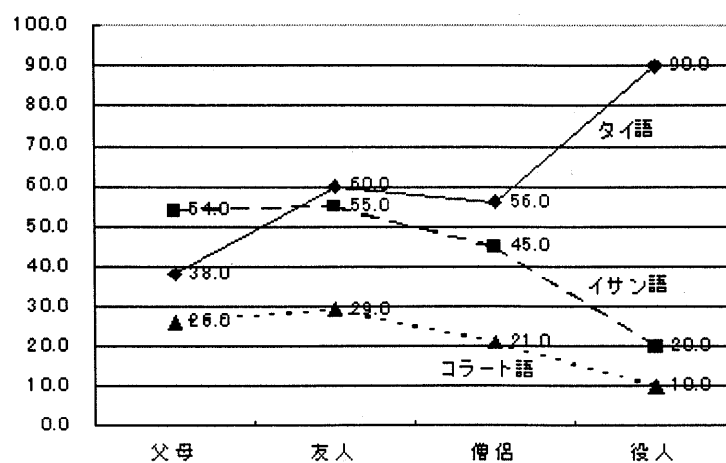


図4. 9 言語使用域と使用比率(複数回答あり)(図3. 1再掲)

前述のように、子どもに対して使用する言語に関して若干の例外はあるが、公的な場ほ

どタイ語が使用され、私的な場ほどその他の言語が使用される傾向は明らかである。公と私を両極とするスペクトラムにおいては、タイ語は公の側に、イサン語とコラート語は私の側に傾く。これは、この3言語の東北タイにおけるプラットの的な意味での上位下位の地位を示すと考えられる。

#### 4. 2. 5 東北タイにおける言語の階層化

以上、本節で様々な基準によって検討した、諸言語間の関係から、東北タイにおいては、タイ語を頂点とする、言語の序列が成立していると考えられる。今回の調査では、全ての基準に関して、主要な言語のすべてを比較する設問を設定し得なかったため、暫定的な結論に止まらざるを得ない。

- (1) 言語の包含関係からすると、タイ語、ラオ語、イサン語という序列が存在する。
- (3) 言語人口という観点からすれば、タイ語、イサン語、コラート語、ラオ語という序列が存在する。ここで言う言語人口は、それぞれの言語の社会的威信と効用を反映するという意味で、タイという国家機構の社会的序列として機能する。
- (4) 言語の浸透度と被浸透度という観点からすると、同様に、タイ語、イサン語、コラート語という序列が存在する。
- (5) 公と私を両極とするスペクトラムの中の言語使用域という基準からすれば、タイ語と他の言語の間には、明らかな序列が存在する。イサン語とコラート語の序列は、この点では明らかでない。

以上のことから、さし当り、次のような序列を確定することができよう。図4. 10に、

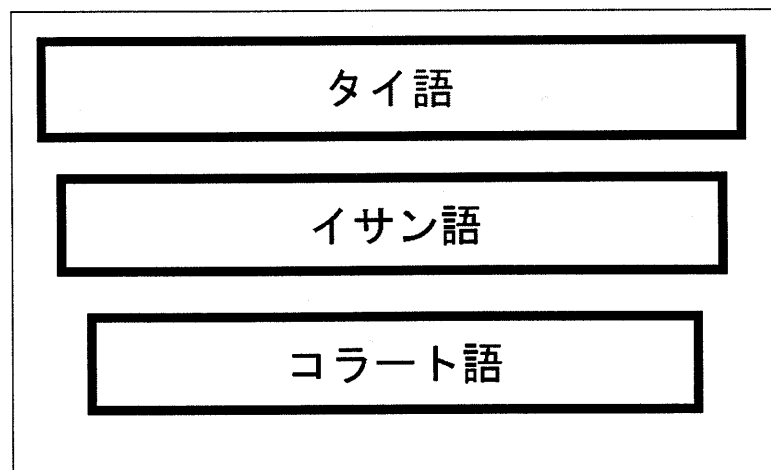


図4. 10 東北タイにおける言語の階層



東北タイにおける言語の階層を示す。なお、ラオ語を、この序列にどのように組み込むかは、本章第1節で述べたように、タイ語、イサン語との関係が複雑であり、今後の検討課題である。また、この階層構造は、はっきりと独立した層からなる階層ではない。それはむしろ、複数の層が互いに重なり合った階層であるといえる。

他方、家庭言語という観点からすれば、約5割のイサン語、約4割のタイ語、約3割のコラート語の順となる。固有の言語や母語が、政治的に意味をもつときには、この序列は上述の序列に対する対抗的序列として、重要な意味を持ちうるであろう。

なお、言語の階層化については、さらに第5章において検討を加える。

## 第5章

### 呼称と帰属意識

## 第5章 呼称と帰属意識

この章では、東北タイの民族の呼称と帰属意識について、東北タイに見られる、複数の自称を使用する現象や、多重の帰属意識を抱く現象に留意しながら論ずる。それとともに、呼称の階層化についても論ずる。また、東北タイにおけるラオという呼称と帰属意識についても言及する。

まず、タイ諸族の分類を論じ、次に、東北タイの民族の呼称と帰属意識に関する先行研究を概観する。また、調査に関する理論的整理を行う。さらに、民族の呼称、帰属意識、呼称の異同認識の問題を、調査結果に基づき検討する。

### 5.1 東北タイの民族の呼称と帰属認識

東北タイには、タイ語 (Tai) を日常使用するタイ諸族が分布する。そして、タイ諸族を分類する試みが行われてきた。

タイ諸族の研究に関して最も影響力を持ち、タイ諸族を発明したとすら言えるのが、アメリカ人宣教師ドッド (William Clifton Dodd) の言語を基準とした分類である (Keyes 1995: 146)。そして、言語をタイ諸族の分類の第一の基準とするアプローチの頂点が、リバー (Frank M. LeBar) 他が著した *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia* であり、話し言葉に与えられた特権的地位が、大多数の研究者によって踏襲され、今日に至っている (Keyes 1995: 147)。

これに対して、キースは異議を唱える。現在、分類にもよるが、タイ諸族の数は20余とされる。方言の差異に意味があるとすれば、タイ諸族の数はそれよりはるかに多くなり、100を越えるタイ諸族を認めるものもある。方言や言語の微妙な差異を確定することを意図する言語学者は、タイ諸語の歴史的関係に関心をもつのであり、言語共同体を構成するもの、ましてやエスニック集団を構成するものに関心を抱いてはいない。言語の差異が認識されることがあるのは確かであるが、それは必ずしも異なる言語を話す集団の間の意思疎通を阻害せず、ダイグロッシアも普通のことであるが故に、人々はしばしば方言の差異によっては分かれぬ共同体の構成員であると想像するとキースは主張する (Keyes 1995: 147)。そして、タイ諸族の系譜に大きな影響を与えたのは言語ではなく表記体系であり、タイのスコタイ王朝の正書法が、現在のタイ文字、ラオ文字の基礎となり、同じ文字記法が、互いに接触のない人々を結びつけた (Keyes 1995: 139)。例えば、キースによれば、タイ北部、ビルマなどに居住する多くのタイ諸族の間には、タム文字の一変種で書かれた仏教文書を共有する集団によって構成される「想像の共同体」が存在する。ユアン (Yuan)、クン (Khün)、ルー (Lue)、ラオ (Lao) といった民族集団は、その共同体の下位集団であった (Keyes 1995: 140-141)。

また、東北タイのコーンケン大学の研究チームは、東北タイに分布する民族を、川の流域によって3つに分類する手法を採用している。それによると、1958年以前は、(1) イサン北部(ソクラーン(Songkhran)川流域)には、タイ・イサン人あるいはラオス人(Laos)<sup>1</sup>、ヨー人(Yor)、ソー人(So)、カレン人(Kaloeng)といった少数民族、(2) イサン中部(チー(Chi)川流域)には、ラオス人、(3) イサン南部(ムーン(Moon)川流域)には、左岸に、ラオス人とクメール人(Khmer)人、右岸に、ラオス人、タイ・コラート人(Thai-Korat)、クメール人、スワイ人(Suai)、が住んでいたという(Viyouth et al 1992:5-6)。

従来の、タイ諸族の分類の第一の基準として言語を使用する手法に問題があることは否めない。しかし、表記体系はタイ諸族を結び付けるものではあっても、それによってタイ諸族を分類できるわけではない。また、川の流域による分類も、絶対的なものとは言えない。例えば、ムーン川流域右岸に、タイ・コラート人が住むとされるが、ムーン川流域左岸にも、タイ・コラート人が住んでいることは、第6章で明らかにしている通りである。

東北タイのラオ人の呼称については、モアマンの論文が重要である。彼は、ルー人の所在を議論する中で、東南アジアにおける民族の呼称が不変のものと捉える考え方は誤りであり、動的かつ重層的なものであるという考え方が妥当であると指摘した(Moerman 1965:1215-1230)。この論文は、西洋的な民族という概念を、タイにそのまま適用しようとした研究手法に対しての批判にもなっている。

以上述べたように、従来の、タイ諸族の民族の呼称に関する研究は、東北タイ全体を対象とした調査を伴ったものではない。それ故、東北タイの諸民族の呼称を明らかにするためには、東北タイの広範な地域を対象とした調査が必要である。

次に、帰属意識という観点から先行研究を概観する。

東北タイ住民が抱くラオとイサンに対する帰属意識については、まず、キースの議論に着目する必要がある。

キースはかつて、東南アジアの民族が、周囲の状況に応じて、複数の言語と複数の帰属意識を使い分けてきたという歴史をもつため、東南アジアにおいて民族とその呼称を対応させることが困難であるということを指摘した(Keyes 1966)。その考え方に従えば、東北タイの住民もまた、複数の言語と複数の帰属意識を使い分けていると考えるべきであり、東北タイにおいて言語に関する調査を行う場合、言語と帰属意識を関係付けて考える必要がある。

そもそも、タイという国家におけるラオのもつ意味について、帰属意識の面から最初に

---

<sup>1</sup> 原文は、Laosと記述されている。これは、他の民族、例えば、ヨー人(Yor)、ソー人(So)などが単数形であることから考えて、ラオ(Lao)の複数形ではなく、ラオス人(Laos)の単数形と考えるのが妥当である。

研究を行ったのは、プーミサック (Chit Phumisak) である。彼は、19世紀前半にラオスと東北タイを支配下においたタイ人が、ラオ人に対して蔑視的感情を抱いたこと、そして、それに対して、ラオ人が「ラオ」であることに誇りを抱いていることを明らかにした (プーミサック 1976: 394-395)。また、林は、ラオスと東北タイのラオ人に焦点を当て、1899年にラオを冠する地名を変更したり、民族名としてのラオの使用を法的に禁じたことや、第二次世界大戦中の東北タイで、ラオを名乗らないこと、歌の名称、歌詞からラオをはずすことを強制した布告が出されたことに象徴されるような、民族の帰属意識としてのラオの脱色化が進行したことを明らかにした (林 1998: 88)。また、1960年代からは東北タイが開発優先地域として指定され、中央タイと直結していく中で、イサンという地域についての帰属意識が制度化されていったことを指摘した (林 1998: 89)。キースは、タイにおける文化的多様性を述べる中で、東北タイのラオ人はイサンという民族的・地域的な帰属意識を抱いていることを指摘している (Keyes 1997: 213)。

ラオ人という民族に対する帰属意識についていえば、1. 2節で述べたように、19世紀末以来、東北タイにおいて、中央タイの圧政に反発する、プーミーブンの反乱が発生している。東北タイにおいては、1901年、1902年、1924年、1936年、1941年、1959年にプーミーブンの反乱が発生した (高城 1994: 361-363)。その中で、1924年に東北タイのルーイ (Loei) 県ノーンマークケーウ村で発生したプーミーブンの反乱において、農民の間で歌われた歌は、ラオ人である東北タイの農民の、タイ人に対する不満と、ラオ人国家であるヴィエンチャン再興への期待を示すものであり (ナートスパー 1987: 130)、ラオ人という民族に対する帰属意識を示すものであると言える。

「(略)・・・タイ人は威張り散らす。籾を臼に入れて搗こうとしても、誰もタイ人の米搗きなど手伝おうとしない。・・・(略)・・・ヴィエンチャンが(ママ)お国が敗れるのを見ても、娘達は軽蔑するな。ヴィエンチャンの都は、次々に実を着けるキュウリの棚と同じように、最後は、ますます栄えるのだ。・・・(以下略)」

その後、東北タイでは、1950年代から1980年代にかけて、タイ共産党 (Communist Party of Thailand) が活動した。しかし、貧困にあえぐ東北タイの村に対し、貧困克服の道程を示すことができず、多数の支持を得ることはできなかった (Rogers and Soongswang 1996: 218)。また、東北タイの住民はイデオロギー的に反共的であり、タイ王制への挑戦につながる動きには、拒絶反応を示す (山下 1996: 9)。そのような住民にとって、共産主義は結局、東北タイの住民の帰属意識にかかわるような問題ではなかったといえる。そのため、中国などの外国の指導による共産ゲリラの活動は、結局は強力なものとはならなかった。

最後に、東北タイの民族の言語と帰属意識に関する先行研究について述べる。

山下は、東北タイの住民の言語認識について、大学生に限定した調査結果からではあったが、タイ語、イサン語、ラオ語といった言語についての言語認識の曖昧さを明らかにし、また、言語と帰属意識の関係を示唆した（山下 1999b: 121-125）。

このように、東北タイの人々の帰属意識についての研究はいくつか存在する。しかしながら、ラオ人の帰属意識と、彼らが抱いている言語認識との関係についての研究は、これまで充分行われてこなかったのが現状である。

言語認識と帰属意識の関係について考える手がかりとして、ブレーダー（Peter Broeder）とエクストラ（Guus Extra）の議論を検討してみる。彼らは、オランダにおける移民集団を規定する規準を検討して、国籍、出生国（country of birth）、自己規定、家庭言語を挙げ、それぞれについて功罪を列挙している（Broeder and Extra 1997: 159-161）。国籍と出生国は、移民の場合にのみ妥当するのでここでは論じないが、自己規定と家庭言語について彼らの議論を検討してみよう。

まず、自己規定（self-categorization）については、事の核心に触れることと個人自身の帰属意識を説明できることを利点としてあげながら、定義からして主観的であることと多重の自己規定がありうることを欠点としてあげる。他方、家庭言語については、コミュニケーション過程における最も重要なアイデンティティの規準であるものの、言語が必ずしもエスニックなアイデンティティの中心的な要素であるとは限らないこと、そしてこの概念そのものが、家庭で誰が誰に対して何語を話すかを考慮に入れば、複合的な概念であることを欠点としている（Broeder and Extra 1997: 160. 傍点筆者）。

ブレーダーとエクストラの議論は、エスニック集団を規定するとき、呼称を含めた自己規定と家庭言語が重要であることを認めながら、単一の自己規定と単一の家庭言語という状態を理念型として、それが損なわれる多重アイデンティティと社会あるいは家庭における多言語使用という状態を理念に合わないのみならず議論であるといえる。極論すれば、現実の社会における多重アイデンティティと多言語使用の実態から目をそむける議論であると言えよう。方法論的には、重層しない単一のアイデンティティあるいは帰属意識と、単一の家庭言語という最も単純なモデルから出発することの有効性を否定するわけではない。しかし、明らかな多重アイデンティティと多言語使用の社会を論ずるときには、むしろこれを逸脱とみなすのではなく、明示的に対象化して、多重アイデンティティと多言語使用の実態を明らかにすることこそ必要なことであろう。

しかも、実態は、一つの集団が複数の帰属意識をもち、複数の言語を使用するという事に止まらない。一つの呼称が複数の集団を指し、「タイ語」や「ラオ語」の例のように、一つの言語名が複数の言語を指すことすらある。

## 5. 2 タイにおけるタイ系3民族<タイ人><コンムアン人><ラオ人>の呼称

現在のタイに相当する地域で、「ラオ」という呼称で呼ばれた民族は複数存在する。そして、「ラオ」と呼ばれた民族のうち、北タイの民族は「ラオ」という呼称を棄て、東北タイの民族は「ラオ」という呼称を現在まで保持している。ここでは、山下(1999a)の記述に基づき、タイに居住する民族のうち、タイ人と、「ラオ」と呼ばれた2つの民族を、民族の呼称という視点から比較し、「ラオ」とは何なのか、「ラオ」のアイデンティティはどのように変化していったのかを明らかにする。それは、タイという国家の中での民族間の序列意識の形成にも大きくかかわる問題である。

タイにおけるタイ諸族のうち、主要な3つの民族集団、すなわち、中央タイのタイ人、北タイのコンムアン人(Khonmüang)、東北タイのラオ人について、各々の民族の呼称の歴史をたどる。この3民族はもともと、「タイ(Tai)」を自称していた。なお、本論文では、比較を行う際に、現在中央タイに居住するタイ人を<タイ人>、現在北タイに居住するコンムアン人を<コンムアン人>、現在東北タイに居住するイサン人を、歴史的な名称である<ラオ人>と呼ぶことにする。そして、民族の自称・他称を、「」で示す。民族とその呼称の錯綜した関係を示すためには、< >で示される民族が、「」で示される名称で呼ばれることを示す必要がしばしば生じるからである。例えば、<ラオ人>は、後に見るように、「タイ(Tai)」でもあり、「ラオ」でもあり、「イサン」でもある。逆に、「ラオ」は、<コンムアン人>、<ラオ人>、ときには<プータイ(Phu Tai)人>のいずれをも指した。

言うまでもなく、民衆自身が、どのような自称、他称を用いていたかを過去に遡って明らかにすることは事実上不可能であり、支配者や支配集団が残した記録に頼らざるを得ないことをあらかじめ断っておく。

### 5. 2. 1 中央タイのタイ人(<タイ人>)

中央タイには、現在、タイクラン語を母語とする<タイ人>が居住する。彼らは、1351年に興ったアユタヤ王朝、1767年に興ったトンブリ王朝から、1782年に興った現在のラタナコーシン王朝まで、現在のタイ王国の主流集団をなし、周辺のタイ諸族を支配してきた民族である。

彼らは、民族名として「タイ(Thai)」を自称するようになった。「タイ(Thai)」という単語には、現在でも自由という意味がある。現在の中央タイに相当する地域は、13世紀

の中頃までは、クメール人が支配しており、＜タイ人＞は、クメール人の支配下にあった。チット・プーミサックは、＜タイ人＞が、13世紀に、クメール人の支配から逃れ、自由になり、自分たちの民族の国家をうち立てたことに大きな意義を見だし、自由という意味の「タイ (Thai)」という言葉に思い入れがあったので、「タイ (Thai)」と自称したと主張する (プーミサック 1976: 394)。

また、＜タイ人＞の呼称としては「シャム (Siam)」が使われてきたが、これは、自称ではなく、他称である。クメール人のジャヤ・パラメーシュヴァラヴァルマン一世が、1050年に戦争を行ったときの勝利柱には、奴隷として、クメール人、中国人、プカーン人、シャム人がいた、と記録されている (セデス 1989: 198) ことから、民族に対する「シャム」という他称は、すでに11世紀には使われていたと考えられる。

### 5. 2. 2 北タイのコンムアン人 (＜コンムアン人＞)

北タイには、現在、カムムアン語 (チェンマイ・ラオ語とも称する) を母語とする＜コンムアン人＞が居住する。彼らは、現在のタイ北部のチェンマイを中心に栄えたランナータイ (Lanna Thao) 王国の末裔である。

彼らは、民族名として、有気音の「タイ (Thai)」とは異なる「タイ (Tai)」を自称していた。1292年に建国されたランナータイ王国という国家の名前は、「百万の水田をもつタイ人」という意味である。ただし、ランナータイ王国の始祖であるマンラーイ王 (Phokhun Mangrai) は、ラオ (タイ諸語で「主人階級」の意) の家系にあり、彼の祖父は「ラオ・ムアン」、彼の父は「ラオ・メーン」という名前であった (プーミサック 1976: 395, セデス 1989: 271)。このことから、＜コンムアン人＞の支配層は、自らを「ラオ」と見なしていたことがわかる。また、彼らは古くから、他称として「ユアン」とも呼ばれている (Smalley 1994: 81)。

タイ古典文学である「リリット・プラロー (Lilit Phra Lo)」という詩は、アユタヤ王朝初期に作られたとされる作品であるが、その中に、ボーロマラーチャー2世治世下の1420年頃、＜タイ人＞のアユタヤ王朝が、＜コンムアン人＞のランナータイ王国に勝利したことを賞賛する、「ユアン側が負け、ラオ側が壊滅し、タイ側が勝ち」という表現がある (プーミサック 1976: 376)。これは、この当時、＜コンムアン人＞が、＜タイ人＞によって、「ユアン」とも「ラオ」とも呼ばれていたことを示す。

ランナータイ王国は、ビルマやタイと互して繁栄するが、1558年、ビルマに破れ、それ以降200年間、ビルマの影響下に入る。そして、何度もビルマに対する反乱を起こ



したが、単独では完全にビルマの勢力を排除できず、＜タイ人＞のタイ王国に援助を求めた。タイ・トンブリ王朝のタークシン (Taksin) 王は、1776年にチェンマイをビルマから奪い、＜コンムアン人＞はそれ以降、＜タイ人＞の属国支配下に入るようになった。そして、1804年、ようやく完全にビルマの影響が排除された。

この頃、＜タイ人＞の支配階級は、＜コンムアン人＞を属国人、二級市民とみなし、蔑視をこめて「ラオ」と呼んでいた (プーミサック 1976: 374)。この例に限らず、＜タイ人＞が他の民族を「ラオ」と呼ぶとき、そこには、その民族に対する蔑視が含まれていた。

それ故、＜コンムアン人＞は、「ラオ」という他称を嫌い始め、ついには自分たちが「ラオ」であることを否定しするようになり、新しい呼称として「コンムアン」を使うようになった。「コンムアン」とは、国の人という意味であり、＜コンムアン人＞が野蛮人と蔑視している山の人「コンドーイ (Khondoy)」とは異なることを示すために使われるようになったものである (プーミサック 1976: 395)。また、彼らの母語であったチェンマイ・ラオ語も、カムムアン語と称するようになった。これは、国の言葉という意味である。

このような歴史があるため、＜コンムアン人＞は、現在「ラオ」と呼ばれると不満を表す。ちなみに、＜コンムアン人＞が使用してきた文字は、チェンマイ・ラオ文字と呼ばれ、モン文字の系統の文字である (西田 1981)。この文字は、＜コンムアン人＞の＜タイ人＞と異なるアイデンティティのシンボルの一つとなっていると言われる (Keyes 1995: 141-142)。

### 5. 2. 3 東北タイのイサン人 (＜ラオ人＞)

東北タイには、現在、ラオ語を母語とする＜ラオ人＞ (我々のいうイサン人) が居住する。彼らは、現在のラオスのルアン普拉バーンを中心に栄えたラーンサーン王国の末裔の民族である。そして、現在は、ラオス及び東北タイに居住している。

彼らも、最初は民族名として「タイ (Tai)」と自称していた。当時の＜ラオ人＞のチャオ・ファー・グムは、1354年頃、ラーンサーン王国を建国した。ラーンサーン王国の第2代国王は、当時周辺諸国では正式な王号よりもサームセーン・タイ (Saamseen Tai)<sup>2</sup> という名前で知られていた。この俗名は、同王が1376年に行った王国内の調査にもとづきタイ人30万人の荘丁からなる強力な軍隊を編成し、周辺諸国に恐れられた存在であったことによる。この、サームセーン・タイ王という俗名は、当時の＜ラオ人＞はまだ「タイ (Tai)」と呼ばれていたことを示したものである (上東 1992: 28)。また、＜ラオ人＞も

---

<sup>2</sup> 30万人のタイ人の長の意。

<コンムアン人>と同じく、「ラオ」という呼称を、最高権力者あるいは偉大な人といった、社会的地位を示す人称代名詞に近い語として使用していた（林 1998: 86）。

ところで、<タイ人>の支配層は、「タイ (Thai)」と「ラオ」を明確に区分し、「ラオ」に対する蔑視の感情をもつものも多かった。特に、<タイ人>の国家が、<ラオ人>の国家であるラーンサーン王国が3つに分裂してできた王国の一つ、ヴィエンチャン王国を19世紀初頭に滅ぼし、<ラオ人>の住む地域を統治するようになったとき、<タイ人>の領主たちは、その住民を、蔑意をこめて「ラオ」と呼んだ。彼らは「腹黒ラオ (lao phung dam)」や「腹白ラオ (lao phung khao)」などという呼び方を使い、住民たちを「タイ (Thai)」として認めようとはしなかった。この場合も、「ラオ」という呼称には、民族的な蔑視感情が含まれていた。

<タイ人>と<ラオ人>は、同じタイ諸族であり、<タイ人>が<ラオ人>を支配するまでは、反目することはなかった。しかし、<タイ人>が<ラオ人>を支配し、蔑称として「ラオ」という呼称を使うことにより、「ラオ」と呼ばれたラオ人側にも、それに対する反発が生じた。これまで、自分たちの民族名でもあった「タイ (Tai)」を呼称として使う<タイ人>が自分たちに抱く蔑視感情に反発し、自分たちは「タイ (Tai)」ではないと思うようになったのである（プーミサック 1976: 394）。

こうして蓄積された<ラオ人>の記憶は、「タイ (Tai)」という語を<ラオ人>の記憶から遠ざける結果となり、最後には<ラオ人>がタイ諸族であることを否定し、もともと「ラオ」に誇りをもっていたことから、「ラオはラオだ」と考えるようになった。そのため、ラオス国内に住む<ラオ人>は、彼らがタイ諸族であると指摘されることに、現在でも不満を表明する（プーミサック 1976: 395）。同じく、現在の東北タイに住む<ラオ人>（我々のいうイサン人）も、自分たちは「ラオ」であり、「タイ (Tai)」ではないという意識をもっていた。これは、表5. 1に示すように、現在でも彼らの相当数が「ラオ」と自称することがあるということ、そして、中央タイの<タイ人>に対して<ラオ人>が抱く他者意識から、20～30年前までは、自分たちがタイの首都バンコクに行くことを、「タイ (Thai)」に行くと言っていたことから知ることができる（荘司 1996）。

表5. 1 「あなたは、自分をラオ人と呼ぶことがありますか？」に対する回答

はい	560	(23.6)
いいえ	1774	(74.7)
その他	41	(1.7)

ここで、<タイ人>にとっての「ラオ」とはどのような意味をもつ呼称なのかについて

整理しておこう<sup>3</sup>。

<タイ人>も<コンムアン人>も<ラオ人>も、もともとは、自らを「タイ (Tai)」と呼んでいた。しかし、<タイ人>がインドシナ半島中部で力を得て、<コンムアン人>や<ラオ人>の国家を18～19世紀初頭にかけて支配下に置いたとき、彼らは、「ラオ」という言葉を、<タイ人>以外のタイ諸族に対する蔑称として使用した。同様に、<タイ人>は、現ラオスのシプソンチュタイ (Sipsong Chu Tai) のプータイ人も「ラオ」と呼んでいた (プーミサック 1976: 135) ことから、<タイ人>が、特定の民族のみを「ラオ」と呼んだのではないことは明らかである。その一方で<タイ人>は、同じタイ諸族である<コンムアン人>や<ラオ人>を「タイ (Thai)」民族として認めようとはしなかった。これは、「タイ (Thai)」が「ラオ」に対して、社会的・文化的・政治的に優越性しているということを示唆するために、「タイ (Thai)」と「ラオ」という呼称を使い分けるようになったことを意味する。そして、民族的関係をつらぬくこうした価値観は、今日に至るまで根強く残っている (スクサムラン 1996)。

このような<タイ人>による、他のタイ諸族に対する蔑視に対し、前述のように、ランナータイ王国の末裔の<コンムアン人>は、「ラオ」という呼称を捨て去り、ラーンサーン王国の末裔の<ラオ人>は、「タイ (Tai)」という呼称を捨て去ったのである。

そこには、支配者となった<タイ人>が、他のタイ諸族を「ラオ」と呼んで蔑視するとともに、<タイ人>が「タイ (Thai)」という呼称の独占を図った構図が浮かんでくる。支配者が、民族名を独占する例は他にも見受けられる。例えば、ロシア人が「ロシア」という呼称の独占を図って「大ロシア」と自称し、ウクライナ人を「小ロシア」、ベラルーシ人を「白ロシア」と呼んだ (Chinn & Kaiser 1996) のも、同じ構図である。

#### 5. 2. 4 新たな「タイ人」の概念の構築とラオに対する蔑視

これまで述べたタイ系3民族の自称、他称の変遷は、19世紀末から20世紀にかけて、

---

<sup>3</sup> <タイ人>は、いつ頃から他の民族に対して「ラオ」という呼称を使用するようになったのであろうか。「ラオ」がタイの碑文の中で最初に現れるのは、1292年に作られたとされる、スコタイ王朝のラームカムヘン王の碑文である。その第4面には、「ラームカムヘン王はスコタイの王であるばかりでなく、天空下の国、マー、カオ、ラオおよびタイ、ウー川とメコン川のタイの王である。」という一文があり、「ラオ」という呼称が見える (吉川 1996: 26, Nagara & Griswold 1992: 241-290)。この、「ラオ」の呼称が最初に登場するスコタイ王朝のラームカムヘン王の碑文の内容については、碑文の贋作説が発表され (Vickery 1987)、それに対して、反論も行われ (Nagara & Griswold 1992: 805-821)、学界での論争が行われてきた。また、言語の系統から、スコタイ王朝を建国した民族が、タイ人であったか、ラオ人であったについても、学界で議論が続いている (吉川 1996: 8)。しかし、その後、他の碑文には、「ラオ」という呼称は現れない (Nagara & Griswold 1992)。ユール (Henry Yule) は、「ラオ」という呼称を初めて記録し、紹介したのは、16世紀のポルトガル人であるとしている (林 1998: 85 に引用)。また、18世紀には、トンブリ王朝のタークシン王は、1770年、ヴィエンチャン王と交換した書簡のなかで、「ラオ」という呼称を使っている (上東 1992: 64)。

新たな展開を示すことになる。タイ国民国家形成に伴い、新たな「タイ人」概念が成立したからである。ここでは、新たな「タイ人」の概念が成立した過程と、それでも消滅することのない、タイ人による「ラオ」に対する蔑視について考察する。

「ラオ」に対する「タイ」の社会的・文化的・政治的優越性を示唆するものとして、「タイ」と「ラオ」の使い分けを行うようになったことは既に述べた。例えば、1890年のシャム（現在のタイ）の人口は、推定で、全人口約1千万人中、シャム人（タイ人）は300万人以上、華僑は300万人、ラオ人は130万人とされている（Landon 1941: 37）ことから、タイ人とラオ人は別民族であると理解されていた。

しかし、前述のように、1893年に、フランスが、タイ王国に、その領土であったラオスを割譲させ、後にインドシナ植民地に組み込んだことにより、「タイ (Thai)」と「ラオ」を区別し続けることに重大な懸念が生じた。それは、メコン川をはさんで、ラオスの反対側になる東北タイには、フランスに割譲したラオスの「ラオ」と同じ民族である「ラオ」が多く居住していたからである。このような状況は、植民地拡張に意欲を燃やす西欧諸国に、干渉の口実を与えかねなかった（Keyes 1995: 144）。ほぼ同じ19世紀に、ロシア人の来航に危機感を抱いた徳川幕府が、それまで異民族として扱ってきたアイヌ人の日本人化を強制する同化政策を取ったのも同様の事例であろう（菊池 1994: 244-245）。

そこで、タイ政府は、1.7節でも述べたように、早急に単一民族による国民国家を形成するための政策を打ち出した。例えば、<ラオ人>をタイ国民として同化するために、「ラオ」のついた地名をタイ語風に改めた。それまで、東北タイには、ファムアング・ラオ・プアンやファムアング・ラオ・ガオといった、ラオという言葉を含む地方名が存在した。これは、中央タイの<タイ人>から見て、そこが異民族ラオ人の地方であったという認識を表している。これらの地域名を、モントン・ウドンやモントン・イサーンに変更した。これは、タイ政府が、「ラオ」に対する民族的差異を少なくとも行政的には意識的に排除しようとしたことを意味する（福井 1988: 53）。

また、1899年には、民族名としての「ラオ」の使用が法律で禁止され（林 1998: 88）、<ラオ人>は「イサン」と呼ばれることになった。

さらに、1930年代には、「ラッタニヨム」の第3号で、新たな「タイ人」の定義が示された。それは、<ラオ人>であろうとムスリム（<マレー人>）であろうとタイ国内に住んでいる者はタイ人である、というものである。この定義の主な目的は、その当時タイ経済に大きな力を得ていた華僑をタイ国民に同化することではあった。しかし、それは同時に、タイ国民の呼称を、<タイ人>、<ラオ人>といった民族の違いを問わない、新たな「タイ人」という呼称に統一させたことを意味していた（吉川 1996: 11）。華僑の中国語

の使用に対し、タイ政府は、1939年、中華学校と中国語新聞を弾圧し、1940年までに約200あった中華学校をすべて廃校にした。また、9紙あった中国語新聞も、「中原報」を残して、すべて廃刊させた（村嶋 1996: 228）。

このような領土に基づく国民の規定は、1868年のハンガリー王国の「民族法」にも見られる<sup>4</sup>（コバン 1976: 28）。この法は、すべてのハンガリー国民が、政治的には、その民族的帰属にかかわらず、一にして不可分の統一された国民であることを強調している（Kaprat 1993: 144）。また、ハンガリー王国の憲法は、ハンガリーのすべての市民が政治的には分割することのできないただひとつのハンガリー民族を構成しており、祖国のすべての市民はいかなる民族グループに属していようとハンガリー民族の一員なのであるとしている（コーン 1982: 219）。

そして、タイ国内で使われている民族固有の言語も、その位置付けを変更させられた。すなわち、タイにおいてはタイ語というただ一つの言語が使用されているということを示すため、東北タイの<ラオ人>が母語としているラオ語と、北タイの<コンムアン人>が母語としているカムムアン語は、タイ語の方言であるという位置付けに変更され、ラオ語はイサン語とよばれるようになった。民族固有の言語から、タイ語の方言へと格下げさせられたのである（山下 1999a: 80）。

以上のような、タイ政府による様々な政策によって、タイに居住していた様々な民族は、ただ一つの言語であるタイ語を共有する新しい「タイ人」へと導かれ、それによってタイに住む<ラオ人>の民族的文化的多様性は否定されていくこととなった。そのため、現在でも、学校教育で、<ラオ人>といった特定の民族の歴史や伝説を教えることは行われていない。そして、その代わりに、新たな「タイ人」がどのように国家を形成してきたかを、歴史教育で教えている。

最近のタイの中学校用歴史の教科書では、新たな「タイ人」の起源として、タイ北部、ビルマのシャン州、メコン川のルアン普拉バーン、ベトナムのトンキン地方を支配したというシンハナワット王子（Nakhaphan Singhanawat Nakhon）の伝説を登場させている（吉川 1996: 12）。これは、北タイのユアン人（<コンムアン人>）の歴史であり、タイ中央の<タイ人>の歴史ではない。このように、新たな「タイ人」の起源を説明するために、これまで、中央タイの<タイ人>が「ラオ」と蔑視していた民族の歴史を、新たな「タイ人」の歴史として援用し、「タイ人」の偉大な歴史を構築しようとする試みが行われている。これだけを見ると、<タイ人>が他の民族を蔑視するという関係は解消されたかに思われる。

---

<sup>4</sup> 「ハンガリーのすべての市民は... 単一の国民、すなわち単一不可分のマジャーール国民を形成し、国内の全市民は民族のいかによらず、これに属するものである」（コバン 1976: 28 に引用）。

しかし、中央タイの<タイ人>が住むバンコクにおける、東北タイの<ラオ人>に対する蔑視は、現在も依然として続いている。

#### 5. 2. 5 タイ人から新たな<タイ人>へ

「ラオ」とは、中央タイの<タイ人>が、他のタイ諸族を他者として措定し、自分たちが「タイ」という民族名を独占するために使った民族名である。そして、「ラオ」という呼称で呼ばれた民族は、中央タイのタイ人によって、民族間の階層関係を強要されたということができる。

これに対し、「ラオ」と呼ばれた民族のうち、2つの集団は、全く反対の対応をしてきた。ランナータイ王国の末裔である北タイのコンムアン人は、自分たちは「ラオ」ではなく「コンムアン」であると自己規定し、「ラオ」という呼称を棄てた。他方、ラーンサーン王国の末裔である東北タイのラオ人は、自分たちは「タイ」ではなく「ラオ」であると自己規定し、「タイ」という呼称を棄て、「ラオ」という呼称を現在まで保持している。

ところが、西欧諸国のアジア進出という外的要因により、「タイ」という民族名を独占するために作った「ラオ」という呼称を、逆に禁止すべき状況が生まれた。そこで、新たな「タイ人」という、民族の出自、宗教を問わない概念が考案された。そして、タイ国内における学校教育やマスメディアの力により、「ラオ」という呼称は、公式には使われなくなり、ラオ人としての民族的アイデンティティは希薄化していった。

タイ諸族が未だ分化していなかった初期状態の「タイ (Tai)」から、新たな「タイ人」への歴史的変化を概念的に示したのが、図5. 1である。ただし、この図はタイ諸族の中のタイ人、コンムアン、ラオ人のみに対象を限定して表現したものである。

ところで現在、中央タイのタイ人が自分たち以外のタイ人を蔑視してきたという状況が、さらに範囲を拡大して、タイとラオスの国民の間で発生している。

タイとラオスは、メコン川を国境として隣接している。そして、ラオスには、ラーンサーン王国の末裔であるラオ人が居住している。東北タイのラオ人も、同じく、ラーンサーン王国の末裔であるが、彼らは、国境を越えてラオスに渡ったとき、ラオ人ではなく「タイ国民」として振る舞い、「ラオス国民」を蔑視するのである(青柳 1996: 142, 林 1998: 87)。タイ国内では、タイ人から蔑視されてきた東北タイのラオ人が、ラオスでは、タイ国民としてラオス国民を蔑視する姿は、これまでラオ人がタイ人から国内で受けてきた蔑視の構図が、国境を越えた場所で、立場を変えて、再生産されていることを意味する。この根底に横たわるのは、民族の間に上下関係が存在するという意識である。

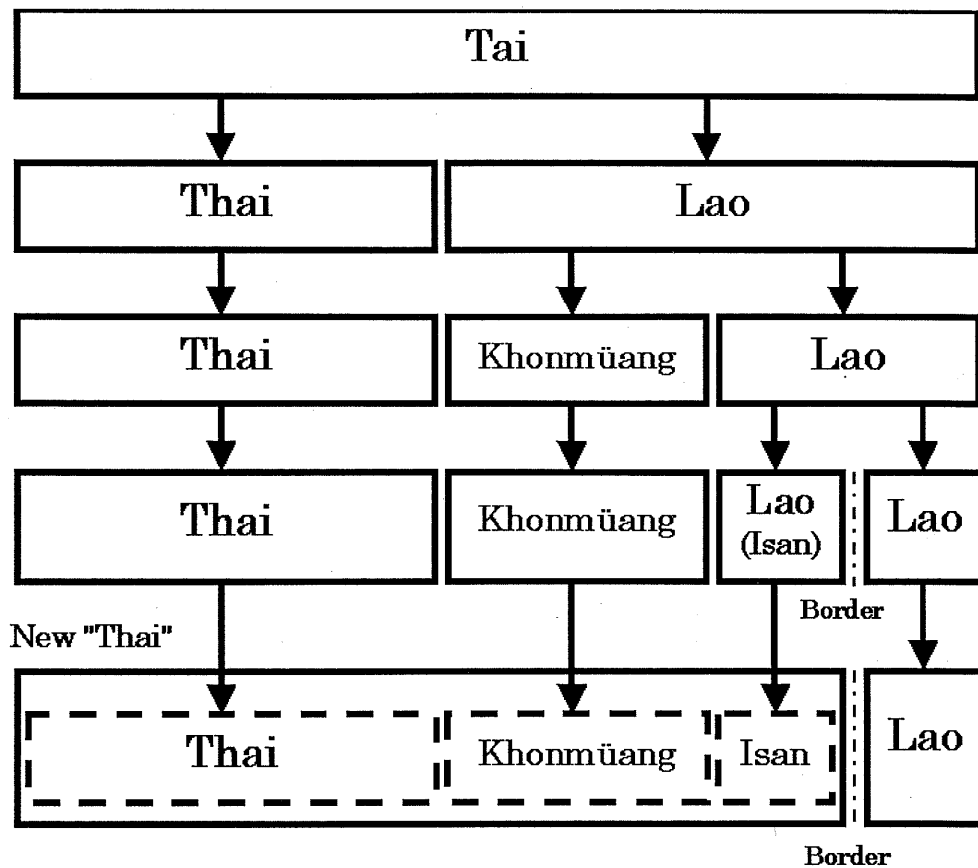


図5.1 タイ人から新たな「タイ人」へ

フランスのラオス植民地化により、ラーンサーン王国の末裔であるラオ人は、自分たちの意志に関わりなく、タイと、ラオスという2つの国家に分断されてしまった。これまで、タイとラオスの間の交流がほとんどなかったために問題は生じなかったが、ラオスの経済開放路線により、タイとラオスの間での人間の往来も頻繁になり、前述の問題が表面化しつつある。

### 5.3 東北タイにおける呼称

ここで、東北タイの住民が、どのような自称を用いているか、その実態を、2001年に実施した言語認識調査の結果を基に考察する。

#### 5.3.1 自らの呼称

「自分をタイ人と呼ぶことがあるか」、「自分をイサン人と呼ぶことがあるか」、「自分を

ラオ人と呼ぶことがあるか」、「自分をコラート人と呼ぶことがあるか」といった、自らの呼称に対する回答をまとめたのが、表5. 2である。なお、表の中の数値は、各設問の回答者数に対する百分比である。また、コラート人については、東北タイ全体の回答者数で補正を行っている。

表5. 2 東北タイにおける自称

タイ人	イサン人	ラオ人	コラート人
92.6	81.7	23.6	36.8

自らの呼称について、全体では、タイ人という呼称が約9割、イサン人という呼称が約8割、コラート人という呼称が約4割、ラオ人という呼称が約2割使われている。表5. 2から、東北タイでは人々が平均2つ以上の呼称を使用していることは明らかである。ただし、設問は、「自分を～と呼ぶことがあるか」という形なので、当然、場面や状況によって呼び方が異なることはありうる。また、場合によっては序列を想定する必要があるだろう。自称が、すなわち、自己規定であるわけではないが、このような多重の自己規定、そしておそらくは、その根底にある帰属意識の多重性を無視することはできない。

### 5. 3. 2 自称間の序列

先に、自称間の序列を示唆したが、ここで若干検討してみる。

今、Xを自称する人のうち、Yをも自称する人の比率を考える。次に、Yを自称する人のうち、Xをも自称する人の比率を考える。前者を(X, Y)、後者を(Y, X)とすると、(X, Y)と(Y, X)を比較すれば、自称間の序列を明らかにすることができる。

今仮に、(X, Y)が(Y, X)よりも明らかに小さければ、XはYよりも明らかに広範囲に適用される自称である。逆に、(X, Y)が(Y, X)よりも明らかに大きければ、YはXよりも明らかに広範囲に適用される自称である。

例えば、フランス人はヨーロッパ人であるが、ヨーロッパ人はフランス人であるとは限らない。ヨーロッパ人を自称する人のうちフランス人をも自称する人の比率(ヨーロッパ, フランス)と、フランス人を自称しヨーロッパ人をも自称する人の比率(フランス, ヨーロッパ)を比べれば、明らかに、前者の方が小さいはずである。

もちろんこのことは、帰属意識の強さを意味するものではない。比率(X, Y)と比率(Y, X)とによって示される自称間の序列は、帰属意識の広がりやの序列を示すものに過ぎない。

そこで、タイ人、イサン人、コラート人、ラオ人を自称する人について、他の自称をど



の程度使うかを、回答より算出した。その結果を示したのが、表5. 3である。

表5. 3 それぞれの自称を使用する回答者

	タイ人	イサン人	コラート人	ラオ人	それぞれの自称を使用する回答者総数
タイ人	— (82.0)	1804 (82.0)	817 (37.2)	506 (23.0)	2199
イサン人	1804 (93.0)	—	664 (34.2)	532 (27.4)	1940
コラート人	817 (93.5)	664 (76.0)	—	149 (17.0)	874
ラオ人	506 (90.4)	532 (95.0)	149 (26.6)	—	560

括弧の中は、それぞれの自称を使用する回答者総数に対する比率

以下、タイ人、イサン人、コラート人、ラオ人の自称を比較する。

- (1) (タイ人, イサン人) = 82.0 (イサン人, タイ人) = 93.0  
(タイ人, イサン人) < (イサン人, タイ人) → イサン人 < タイ人
- (2) (タイ人, コラート人) = 37.2 (コラート人, タイ人) = 93.5  
(タイ人, コラート人) < (コラート人, タイ人) → コラート人 < タイ人
- (3) (タイ人, ラオ人) = 23.0 (ラオ人, タイ人) = 90.4  
(タイ人, ラオ人) < (ラオ人, タイ人) → ラオ人 < タイ人
- (4) (イサン人, コラート人) = 34.2 (コラート人, イサン人) = 76.0  
(イサン人, コラート人) < (コラート人, イサン人) → コラート人 < イサン人
- (5) (イサン人, ラオ人) = 27.4 (ラオ人, イサン人) = 95.0  
(イサン人, ラオ人) < (ラオ人, イサン人) → ラオ人 < イサン人
- (6) (コラート人, ラオ人) = 17.0 (ラオ人, コラート人) = 26.6  
(コラート人, ラオ人) < (ラオ人, コラート人) → ラオ人 < コラート人

大小だけを比較すると、(1)～(6)により、タイ人 > イサン人 > コラート人 > ラオ人という序列を考えることができる。

この中で、タイ人という自称は他の自称に比べて圧倒的に強く、イサン人、コラート人、ラオ人を自称する場合でも、95%がタイ人を自称することは特徴的である。

タイ人という自称は、タイ国民であるということに基づく帰属意識を表していると考えられる。他方、ラオ人という自称は、ラオ人という民族に基づく帰属意識を表している。タイ人とラオ人という自称については、地域性はない。しかしながら、イサン人、コラート人という自称が、イサン地方、コラート地方という地域に基づく帰属意識を表している

のか、それとも民族に基づく帰属意識を表しているのか、明確に判断することは困難である。これは、設問が本来孕んでいる問題といえる。

### 5. 3. 3 属性ごとの自称の検討

以下、補足的に、地域、家庭言語、年齢別に検討を試みる。

まず、地域別の自称について検討する。表5. 4は、コーンケン地域とナコンラチャシマ地域における住民の自称を比較したものである。

表5. 4 地域別の自称の比較

	タイ人	イサン人	ラオ人	コラート人
コーンケン地域	93.0	89.5	29.2	0.0
ナコンラチャシマ地域	92.2	74.9	18.7	81.5

注) 値は地域別全被験者に対する百分比

この表によれば、タイ人という呼称については地域による差がほとんどなく、イサン人、ラオ人という呼称についてはコーンケン地域の方が使用率が高く、コラート人という呼称についてはナコンラチャシマ地域の方が使用率が高い。

次に、家庭言語別に見ると、表5. 5のようになる。これは、家庭言語別に住民の自称を比較したものである。ただし、家庭言語がラオ語のみの被験者は37名と極めて少ないので、除外した。

表5. 5 家庭言語別の自称の比較

	タイ人	イサン人	ラオ人	コラート人
家庭言語タイ語のみ	90.8	60.3	16.4	43.9
家庭言語イサン語のみ	93.1	94.1	28.0	6.9
家庭言語コラート語のみ	94.4	77.8	10.1	92.1

注) 値は家庭言語別全被験者に対する百分比

タイ人という呼称は家庭言語に関わりなく約90%の高率で使用される。イサン人、ラオ人という呼称は家庭言語がイサン語のみの被験者が多く使用し、コラート人という呼称は家庭言語がコラート語のみの被験者が多く使用する。

タイ語を除き、家庭言語と自称との間に強い相関があると考えられる。

最後に、年齢別に検討する。表5. 6は、年齢別に住民の自称を比較したものである。

表5.6 年齢別の自称の比較

	タイ人	イサン人	ラオ人	コラート人
24歳以下	90.5	74.6	24.1	45.8
25～44歳	94.5	85.3	22.4	35.2
45歳以上	93.7	88.9	24.2	24.0

注) 値は年齢別全被験者に対する百分比

タイ人という呼称は年齢に関わりなく約90%の高率で使用され、イサン人という呼称は高年層ほど多くの被験者が使用する。これは、イサン人が社会における非主流集団であることから説明できる。

しかし、コラート人という呼称について、若年層ほど使用頻度が高い理由については明らかでない。

### 5.3.4 小括

東北タイでは人々が複数の呼称を使用している。そして、東北タイ全体では、タイ人という呼称が約9割、イサン人という呼称が約8割、コラート人という呼称が約4割、ラオ人という呼称が約2割使われている。また、自称間の序列を数字で比較すると、タイ人>イサン人>コラート人>ラオ人の順となる。

自称の多重使用という観点からすれば、表5.3に示す数字からして、タイ人、イサン人という自称と、コラート人、ラオ人という自称の2つの集団に区分できる。

タイ人という自称とイサン人という自称は、類似した性質を持つ。タイ人という自称は、他の自称に比べ、最も多く使用され、かつ、表5.3で示したように、最も広く使われている。地域、家庭言語、年齢に関わりなく広く使われているのが特徴である。また、イサン人という自称は、地域、年齢、家庭言語によらず、東北タイの約8割の住民が広範囲に使用している。

これに対して、コラート人、ラオ人という自称は、タイ人、イサン人という自称に対して、東北タイで大多数が使用しているわけではないという特徴がある。コラート人という自称は、約4割の住民が使用し、ラオ人という自称は、約2割の住民が使用する。そして、コラート人という自称を使用する者と、ラオ人という自称を使用する者の重なりはきわめて小さい。また、コラート人、ラオ人という自称を使用する者は、地域的な偏りがあるという特徴がある。ラオ人という自称はコーンケン地域、コラート人という自称はナコンラチャシマ地域で多く使用されている。

自称を基に考えると、東北タイにおいては、タイ人ーイサン人ーコラート人ーラオ人という序列を観察することができる。

タイ人がこのような序列をイメージすることはおそらくないであろう。あえて言えば、これは、イサン人やコラート人、あるいは、自分をラオ人と呼ぶ人々から見た、国家—地方—地域—民族という序列ということもできよう。もちろん、これが帰属意識の強さの序列でないことは、既に断ったとおりである。また、タイ人とイサン人という自称を使用する者は相当程度重複するのに対し、コラート人とラオ人という自称を使用する者の重なりはきわめて小さい。

このように考えれば、東北タイにおける国家・地域・民族への帰属意識の関係は、図式的に、図5. 2のように示すことができよう。

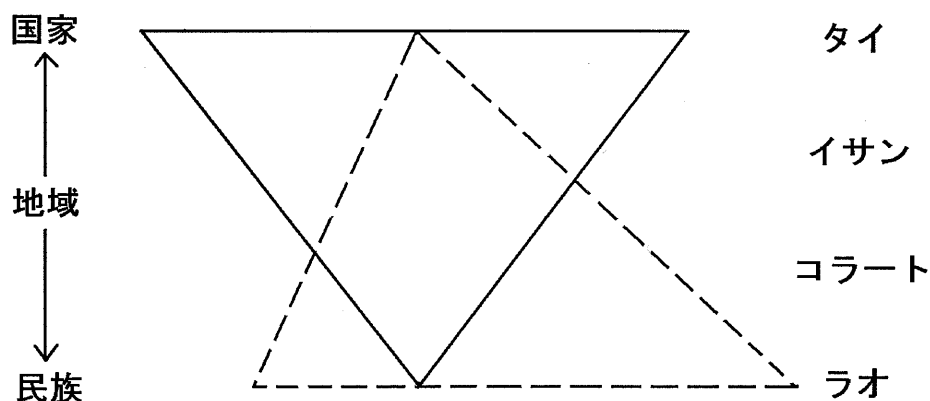


図5. 2 東北タイにおける国家・地域・民族への帰属意識の関係

この図において、タイへの帰属意識は、国家への帰属意識に対応している。国家←地域→民族という序列の中で、国家への帰属意識は最上位に位置する。図5. 2上の実線で描いた逆三角形は、国家への帰属意識を表している。次に、イサンへの帰属意識は、地域への帰属意識という要素が強く、序列の中間に位置する。しかし、イサンへの帰属意識には、民族への帰属意識という面が存在することも否定できない。また、ラオという帰属意識は、民族への帰属意識という要素が強く、序列の最下位に位置する。図5. 2上の破線で描いた三角形は、民族への帰属意識を表している。

問題は、コラートへの帰属意識である。これは、次章でも述べるように、コラート地方という地域への帰属意識と考えることができると同時に、コラート人という民族への帰属意識と考えることもできる。それ故、コラートの位置を図5. 2上で的確に指示することは困難である。

このように、タイ人、イサン人、ラオ人、コラート人という呼称が、地域に基づく帰属意識を表すのか、民族集団に基づく帰属意識を表すのかは、今回の調査でははっきりと断定できない。ラオ人という自称は、地域への帰属意識というよりは、民族集団への帰属意

識という側面が強いかもしれないが、東北タイの住民が、イサン人、コラート人と自称するとき、それが、地域への帰属意識であるのか、民族集団への帰属意識であるのかは断定できない。

#### 5. 4 東北タイにおける帰属意識

今回の調査では、帰属意識を直接問う設問を用意した。東北タイの住民の帰属意識の実態を、調査結果を基に考察する。

20世紀に入り、タイ政府は、東北タイのラオ人という民族についての帰属意識を否定し、中央タイのタイ人に同化させることに力を注いできた。東北タイは、イサン地方と呼ばれるようになり、ラオ人という呼称に代わって、イサン人という呼称が導入され、民族の帰属意識としてのラオの脱色化が進行した（林 1998: 88）。それでは、実態として、東北タイにおいて、ラオ人という民族についての帰属意識に代わって、イサン人という地域性のより強い帰属意識が定着してきているのであろうか。

このような帰属意識の変化を確認するために、今回の調査結果を検討してみよう。

今回の調査以前にも、個人の抱く国家への帰属意識を比較する調査が行われてきたことはある。例えば、ティタレンコ（Larissa Titarenko）は、ベラルーシ（Belarus）の若者がどのような帰属意識を抱いているかを調査し、ベラルーシという国家に42%、旧ソ連に33%という結果を示している（Titarenko 1999: 176）。ただし、この調査では複数回答を許しておらず、これは、ブレードーとエクストラの議論と同じ立場であると言えよう。

また、マクローン（David McCrone）は、スコットランド人の国家と民族への帰属意識を調査したデータを示しており、イギリスではなくスコットランドに39%、イギリスよりもスコットランドに30%という結果を示している（McCrone 1992: 90）が、この調査でも、複数回答は許されていない。

エストラッヒ（Joan Estruch）は、スペインのカタロニア地方で、国家への帰属意識と、民族への帰属意識を比較するために、「カタロニアに住むカタロニア人ですか？」「スペインに住むカタロニア人ですか？」「カタロニアに住むスペイン人ですか？」「スペインに住むスペイン人ですか？」という設問を設け、調査を行った。そしてその結果、カタロニア人の約80%が、カタロニアに住むカタロニア人であると回答していることを明らかにした（Estruch 1991: 138）。この調査でも、複数回答は許されていないが、このような設問群は、複数の帰属意識の序列を明らかにする場合には有効な設問群であると考えられる。

それに対し、リンズ（Juan J. Linz）は、スペイン国民としての帰属意識と、エウスカディ（Euskadi）、カタロニア（Catalonia）、ガリシア（Galicia）という地域への帰属意識、そ

して、バスク人 (Basque)、カタロニア人 (Catalan)、ガリシア人 (Galician) という民族への帰属意識とを比較する調査を行った。それによると、例えばバスクでは、生活の中や職場において、スペイン国民としての帰属意識よりもバスク人としての帰属意識をより強く抱くと答えた住民が約80%、スペイン国民としての帰属意識よりもエウスカディという地域に対する帰属意識をより強く抱くと答えた住民も、約75%存在する (Linz 1985: 209)。この調査では複数回答を許しており、これは、この種の調査としては特筆すべきことである。

#### 5. 4. 1 帰属意識の調査結果

今回の調査では、上述した帰属意識を比較する調査を参考に、東北タイの住民が多重の帰属意識を抱くことを想定し、「タイ人というよりはイサン人だと思うか」、「ラオ人というよりはタイ人だと思うか」、「イサン人というよりはラオ人だと思うか」、という設問を設けた。これらについて、順に検討を加える。

第1に、「タイ人というよりはイサン人だと思うか」という設問に対する回答について検討する。全体では、タイ人というよりはイサン人だと思う比率は、50.9%であった。東北タイの住民にとって、タイ人としての帰属意識と、イサン人としての帰属意識は、ほぼ拮抗しているという結果である。

さらに、補足的に、地域、家庭言語、年齢別に、タイ人への帰属意識とイサン人への帰属意識を比較してみる。

表5.7に、地域別に、タイ人への帰属意識とイサン人への帰属意識を比較した結果を示す。

表5.7 地域別タイ人・イサン人の帰属意識の比較

	タイ人というよりはイサン人だと思う
コーンケン地域	64.3
ナコンラチャシマ地域	39.3

コーンケン地域とナコンラチャシマ地域を比較したとき、コーンケン地域の方が、タイ人というよりはイサン人だと思う比率が高い。従って、コーンケン地域ではイサン人→タイ人が観察され、これに対して、ナコンラチャシマ地域ではタイ人→イサン人という序列が観察される。

コーンケン地域では、イサン語を家庭言語とする者が多く居住しているため、タイ人への帰属意識より、イサン人への帰属意識がより強い。他方、ナコンラチャシマ地域では、イサン人への帰属意識よりも、タイ人への帰属意識がより強い。

同様に、家庭言語別に、タイ人への帰属意識とイサン人への帰属意識を比較した結果を表5. 8に示す。

**表5. 8 家庭言語別タイ人・イサン人の帰属意識の比較**

	タイ人というよりはイサン人だと思う
タイ語のみ家庭言語	29.6
イサン語のみ家庭言語	66.9
コラート語のみ家庭言語	46.1

イサン語のみを家庭言語とする者の場合、タイ人というよりはイサン人だと思う比率が約7割とかなり高い。これを前表と照合すると、コーンケン地域にはイサン語を家庭言語とする者が多く居住しているため、タイ人というよりはイサン人だと思う比率が高くなると考えられる。

さらに、年齢別でタイ人への帰属意識とイサン人への帰属意識を比較した結果を表5. 9に示す。

**表5. 9 年齢別タイ人・イサン人の帰属意識の比較**

	タイ人というよりはイサン人だと思う
24歳以下	40.0
25～44歳	51.4
45歳以上	67.9

この表は、若年層ほど、タイ人というよりはイサン人だと思う比率が低くなっていることを示している。

第2に、「ラオ人というよりはタイ人だと思うか」という設問に対する回答について検討する。全体では、ラオ人というよりはタイ人だと思う比率は、85.3%に達する。東北タイの住民にとって、ラオ人としての帰属意識よりも、タイ人としての帰属意識の方が、序列が上であるという結果である。

さらに、地域、家庭言語、年齢別に、ラオ人への帰属意識とタイ人への帰属意識を比較してみる。地域別で見ると、コーンケン地域でもナコンラチャシマ地域でも、ほとんど差はない。また、家庭言語でも、差は認められない。唯一、年齢別の場合、高年層の方が、ラオ人というよりはタイ人だと思う比率が高くなる。その結果を表5. 10に示す。

**表5. 10 年齢別ラオ人・タイ人の帰属意識の比較**

	ラオ人というよりはタイ人だと思う
24歳以下	78.5
25～44歳	89.6
45歳以上	91.1

このように、東北タイにおいては、ラオ人への帰属意識より、タイ人への帰属意識がはるかに強く、また、その傾向は、高年層ほど高くなる。その理由は不明である。

第3に、「イサン人というよりはラオ人だと思うか」という設問に対する回答について検討する。全体では、イサン人というよりはラオ人だと思う比率は、10.3%にしか過ぎなかった。これは、東北タイの住民にとって、イサン人としての帰属意識よりも、ラオ人としての帰属意識の方が、序列のはるかに下に位置するという結果である。

そして、先程と同様、地域、家庭言語、年齢別に、ラオ人への帰属意識とタイ人への帰属意識を比較してみると、地域別で見ても、家庭言語で見ても、年齢別で見ても、ほとんど差が認められない。

#### 5.4.2 小括

調査結果全体では、タイ人への帰属意識、イサン人への帰属意識、ラオ人への帰属意識を比較した場合、タイ人としての帰属意識とイサン人としての帰属意識はほぼ拮抗しており、ラオ人への帰属意識よりタイ人への帰属意識がより強く、ラオ人としての帰属意識よりもイサン人としての帰属意識がより強い。換言すると、東北タイにおいては、ラオという民族に基づく帰属意識よりも、タイ人という国家に基づく帰属意識や、イサン人という地域に基づく帰属意識の方が強い。

これを図式化すると、タイ人、イサン人への帰属意識が1つの集団を構成し、ラオ人への帰属意識がその下に存在するという構図が浮かんでくる。すなわち、民族に対する帰属意識よりも、国家、地域に対する帰属意識が強いということである。これは、先に示した図5.2と矛盾しない。

また、地域で比較した場合、コーンケン地域とナコンラチャシマ地域とで大きく異なるのは、タイ人というよりイサン人だと思う者がコーンケン地域で多いことである。これと、イサン語のみを家庭言語とする者の場合、タイ人というよりはイサン人だと思う比率が高いということから、コーンケン地域にはイサン語を家庭言語とする者が多く居住しており、それ故、タイ人というよりはイサン人だと思う比率が高くなっていると考えられる。

年齢別で比較すると、ラオ人というよりはタイ人だと思う、タイ人というよりはイサン人だと思うと答えた者が、高年齢ほど多くなっている。断定はできないが、ラオ人への帰属意識は、タイ政府の国民形成政策の影響が高年齢ほど強かったため、高年層ほどラオ人というよりはタイ人だと思うと答えた者が多く、同時に、義務教育によるタイ語の普及の影響が若年齢ほど強いため、高年層ほどタイ人というよりはイサン人だと思うと答えた者が多いと考えられる。



コラートに対する帰属意識については、6章で詳しく検討する。

## 5. 5 言語紛争と民族紛争の不在

本節では、東北タイと、帰属意識に基づいた紛争の関係について論ずる。

言語・民族集団という観点からした場合、タイのイサン地方については、

- (1) 相当数の言語人口をもつ非主流言語集団が居住する。
- (2) 国境によって言語集団の居住地が分断されている。
- (3) 国境の向こう側では主流言語集団である。

という3つの条件が妥当する。

世界には、上の3つの条件を満たす集団が多く存在する。そして、民族集団が主流集団ないしは国家に対して、民族的言語的帰属意識に基づく政治的要求を掲げた運動を起こすことは珍しくない。タイ南部のマレー人地域 (Thomas 1989: 22-29) はその一例である<sup>5</sup>。

このように、上記の3条件は、民族的地域的紛争・運動の発生ときわめて密接な関係があると考えられる。換言すれば、民族的地域的紛争・運動において、非主流、非支配的言語 (集団) の存在は、非常に重要な要因である。

ところが、イサン地方の場合、上の3条件をすべて満たすにもかかわらず、タイ国家あるいはタイ語集団に対して、民族的言語的帰属意識をもとにした政治的要求を掲げた運動はほとんど発生していない。もちろん、過去、イサン地方において、地域主義の発現と見なすべき地方反乱や運動が全くなかったわけではない。

イサン地方で、20世紀初めに発生したプーミーブンの反乱については、5.1節で詳述したが、これは、イサン人のタイ人とは異なる帰属意識の発現を示すものである。

確かに、プーミーブンの反乱は、イサン分離運動やイサン・ナショナリズムの発現と見ることができよう。上述の3つの基準は、ここでも妥当する。しかしながら、1924年から1959年までの反乱の規模は、反乱という名に値するほど大規模ではなく、騒動と呼ぶ程度であったようである (Rogers & Soongswang 1996: 211)。そして、暴力的であれ、非暴力的であれ、1960年代以降、イサン地方においては、地域や民族に基づいた紛争は発生していない。

タイ国内においては、タイ南部のマレーシアと国境を接する県に居住するムスリムのマ

---

<sup>5</sup> オランダ語地域であるベルギーのフランドル (Flanders)、フランス語地域であるスイスのジュラ (Jura)、アルザス語 (Alsatian) 地域であるフランスのアルザス (Alsace) などは、民族的地域的要求を掲げた運動の発生地域である (梶田 1989: 164)。なお、この「アルザス語」については、今日では、アルザス語 (Vassberg 1994: 498 など) と呼ばれることも多いが、ドイツ語の方言という言い方 (田中 1981: 123-124, ウージェーヌ 1994: 9 など) も使われる。

レー人が、1960年代後半から武力を用いた激しい分離運動を展開してきた (Tugby & Tugby 1989: 85-88)。彼らは、国境の向こう側のマレーシアのマレー人と民族、言語、宗教を共有しており、その意味では、地域や民族に基づいた紛争の一例である。また、タイ北部のビルマ、中国と国境を接する県の山岳部に居住するモン人が、1967年から1968年にかけて、民族的帰属意識に基づく広範な反乱を起こした (Tapp 1989: 35-37)。彼らもまた、国境の向こう側のビルマのモン人と民族、言語、宗教を共有しており、マレー人の場合と同様、地域や民族に基づいた紛争の一例である。

このように、その条件が十分にあるにもかかわらず、しかも1000万人以上の人口を擁するにもかかわらず、イサン地方では、タイの他の地域とは異なり、地域的民族的帰属意識、特に言語的帰属意識に基づいた政治的主張、運動、紛争が生まれなかった。なぜそうであったかは、民族紛争が頻発する今日の世界において、十分検討に値する問題である。

筆者は、イサン地方で、地域的民族的帰属意識、特に言語的帰属意識に基づいた政治的主張や運動がなぜ発展しなかったかについて、いくつかの要因があると考えた。それは、

- (1) イサン人にとっては、タイ国民という意識が非常に強いこと、タイ人と異なるラオ人という意識よりも、タイ国民としてのイサン人という意識が強いこと
- (2) 上座部仏教という宗教を共有すること
- (3) 1960年代以降、地域主義運動が共産主義運動とみなされる危険があったこと

などである。この背景には、イサン地方におけるタイ政府の国民形成政策、民族政策の成功、具体的には、強力なタイ語教育、ラオ文字の使用に対する圧力があつた。また、開発政策も実施された結果、イサン人の民族的言語的帰属意識、すなわち、自分たちは、タイ語と異なるラオ語あるいはイサン語を話す、タイ人とは別個のラオ人あるいはイサン人であるという意識が希薄化されたことが、紛争の生まれなかった最大の要因であると考えた (山下 1996)。

以上述べたように、非支配的集団における独自の言語が、いわゆる民族紛争の重要な要因、もしくは、運動の象徴となることは否定できない。独自の言語は、多くの場合、民族の独自性を示す象徴として機能するからである。しかし、東北タイにおいては、民族紛争が発生しうる条件が満たされていると考えられるにもかかわらず、イサン人が言語や民族に基づいた運動や紛争を展開したとは到底言えない。タイ政府の経済開発政策、ラオスに対する比較的優位等も無視することはできないが、この問題を理解する鍵の一つは、前述のようにイサン人の民族意識、特に言語意識にあるのではないだろうか。

一般には、言語や民族に基づく紛争の前提になるような集団的アイデンティティが欠如しているために、紛争が発生しない地域であったと思われがちである。しかし、東北タイ

において発生したプーミーブンの反乱では、ラオ人の民族的帰属意識の要素も働いており、この地域において、言語や民族に基づく集団的アイデンティティが欠如していたとは言い難い。東北タイにおいて、住民が、イサン人という自称を約8割、コラート人という自称を約4割、ラオ人という自称を約2割使うというのも、そのひとつの証拠であろう。

東北タイは、多言語使用の地域であり、言語や民族に基づく集団的アイデンティティも複数存在する。しかも、それらは互いに重なり合っている。そのことが、言語、民族といった集団的アイデンティティが政治化しなかった一つの要因であると考えられる。

この多言語使用や多重の帰属意識が、紛争、特に紛争の不在とどのように関わるかは、今後の検討課題である。

## 5. 6 呼称と帰属意識による階層化

本章では、東北タイの人々が、複数の自称を使用し、複数の帰属意識を保持していることを明らかにした。このような状況の下でも、4. 2. 2で論じたのと同様の序列を観察することができる。

まず第1に、自称を使用する絶対数で求めた序列では、タイ人という呼称が約9割、イサン人という呼称が約8割、コラート人という呼称が約4割、ラオ人という呼称が約2割であることから、タイ人ーイサン人ーコラート人ーラオ人の順になる。

第2に、自称間の関係をさらに検討すると、タイ人という自称は、イサン人という自称よりもわずかに上位の序列に位置し、コラート人という自称、ラオ人という自称よりもかなり上位の序列に位置する。イサン人という自称は、コラート人という自称よりも上位の序列に位置し、ラオ人という自称よりも、かなり上位の序列に位置する。コラート人という自称は、ラオ人という自称よりも、上位の序列に位置する。

このことから、東北タイにおいて、自称間において、タイ人ーイサン人ーコラート人ーラオ人という序列を観察することができる。もちろん、これは帰属意識の強さの序列を必ずしも示すものではない。

第3に、帰属意識については、タイ人としての帰属意識とイサン人としての帰属意識が並存し、その下に、ラオ人としての帰属意識が位置する。コラート人としての帰属意識は、コーンケン地域においては無視でき、タイ人ーイサン人ーラオ人という序列になる。ナコンラチャシマ地域においては、コラート人としての帰属意識は、イサン人としての帰属意識よりも下に位置し、タイ人ーイサン人ーコラート人ーラオ人という序列になる。

以上のように、様々な基準を用いて階層を考えることができるが、タイ語ーイサン語ーコラート語ーラオ語という言語認識による階層、タイ人ーイサン人ーコラート人ーラオ人という帰属意識による階層を比較するとき、タイ語とタイ人、イサン語とイサン人、コラート語とコラート人、ラオ語とラオ人がそれぞれ、対応しながら階層を構成していると考

えることができる。また、この階層構造は、はっきりと独立した層からなる階層ではなく、複数の層が互いに重なり合った階層であることは、すでに述べた通りである。

図5. 2では、自称の階層構造を示したが、自称と言語能力との間で、それぞれ対応した階層化が観察できないであろうか。

そこで、自称と十分言語能力の関係を求め、表5. 11に示す。なお、百分比は、各行に対する値である。

表5. 11 十分言語能力と自称の関係

	タイ人を自称	イサン人を自称	ラオ人を自称	コラート人を自称	N
タイ語十分言語能力	1853 (93.1)	1612 (81.0)	451 (22.7)	714 (35.9)	1989
イサン語十分言語能力	1205 (92.9)	1187 (91.5)	397 (30.6)	223 (17.2)	1297
ラオ語十分言語能力	197 (87.9)	201 (89.7)	96 (42.9)	60 (26.8)	224
コラート語十分言語能力	619 (93.6)	512 (77.5)	102 (15.4)	566 (85.6)	661
N	2199	1940	560	874	

この表に示されたデータは、どの言語の十分言語能力を持った者でも、約9割の者がタイ人を自称することを示す。また、どの言語の十分言語能力を持った者でも、8～9割の者がイサン人を自称する。自称が必ずしも帰属意識を表すわけではないが、自称が帰属意識を反映するものとするならば、タイ人への帰属意識、およびイサン人としての帰属意識が、東北タイ全体で強いことの表れである。

タイ語の十分言語能力を持つ者のうち約9割がタイ人を自称する。イサン語の十分言語能力を持つ者のうち約9割がイサン人を自称する。コラート語の十分言語能力を持つ者のうち約9割がコラート人を自称する。ラオ語の十分言語能力を持つ者のうち約4割がラオ人を自称する。

これらのことから、十分言語能力と自称とが対応しているといえる。言語の階層構造と自称の階層構造とが対応しているともいえるであろう。

ただし、ラオ人を自称する者の比率は、ラオ語だけでなく、他のどの言語の十分言語能力を持った者でも、それほど高くない。これは、ラオ人という民族集団に基づく帰属意識が、東北タイの住民の中で、一定程度にしか保持されていないことを意味している。

また、階層の各層は、完全に独立しているわけではなく、相当程度重なっている。これは、住民が、多重の帰属意識を保持しているからである。

例えば、階層の境界は、タイ語－イサン語、タイ人－イサン人という階層間、及び、イサン語－コラート語、イサン人－コラート人という階層間において重なり合っている。住民が、タイ人という呼称も使えばイサン人という呼称も使い、タイ語も使えばイサン語も

使う、あるいは、イサン人という呼称も使えばコラート人という呼称も使い、イサン語を使えばコラート語も使うという状況が存在する。

## 第6章

### コラート人とコラート語

## 第6章 コラート人とコラート語

ある民族集団と、彼らの母語の問題を議論するとき、対象とされる人々自身の呼称や言語に関する認識の問題は決定的に重要である。それにもかかわらず、従来の研究においては、ナコンラチャシマ県を中心に東北タイ南西部に居住するコラート人に対して、呼称や言語認識についての調査が実施されてこなかった。

本章では、東北タイの内部的多様性を考える一つの手がかりとして、このコラート人に焦点を当て、コラート人と、その言語であるコラート語について論じる。

まず、コラート語に関する先行研究を概観する。次に、コラート語の問題を、調査結果に基づき検討する。そして、コラート語の言語境界について論じ、最後に、コラート人の抱く帰属意識について論ずる。

### 6.1 コラート人とコラート語についての先行研究

コラート人という民族集団の存在の有無、起源、および、コラート語という言語の位置付けについては諸説存在する。

ナコンラチャシマ県付近に、コラート人という集団が存在することは、タムバイア (Tambiah 1968: 88) や、ウィヨー等 (Viyouth et al 1992 :5-6) が主張してきた。彼らは、東北タイの中に確実に存在する。それにもかかわらず、コラート人の存在はあまり注目を浴びることがなかった。

現在のタイにおいて、研究者はコラート人をどのように位置付けているのであろうか。コラート人を、現在のタイ諸族の中に明確に位置付けたのは、タムバイアである。彼は、タイとラオスの2ヶ国に居住するタイ諸族であるタイ人 (Thai) とラオ人 (Lao) を、言語、場所、文化の差異により

- (1) 中央タイ人：チャオプラヤ川周辺とバンコクの北部
- (2) タイ (またはラオ)・ユアン人：チェンマイ周辺の北部地域
- (3) タイ・コラート人：ナコンラチャシマ県<sup>1</sup>の地域
- (4) ラオ人 (タイ人)：東北タイとラオス王国

という4つの地域集団に分類しており (Tambiah 1968: 88)、この中の第3番目に、コラート人の存在を挙げている。

また、コーンケン大学のウィヨー他は、東北タイに分布する民族を、川の流域によって

---

<sup>1</sup> 原文では、Korat Province となっているが、現在、コラート県は存在しない。

3つに分類する手法を採用している (Viyouth et al 1992 :5-6)。それは、5. 1 節で述べたように、

- (1) イサン北部 (ソクラーン (Songkhram) 川流域) : タイ・イサン人あるいはラオス人 (Laos)、ヨー人 (Yor)、ソー人 (So)、カレン人 (Kaloeng) といった少数民族
- (2) イサン中部 (チー (Chi) 川流域) : ラオス人
- (3) イサン南部 (ムーン (Moon) 川流域) : 左岸にラオス人とクメール人 (Khmer) 人、右岸にラオス人、タイ・コラート人 (Thai-Korat)、クメール人、スワイ人 (Suai)

という分類である。この中で、イサン南部、ムーン川右岸 (南岸) に居住する民族として、タイ・コラート人を挙げている。

このように、コラート人の存在を認めるとすれば、その起源については、どのような説が唱えられているのであろうか。

シュリシンジャーによれば、第1は、セイデンファーデン (Erik Seidenfaden) の、コラート人は14世紀前半、タイ人兵士とクメール人女性との間に生まれた人々の子孫であるという説である。これは、タイ諸族が現在のタイ王国に居住し始める前までは、この地域がクメール人の勢力下であり、クメール人が居住していたからである (Schliesinger 2001: 7)。例えば、ナコンラチャシマ市の北東約50kmの地点にあるピマイ遺跡は、12世紀頃に建設された、クメール様式の城郭都市であり、コラートには、クメール文化の影響が色濃く残っている。

第2は、クレッドナー (Wilhelm Credner) の、コラート人を中央タイに居住するタイ人の一部であるとする説である (Schliesinger 2001: 7)。これは、中央タイとナコンラチャシマ県が境を接しているという地理的条件、および、コラート語をタイ語の方言であると位置付ける人がいるほどの言語上の類似性がその理由である。

第3は、マヒドン大学の言語学者達とシュリシンジャーの、コラート人を、中央タイ人のタイ人とは別個の集団と位置付ける説である (Schliesinger 2001: 7-12)。

第4は、コラートに居住するコラート人自身が抱く、自分たちはラオ人がナコンラチャシマを攻撃した19世紀に、コラート防衛のために中央タイから移住したタイ人の子孫であるとする説である (Schliesinger 2001: 8)。

筆者は、予備調査の中で、東北タイのナコンラチャシマ県を中心に、コラート人を自称として用いる住民が存在することを知った。そこで、今回実施した調査の設問に、コラート人に関する設問を加え、その一つで、「自分をコラート人と呼ぶことがあるか」を問い、コラート人であるという認識を抱く者の比率を調べた。その結果、全回答者の36.8%が、自分をコラート人と呼ぶことがあると答えている。これは、コラート人を自称として



用いる住民が、東北タイに相当数存在することを示しているといえよう。

東北タイでは、大部分の地域でイサン語が使用されている。その中で、例外といえるのが、コラート語が使用されている地域（ナコンラチャシマ県など）と北クメール語が使用されている地域（スリン県、ブリラム県など）である。コラート語は、コラート・タイ語とも呼ばれ、タイクラン語と相互理解可能な言語である。この言語は、東北タイで最大の都市であるナコンラチャシマ市を中心に使用されており、ナコンラチャシマの旧名がコラートであったことから、コラート語と呼ばれる。

コラート語について、研究者の間には、これを、独立した言語であると捉える立場と、タイクラン語の方言であると捉える立場が存在する。

前者に従うと推定されるのが、前述のタムバイアであり、彼はコラート人が、コラート県内に居住し、言語、場所、文化において、他のタイ人、ラオ人の地域集団と異なるとする（Tambiah 1968: 88）。また、1994年には、約2000個のコラート語の語彙が解説された「コラート語辞書」が出版されている（メートカールチット 1994）が、これも、コラート語という独立した言語が存在するという立場を示している。その著書の中で、タイ国内のタイ諸語話者集団の一つとして、コラート・タイ人の章を設けているシュリシンジャー（Schliesinger 2001: 7-12）も、独立したタイ語話者集団と位置付けている。

後者に従うと推定されるのが、マヒドン大学の言語学者達であり、彼らは、コラート・タイ語（我々の言うコラート語）を中央タイ語の方言と位置付けている（Schliesinger 2001: 7）。ブラウンも、コラート語の起源を、その発音体系から1650年頃のサコンナコンで使われていた言語とし、コラート語という方言は、バンコクのタイ語（すなわちタイクラン語）と相互理解可能としており、コラート語は方言であると考えている（Brown 1985: 189）。また、スモーリーも、コラート語については、タイクラン語の方言のひとつと考えている（Smalley 1994: 111）し、グライムスも、タイの地域言語の一つであるタイクラン語の方言であると位置付けている（Grimes 1992: 753）。

コラート語は、既に述べたように、タイクラン語の一方言と位置付けられ、注目されてこなかった。しかし、本論文では、そしてまた、本論文の基礎となった調査においては、コラート語は、タイクラン語とは異なる独立の言語である、少なくとも東北タイにおいてはそう認識されているという前提で議論を進める。

そこで、今回実施した調査では、選択肢の中にコラート語を加え、さらに、コラート語を話すと言った被験者に対してのみ、設問32～37によって、コラート人およびコラート語に関する質問を行った。

調査の中の「母親と何語で話すか」という設問の回答選択肢の中に「コラート語」を加えた結果、全被験者の26.3%が、母親とコラート語で話すと言っており、これは、コラート語を家庭言語とする人（正確には、母親と話す言語がコラート語と考える人）が、

東北タイに一定程度存在することを裏付けている。

以下、調査結果を論ずる。

## 6. 2 コラート人とコラート語に関する調査結果

### 6. 2. 1 十分言語能力

まず、コラート語の十分言語能力に関する調査結果は、以下の通りである。

表3. 5に示したように、東北タイの人々は、約3割がコラート語の十分言語能力をもつ。東北タイにおいて、コラート語が無視できない言語である所以である。

しかし、コラート語の十分言語能力は、地域的偏りが大きい。コーンケン地域とナコンラチャシマ地域を比較すれば、この点は明らかである。

まず、十分言語能力について、表3. 5より抜粋したものを、表6. 1に示す。

表6. 1 地域別の十分言語能力(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	コラート語
コーンケン地域	949 (86.3)	880 (80.0)	0 (0.0)
ナコンラチャシマ地域	1040 (81.6)	417 (32.7)	661 (51.8)

数値は回答者数、括弧内は地域ごとの被験者総数に対する百分比

タイ語の十分言語能力については、両地域で、大きな差は見られないが、イサン語の十分言語能力をもつ者が、コーンケン地域に偏り、コラート語の十分言語能力をもつ者が、ナコンラチャシマ地域に限られることは、表から明らかである。

ただし、ナコンラチャシマ地域にも、イサン語の十分言語能力をもつ者が、約3割いる。これは、イサン語のコラート語話者への浸透度が0. 50、換言すれば、コラート語話者の相当数がイサン語の十分言語能力をもつためであるとも考えられる。しかし、ナコンラチャシマ地域にも、次の表6. 2に示すように、イサン語のみを家庭言語とする者が約15%いること、イサン語が家庭言語の一つである話者を加えると約25%に達することの反映に過ぎないとも考えられる。この点は、今回の調査結果だけからは、判断できない。

表6. 2 地域別の家庭言語(複数回答あり)

	タイ語のみ	イサン語のみ	コラート語のみ
コーンケン地域	122 (11.1)	785 (71.4)	0 (0.0)
ナコンラチャシマ地域	304 (23.8)	202 (15.8)	356 (27.9)

数値は回答者数、括弧内は地域ごとの被験者総数に対する百分比

次に、言語の浸透度に関して、コーンケン地域とナコンラチャシマ地域について比較を行うと、コーンケン地域における各言語の浸透度、ナコンラチャシマ地域における各言語の浸透度は、表6. 3と表6. 4にそれぞれ示す通りである。

表6. 3 コーンケンにおける各言語の浸透度

n = 1100

	家庭言語話者数 Fi	総話者数 Li	言語の浸透度 Si
タイ語	122	949	0.85
イサン語	785	880	0.30
コラート語	0	0	0.00

表6. 4 ナコンラチャシマにおける各言語の浸透度

n = 1275

	家庭言語話者数 Fi	総話者数 Li	言語の浸透度 Si
タイ語	304	1040	0.76
イサン語	202	417	0.20
コラート語	356	661	0.33

2つの表の比較から、以下の点が観察される。

- (1) タイ語は、両地域で、タイ語以外の言語を家庭言語とする住民に非常に浸透しているが、コーンケン地域において、より高い比率で浸透している。
- (2) コーンケン地域では、イサン語はある程度浸透しているが、コラート語は浸透していないのに対し、ナコンラチャシマ地域では、コラート語もある程度浸透しているし、イサン語もある程度浸透している。

また、調査結果から、コラート語の使用頻度が増加したか否かを検討する。ただし、この設問は、コラート語を話すと言った被験者のみを対象としており、全員がナコンラチャシマ地域の住民である。

ナコンラチャシマ地域では、「以前よりコラート語を多く使うようになった」と回答する者が701名であり、これは、ナコンラチャシマ地域の回答者数の約65%に相当する。これは、東北タイにおけるイサン語の使用が以前より多くなったと回答した比率の約50%、ラオ語の使用が以前より多くなったと回答した比率の約20%と比べてもはるかに大きな値であり、コラート語の使用頻度が少なくとも減少しているとは考えられない。

次に、この内訳を年齢別に見ると、次の表6. 5のようになる。高年層ほどコラート語を使う頻度がわずかに高まる傾向が認められる。

表6.5 ナコンラチャシマ地域における「コラート語を以前より多く使うようになった」者の年齢別集計

24歳以下	365 (62.4)
25～44歳	213 (66.4)
45歳以上	123 (73.7)

(数値は回答者数)

ナコンラチャシマ地域の特徴として、コラート語の十分言語能力は、若年層の方が高くなっている。また、高年層なほど、コラート語を多く使うようになっている。これらの理由については、今回の調査結果からは不明である。

#### 6.2.2 言語使用域

コラート語が言語使用域ごとに、ナコンラチャシマ地域でどの程度使用されるかを、表3.2、表3.18、表3.20、表3.22、表3.24から抜粋したものを表6.6にまとめて示す。また、比較のために、イサン語が言語使用域ごとに、ナコンラチャシマ地域でどの程度使用されるかも示す。

表6.6 ナコンラチャシマ地域における言語使用域ごとのコラート語・イサン語の使用比率

言語使用域	コラート語	イサン語
役人	18.5	5.3
僧侶	39.7	14.9
友人	53.4	26.8
母	48.9	25.2
子ども	42.7	18.0

数値はナコンラチャシマ地域の全被験者に対する百分比

ナコンラチャシマ地域においては、役人に対して約2割、僧侶に対して約4割、友人、母親に対して約5割、子どもに対して約4割の人が、コラート語を使用する。この数値は、複数回答に基づくものであり、割り引いて考える必要があるが、ナコンラチャシマ地域におけるコラート語の重要性は明らかである。これは、同地域におけるイサン語よりも、明らかに大きな役割を担っている。

次に、比較のために、コーンケン地域において、イサン語、コラート語が言語使用域ごとにどの程度使用されているか、まとめて、表3.2、表3.18、表3.20、表3.22、表3.24から抜粋し、表6.7に示す。

表6.7 コーンケン地域における言語使用域ごとのイサン語・コラート語の使用比率

言語使用域	イサン語	コラート語
役人	37.6	0.0
僧侶	78.8	0.0
友人	87.6	0.0
母	87.5	0.0
子ども	75.3	0.0

数値はコーンケン地域の全被験者に対する百分比

2つの表を比較すれば、コーンケン地域におけるイサン語の使用比率は、ナコンラチャシマ地域におけるコラート語の使用比率より相当に大きい。

このことから、2つのことが推定できる。

一つは、ナコンラチャシマ地域におけるコラート語は、言語と地域が異なるだけで、コーンケン地域のイサン語と、社会的にはほぼ同じ役割を果たしていると考えられることである。

他の一つは、ナコンラチャシマ地域におけるコラート語の社会的役割は、コーンケン地域におけるイサン語の役割ほど大きくないことである。

### 6. 2. 3 言語の異同・包含関係

今回の調査では、「イサン語とコラート語は同じ言語だと思うか」「コラート語はイサン語の方言だと思うか」という設問を設けた。これらの設問から、イサン語とコラート語の異同・包含関係を求める。なお、これらの設問は、コラート語を話すと答えた被験者のみを対象としており、全員がナコンラチャシマ地域の住民である。

また、今回の調査では、質問票の質問総数の制約の関係で、コラート語とタイ語間の関係を問う設問を設けなかったため、以下のデータは、参考程度と考える必要がある。

まず、イサン語とコラート語の関係について検討する。上掲の2つの設問に対する回答者の比率を、次の表6.8に示す。

表6.8 コラート語とイサン語の関係(1)

	%
コラート語はイサン語の方言である	63.6
イサン語とコラート語は同じ言語である	47.4

また、4. 1. 1の分類①～③に従うと、イサン語とコラート語の関係は、表6.9のようになる。

表6. 9 コラート語とイサン語の関係(2)

	%
同一	10.2
コラート語はイサン語の方言	63.6
独立	26.3

また、図6. 1 にこれを図示する。

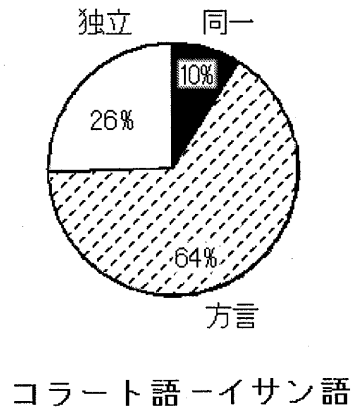


図6. 1 コラート語・イサン語の関係

出所：筆者作成

コラート語とイサン語を別個の言語とみなすものは約3割、コラート語がイサン語の方言であるとみなすものは約6割、コラート語とイサン語を同一の言語とみなすものは約1割である。

以上のように、一般には、コラート語はタイ語の方言である考えられてきたが、コラート語はイサン語の方言であるという認識が、東北タイのコラート語話者に相当多いという、従来の考え方とは明らかに異なる結果が調査から明らかになった。コラート語を含む東北タイの諸言語の異同・包含関係を明らかにするためには、コラート語とタイ語の関係を含めさらに詳細な調査が必要がある。

#### 6. 2. 4 呼称と帰属意識

ナコンラチャシマ地域においては、コラート語を話すと答えた被験者のうち、コラート人を自称として用いると回答した者が874名であり、約82%に相当する。コラート語を話す住民がコラート人という自称を高い比率で使用していることを示す。

同様に、家庭言語別にコラート人と自称する者の比率を求め、表6. 10に示した。なお、表の中の数値の意味は、上と同様である。

表6. 10 コラート人を自称する者の家庭言語別集計

	自分をコラート人と呼ぶことがある
家庭言語タイ語のみ	75.7
家庭言語イサン語のみ	55.3
家庭言語コラート語のみ	93.7

コラート語のみを家庭言語とする回答者は約9割が、自分をコラート人と呼ぶことがあると回答している。これは、コラート語を家庭言語とする者にとって、コラート人という自称との関連性が極めて強いことを物語っている。

その一方で、タイ語のみを家庭言語とする回答者でも約8割、イサン語のみを家庭言語とする回答者でも約6割が、自分をコラート人と呼ぶことがあると答えている。これは、自称が帰属意識を反映するものとするならば、コラート人という自称が、コラート地域という、地域に基づく帰属意識を反映していることを示唆していると考えられる。

コラート人という自称が、地域に基づく帰属意識を反映しているとすれば、同じく、イサン地方に基づく帰属意識を反映していると考えられるイサン人という自称との関係はどのようなになっているのであろうか。

ナコンラチャシマ地域においては、コラート語を話すと言った被験者のうち、イサン人というよりはむしろコラート人であると思うと回答した者が800名であり、その比率は約7割になる。これは、東北タイの住民の中で、コラート語を話すと言った被験者にとって、イサン人としての帰属意識よりも、コラート人としての帰属意識の方が強いということの意味している。もちろん、これは、コラート語を話すとした被験者に限定して行った設問に対する結果であることを考慮しておく必要がある。

#### 6. 2. 5 小括

これまで、コラート語の存在はほとんど重要視されてこなかった。その理由は、コラート語が、タイクラン語の方言と理解されるほど、タイクラン語との言語的諸要素の差異が小さかったこと、および、使用されている地域が非常に限定されていたことにあると考える。

しかし、本論文で論じたように、コラート語は、東北タイにおける言語分布を考える上で、大変重要な意味をもっている。すなわち、イサン語話者の比率が多い東北タイの中で、クメール語とともに、コラート語は、内部的多様性を示す特異な存在であるといえる。

今後、東北タイのイサン語話者の言語認識の調査と並行して、コラート語話者の言語認識についても、さらに調査を行う必要がある。

### 6. 3 言語境界

今回の調査結果から、コラート語を、東北タイの内部的多様性の一例として捉えることができると考えられる。コラート語が東北タイの中のどの範囲で使用されているかについて、調査結果に基づき、コラート語の言語境界を論ずる。

#### 6. 3. 1 言語境界

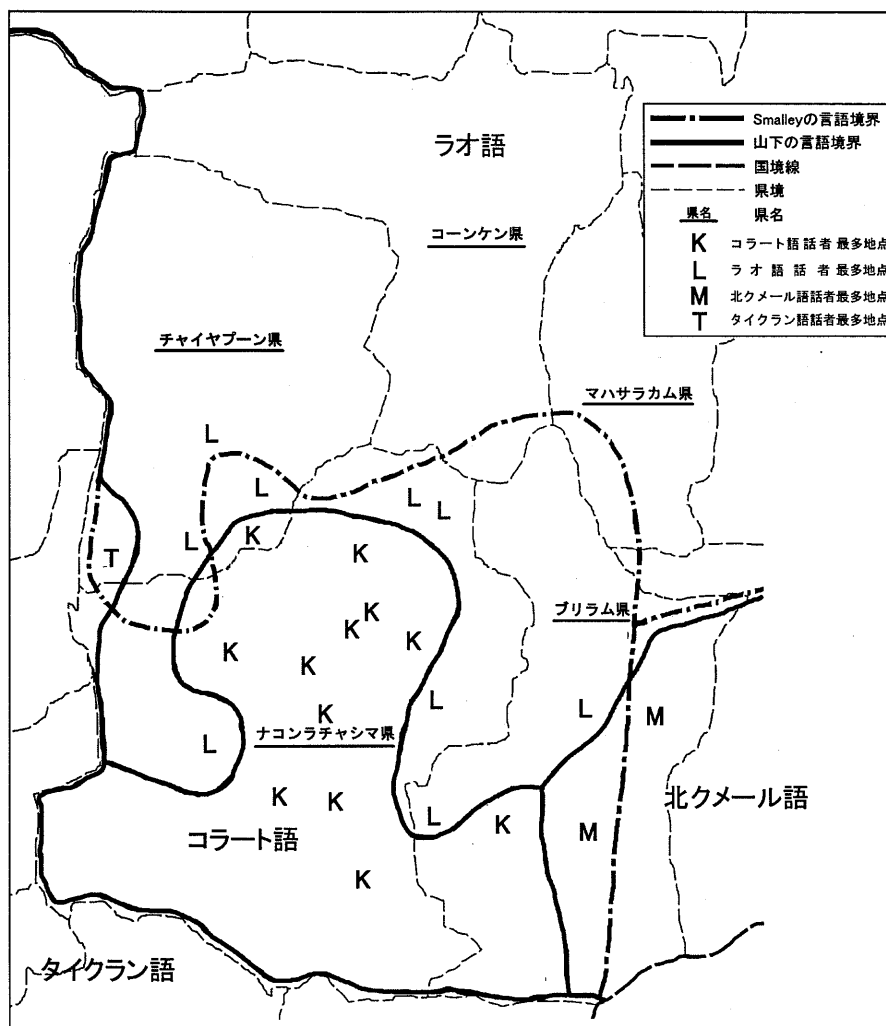
繰り返しになるが、東北タイは、タイクラン語、イサン語、クメール語、コラート語という4つの言語の使用地域が隣接し、互いの言語地域が相互に浸透しあって構成されている(山下 1999b: 119-120)。それにもかかわらず、4言語の使用地域がどの範囲にわたるかという情報は、前掲の、スモーリーが作成した「タイの地域言語の分布」を示す地図1.5にしか存在しなかった。

スモーリーは、地図1.5のタイの地域言語の分布の中で、コラート語が使用されている地域を、タイクラン語が使用されている地域に含めているが、これは、コラート語がタイクラン語の方言であるという考え方からである。また、スモーリーは、タイクラン語が話されている地域が、ゆっくりと着実に、ブリラム県を越えて、主に北クメール語を吸収しながら東方へ広がっていると推定している(Smalley 1994: 112)。

スモーリーの作成した図1.5の中で、タイクラン語(この場合コラート語を含む)とイサン語、北クメール語との間の言語境界の妥当性を、まず検証する。

「母親とどの言語で話すか」への回答を解析し、ナコンラチャシマ周辺の24ヶ所の調査地点で、一番多くの人を使用している言語は何かを求めた。その結果は、タイ語の地点が1ヶ所、イサン語が9ヶ所、クメール語が2ヶ所、コラート語が12ヶ所であった。これらの情報をもとに、タイのナコンラチャシマ県、ブリラム県、チャイヤプーン県における、タイクラン語、イサン語、北クメール語、コラート語の間の言語分布を推定したのが、地図6.1である。この図には、比較のために、スモーリーの推定した言語境界も書き加えた。





地図6.1 調査地点と言語境界

出所：Smalley 1994: 68 および筆者調査により作成

ただし、スモーリーの推定は、1990年当時のものであり、山下が2001年に実施した調査とは、約10年のずれがある。また、スモーリーは、2.4.1で述べたように、北クメール語地域においては綿密な調査を行っているが、それ以外の地域では、それほど綿密な調査を行ったわけではない。また、スモーリーはそもそも、コラート語がタイクラン語の方言であるという立場であり、単純な比較はできないことを考慮しておかなければならない。

母親に対して使用する言語のみを基礎とすること、調査地点の数、位置などの問題はあ  
るが、地図6.1で、一点鎖線で示すスモーリーの言語境界と比較して、今回の調査結果  
とは、各県ごとに、以下のような点で違いがあることを暫定的に指摘できる。

- (1) チャイヤブーン県内には、コラート語使用地域がわずかしか存在しない。

- (2) ナコンラチャシマ県内の西部、北東部、東部にイサン語使用地域が存在し、コラート語使用地域がより小さい。
- (3) ブリラム県内で、コラート語使用地域がより小さく、イサン語使用地域と北クメール語使用地域がより大きい。

コラート語の使用地域は、スモーリーのコラート語使用地域の約半分しかない。すなわち、コラート語（スモーリーのいうタイクラン語の方言）は、スモーリーが考えているほど、イサン語使用地域や北クメール語使用地域に浸透していない。

これは、東北タイの中で、タイクラン語の方言としてのコラート語の使用地域が、ゆっくりと着実に、ブリラム県を越えて、主に北クメール語を吸収しながら東方へ広がりつつあるという、前述のスモーリーの推定を否定する結果である。

スモーリーは、コラート語が話されている地域が、ブリラム県を越えて、主に北クメール語を吸収しながら東方へ広がっていると言っているわけではない。コラート語という存在を認めていないスモーリーは、タイクラン語が広がっていると言っているのである。しかしながら、コラート語がタイクラン語の方言であったとしても、スモーリーの、「ゆっくりと着実に、ブリラム県を越えて、主に北クメール語を吸収しながら東方へ広がっている」という記述は、地図6. 1によって否定されよう。

### 6. 3. 2 コラート語の認識

次に、住民がコラート語をどのように認識しているか検討する。

コラート語は、既に述べたように、これまで、タイの地域言語の一つであるタイクラン語の方言であると位置付けられてきた。それは、コラート語とタイクラン語が、相互理解可能な言語であり、コラート語に、タイクラン語からの借用語彙が極めて多いからであると考えられる。しかし、調査に基づけば、住民がコラート語を、タイクラン語の方言ではなく、ナコンラチャシマ県とその周辺に使用地域が限定される、独立した言語として認識していると考えべきである。その根拠は、以下の通りである。

第1は、ナコンラチャシマ県においてコラート語という概念が強固であるという点である。今回の調査で、ナコンラチャシマ県内に住む被験者959人のうち、半数以上の52.7%に相当する505人は、コラート語が家庭言語であると答えている。これは、コラート語という概念が、ナコンラチャシマ県民にしっかりと定着していることを意味する。これに対し、隣県であるコーンケン県では、県内に住む被験者1100人のうち、コラート語を母語としていると答えたのは皆無であった。また、ナコンラチャシマ県の中で、コラート語が母語でない被験者404人のうち、自由にコラート語を話せるのは29.2%に相当する118人、少しでもコラート語を話せるのは56.2%に相当する227人であ

り、ナコンラチャシマ県の中では、コラート語という概念が、しっかりと定着している。

第2は、コラート語を代表する歌謡が存在する点である。

ナコンラチャシマ県周辺で使用されている主要な言語のうち、タイ諸語に属するタイクラン語、イサン語、コラート語については共通点が存在する。それは、それぞれの言語を代表する歌謡が存在するという点である。その歌謡とは、タイクラン語で歌われる「ルークトウン (Luk Tung)」、イサン語で歌われる「モーラム (Moram)」、そして、コラート語で歌われる「プレーンコラート (Pleng Khorat)」である。

「プレーンコラート」は、ナコンラチャシマ市の城内に立つ英雄タオ・スラナリ (Thao Suranari) の像の横に設けられたステージ (写真6. 1 参照) で歌われる、伴奏なしの歌謡である。「プレーンコラート」はコラート語で歌われ、タオ・スラナリ像に参拝する多くの人々が聞き、記憶に留める。「プレーンコラート」は、「ルークトウン」や「モーラム」と同じく、言語を代表する歌謡であるといえる。



写真6. 1 「プレーンコラート」のステージ

2001年9月9日筆者撮影

第3は、ナコンラチャシマ県の仏教の高僧がコラート語で説法を行う点である。ナコンラチャシマ県の北西部に位置するワットバンライ (Wat Banrai) は、コラート語が使用されている地域の中で最も有名な寺院である (写真6. 2 参照)。このワットバンライの高僧、ルアンポークン (Luang Pho Khun) 師に話を聞くことができた<sup>2</sup>。

<sup>2</sup> 2001年9月7日午前11時、ワットバンライにて、ルアンポークン師に対するインタビューを実施した。

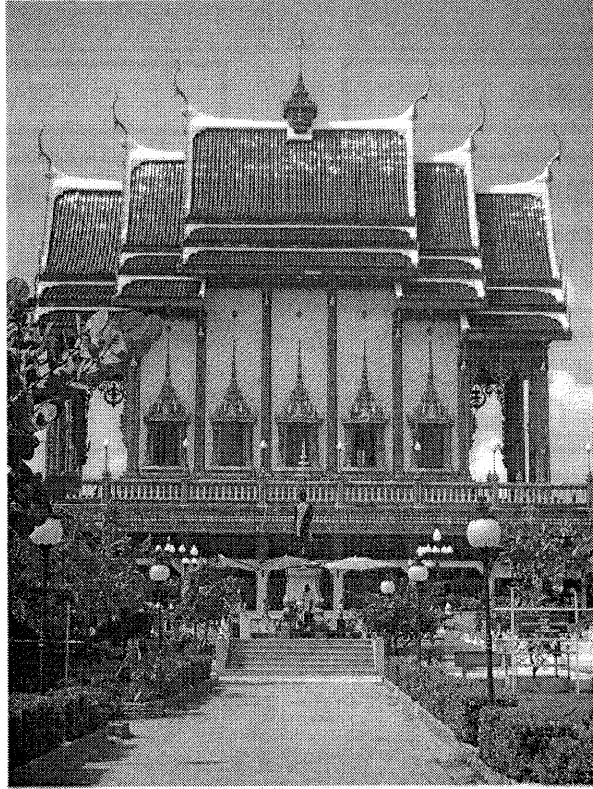


写真6. 2 ワットバンライ

2001年9月7日筆者撮影

彼は、コラートに住む人はコラート語を話すこと、そして、コラートに住む人は、他の地域に移住しても、なかなか言語を変えることが難しいことを、コラート語で話された。ワットバンライには、毎日多くの仏教徒が参拝し、彼のコラート語の説法を耳にする。その意味では、コラート語と、コラートの仏教は、深く結びついているといえることができる。

以上の3つの根拠により、筆者は、住民がコラート語を、タイクラン語の方言ではなく、独立した言語と認識していると考えられる。

### 6. 3. 3 言語階層とコラート語

既に述べたように、コラート語を、タイクラン語の方言ではなく、ナコンラチャシマ県とその周辺に使用地域が限定される、独立した言語として扱うものとする、タイにおける言語階層の中で、コラート語の位置する階層は、図6. 2の(1)スモーリーの言語階層から(2)山下の言語階層へと移動することになる。

仮に、図6. 2の(1)のように、コラート語がタイクラン語の方言であると考えれば、タイにおける言語階層の最上位層に位置する標準タイ語にもっとも近いタイクラン語と、地域言語の一つであり、タイにおける言語階層では標準タイ語の下の階層に位置するイサ

ン語との間で、タイクラン語の使用地域が拡大していく傾向にあって不思議ではない。

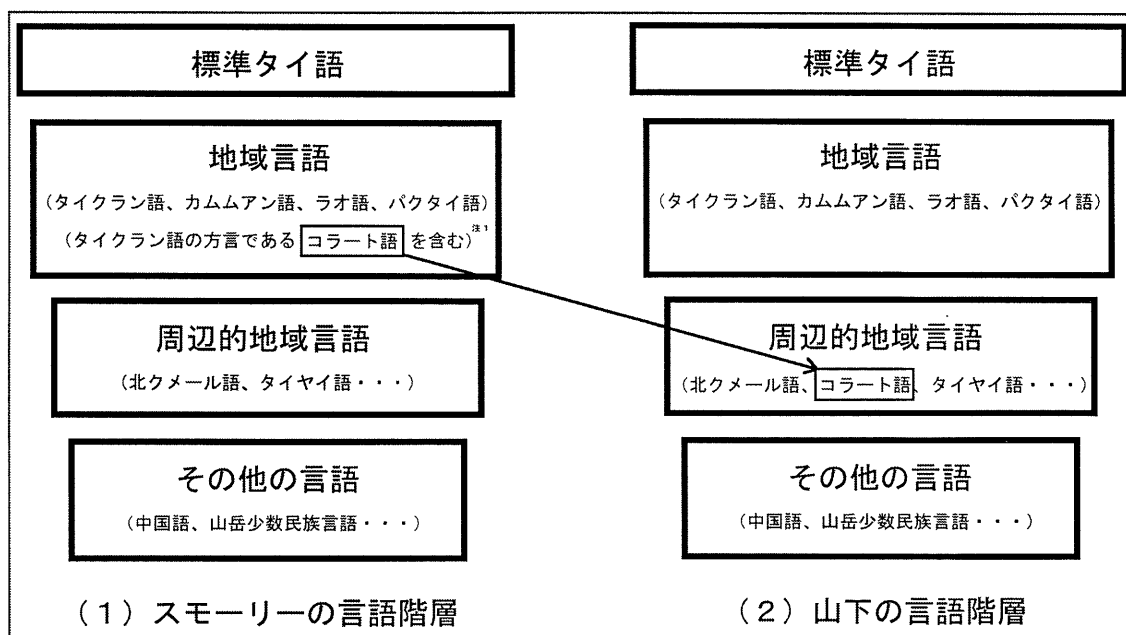


図6.2 タイの言語階層におけるコラート語の位置

注1) スモーリーは括弧書きはしていないが、本文の中でコラート語はタイクラン語の方言とされると記述している

出所：Smalley 1994: 69 より作成

また、タイクラン語と、タイにおける言語階層で地域言語のさらに下位の階層である周辺の地域言語に位置する北クメール語との間でも、タイクラン語の使用地域が拡大していく傾向にあるはずである。一般に、国語に指定された言語は、教育やマスメディアの力によって、国内に浸透していく。これは、インドネシアにおけるインドネシア語の話者が、独立当時、数%しか存在しなかったのに、現在では、ほとんどの国民がインドネシア語を使用することからも明らかである。

次に、もし、図6.2の(2)のように、コラート語がタイクラン語の方言ではなく、ナコンラチャシマ県とその周辺に使用地域が限定される、独立した周辺の地域言語であると考えれば、タイにおける言語階層で、地域言語のさらに下位の階層である周辺の地域言語に位置するコラート語と、地域言語の一つであり、タイにおける言語階層では標準タイ語の下位の階層に位置するイサン語との間で、イサン語の使用地域が拡大していく傾向にあるはずである。そして、タイ国内の言語階層で、地域言語のさらに下位の階層である周辺の地域言語に位置するコラート語と、同じく、周辺の地域言語に位置する北クメール語との間で、使用地域は拮抗する傾向にあるはずである。

ところが、すでに述べたように、コラート語は、スモーリーの推定に比べ、イサン語使用地域や北クメール語使用地域への浸透がそれほど進んでおらず、また、その使用地域が

東方へ広がりつつあるということもないという結果が明らかになった。この結果は、図6.2の(1)ではなく、図6.2の(2)の説明に合致する。

これは、住民がコラート語を、タイクラン語の方言ではなく、ナコンラチャシマ県とその周辺に使用地域が限定される、独立した周地的地域言語と認識している証拠と考えるべきではないだろうか。

#### 6.4 コラート人の抱く帰属意識

コラート人が使用するコラート語は、中央タイの人々が使用するタイクラン語と近い関係にある。そこで、この節では、コラート人と中央タイの人々との関係について論じ、コラート人という帰属意識が存在する必然性を論ずる。

東北タイの中で、コーンケン地域にはラオ人が多く居住する。それに対し、ナコンラチャシマ地域に居住するコラート人は、6.1節の先行研究で示したように、ラオ人とは異なる民族集団と考えられている。

1章で述べたように、19世紀後半のフランスのインドシナ進出に応じて、東北タイの脱ラオ化が、タイ政府により進められた。その結果、東北タイのラオ人はイサン人、ラオ語はイサン語と読み替えられるようになったのであるが、それは同時に、政府が、民族的帰属意識の拠り所としてのラオ人という呼称を、地域的帰属意識の拠り所としてのイサン人という呼称に置き換えたことを意味する。その意味においては、ナコンラチャシマ地域のコラート人は、イサンに居住する住民であるから、イサン人と呼ばれるべきである。

しかし、19世紀前半に、ナコンラチャシマ地域において、ラオスのラオ人の軍隊を打ち破ったのは、ナコンラチャシマのコラート人であり (Stuart-Fox 1998: 123)。決して、東北タイのラオ人ではなかった。イサン人という呼称が、地域的帰属意識の拠り所という面だけでなく、民族的帰属意識の拠り所という面も持ち合わせているために、コラート人は、イサンに居住するからイサン人と呼ばれることには抵抗があったと思われる。

一般的な中央タイの人々は、東北タイの言語事情、民族事情についてはよく知らないため、往々にして、東北タイといえばイサン語を話すイサン人という、ステレオタイプな考えを抱きやすい。そして、中央タイの人々は、イサン人を、タイ人に敗れたラオ人の子孫であるとして、蔑視しがちである。しかし、ナコンラチャシマに住み、コラート語を話す人々は、東北タイの中にありながら、イサン人とは別であるという意識を強くもっている。

また、既に述べたように、コラート人の話すコラート語は、タイクラン語に近い言語である。そこで、コラート人の中には、中央タイの人々に対して、彼らの母語であるタイクラン語に近い言語を話すという親近感と、イサン人として蔑視されるという失望感が並存する。

今回の調査でも、コラート語のみを家庭言語とすると回答した者の中で、イサン人というよりコラート人であると回答した者の比率は、約9割に達している。このように、東北タイのナコンラチャシマの住民は、イサン人という、ラオ人を読み替えた、民族的帰属意識の意味合いをもつアイデンティティではなく、別のアイデンティティを求めているのではないだろうか。その意味において、東北タイのナコンラチャシマの住民が、コラート語という言葉をもとにした、コラート人という帰属意識を抱くことには、必然性があると考ええる。

## 第 7 章

### 結論



## 第7章 結論

### 7. 1 調査と本論文の意義

1. 9節で述べたように、本論文の目的は、

- (1) 東北タイにおいてどの言語が、どの程度、どのように使用されているか、その実態を明らかにすること
- (2) 東北タイの人々が、そのような言語をどう認識し、また、言語間の関係をどのように認識しているかを明らかにすること
- (3) 東北タイの人々が、自分たちをどのように呼び、どのような帰属意識を抱いているかを明らかにすること

である。この3点を明らかにすることにより、東北タイの人々、特にイサン人の言語的帰属意識、民族帰属意識の一端を明らかにすることができる。

この目的を達成するために、今回、東北タイの広範囲な地点において、2375名の被験者に対し、言語認識や帰属意識に関する調査を実施した。この調査の主眼は、東北タイ全体としての実態を明らかにすることであり、ハウゲンの提唱した言語の生態系という概念を援用し、東北タイで使用される諸言語について、多言語使用や言語集団間の言語浸透の実態、言語の異同・包含関係の認識、自称や帰属意識、および、各種の階層構造を明らかにした。その際、単一言語、単一集団への帰属意識であることを前提にせず、多重、かつ重層的であると仮定し、論を進めた。

また、この調査は、この地域においては初めての大規模な調査である。これらのデータは、今後の東北タイの言語使用や言語間の関係の認識、自称などの研究の基礎データとして活用することが可能である。

### 7. 2 多言語地域としての東北タイ

まず、東北タイが多言語地域であることは、次の点から実証できる。

住民一人当たりが使用する言語数の指標である多言語化指標  $M$  については、東北タイ全体で  $M = 0.80$  である。これは、母語以外の言語を平均して約1個使用しているということの意味する。また、2言語以上を使用できる住民の比率を表す多言語人口比率  $P$  については、東北タイ全体で  $P = 0.60$  である。これは、5人中3人が、母語を含めて2つ以上の異なる言語を使用できるということの意味する。

具体的には、タイ語は8割以上、イサン語は約5割、コラート語は約3割、ラオ語は約

1割の住民が自由に話せる。

結論として、東北タイは、一人の人間が複数の言語を使うという意味での多言語地域である。

次に、東北タイの住民が、このような言語をどの様に使い分けているかを知るために、「役人」、「僧侶」、「友人」、「父母」および「子ども」という5つの言語使用域を用意した。

その結果、各言語使用域に1つの言語が対応するのではなく、言語使用域の差異は、それぞれの言語の使用比率の差異として表れる。

ただし、以下の結論においては、「子ども」という言語使用域は例外とする。

タイ語は、最も公的な「役人」に対する90%という使用比率から、最も私的な「父母」に対する39%という使用比率に至る。タイ語は東北タイにおいて、公的な場でより多く使用され、私的な場で使用比率が低い。

イサン語は、最も私的な「父母」に対する54%という使用比率から、最も公的な「役人」に対する20%という使用比率に至る。イサン語は東北タイにおいて、私的な場でより多く使用され、公的な場で使用比率が低い。

コラート語も、最も私的な「父母」に対する26%という使用比率から、最も公的な「役人」に対する10%という使用比率に至る。コラート語も、イサン語と同様、私的な場でより多く使用され、公的な場で使用比率が低い。

このように、公と私を両極とするスペクトラムにおいては、タイ語は公の側に、イサン語とコラート語は私の側に傾き、公的な言語使用域においてはタイ語、私的な言語使用域においてはイサン語、コラート語がより多く使用される。

また、東北タイの各言語の住民への浸透の度合いについては、言語*i*の社会全体への普及度  $S_i$  が、タイ語で  $S_i = 0.80$ 、イサン語で  $S_i = 0.22$ 、コラート語も  $S_i = 0.15$  である。これは、東北タイにおけるタイ語の浸透を表しており、イサン語、コラート語に比べて、タイ語の浸透度の高さは明らかである。

家庭言語集団別の浸透度でも、タイ語は、イサン語、コラート語といった家庭言語話者へ深く浸透し、逆に、イサン語、コラート語は、タイ語家庭言語話者へそれほど浸透していない。東北タイにおいて、イサン語、および、コラート語集団の多言語化が、タイ語集団の多言語化よりもはるかに進んでいることを示すものである。

### 7. 3 東北タイの住民の言語認識

東北タイで使用されている、タイ語、イサン語、コラート語、ラオ語は、すべてタイ諸語に属する言語である。これら東北タイで使用される言語の関係は、包含と異同という観点からすれば、以下の通りである。

イサン語はタイ語の方言であると認識されている。すなわち、タイ語とイサン語の関係

は、図1. 1において我々の言う「広義のタイ語」と認識されている。また、イサン語はラオ語の方言であるという認識が強い。それに対し、タイ語とラオ語は独立した言語であるという認識が最も強いが、ラオ語がタイ語の方言であるという認識も相当に強い。

以上のことから、イサン語は、タイ語でもあり、ラオ語でもあると認識されている。これは、東北タイの大学生に対して行った、タイ語、イサン語、ラオ語間の距離に対する調査によっても裏付けられる。

さらに、東北タイのコラート語話者だけについて言えば、イサン語とコラート語については、コラート語がイサン語の方言であるという認識が強い。

#### 7. 4 呼称と帰属意識

まず、自称について、住民の約9割は、タイ人という自称を使用している。これは、他の自称に比べ、最も多く使用され、かつ、最も広範囲に、家庭言語や年齢にもに関わりなく広く使われている。イサン人という自称も、約8割と、地域、年齢、家庭言語によらず、東北タイで広範囲に使用されている。

これに対して、コラート人という自称は東北タイにおいて約4割、ラオ人という自称は東北タイにおいて約2割の住民が使用する。

住民は、キースなどが指摘したように、複数の自称を使用している。すなわち、タイ人でも、イサン人でもあり、場合によってはラオ人でもコラート人でもあるという、自称の多重使用が行われている。

住民の帰属意識については、タイ人、イサン人、ラオ人への帰属意識を比較した場合、タイ人としての帰属意識とイサン人としての帰属意識はほぼ拮抗している。ラオ人への帰属意識よりタイ人への帰属意識がより強く、ラオ人としての帰属意識よりもイサン人としての帰属意識がより強い。

結論としては、住民は、タイ人もしくはイサン人という集団への帰属意識が最も高く、ラオ人への帰属意識がそれに次ぐ。

ただし、イサン人、コラート人への帰属意識については、それが、地域への帰属意識か、民族への帰属意識か、あるいは、国家への帰属意識かという問題は残る。

#### 7. 5 言語と民族の階層化

東北タイの人々の言語使用の実態、言語認識、呼称と帰属意識などについて、様々な階層構造がそこに成立していることが観察される。

注目すべきは、その階層が、相互に独立した層からできているのではなく、むしろ、複数の層が互いに重なり合っていてできていることである。

まず、言語について考える。

十分言語能力をもつ話者数からは、タイ語、イサン語、コラート語、ラオ語という序列が成立している。これは、スモーリーが行ったのと同じく、当該言語の社会的威信と効用を反映するものであり、その意味で、社会的序列として意味をもつものである。逆に、家庭言語話者数からは、イサン語、タイ語、コラート語、ラオ語という序列になる。社会的威信や効用ではなく、例えば、愛着、帰属意識といった観点からすれば、このような階層構造も考えられよう。

東北タイ社会への浸透度という観点からは、タイ語が最上位の層にあり、その下に、イサン語とコラート語の層が存在するという構造になる。

言語間の関係という観点からは、イサン語はタイ語とラオ語に包含され、ラオ語はタイ語に包含されており、このような階層構造を考えることも可能である。

公と私を両極とする言語使用域という基準からすれば、タイ語と他の言語の間に、明らかな序列が存在する。イサン語とコラート語の間の序列は、この点では明らかでない。

以上のことから、東北タイにおいては、タイ語、イサン語、コラート語という階層関係が成立すると言ってよい。これは、言語能力の面でも言語認識の面でも同じである。

なお、ラオ語の位置については、タイ語、イサン語との関係が複雑であり、確定することが困難であるが、基本的には、タイ語、イサン語、コラート語、ラオ語という階層を考えてよいのであろう。

自称の使用については、タイ人、イサン人、コラート人、ラオ人という階層構造が成立している。

帰属意識については、タイ人、イサン人の層があり、その下にラオ人の層がくる。しかし、これは地域により違いがある。コーンケン地域においては、コラート人としての帰属意識は無視できるので、タイ人、イサン人、ラオ人という序列になる。これに対して、ナコンラチャシマ地域においては、コラート人としての帰属意識はイサン人としての帰属意識よりも下に位置するので、タイ人、イサン人、コラート人、ラオ人という序列になる。

以上のように、様々な基準を用いて階層構造を考えることができるが、タイ語－イサン語－コラート語－ラオ語という言語の階層化と、タイ人－イサン人－コラート人－ラオ人という帰属意識の階層化を比較するとき、タイ語とタイ人、イサン語とイサン人、コラート語とコラート人、ラオ語とラオ人がそれぞれ、対応すると考えることができる。そして、この対応は、自称と十分言語能力の密接な対応関係からも裏付けられる。

ただし、階層の境界は、タイ語－イサン語、タイ人－イサン人という階層間、及び、イサン語－コラート語、イサン人－コラート人という階層間において、重なり合っている。

これは、住民が、タイ人という呼称も使えばイサン人という呼称も使い、タイ語も使え

ばイサン語も使う、あるいは、イサン人という呼称も使えばコラート人という呼称も使い、イサン語も使えばコラート語も使うという状況が存在するという意味である。

東北タイは、言語においても、帰属意識においても、個人レベルで重層的であるということができる。

#### 7. 6 コラート人とコラート語

また、これまで、東北タイは均質的であるかのように論じられることが多かった。しかし、東北タイには、内部的な多様性がある。この多様性を示すために、コラート語の問題を取り上げた。

コラート語とコラート人については、これまで東北タイの中では注目されてこなかった。本論文は、コラート語を使用し、コラート人を自称する住民の言語認識や帰属意識、及び、コラート語の言語分布を言語境界という形で明らかにした。それにより、住民がコラート語を、タイクラン語の方言ではなく、独立した言語と認識していることを明らかにした。

#### 7. 7 言語紛争と民族紛争の不在

東北タイは、一般には、言語や民族に基づく紛争の前提になるような帰属意識が欠如しているために、紛争が発生しない地域であったと思われがちである。しかし、東北タイにおいて発生したプーミーブンの反乱では、ラオ人の民族的帰属意識の要素も働いており、この地域において、言語や民族に基づく帰属意識が欠如していたとは言い難い。

東北タイにおいて、言語、民族といった集団的アイデンティティが政治化しなかった一つの要因は、東北タイが多言語使用の地域であり、言語や民族に基づく帰属意識も互いに重なり合いながら複数存在することであると考えられる。

#### 7. 8 将来の検討課題

今後の課題としては、以下の5点が挙げられる。

第1は、本論文で明らかにした、東北タイの住民の多言語使用の状況や言語間関係についての認識、そして、住民の使用する自称や住民の抱く帰属意識が、その多重性、階層化も含め、安定的なものであるか、それとも過渡的なものであるかを検証する必要がある点である。義務教育による国民国家形成が将来さらに進んだとすると、住民の使用する自称や住民の抱く帰属意識がどう変化するかについて追跡調査を行う必要がある。

第2は、イサン語とラオ語、イサン人とラオ人の異同に関する認識が、どのように理解

されているかを明らかにするという点である。今回の調査では、イサン語とラオ語といったとき、広義のラオ語か、狭義のラオ語かを厳密に客観的に区別できるような設問を設けることができなかつた。イサン語とラオ語、イサン人とラオ人の異同に関する認識については、今後、別の調査で明らかにする必要がある。

第3は、今回、東北タイのもつ多様性を示すためにコラート語の問題を取り上げたが、東北タイの多様性の問題は、コラート語のみの問題を明らかにすれば十分ということではないという点である。東北タイには、地域的な問題が数多く存在することが予想されるので、地域毎に一層細かく分析する必要がある。

第4は、2. 3. 4で取り上げた、帰属意識をより明らかにするために、帰属意識に関する設問の設定法を改善すべき点である。今後、より正確に住民の意識を測る手法を設計していく必要がある。

第5は、すでに述べたように、紛争と、言語や帰属意識の関係を明らかにする必要がある点である。

## 謝辞

この研究には、財団法人トヨタ財団の 2000 年度研究助成「東北タイのラオ人の言語認識と帰属意識：民族紛争不在の事例研究」による助成を得ました。トヨタ財団に心より御礼申し上げます。

## 引用文献

- Aikio, Marjut (1990), "The Finnish Perspective: Language and Ethnicity," Collis (ed.) (1990), 367-400.
- 赤木 攻 (1989), 『タイの政治文化：剛と柔』, 東京: 勁草書房.
- 赤木 攻 (1991), 「タイ国の「国境」確定: 近代的主権国家の成立過程」, 矢野 (編) (1991), 125-140.
- Akiner, Shirin (ed.) (1991), *Cultural Change and Continuity in Central Asia*, London: Kegan Paul International.
- Ammon, Ulrich and Marlis Hellinger (eds.) (1991), *Status Change of Languages*, Berlin: Walter de Gruyter.
- 青山 利勝 (1995), 『ラオス: インドシナ緩衝国家の肖像』, 東京: 中央公論社.
- 青柳 健二 (1996), 『メコンを流れる』, 東京: NTT出版.
- 有賀 貞 他 (編) (1989b), 『講座国際政治 3 : 現代世界の分離と統合』, 東京: 東京大学出版会.
- 綾部 恒雄 (編) (1996), 『国家の中の民族: 東南アジアのエスニシティ』, 東京: 明石書店.
- 綾部 恒雄・綾部 裕子 (1995), 「民族と言語」, 綾部・石井 (編) (1995), 72-102.
- 綾部 恒雄・石井 米雄 (編) (1995), 『もっと知りたいタイ』, 東京: 弘文堂.
- 綾部 恒雄・中園 優子 (1995), 「社会と教育」, 綾部・石井 (編) (1995), 178-223.
- Baker, Colin (1998), *Encyclopedia of Bilingualism and Bilingual Education*, UK: Multilingual matters Ltd.
- Beebe, Leslie M. (1974), "Socially Conditioned Variation in Bangkok Thai," Ph.D. Dissertation, University of Michigan.
- Beer, William R. and James E. Jacob (eds.) (1985), *Language Policy and National Unity*, Tototwa, NJ: Rowman & Allanheld.
- Bennigsen, Alexander and Chantal Lemercier-Quelquejay (1985), "Politics and Linguistics in Daghestan," Kreindler (ed.) (1985), 125-142.
- Bentahila, Abdelâi and Eirlys E. Davies (1992), "Convergence and Divergence: Two Cases of Language Shift in Morocco," Fase et al (eds.) (1992), 197-210
- Bongaerts, Theo and Kees de Bot (eds.) (1997), *Perspective on Foreign Language Policy: Studies in Honor of Theo van Els*, Amsterdam: Benjamins.
- Bright, William (1992) (ed.), *International Encyclopedia of Linguistics*, 4 Vols, New York: Oxford University Press.
- Broeder, Peter and Guus Extra (1997), "Minority Groups and Minority Languages in the Netherlands: Empirical Facts and Educational Policy," Bongaerts & de Bot (eds.) (1997), 157-179.
- Brown, J. Marvin (1985), *From Ancient Thai to Modern Dialects: And Other Writings on Historical Thai Linguistics*, Bangkok: White Lotus.



- Brown, Michael E. and Sumit Ganguly (eds.) (1997), *Government Policies and Ethnic Relations in Asia and the Pacific*, Cambridge, MA: MIT Press.
- セデス, G. (山本智教訳) (1989), 『東南アジア文化史』, 東京: 大蔵出版.
- Chaklader, Snehamoy (1990), *Sociolinguistics: A Guide to Language Problems in India*, New Delhi: Mittal.
- Chantrasupawong Narumol (1985), "Classifiers in Korat Thai spoken in Ban Bung Thap Prang, Tambon Krathok, Amphoe Chokchai, Nakhonrachasima Province," M.A.Thesis, Chulalongkorn University.
- Cheshire, Jenny (ed.) (1991), *English around the World: The Social Contexts*, Cambridge: Cambridge UP.
- Chinn, Jeff and Robert Kaiser (1996), *Russians as the New Minority: Ethnicity and Nationalism in The Soviet Successor States*, Colorado: Westview Press, 53.
- Clyne, Michael (1997), "Multilingualism," Coulmas (ed.) (1997), 301-314.
- コバン, アルフレッド (栄田卓弘訳) (1976), 『民族国家と民族自決』, 東京: 早稲田大学出版部.
- Collis, Dirmid R. F. (ed.) (1990), *Arctic Languages: An Awakening*, Paris: UNESCO.
- コーン, ハンス (1982), 『ハプスブルク帝国史入門』, 東京: 恒文社.
- Coulmas, Florian (ed.) (1997), *The Handbook of Sociolinguistics*, Oxford: Blackwell.
- Crisp, Simon (1991), "Census and Sociology: Evaluating the Language Situation in Soviet Central Asia," Akiner (ed.) (1991), 84-123.
- Crowley, Terry (1994), "Linguistic Demography: Interpreting the 1989 Census Results in Vanuatu," *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 15(1), 1-16.
- Diller, Anthony V. N. (1976), "Toward a Model of Southern Thai Diglossic Speech," Ph.D. Dissertation, Cornell University.
- Diller, Anthony V. N. (1992), "Tai Languages," Bright (ed.) (1992), 128-130.
- Dressler, Wolfgang and Ruth Wodak-Leodolter (1977), "Language Preservation and Language Death in Brittany," *International Journal of the Sociology of Language*, 12, 33-44.
- Duncan, W. Raymond and G. Pual Holman, Jr. (eds.) (1994), *Ethnic Nationalism and Regional Conflict: The Former Soviet Union and Yugoslavia*, Boulder: Westview.
- Edwards, John (1994), *Multilingualism*, London: Routledge.
- Estruch, Joan (1991), "The Social Construction of National Identities: The Case of Catalonia as a Nation in the Spanish State," Ra'anán et al (eds.) (1991), 135-142.
- Fase, Willem, Koen Jaspaert and Sjaak Kroon (eds.) (1992), *Maintenance and Loss of Minority Languages*, Amsterdam: Benjamins.
- Fasold, Ralph W. (1988), "Language Policy and Change: Sexist Language in the Periodical News Media," Lowenberg (ed.) (1988), 187-206.

- Fennell, Desmond (1990), "Can a Shrinking Linguistic Minority be Saved?: Lessons from the Irish Experience," Haugen et al (eds.) (1990), 32-39.
- Ferguson, Charles A. (1972, 1959) "Diglossia," Giglioli(ed.) (1972) , 232-251. Originally *Word*, Vol.15, 325-340.
- Fishman, Joshua A. (1972), "Domains and the Relationship between Micro- and Macrosociolinguistics," Gumperz and Hymes (eds.) (1972), 435-453.
- Fishman, Joshua A., Andrew W. Conrad and Alam Rubal-Lopez (eds.) (1996), *Post-Imperial English: Status Change in Former British and American Colonies*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Forbes, Andrew D. W. (1989) (eds.), *The Muslim of Thailand: Volume 2 Politics of the Malay-speaking South*, Bihar: Center for South East Asian Studies.
- 藤田 剛正 (1993), 『アセアン諸国の言語政策』, 東京: 穂高書店.
- 福井 捷朗 (1988), 『ドンデーン村: 東北タイの農業生態』, 東京: 創文社.
- Giglioli, Pier Paolo (ed.) (1972), *Language and Social Context: Selected Readings*, Harmondsworth: Penguin.
- Girling, John L. S. (1981), *Thailand: Society and Politics*, Ithaca and London: Cornell University Press.
- Goody, Jack (ed.) (1968), *Literacy in Traditional Societies*, London: Cambridge University Press.
- Gorter, Durk (1987), "Aspects of Language Choice in the Frisian-Dutch Bilingual Context: Neutrality and Asymmetry," Mac Eoin et al (eds.) (1987), 121-132.
- Gorter, Durk and Jehannes Ytsma (1988), "Social Factors and Language Attitudes in Friesland," van Hout and Knops (eds.) (1988), 59-71.
- Grimes, Barbara F. (1988), *Ethnologue: Language of the World*, 11th Edition, Dallas: Summer Institute of Linguistics.
- Grimes, Barbara F. (1992), *Ethnologue: Languages of the World*, 12th edition, Dallas: Summer Institute of Linguistics.
- Gumperz, John J. and Dell Hymes (eds.) (1972), *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Gupta, Anthea Fraser and Siew Pui Yoek (1995), "Language Shift in Singapore Family," *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 16(4) , 301-314.
- Gurevich, Robert (1976), "Language, Minority Education, and Social Mobility: The Case of Rural Northeast Thailand," *Journal of Research and Development in Education*, 9(4), 137-145.
- ハントラクーン, ポーンペン (橋本 卓 訳) (1993), 「千年王国」, 石井・吉川 (編) (1993), 184.
- 原口 武彦 (1980), 「ブラック・アフリカ諸国の言語状況と言語政策 - コートジボワールの事例」, 『アジア経済』, XXI(5), 60-73.
- Haugen, Einar (1972c, 1971), "The Ecology of Language," Haugen (1972), 325-339. Reprinted from, *The Linguistic Reporter*, Supplement 25, Winter 1971, 19-26.

- Haugen, Einar, J. Derrick McClure and Derick Thomson (eds.) (1990), *Minority Languages Today*,  
Edinburgh: Edinburgh University Press.
- 林 行夫 (1990), 「村落宗教の構造と変容」, 口羽 (編) (1990), 403-506.
- 林 行夫 (1993), 「イーサーン」, 石井・吉川 (編) (1993), 51.
- 林 行夫 (1998), 「ラオの所在」, 『東南アジア研究』 35(4), 78-109.
- 林 行夫 (2000), 『ラオ人社会の宗教と文化変容』, 京都: 京都大学学術出版会.
- Heller, Monica (1995), "Language Choices, Social Institutions and Symbolic Domination," *Language in Society*, 24, 373-405.
- Hoffmann, Fernand (1996), "The Domains of Letzebuergesch," Newton(ed.) (1996), 123-141.
- Hoshino, Tatsuo and Russell Marcus (1981), *Lao for Beginners*, Bangkok: Tuttle Language Library.
- 池端 雪浦 (編) (1994), 『変わる東南アジア史像』, 東京: 山川出版社.
- 石井 米雄・桜井 由躬夫 (編) (1985), 『東南アジア世界の形成』, 東京: 講談社.
- 石井 米雄・吉川 利治 (編) (1993), 『タイの事典』, 東京: 同朋舎出版.
- Joy, Richmond J. (1992), *Canada's Official Languages: The Progress of Bilingualism*, Toronto:  
University of Toronto Press
- 梶田 孝道 (1989), 「現代国家と地域問題 — 西欧を中心に —」, 有賀他 (編) (1989b), 163-193.
- 亀井 孝 他 (編) (1996), 『言語学大辞典: 第6巻述語編』, 東京: 三省堂.
- Kachru, Yamuna and Tej K. Bhatia (1978), "The Emerging 'Dialect' Conflict in Hindi: A Case of  
Glottopolitics," *International Journal of the Sociology of Language*, 16, 47-58.
- 上東 輝男 (1987), 『北タイ地域の山岳民族』, バンコク: バンコク日本人商工会議所.
- 上東 輝男 (1992), 『現代ラオス概説』, 東京: 同文館.
- Kaprat, Jozef (1993), "The Transition of the Slovaks from a Non-dominant Ethnic Group to a Dominant  
One," Vilfan (ed.) (1993), 135-154.
- Kashoki, Mubanga E. (1982), "Rural and Urban Multilingualism in Zambia: Some Trends,"  
*International Journal of the Sociology of Language*, 34, 137-166.
- 川口 健一 (編) (1994), 『田中忠治先生退官記念論文集』, 東京: 田中忠治先生退官記念論文集  
刊行委員会.
- Keyes, Charles F. (1966), *Peasant and Nation: A Thai-Lao Village in a Thai State*, Unpublished Ph..D.  
Dissertation, New York: Cornell University .
- Keyes, Charles F. (1995), "Who are the Tai? Reflections on the Invention of Identities," Romanucci-Ross  
& George (eds.) (1995), 136-160.
- Keyes, Charles F. (1997), "Cultural Diversity and National Identity in Thailand," Brown and Ganguly  
(eds.), 197-231.
- Khubchandani, Lachman M. (1977), "Language Ideology and Language Development," IJSL, 13, 33-51.  
Reprinted Singh (ed.) (1997), 282-303.

- 菊池 勇夫 (1994), 『アイヌ民族と日本人：東アジアのなかの蝦夷地』, 東京: 朝日新聞社.
- 小林 豊 (1989), 『やさしいタイ語文法：初級及び中級編』, バンコク: 小林株式会社.
- 小泉 順子 (1994), 「バンコク朝と東北地方」, 池端 (編) (1994), 195-218.
- Kreindler, Isabelle T. (ed.) (1985), *Sociolinguistic Perspectives on Soviet National Languages: Their Past, Present and Future*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- 口羽 益生 (1990), 『ドンデン村の伝統構造とその変容』, 東京: 創文社.
- 桑原 政則 (1989), 『東南アジアの民族と言語文化: タイおよび東南アジア・中国・太平洋諸民族』, 東京: 穂高書店.
- Laitin, David and Edward Mensah (1991), "Language Choices among Ghanians," *Language Problems & Language Planning*, 15(2), 121-138.
- Lallukka, Seppo (1990), *The East Finnic Minorities in the Soviet Union: An Appraisals of the Erosive Trends*, Helsinki: Suomalainen Tiedeakatemia.
- Landon, Kenneth Perry (1941), *The Chinese in Thailand: A Report in the International Research Series of the Institute of Pacific Relations*, New York: Secretariat, I.P.R..
- Laponce, J. A. (1992), *What Kind of Bilingualism for Canada: Personal or Territorial? The Demographic Factor*, Messina et al (eds.) (1992), 265-278.
- Lasimbang, Rita, Carolyn Miller and Francis Otigil (1992), "Language Competence and Use among Coastal Kadazan Children: A Survey Report," Fase et al (eds.) (1992), 335-355.
- Laycock, Don (1979), "Multilingualism: Linguistic Boundaries and Unsolved Problems in Papua New Guinea," Wurm (ed.) (1979), 81-99.
- 李 素玲 (1997), 「タイの言語環境：タイの言語の多様性と標準語」, 小野沢 (編) (1997), 14.
- Lieberson, Stanley and Edward J. McCabe (1978), "Domains of Language Usage and Mother Tongue Shift in Nairobi," *International Journal of the Sociology of Language*, 18, 69-81.
- Linz, Juan J. (1985), "From Primordialism to Nationalism," Tiryakian and Rogowski (eds.) (1985), 203-253.
- Lowenberg, Peter H. (ed.) (1988), *Language Spread and Language Policy: Issues, Implications and Case Studies*, Washington, DC: Georgetown University Press.
- Lyons, John (1981), *Language and Linguistics: An Introduction*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Mac Eoin, Gearoid, Anders Ahlqvist, and Donncha O. Haodha (eds.) (1987), *Third International Conference on Minority Languages: General Papers*, Clevedon: Multilingual Matters.
- Mann, Charles and Gabriella Wong (1999), "Issues in Language Planning and Language Education: A Survey from Macao on Its Return to Chinese Sovereignty," *Language Problems & Language Planning*, 23(1), 17-36.
- 松尾 雅嗣 (1990), 「言語的差異：現実、認識、不平等」, 『広島平和科学』, 13, 73-99.

- 松尾 雅嗣 (2000), 「表記体系をめぐる紛争: 文字紛争論序説」, 『広島平和科学』, 12, 75-114.
- Mauzy, Diane K. (1985), "Language and Language Policy in Malaysia," Beer and Jacob (eds.) (1985), 151-177.
- McCormack, William C. and Stephen A. Wurm (eds.) (1979), *Language and Society: Anthropological Issues*, The Hague: Mouton.
- McCrone, David (1992), *Understanding Scotland: The Sociology of a Stateless Nation*, London: Routledge.
- メートカールチット, メート (1994), *コラート語辞書 (タイ語)*, バンコク: ワンチュワリット  
クン美術文化大学ナコンラチャシマ.
- Messina, Anthony M., Luis R. Fraga, Laurie A. Rhodebeck and Frederick D. Wright (eds.) (1992), *Ethnic and Racial Minorities in Advanced Industrial Democracies*, New York: Greenwood.
- Midlarsky, Manus I. (ed.) (1992), *The Internationalization of Communal Strife*, London: Routledge.
- 宮島 喬 (1990), 「差別意識と民族—「ナシオン」の解体」, 二宮 (編) (1990), 363-403.
- 宮島 喬 (1992), 『ひとつのヨーロッパ いくつものヨーロッパ: 周辺の視点から』, 東京: 東京大学出版会.
- Moerman, Michael (1965), "Ethnic Identification in a Complex Civilization: Who are the Lue?," *American Anthropologist*, 67, 1215-1230.
- 村嶋 英治 (1996), 『ピブーン: 独立タイ王国の立憲革命』, 東京: 岩波書店.
- Musa, Monsur (1996), "Politics of Language Planning in Pakistan and the Birth of a New State," *International Journal of the Sociology of Language*, 118, 63-80.
- Muthiani, Joseph (1979), "Sociopolitical Bases of Language Choice and Use: The Case of Swahili Vernaculars and English in Kenya," McCormack and Wurm (eds.) (1979), 377-388.
- ナートスパー, チャタイプ (野中 耕一・末廣 昭 編訳) (1987), 『タイ村落経済史』, 東京: 勁草書房.
- Nagara, Prasert Na and A. B. Griswold (1992), *Epigraphic and Historical Studies*, Bangkok: The Historical Society.
- National Statistical Office (2001), *Statistical Yearbook Thailand*, Number 47, Bangkok: Office of the Prime Minister.
- Newton, Gerald (ed.) (1996), *Luxembourg and Letzebuergesch: Language and Communication at the Crossroads of Europe*, Oxford: Clarendon Press.
- 二宮 宏之 (編) (1990), 『民族の世界史 9 深層のヨーロッパ』, 東京: 山川出版社.
- 西田 龍雄 (編) (1981), 『世界の文字』, 東京: 大修館書店.
- Noss, Richard (1967), *Higher Education and Development in South-east Asia Volume III, Part 2 Language Policy*, Paris: UNESCO and the International Association of Universities.
- O'Barr, William M. and Jean F. O'Barr (eds.) (1976), *Language and Politics*, Hague: Mouton.

- 小野沢 純 (編) (1997), 『ASEAN の言語と文化』, 東京: 高文堂出版社.
- Palakornkul, Angkab (1972), "A Sociolinguistic Study of Pronominal Strategy in Spoken Bangkok Thai," Ph.D. Dissertation, University of Texas at Austin.
- Pascasio, Emy M. and Araceli Hidalgo (1979), "How Role-Relationships, Domains, and Speech Situations Affect Language Use among Bilinguals," McCormack and Wurm (eds.) (1979), 111-126.
- Phinthong, Preecha (1989), "Isan-Thai-English Dictionary," Ubol Thailand: Siritham Press.
- Phittayalongkorn (1929), "Growth of Language," in Collection of Lectures by Phittayalongkorn, published on the occasion of the Khun Thanomsri Sangkhawasi, November 29, 1955.
- Platt, John T. (1977), "A Model for Polyglossia and Multilingualism (with Special Reference to Singapore and Malaysia)," *Language in Society*, 6(3), 361-378.
- Prasithratsint, Amara (1988), "Sociolinguistic Research on Thailand Languages," *Language Sciences*, 10(2), 263-272.
- プーミサック, チット (坂本比奈子訳) (1976), 『タイ族の歴史』, 東京: 井村文化事業社.
- Ra'anan, Uri, Maria Mesner, Keith Armes and Kate Martin (eds.) (1991), *State and Nation in Multiethnic Societies: The Breakup of Multinational States*, Manchester: Manchester University Press.
- Ramirez-Gonzalez, Carlos M. and Roame Torres-Gonzalez (1996), "English under U. S. Sovereignty: Ninety-Five Years of Change of the Status of English in Puerto Rico," Fishman, Conrad and Rubal-Lopez (eds.) (1996), 173-204.
- Raun, Toivo U. (1994), "Ethnic Relations and Conflict in the Baltic States," Duncan and Holman (eds.) (1994), 155-182.
- Rogers, Peter and Suk Soongswang (1996), *Northeast Thailand: from Prehistoric to Modern Times*, Bangkok: D.K.Printing House.
- Romaine, Suzanne (1992), "The Status of Tok Pisin in Papua New Guinea: The Colonial Predicament," Ammon and Hellinger (eds.) (1992), 229-252.
- Romanucci-Ross, Lola and George De Vos (eds.) (1995), *Ethnic Identity: Creation, Conflict and Accommodation*, 3rd ed., Walnut Creek, CA: AltaMira Press.
- Rubin, Joan (1976), "Language and Politics from a Sociolinguistic Point of View," O'Barr and O'Barr (eds.) (1976), 389-404.
- Ruhlen, Merritt (1991), *A Guide to the World's Languages, Volume 1: Classification*, Stanford, California: Stanford University Press.
- Schliesinger, Joachim (2001), *Tai Groups of Thailand: Volume 2 - Profiling of the Existing Groups* -, Bangkok: White Lotus.
- 重富 スパボン (1993), 「タイに「先住民」がないわけ」, 『アジア研ニュース』, 14(7), 12-15.
- Siachitema, Alice K. (1991), "The Social Significance of Language Use and Language Choice in a Zambian Urban Setting: An Empirical Study of Three Neighbourhoods in Lusaka," Cheshire (ed.)

- (1991), 474-490.
- Singh, Rajendra (ed.) (1997), *Grammar, Language and Society: Contemporary Indian Contributions*, New Delhi: Sage.
- Smalley, William A. (1988), "Thailand's Hierarchy of Multilingualism," *Language Sciences*, 10, 245-261.
- Smalley, William A. (1994), *Linguistic Diversity and National Unity: Language Ecology in Thailand*, Chicago & London: University of Chicago Press.
- Srivastava, R. N. (1989), "Perspectives on Language Shift in Multilingual Setting," *International Journal of the Sociology of Language*, 75, 9-26.
- Stuart-Fox, Martin (1998), *The Lao Kingdom of Lan Xang: Rise and Decline*, Bangkok: WhiteLotus.
- Suksamran, Somboon (1993), *Buddhism and Political Legitimacy*, Bangkok: Chulalongkorn University.
- スクサムラン, ソンブーン (綾部真雄訳) (1996), 「民族の存続にむけた戦略：ハート・スイオのプランにおけるケース・スタディ」, 綾部 (編) (1996), 89-116.
- Syamananda, Rong (1990), *A History of Thailand*, Bangkok: Chulalongkorn University.
- 荘司 和子 (1996), 『ソムタムの歌：わたしのタイ 30 年』, 東京: 筑摩書房.
- 高城 玲 (1994), 「タイ農民反乱研究史」, 川口 (編) (1994), 357-383.
- Tambiah, S. J. (1968), "Literacy in a Buddhist Village in North -East Thailand," Goody (ed.) (1968), 86-131.
- 田中 克彦 (1981), 『ことばと国家』, 東京: 岩波書店.
- Tapp, Nicholas (1989), *Sovereignty and Rebellion: The White Hmong of Northern Thailand*, Singapore: Oxford University Press.
- Thomas, M. Ladd (1989), "Thai Muslim Separatism in South Thailand," Forbes (1989) (eds.), 19-31.
- Tiryakian, Edward A. and Ronald Rogowski (eds.) (1985), *New Nationalisms of the Developed West: Toward Explanation*, Boston: Allen and Unwin.
- Titarenko, Larissa (1999), "Globalisation, Nationalism and Ethnic Relations in Belarus," Williams and Sfikas (eds.) (1999), 150-183.
- 豊田 国夫 (1968), 『言語政策の研究』, 東京: 錦正社.
- Trudgill, Peter (1974), *Sociolinguistics: An Introduction*, Harmondsworth: Penguin.
- Tsou, Benjamin K. (1997), "Aspects of the Two Language System and Three Language Problem in the Changing Society of Hong Kong," Wright & Kelly-Holmes (ed.) (1997), 22-33.
- Tugby, Donald and Elise Tugby (1989), "Malay-Muslim and Thai-Buddhist Relations in the Pattani Region: An Interpretation," Forbes (1989) (eds.), 73-89.
- van der Plank, P. (1987), "Frisian Language Use and Ethnic Identity," *International Journal of the Sociology of Language*, 64, 9-20.
- van Hout, Roeland and Henk Munstermann (1988), "The Multidimensionality of Domain

- Configuration," *International Journal of the Sociology of Language*, 74, 107-124.
- van Hout, Roeland and Uus Knops (eds.) (1988), *Language Attitudes in the Dutch Language Area*, Dordrecht: Foris.
- Vasil, Raj (1995), *Asianising Singapore: The PAP's Management of Ethnicity*, Singapore: Heineman Asia.
- Verhoef, Marlene (1998), "In Pursuit of Multilingualism in South Africa," *Multilingua*, 17(2/3), 181-196.
- Vickery, Michael (1987), The Ramkhamhaeng Inscription: a Piltown Skull of Southeast Asian History ?, *International Conference on Thai Studies*, Canberra : The Australian National University.
- Vilfan, Sergij (ed.) (1993), *Ethnic Groups and Language Rights*, Aldershot: Dartmouth.
- Viyouth Chamruspanth et al (1992), *Social-Cultural Change and Political Development in Thailand, 1950-1990: The Northeast*, KhonKaen: Khon Kaen University.
- Williams, Christopher and Thanasis D. Sfikas (eds.) (1999), *Ethnicity and Nationalism in Russia: the CIS and the Baltic States*, Aldershot: Ashgate.
- Wright, Sue and Hellen Kelly-Holmes (eds.) (1997), *One Country, Two Systems, Three Languages: A Survey of Changing Language Use in Hong Kong*, Clevedon: Multilingual Matters.
- Wurm, Stephen A. (ed.) (1979), *New Guinea and Neighboring Areas: A Sociolinguistic Laboratory*, The Hague: Mouton.
- 山下 明博 (1996), 『東北タイにおける言語、地域、政治：紛争不在の事例研究』, 広島大学大学院国際協力研究科修士論文.
- 山下 明博 (1999a), 「タイにおける『ラオ』の呼称とアイデンティティ」, 『国際協力研究誌』, 5(1), 75-85.
- 山下 明博 (1999b), 「東北タイにおける域内格差と民族・言語の関わり」, 『国際開発研究』, 9(1), 115-128.
- 山下 明博 (1999c), 「非タイ語のタイ文字表記による問題点」, 『安田女子大学紀要』, 第 2 7 号, 325-337.
- 山下 明博 (1999d), 「日本語ワープロにおける多言語混在文書作成技法：タイ語仮想キーボードの開発」, 『パーソナルコンピュータユーザ利用技術協会論文誌』, 9(1), 71-79.
- 山下 明博 (2000a), 「ラオ人の帰属意識」, 『国際協力研究誌』, 6(1), 307-315.
- 山下 明博 (2000b), 「タイ語ラオ語キーボードの開発」, 『安田女子大学紀要』, 第 2 8 号, 357-368.
- 山下 明博 (2002), 「東北タイのコラート語に関する研究」, 『安田女子大学紀要』, 第 3 0 号, 223-231.
- 矢野 暢 (編) (1991), 『東南アジアの国際関係』, 東京: 弘文堂.
- 吉川 利治 (1996), 「創られる歴史像：近現代に見るタイの国家意識」, 吉川 (編) (1996), 1-27.



吉川 利治（編）(1996), 『東南アジア史に見る国家意識』, 重点総合研究「総合的地域研究」  
成果報告書シリーズ 12.

Zondag, Koen (1987), "This Morning the Church Presents Comedy: Some Aspect of Frisian in the  
Religious Domain, *International Journal of the Sociology of Language*, 64, 71-81.

## 付録A

東北タイにおける言語認識に関するアンケート調査  
(調査票)



8. บางครั้งคุณเรียกตัวคุณเองว่าคนลาวหรือไม่?  
ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
9. คุณคิดว่าภาษาอีสานเป็นภาษาถิ่นของภาษาไทยหรือไม่?  
ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
10. คุณใช้ภาษาอะไรพูดกับพ่อ? (สามารถเลือกได้มากกว่า 1 ข้อ)  
ไทย อีสาน ลาว เขมร คำเมือง โคราช อื่นๆ( )
11. บางครั้งคุณเรียกตัวคุณเองว่าคนอีสานหรือไม่?  
ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
12. คุณคิดว่าภาษาลาวเหมือนภาษาไทยหรือไม่?  
ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
13. หากคุณแต่งงาน คุณคิดว่าจะอาศัยอยู่กับ พ่อ-แม่ ของภรรยาหรือไม่?  
ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
14. คุณคิดว่าคนลาวเหมือนกับคนไทยหรือไม่?  
ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
15. คุณใช้ภาษาอะไรพูดกับแม่? (สามารถเลือกได้มากกว่า 1 ข้อ)  
ไทย อีสาน ลาว เขมร คำเมือง โคราช อื่นๆ( )
16. คุณคิดว่าภาษาลาวไม่เหมือนกับภาษาไทยหรือไม่?  
ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
17. คุณคิดว่าภาษาลาวเป็นภาษาถิ่นของภาษาไทยหรือไม่?  
ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
18. ถ้าคุณพูดกับข้าราชการในสถานที่ราชการ คุณจะพูดภาษาอะไร?  
(สามารถเลือกได้มากกว่า 1 ข้อ)  
ไทย อีสาน ลาว เขมร คำเมือง โคราช อื่นๆ( )
19. คุณคิดว่าคนไทยเหมือนกับคนอีสานหรือไม่?  
ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
20. ภาษาใดต่อไปนี้ที่คุณเข้าใจเป็นอย่างดี? (สามารถเลือกได้มากกว่า 1 ข้อ)  
ไทย อีสาน ลาว เขมร คำเมือง โคราช อื่นๆ( )
21. คุณคิดว่าคนอีสานเหมือนกับคนลาวหรือไม่?  
ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
22. คุณเคยได้ยินตำนานเรื่องเจ้าฟ้าจ๋มแห่งอาณาจักรล้านช้างหรือไม่?  
ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
23. คุณได้ใช้ภาษาลาวมากกว่าเมื่อก่อนหรือไม่?  
ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
24. คุณคิดว่าคุณเป็นคนไทยมากกว่าเป็นคนลาวหรือไม่?  
ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )

25. ภาษาใดต่อไปนี่ที่คุณเข้าใจบ้าง? (สามารถเลือกได้มากกว่า 1 ข้อ)  
 ไทย อีสาน ลาว เขมร คำเมือง โคราช อื่นๆ( )
26. คุณได้ใช้ภาษาไทยมากกว่าเมื่อก่อนหรือไม่?  
 ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
27. ถ้าคุณพูดกับเพื่อน คุณจะพูดภาษาอะไร? (สามารถเลือกได้มากกว่า 1 ข้อ)  
 ไทย อีสาน ลาว เขมร คำเมือง โคราช อื่นๆ( )
28. คุณคิดว่าภาษาไทยเหมือนภาษาอีสานหรือไม่?  
 ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
29. บางครั้งคุณเรียกตัวคุณเองว่าคนไทยหรือไม่?  
 ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
30. คุณคิดว่าภาษาอีสานเป็นภาษาถิ่นของภาษาลาวหรือไม่?  
 ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
31. คุณคิดว่าคุณเป็นคนอีสานมากกว่าเป็นคนไทยหรือไม่?  
 ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )

ถ้าคุณพูดภาษาโคราช ...

32. คุณคิดว่าภาษาอีสานเหมือนกับภาษาโคราชหรือไม่?  
 ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
33. คุณได้ใช้ภาษาโคราชมากกว่าเมื่อก่อนหรือไม่?  
 ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
34. คุณคิดว่าคุณเป็นคนโคราชมากกว่าเป็นคนอีสานหรือไม่?  
 ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
35. บางครั้งคุณเรียกตัวคุณเองว่าคนโคราชหรือไม่?  
 ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
36. คุณคิดว่าภาษาโคราชเป็นภาษาถิ่นของภาษาอีสานหรือไม่?  
 ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )
37. คุณคิดว่าคนโคราชเหมือนกับคนอีสานหรือไม่?  
 ใช่ ไม่ใช่ อื่นๆ( )

付録 B  
属性とグループ化

## 付録 B. 属性とグループ化

調査の全被験者の属性とグループ化した結果を示す。

なお、数値は該当する被験者数を示し、( ) の中の数値は、全被験者数 2375 人に対する百分比である (%)。

参考に、面接調査日ごとのアンケート件数を示す。

面接調査日	人数
2001/03/03	150 (6.3)
2001/03/04	178 (7.5)
2001/03/05	164 (6.9)
2001/03/06	152 (6.4)
2001/03/07	150 (6.3)
2001/03/08	155 (6.5)
2001/03/09	151 (6.4)
2001/09/03	169 (7.1)
2001/09/04	204 (8.6)
2001/09/05	158 (6.7)
2001/09/06	199 (8.4)
2001/09/07	178 (7.5)
2001/09/08	148 (6.2)
2001/09/09	219 (9.2)

### (1) 地域別

調査は、34ヶ所に居住する被験者に対して実施した。これを、地理的に、東北タイの中央部に位置する「コーンケン地域」と、東北タイの南西部に位置する「ナコンラチャシマ地域」(ナコンラチャシマ県、ブリラム県、チャイヤブーン県)に分類した。地域別の集計については、付録Cを参照のこと。

地域	地点番号	県名	村名	人数
コーンケン地域	1	KhonKaen	Ban Nong Kung	69 (2.9)
	2	KhonKaen	Tha Phra	58 (2.4)
	3	KhonKaen	Muang KhonKaen (西)	150 (6.3)
	4	KhonKaen	Muang KhonKaen (東)	177 (7.5)
	5	KhonKaen	Ban Muang	96 (4.0)
	6	KhonKaen	Kut Kuang	94 (4.0)
	7	KhonKaen	Phra Thad Kham Kaen	150 (6.3)
	8	KhonKaen	Ban Non Sawan	155 (6.5)
	9	KhonKaen	Ban Lau	151 (6.4)
ナコンラチャシマ地域	11	NakhonRatchasima	Phimai	169 (7.1)
	12	NakhonRatchasima	Chokchai	60 (2.5)
	13	NakhonRatchasima	Khon Buri	47 (2.0)
	14	NakhonRatchasima	Pak Thong Chai	97 (4.1)
	15	NakhonRatchasima	Ban Prasat	46 (1.9)
	16	NakhonRatchasima	Ban Wat	15 (0.6)
	17	NakhonRatchasima	Khong	12 (0.5)
	18	NakhonRatchasima	Bua Yai	51 (2.1)
	19	NakhonRatchasima	Ban Sida	34 (1.4)
	20	NakhonRatchasima	Huai Thalaeng	31 (1.3)
	21	BuriRam	Buri Ram	37 (1.6)
	22	BuriRam	Krasang	21 (0.9)
	23	BuriRam	Prakhon Chai	23 (1.0)
	24	BuriRam	Nang Rong	62 (2.6)
	25	BuriRam	Nong Ki	25 (1.1)
	26	NakhonRatchasima	Pat Thong Thai	19 (0.8)
	27	NakhonRatchasima	Sikhiu	42 (1.8)
	28	NakhonRatchasima	Dan Khun Thot	65 (2.7)
	29	NakhonRatchasima	Non Thai	52 (2.2)

ナコンラチャシマ地域 (続き)	30	Chaiyaphum	Nong Bua Khok	25 (1.1)
	31	Chaiyaphum	Chatturat	45 (1.9)
	32	Chaiyaphum	Nong Bua Rawae	30 (1.3)
	33	Chaiyaphum	Thep Sathit	15 (0.6)
	34	Chaiyaphum	Ban Kham Ping	33 (1.4)
	35	NakhonRatchasima	Muang Korat	219 (9.2)

(2) 性別

性別	人数
男性	1197 (50.4)
女性	1178 (49.6)

(3) 年齢別

年齢については、8～102歳の幅があった。年齢のグループ化については、付録Cを参照のこと。

年齢	人数	年齢	人数
8	1 (0.0)	49	29 (1.2)
10	1 (0.0)	50	46 (1.9)
11	5 (0.2)	51	24 (1.0)
12	9 (0.4)	52	33 (1.4)
13	44 (1.9)	53	30 (1.3)
14	107 (4.5)	54	26 (1.1)
15	94 (4.0)	55	23 (1.0)
16	118 (5.0)	56	27 (1.1)
17	141 (5.9)	57	18 (0.8)
18	126 (5.3)	58	22 (0.9)
19	77 (3.2)	59	18 (0.8)
20	69 (2.9)	60	25 (1.1)
21	55 (2.3)	61	10 (0.4)
22	51 (2.1)	62	8 (0.3)
23	56 (2.4)	63	8 (0.3)
24	54 (2.3)	64	14 (0.6)
25	44 (1.9)	65	12 (0.5)
26	35 (1.5)	66	11 (0.5)
27	22 (0.9)	67	12 (0.5)
28	45 (1.9)	68	7 (0.3)
29	40 (1.7)	69	6 (0.3)
30	61 (2.6)	70	12 (0.5)
31	31 (1.3)	71	3 (0.1)
32	40 (1.7)	72	10 (0.4)
33	28 (1.2)	73	4 (0.2)
34	45 (1.9)	74	10 (0.4)
35	39 (1.6)	75	6 (0.3)
36	33 (1.4)	76	4 (0.2)
37	42 (1.8)	77	3 (0.1)
38	36 (1.5)	78	3 (0.1)
39	33 (1.4)	79	3 (0.1)
40	38 (1.6)	80	2 (0.1)
41	28 (1.2)	81	1 (0.0)
42	36 (1.5)	82	1 (0.0)
43	30 (1.3)	83	2 (0.1)
44	41 (1.7)	84	3 (0.1)
45	38 (1.6)	89	1 (0.0)
46	24 (1.0)	93	1 (0.0)
47	42 (1.8)	95	1 (0.0)
48	35 (1.5)	102	2 (0.1)



(4) 居住地別

調査を行った居住地については、「都市部」、「(都市部と農村部の) 中間部」、「農村部」に分類した。居住地のグループ化については、付録Cを参照のこと。

居住地	地点番号	県名	村名	人数
都市部	3	KhonKaen	Muang KhonKaen (西)	150 (6.3)
	4	KhonKaen	Muang KhonKaen (東)	177 (7.5)
	21	BuriRam	Buri Ram	37 (1.6)
	35	NakhonRatchasima	Muang Korat	219 (9.2)
中間部	1	KhonKaen	Ban Nong Kung	69 (2.9)
	2	KhonKaen	Tha Phra	58 (2.4)
	5	KhonKaen	Ban Muang	96 (4.0)
	6	KhonKaen	Kut Kuang	94 (4.0)
	11	NakhonRatchasima	Phimai	169 (7.1)
	12	NakhonRatchasima	Chokchai	60 (2.5)
	13	NakhonRatchasima	Khon Buri	47 (2.0)
	14	NakhonRatchasima	Pak Thong Chai	97 (4.1)
	15	NakhonRatchasima	Ban Prasat	46 (1.9)
	16	NakhonRatchasima	Ban Wat	15 (0.6)
	20	NakhonRatchasima	Huai Thalaeng	31 (1.3)
	22	BuriRam	Krasang	21 (0.9)
	23	BuriRam	Prakhon Chai	23 (1.0)
	26	NakhonRatchasima	Pat Thong Thai	19 (0.8)
27	NakhonRatchasima	Sikhiu	42 (1.8)	
29	NakhonRatchasima	Non Thai	52 (2.2)	
農村部	7	KhonKaen	Phra Thad Kham Kaen	150 (6.3)
	8	KhonKaen	Ban Non Sawan	155 (6.5)
	9	KhonKaen	Ban Lau	151 (6.4)
	17	NakhonRatchasima	Khong	12 (0.5)
	18	NakhonRatchasima	Bua Yai	51 (2.1)
	19	NakhonRatchasima	Ban Sida	34 (1.4)
	24	BuriRam	Nang Rong	62 (2.6)
	25	BuriRam	Nong Ki	25 (1.1)
	28	NakhonRatchasima	Dan Khun Thot	65 (2.7)
	30	Chaiyaphum	Nong Bua Khok	25 (1.1)
	31	Chaiyaphum	Chatturat	45 (1.9)
	32	Chaiyaphum	Nong Bua Rawae	30 (1.3)
	33	Chaiyaphum	Thep Sathit	15 (0.6)
34	Chaiyaphum	Ban Kham Ping	33 (1.4)	

(5) 家庭言語別

日常、母親と話す言語により、「タイ語」、「イサン語」、「コラート語」、「その他」の4グループに分類した。

「タイ語」は、母親とタイ語のみで話す被験者、「イサン語」は、母親とイサン語のみで話す被験者、「コラート語」は、母親とコラート語のみで話す被験者、「その他」は、これら以外の被験者を意味する。(家庭言語の定義については、本文3. 2. 1を参照のこと。)

家庭言語	人数
タイ語	426 (17.9)
イサン語	987 (41.6)
コラート語	356 (15.0)
その他	606 (25.5)

付録C  
単純集計

## 付録C. 単純集計

調査の全被験者の単純集計結果を示す。

### (1) 地域別

地域	人数
コーンケン地域	1100 (46.3)
ナコンラチャシマ地域	1275 (53.7)

### (2) 性別

性別	人数
男性	1197 (50.4)
女性	1178 (49.6)

### (3) 年齢別

8～102歳の年齢を、「24歳以下」「25～44歳」「45歳以上」の3つにグループ化した。

グループ化においては、ラオ人というアイデンティティに関わる、タイの隣国のラオスとの関係に着目した。ラオスは、1975年にラオス人民民主共和国が発足し社会主義体制に移行した。そして、1986年にラオスが自由主義経済原理を導入するまでの期間、タイは、ラオスと敵対関係にあった。そこで、1986年時点でまだ生まれていない「24歳以下」のグループ、1986年時点で未成年であった「25～44歳」のグループ、1986年時点で成人していた「45歳以上」のグループと、3つのグループに分類した。

年齢	人数
24歳以下	1008 (42.4)
25歳～44歳	747 (31.5)
45歳以上	620 (26.1)

### (4) 居住地別

居住地	人数
都市部	584 (24.6)
中間部	938 (39.5)
農村部	853 (35.9)

### (5) 家庭言語別

家庭言語	人数
タイ語	426 (17.9)
イサン語	987 (41.6)
コラート語	356 (15.0)
その他	606 (25.5)

(6) 設問毎の単純集計

問1 あなたは、僧侶とお話するとしたら、何語を使いますか？（複数回答あり）

タイ語 イサン語 ラオ語 クメール語 カムムアン語 コラート語 その他（ ）

タイ語	1318	(55.5)
イサン語	1057	(44.5)
ラオ語	87	(3.7)
クメール語	37	(1.6)
カムムアン語	26	(1.1)
コラート語	506	(21.3)
その他	9	(0.4)

問2 あなたは、都市と農村とでは、どちらに住みたいですか？

都市 農村 その他（ ）

都市	577	(24.3)
農村	1721	(72.5)
その他	77	(3.2)

問3 あなたは、うるち米ともち米のどちらが好きですか？

うるち米 もち米 どちらともいえない

うるち米	1378	(58.0)
もち米	823	(34.7)
その他	174	(7.3)

問4 あなたは、イサン語とラオ語は同じ言語だと思いますか？

はい いいえ その他（ ）

はい	1257	(52.9)
いいえ	882	(37.1)
その他	236	(9.9)

問5 あなたは、以前より、イサン語を多く使うようになりましたか？

はい いいえ その他（ ）

はい	1230	(51.8)
いいえ	1020	(42.9)
その他	125	(5.3)

問6 あなたは、イサン人というよりはむしろラオ人だと思いますか？

はい いいえ その他（ ）

はい	245	(10.3)
いいえ	2067	(87.0)
その他	63	(2.7)

問7 あなたは、子どもと何語で話しますか？（複数回答あり）

タイ語 イサン語 ラオ語 クメール語 カムムアン語 コラート語 その他（ ）

タイ語	1352	(56.9)
イサン語	1057	(44.5)
ラオ語	82	(3.5)
クメール語	34	(1.4)
カムムアン語	23	(1.0)
コラート語	544	(22.9)
その他	19	(0.8)

問 8 あなたは、自分をラオ人と呼ぶことがありますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	560	(23.6)
いいえ	1774	(74.7)
その他	41	(1.7)

問 9 あなたは、イサン語はタイ語の方言だと思いますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	1781	(75.0)
いいえ	535	(22.5)
その他	59	(2.5)

問 10 あなたは、父親と何語で話しますか？ (複数回答あり)

タイ語 イサン語 ラオ語 クメール語 カムムアン語 コラート語 その他 ( )

タイ語	869	(36.6)
イサン語	1288	(54.2)
ラオ語	101	(4.3)
クメール語	42	(1.8)
カムムアン語	24	(1.0)
コラート語	595	(25.1)
その他	8	(0.3)

問 11 あなたは、自分をイサン人と呼ぶことがありますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	1940	(81.7)
いいえ	400	(16.8)
その他	35	(1.5)

問 12 あなたは、ラオ語とタイ語は同じ言語だと思いますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	668	(28.1)
いいえ	1593	(67.1)
その他	114	(4.8)

問 13 あなたは、夫は結婚したら妻方の両親と住むべきだと思いますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	849	(35.7)
いいえ	1083	(45.6)
その他	443	(18.7)

問 14 あなたは、ラオ人はタイ人だと思いますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	1565	(65.9)
いいえ	717	(30.2)
その他	93	(3.9)

問 15 あなたは、母親と何語で話しますか？（複数回答あり）

タイ語 イサン語 ラオ語 クメール語 カムムアン語 コラート語 その他（ ）

タイ語	921	(38.8)
イサン語	1284	(54.1)
ラオ語	99	(4.2)
クメール語	39	(1.6)
カムムアン語	23	(1.0)
コラート語	624	(26.3)
その他	6	(0.3)

問 16 あなたは、タイ語とラオ語は異なる言語だと思いますか？

はい いいえ その他（ ）

はい	1379	(58.1)
いいえ	916	(38.6)
その他	80	(3.4)

問 17 あなたは、ラオ語はタイ語の方言だと思いますか？

はい いいえ その他（ ）

はい	926	(39.0)
いいえ	1380	(58.1)
その他	69	(2.9)

問 18 あなたは、役場で役人とお話するとしたら、何語を使いますか？（複数回答あり）

タイ語 イサン語 ラオ語 クメール語 カムムアン語 コラート語 その他（ ）

タイ語	2133	(89.8)
イサン語	482	(20.3)
ラオ語	43	(1.8)
クメール語	6	(0.3)
カムムアン語	37	(1.6)
コラート語	236	(9.9)
その他	9	(0.4)

問 19 あなたは、タイ人はイサン人だと思いますか？

はい いいえ その他（ ）

はい	1834	(77.2)
いいえ	477	(20.1)
その他	64	(2.7)

問 20 あなたが、次のどのことばを自由に話せますか？（複数回答あり）

タイ語 イサン語 ラオ語 クメール語 カムムアン語 コラート語 その他（ ）

タイ語	1989	(83.7)
イサン語	1297	(54.6)
ラオ語	224	(9.4)
クメール語	41	(1.7)
カムムアン語	50	(2.1)
コラート語	661	(27.8)
その他	15	(0.6)

問 21 あなたは、イサン人はラオ人であると思いますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	1510	(63.6)
いいえ	763	(32.1)
その他	102	(4.3)

問 22 あなたは、ラーンサン王国のチャオ・ファークムの伝説を聞いたことがありますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	563	(23.7)
いいえ	1702	(71.7)
その他	110	(4.6)

問 23 あなたは、以前より、ラオ語を多く使うようになりましたか？

はい いいえ その他 ( )

はい	519	(21.9)
いいえ	1775	(74.7)
その他	81	(3.4)

問 24 あなたは、ラオ人というよりはむしろタイ人だと思いますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	2025	(85.3)
いいえ	311	(13.1)
その他	39	(1.6)

問 25 あなたが、少しでも話せるのは何語ですか？ (複数回答あり)

タイ語 イサン語 ラオ語 クメール語 カムムアン語 コラート語 その他 ( )

タイ語	2222	(93.6)
イサン語	1770	(74.5)
ラオ語	836	(35.2)
クメール語	140	(5.9)
カムムアン語	283	(11.9)
コラート語	910	(38.3)
その他	26	(1.1)

問 26 あなたは、以前より、タイ語を多く使うようになりましたか？

はい いいえ その他 ( )

はい	1812	(76.3)
いいえ	490	(20.6)
その他	73	(3.1)

問 27 あなたは、友人と何語で話しますか？ (複数回答あり)

タイ語 イサン語 ラオ語 クメール語 カムムアン語 コラート語 その他 ( )

タイ語	1434	(60.4)
イサン語	1306	(55.0)
ラオ語	133	(5.6)
クメール語	51	(2.1)
カムムアン語	38	(1.6)
コラート語	681	(28.7)
その他	10	(0.4)

問 28 あなたは、タイ語とイサン語は同じ言語だと思いますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	1085	(45.7)
いいえ	1162	(48.9)
その他	128	(5.4)

問 29 あなたは、自分をタイ人と呼ぶことがありますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	2199	(92.6)
いいえ	138	(5.8)
その他	38	(1.6)

問 30 あなたは、イサン語はラオ語の方言だと思いますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	1218	(51.3)
いいえ	1071	(45.1)
その他	86	(3.6)

問 31 あなたは、タイ人というよりはむしろイサン人だと思いますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	1208	(50.9)
いいえ	1076	(45.3)
その他	91	(3.8)

もし、あなたがコラート語を話すならば・・・(以下の設問は、コラート語話者のみの回答である)

問 32 あなたは、イサン語とコラート語は同じ言語だと思いますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	509	(47.4)
いいえ	539	(50.2)
その他	25	(2.3)

問 33 あなたは、以前より、コラート語を多く使うようになりましたか？

はい いいえ その他 ( )

はい	701	(65.3)
いいえ	349	(32.5)
その他	23	(2.1)

問 34 あなたは、イサン人というよりはむしろコラート人だと思いますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	800	(74.6)
いいえ	258	(24.0)
その他	15	(1.4)

問 35 あなたは、自分をコラート人と呼ぶことがありますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	874	(81.5)
いいえ	184	(17.1)
その他	15	(1.4)



問 36 あなたは、コラート語はイサン語の方言だと思いますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	682	(63.6)
いいえ	375	(34.9)
その他	16	(1.5)

問 37 あなたは、コラート人はイサン人だと思いますか？

はい いいえ その他 ( )

はい	812	(75.7)
いいえ	237	(22.1)
その他	24	(2.2)

付録D  
地域別集計

## 付録D. 地域別集計

地域は、東北タイの中央部に位置するコーンケン地域と、東北タイの南西部に位置するナコンラチャシマ地域（ナコンラチャシマ県、ブリラム県、チャイヤブーン県）の2地区に分類した。

数値は回答者数、( ) は行の百分比、すなわち、コーンケン地域 1100 人、ナコンラチャシマ地域 1275 人に対する百分比。

### 性別

性別	男性	女性
コーンケン地域	512 (46.5)	588 (53.5)
ナコンラチャシマ地域	685 (53.7)	590 (46.3)

### 年齢別

	24歳以下	25～44歳	45歳以上
コーンケン地域	340 (30.9)	356 (32.4)	404 (36.7)
ナコンラチャシマ地域	672 (52.7)	391 (30.7)	212 (16.6)

### 居住地別

	都市部	中間部	農村部
コーンケン地域	328 (29.8)	316 (28.7)	456 (41.5)
ナコンラチャシマ地域	256 (20.1)	622 (48.8)	397 (31.1)

### 家庭言語別

家庭言語別	タイ語	イサン語	コラート語	その他
コーンケン地域	122 (11.1)	785 (71.4)	0 (0.0)	193 (17.6)
ナコンラチャシマ地域	304 (23.8)	202 (15.8)	356 (27.9)	413 (32.4)

### 言語能力

問20 自由に話せるのは何語か(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
コーンケン地域	949 (86.3)	880 (80.0)	122 (11.1)	2 (0.2)	19 (1.7)	0 (0.0)	12 (1.1)
ナコンラチャシマ地域	1040 (81.6)	417 (32.7)	102 (8.0)	39 (3.1)	31 (2.4)	661 (51.8)	3 (0.2)

問25 少しでも話せるのは何語か(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
コーンケン地域	1051 (95.5)	1016 (92.4)	453 (41.2)	45 (4.1)	182 (16.5)	0 (0.0)	19 (1.7)
ナコンラチャシマ地域	1171 (91.8)	754 (59.1)	383 (30.0)	95 (7.5)	101 (7.9)	910 (71.4)	7 (0.5)

### 言語使用

問18 役場で役人と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
コーンケン地域	974 (88.5)	414 (37.6)	31 (2.8)	1 (0.1)	6 (0.5)	0 (0.0)	3 (0.3)
ナコンラチャシマ地域	1159 (90.9)	68 (5.3)	12 (0.9)	5 (0.4)	31 (2.4)	236 (18.5)	6 (0.5)

問1 僧侶と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
コーンケン地域	467 (42.5)	867 (78.8)	30 (2.7)	2 (0.2)	9 (0.8)	0 (0.0)	2 (0.2)
ナコンラチャシマ地域	851 (66.7)	190 (14.9)	57 (4.5)	35 (2.7)	17 (1.3)	506 (39.7)	7 (0.5)

問27 友人と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
コーンケン地域	551 (50.1)	964 (87.6)	51 (4.6)	2 (0.2)	11 (1.0)	0 (0.0)	3 (0.3)
ナコンラチャシマ地域	883 (69.3)	342 (26.8)	82 (6.4)	49 (3.8)	27 (2.1)	681 (53.4)	7 (0.5)

問10 父親と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
コーンケン地域	263 (23.9)	965 (87.7)	36 (3.3)	2 (0.2)	10 (0.9)	0 (0.0)	1 (0.1)
ナコンラチャシマ地域	606 (47.5)	323 (25.3)	65 (5.1)	40 (3.1)	14 (1.1)	595 (46.7)	7 (0.5)

問15 母親と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
コーンケン地域	291 (26.5)	963 (87.5)	38 (3.5)	1 (0.1)	9 (0.8)	0 (0.0)	0 (0.0)
ナコンラチャシマ地域	630 (49.4)	321 (25.2)	61 (4.8)	38 (3.0)	14 (1.1)	624 (48.9)	6 (0.5)

問7 子どもと何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
コーンケン地域	536 (48.7)	828 (75.3)	35 (3.2)	1 (0.1)	7 (0.6)	0 (0.0)	7 (0.6)
ナコンラチャシマ地域	816 (64.0)	229 (18.0)	47 (3.7)	33 (2.6)	16 (1.3)	544 (42.7)	12 (0.9)

言語の使用頻度

問26 以前よりタイ語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	762 (69.3)	301 (27.4)	37 (3.4)
ナコンラチャシマ地域	1050 (82.4)	189 (14.8)	36 (2.8)

問5 以前よりイサン語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	715 (65.0)	328 (29.8)	57 (5.2)
ナコンラチャシマ地域	515 (40.4)	692 (54.3)	68 (5.3)

問23 以前よりラオ語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	245 (22.3)	820 (74.5)	35 (3.2)
ナコンラチャシマ地域	274 (21.5)	955 (74.9)	46 (3.6)

言語の異同認識

問28 タイ語とイサン語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	487 (44.3)	542 (49.3)	71 (6.5)
ナコンラチャシマ地域	598 (46.9)	620 (48.6)	57 (4.5)

問4 イサン語とラオ語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	512 (46.5)	419 (38.1)	169 (15.4)
ナコンラチャシマ地域	745 (58.4)	463 (36.3)	67 (5.3)

問12 ラオ語とタイ語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	256 (23.3)	778 (70.7)	66 (6.0)
ナコンラチャシマ地域	412 (32.3)	815 (63.9)	48 (3.8)

言語の異同認識の確からしさ

問12 ラオ語とタイ語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	256 (23.3)	778 (70.7)	66 (6.0)
ナコンラチャシマ地域	412 (32.3)	815 (63.9)	48 (3.8)

問16 タイ語とラオ語は違う言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	702 (63.8)	363 (33.0)	35 (3.2)
ナコンラチャシマ地域	677 (53.1)	553 (43.4)	45 (3.5)

言語の包含関係

問9 イサン語はタイ語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	847 (77.0)	225 (20.5)	28 (2.5)
ナコンラチャシマ地域	934 (73.3)	310 (24.3)	31 (2.4)

問30 イサン語はラオ語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	526 (47.8)	534 (48.5)	40 (3.6)
ナコンラチャシマ地域	692 (54.3)	537 (42.1)	46 (3.6)

問17 ラオ語はタイ語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	354 (32.2)	710 (64.5)	36 (3.3)
ナコンラチャシマ地域	572 (44.9)	670 (52.5)	33 (2.6)

呼称

問29 自分をタイ人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	1023 (93.0)	67 (6.1)	10 (0.9)
ナコンラチャシマ地域	1176 (92.2)	71 (5.6)	28 (2.2)

問11 自分をイサン人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	985 (89.5)	105 (9.5)	10 (0.9)
ナコンラチャシマ地域	955 (74.9)	295 (23.1)	25 (2.0)

問8 自分をラオ人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	321 (29.2)	765 (69.5)	14 (1.3)
ナコンラチャシマ地域	239 (18.7)	1009 (79.1)	27 (2.1)

帰属意識

問31 タイ人というよりむしろイサン人だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	707 (64.3)	348 (31.6)	45 (4.1)
ナコンラチャシマ地域	501 (39.3)	728 (57.1)	46 (3.6)

問6 イサン人というよりむしろラオ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	85 (7.7)	994 (90.4)	21 (1.9)
ナコンラチャシマ地域	160 (12.5)	1073 (84.2)	42 (3.3)

問24 ラオ人というよりむしろタイ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	987 (89.7)	97 (8.8)	16 (1.5)
ナコンラチャシマ地域	1038 (81.4)	214 (16.8)	23 (1.8)

呼称の異同認識

問19 タイ人はイサン人だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	822 (74.7)	242 (22.0)	36 (3.3)
ナコンラチャシマ地域	1012 (79.4)	235 (18.4)	28 (2.2)

問21 イサン人はラオ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	685 (62.3)	355 (32.3)	60 (5.5)
ナコンラチャシマ地域	825 (64.7)	408 (32.0)	42 (3.3)

問14 ラオ人はタイ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	679 (61.7)	374 (34.0)	47 (4.3)
ナコンラチャシマ地域	886 (69.5)	343 (26.9)	46 (3.6)

その他

問2 都市と農村とどちらに住みたいか

	都市	農村	その他
コーンケン地域	226 (20.5)	840 (76.4)	34 (3.1)
ナコンラチャシマ地域	351 (27.5)	881 (69.1)	43 (3.4)

問3 うるち米ともち米とどちらが好きか

	うるち米	もち米	その他
コーンケン地域	281 (25.5)	703 (63.9)	116 (10.5)
ナコンラチャシマ地域	1097 (86.0)	120 (9.4)	58 (4.5)

問13 夫は結婚後妻方の両親と住むべきか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	434 (39.5)	416 (37.8)	250 (22.7)
ナコンラチャシマ地域	415 (32.5)	667 (52.3)	193 (15.1)

問22 チャオファークム伝説を知っているか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	220 (20.0)	859 (78.1)	21 (1.9)
ナコンラチャシマ地域	343 (26.9)	843 (66.1)	89 (7.0)

・コラート語話者のみに対する設問

言語の使用頻度

問33 以前よりコラート語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
ナコンラチャシマ地域	701 (65.3)	349 (32.5)	23 (2.1)

言語の異同認識

問32 イサン語とコラート語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
ナコンラチャシマ地域	509 (47.4)	539 (50.2)	25 (2.3)

言語の包含関係

問36 コラート語はイサン語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
ナコンラチャシマ地域	682 (63.6)	375 (34.9)	16 (1.5)

呼称

問35 自分をコラート人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
ナコンラチャシマ地域	874 (81.5)	184 (17.1)	15 (1.4)

帰属意識

問34 イサン人というよりむしろコラート人だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
ナコンラチャシマ地域	800 (74.6)	258 (24.0)	15 (1.4)

呼称の異同認識

問37 コラート人はイサン人だと思うか

	はい	いいえ	その他
コーンケン地域	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
ナコンラチャシマ地域	812 (75.7)	237 (22.1)	24 (2.2)

付録 E  
性別集計



付録E. 性別集計

数値は該当する被験者数を示し、( )の中の数値は、「男性」の欄内では男性の被験者数 1197 人、「女性」の欄内では女性の被験者数 1178 人に対する百分比である (%)。

数値は回答者数、( )は行の百分比、すなわち、男性 1197 人、女性 1178 人に対する百分比。

地域別

年齢別

地域別		年齢別			
	コーンケン地域	ナコンラチャシマ地域	24歳以下	25～44歳	45歳以上
男性	512 (42.8)	685 (57.2)	462 (38.6)	412 (34.4)	323 (27.0)
女性	588 (49.9)	590 (50.1)	546 (46.3)	335 (28.4)	297 (25.2)

居住地別

家庭言語別

居住地	居住地別			家庭言語別				
	都市部	中間部	農村部	家庭言語	タイ語	イサン語	コラート語	その他
男性	290 (24.2)	481 (40.2)	426 (35.6)	男性	237 (19.8)	472 (39.4)	186 (15.5)	302 (25.2)
女性	294 (25.0)	457 (38.8)	427 (36.2)	女性	189 (16.0)	515 (43.7)	170 (14.4)	304 (25.8)

言語能力

問20 自由に話せるのは何語か(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
男性	1000 (83.5)	674 (56.3)	123 (10.3)	22 (1.8)	25 (2.1)	352 (29.4)	8 (0.7)
女性	989 (84.0)	623 (52.9)	101 (8.6)	19 (1.6)	25 (2.1)	309 (26.2)	7 (0.6)

問25 少しでも話せるのは何語か(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
男性	1109 (92.6)	904 (75.5)	426 (35.6)	89 (7.4)	146 (12.2)	478 (39.9)	12 (1.0)
女性	1113 (94.5)	866 (73.5)	410 (34.8)	51 (4.3)	137 (11.6)	432 (36.7)	14 (1.2)

言語使用

問18 役場で役人と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
男性	1091 (91.1)	227 (19.0)	21 (1.8)	6 (0.5)	13 (1.1)	132 (11.0)	5 (0.4)
女性	1042 (88.5)	255 (21.6)	22 (1.9)	0 (0.0)	24 (2.0)	104 (8.8)	4 (0.3)

問1 僧侶と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
男性	691 (57.7)	527 (44.0)	40 (3.3)	20 (1.7)	10 (0.8)	270 (22.6)	7 (0.6)
女性	627 (53.2)	530 (45.0)	47 (4.0)	17 (1.4)	16 (1.4)	236 (20.0)	2 (0.2)

問27 友人と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
男性	731 (61.1)	670 (56.0)	70 (5.8)	31 (2.6)	18 (1.5)	355 (29.7)	5 (0.4)
女性	703 (59.7)	636 (54.0)	63 (5.3)	20 (1.7)	20 (1.7)	326 (27.7)	5 (0.4)

問10 父親と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
男性	451 (37.7)	624 (52.1)	55 (4.6)	23 (1.9)	14 (1.2)	309 (25.8)	4 (0.3)
女性	418 (35.5)	664 (56.4)	46 (3.9)	19 (1.6)	10 (0.8)	286 (24.3)	4 (0.3)

問15 母親と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
男性	481 (40.2)	622 (52.0)	51 (4.3)	20 (1.7)	16 (1.3)	315 (26.3)	4 (0.3)
女性	440 (37.4)	662 (56.2)	48 (4.1)	19 (1.6)	7 (0.6)	309 (26.2)	2 (0.2)

問7 子どもと何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
男性	685 (57.2)	518 (43.3)	43 (3.6)	19 (1.6)	12 (1.0)	290 (24.2)	12 (1.0)
女性	667 (56.6)	539 (45.8)	39 (3.3)	15 (1.3)	11 (0.9)	254 (21.6)	7 (0.6)

言語の使用頻度

問26 以前よりタイ語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
男性	906 (75.7)	256 (21.4)	35 (2.9)
女性	906 (76.9)	234 (19.9)	38 (3.2)

問5 以前よりイサン語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
男性	640 (53.5)	492 (41.1)	65 (5.4)
女性	590 (50.1)	528 (44.8)	60 (5.1)

問23 以前よりラオ語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
男性	282 (23.6)	872 (72.8)	43 (3.6)
女性	237 (20.1)	903 (76.7)	38 (3.2)

言語の異同認識

問28 タイ語とイサン語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	555 (46.4)	577 (48.2)	65 (5.4)
女性	530 (45.0)	585 (49.7)	63 (5.3)

問4 イサン語とラオ語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	661 (55.2)	412 (34.4)	124 (10.4)
女性	596 (50.6)	470 (39.9)	112 (9.5)

問12 ラオ語とタイ語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	368 (30.7)	759 (63.4)	70 (5.8)
女性	300 (25.5)	834 (70.8)	44 (3.7)

言語の異同認識の確からしさ

問12 ラオ語とタイ語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	368 (30.7)	759 (63.4)	70 (5.8)
女性	300 (25.5)	834 (70.8)	44 (3.7)

問16 タイ語とラオ語は違う言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	675 (56.4)	478 (39.9)	44 (3.7)
女性	704 (59.8)	438 (37.2)	36 (3.1)

言語の包含関係

問9 イサン語はタイ語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	904 (75.5)	257 (21.5)	36 (3.0)
女性	877 (74.4)	278 (23.6)	23 (2.0)

問30 イサン語はラオ語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	634 (53.0)	520 (43.4)	43 (3.6)
女性	584 (49.6)	551 (46.8)	43 (3.7)

問17 ラオ語はタイ語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	466 (38.9)	694 (58.0)	37 (3.1)
女性	460 (39.0)	686 (58.2)	32 (2.7)

呼称

問29 自分をタイ人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
男性	1096 (91.6)	78 (6.5)	23 (1.9)
女性	1103 (93.6)	60 (5.1)	15 (1.3)

問11 自分をイサン人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
男性	983 (82.1)	196 (16.4)	18 (1.5)
女性	957 (81.2)	204 (17.3)	17 (1.4)

問8 自分をラオ人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
男性	283 (23.6)	892 (74.5)	22 (1.8)
女性	277 (23.5)	882 (74.9)	19 (1.6)

帰属意識

問31 タイ人というよりむしろイサン人だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	605 (50.5)	547 (45.7)	45 (3.8)
女性	603 (51.2)	529 (44.9)	46 (3.9)

問6 イサン人というよりむしろラオ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	139 (11.6)	1021 (85.3)	37 (3.1)
女性	106 (9.0)	1046 (88.8)	26 (2.2)

問24 ラオ人というよりむしろタイ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	1022 (85.4)	158 (13.2)	17 (1.4)
女性	1003 (85.1)	153 (13.0)	22 (1.9)

呼称の異同認識

問19 タイ人はイサン人だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	943 (78.8)	223 (18.6)	31 (2.6)
女性	891 (75.6)	254 (21.6)	33 (2.8)

問21 イサン人はラオ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	800 (66.8)	336 (28.1)	61 (5.1)
女性	710 (60.3)	427 (36.2)	41 (3.5)

問14 ラオ人はタイ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	841 (70.3)	316 (26.4)	40 (3.3)
女性	724 (61.5)	401 (34.0)	53 (4.5)

その他

問2 都市と農村とどちらに住みたいか

	都市	農村	その他
男性	284 (23.7)	872 (72.8)	41 (3.4)
女性	293 (24.9)	849 (72.1)	36 (3.1)

問3 うるち米ともち米とどちらが好きか

	うるち米	もち米	その他
男性	693 (57.9)	412 (34.4)	92 (7.7)
女性	685 (58.1)	411 (34.9)	82 (7.0)

問13 夫は結婚後妻方の両親と住むべきか

	はい	いいえ	その他
男性	446 (37.3)	634 (53.0)	117 (9.8)
女性	403 (34.2)	449 (38.1)	326 (27.7)

問22 チャオファーグム伝説を知っているか

	はい	いいえ	その他
男性	281 (23.5)	852 (71.2)	64 (5.3)
女性	282 (23.9)	850 (72.2)	46 (3.9)

・コラート語話者のみに対する設問

言語の使用頻度

問33 以前よりコラート語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
男性	356 (62.1)	202 (35.3)	15 (2.6)
女性	345 (69.0)	147 (29.4)	8 (1.6)

言語の異同認識

問32 イサン語とコラート語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	254 (44.3)	307 (53.6)	12 (2.0)
女性	255 (51.0)	232 (46.4)	13 (2.6)

言語の包含関係

問36 コラート語はイサン語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	366 (63.8)	197 (34.4)	10 (1.7)
女性	316 (63.2)	178 (35.6)	6 (1.2)

呼称

問35 自分をコラート人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
男性	457 (79.8)	108 (18.8)	8 (1.4)
女性	417 (83.4)	76 (15.2)	7 (1.4)

帰属意識

問34 イサン人というよりむしろコラート人だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	403 (70.3)	158 (27.6)	12 (2.1)
女性	397 (79.4)	100 (20.0)	3 (0.6)

呼称の異同認識

問37 コラート人はイサン人だと思うか

	はい	いいえ	その他
男性	445 (77.7)	112 (19.5)	16 (2.8)
女性	367 (73.4)	125 (21.8)	8 (1.4)

付録F  
年齢別集計

付録F. 年齢別集計

数値は回答者数、( ) は行の百分比、すなわち、24歳以下 1008 人、25～44歳 747 人、45歳以上 620 人に対する百分比。

地域別		性別			
地域	コーンケン地域	ナコンラチャシマ地域		男性	女性
24歳以下	340 (33.7)	668 (66.3)	24歳以下	462 (45.8)	546 (54.2)
25～44歳	356 (47.7)	391 (52.3)	25～44歳	412 (55.2)	335 (44.8)
45歳以上	404 (65.2)	216 (34.8)	45歳以上	323 (52.1)	297 (47.9)

居住地別			家庭言語別					
	都市部	中間部	農村部		タイ語	イサン語	コラート語	その他
24歳以下	303 (30.1)	393 (39.0)	312 (31.0)	都市部	177 (30.3)	186 (31.8)	52 (8.9)	169 (28.9)
25～44歳	191 (25.6)	280 (37.5)	276 (36.9)	中間部	148 (16.0)	294 (31.3)	218 (23.2)	278 (29.6)
45歳以上	90 (14.5)	265 (42.7)	265 (42.7)	農村部	101 (11.8)	507 (59.4)	86 (10.1)	159 (18.6)

言語能力

問20 自由に話せるのは何語か(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
24歳以下	862 (85.5)	387 (38.4)	49 (4.9)	16 (1.6)	25 (2.5)	325 (32.2)	3 (0.3)
25～44歳	629 (84.2)	439 (58.8)	69 (9.2)	13 (1.7)	21 (2.8)	202 (27.0)	7 (0.9)
45歳以上	498 (80.3)	471 (76.0)	106 (17.1)	12 (1.9)	4 (0.6)	134 (21.6)	5 (0.8)

問25 少しでも話せるのは何語か(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
24歳以下	950 (94.2)	663 (65.8)	277 (27.5)	56 (5.6)	95 (9.4)	470 (46.6)	8 (0.8)
25～44歳	692 (92.6)	572 (76.6)	259 (34.7)	35 (4.7)	106 (14.2)	273 (36.5)	10 (1.3)
45歳以上	580 (93.5)	535 (86.3)	300 (48.4)	49 (7.9)	82 (13.2)	167 (26.9)	8 (1.3)

言語使用

問18 役場で役人と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
24歳以下	978 (97.0)	62 (6.2)	9 (0.9)	5 (0.5)	33 (3.3)	94 (9.3)	4 (0.4)
25～44歳	680 (91.0)	158 (21.2)	12 (1.6)	0 (0.0)	3 (0.4)	80 (10.7)	4 (0.5)
45歳以上	475 (76.6)	262 (42.3)	22 (3.5)	1 (0.2)	1 (0.2)	62 (10.0)	1 (0.2)

問1 僧侶と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
24歳以下	756 (75.0)	257 (25.5)	27 (2.7)	14 (1.4)	17 (1.7)	227 (22.5)	6 (0.6)
25～44歳	371 (49.7)	383 (51.3)	28 (3.7)	14 (1.9)	5 (0.7)	158 (21.2)	2 (0.3)
45歳以上	191 (30.8)	417 (67.3)	32 (5.2)	9 (1.5)	4 (0.6)	121 (19.5)	1 (0.2)

問27 友人と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
24歳以下	775 (76.9)	427 (42.4)	59 (5.9)	24 (2.4)	28 (2.8)	349 (34.6)	5 (0.5)
25～44歳	428 (57.3)	437 (58.5)	34 (4.6)	17 (2.3)	8 (1.1)	211 (28.2)	3 (0.4)
45歳以上	231 (37.3)	442 (71.3)	40 (6.5)	10 (1.6)	2 (0.3)	121 (19.5)	2 (0.3)

問10 父親と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
24歳以下	514 (51.0)	416 (41.3)	46 (4.6)	18 (1.8)	14 (1.4)	298 (29.6)	5 (0.5)
25～44歳	233 (31.2)	433 (58.0)	20 (2.7)	17 (2.3)	9 (1.2)	183 (24.5)	3 (0.4)
45歳以上	122 (19.7)	439 (70.8)	35 (5.6)	7 (1.1)	1 (0.2)	114 (18.4)	0 (0.0)

問15 母親と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
24歳以下	551 (54.7)	407 (40.4)	45 (4.5)	14 (1.4)	13 (1.3)	320 (31.7)	5 (0.5)
25～44歳	240 (32.1)	436 (58.4)	25 (3.3)	15 (2.0)	10 (1.3)	189 (25.3)	1 (0.1)
45歳以上	130 (21.0)	441 (71.1)	29 (4.7)	10 (1.6)	0 (0.0)	115 (18.5)	0 (0.0)

問7 子どもと何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
24歳以下	740 (73.4)	275 (27.3)	33 (3.3)	11 (1.1)	15 (1.5)	260 (25.8)	14 (1.4)
25～44歳	407 (54.5)	370 (49.5)	23 (3.1)	13 (1.7)	7 (0.9)	170 (22.8)	4 (0.5)
45歳以上	205 (33.1)	412 (66.5)	26 (4.2)	10 (1.6)	1 (0.2)	114 (18.4)	1 (0.2)

言語の使用頻度

問26 以前よりタイ語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	805 (79.9)	172 (17.1)	31 (3.1)
25～44歳	583 (78.0)	143 (19.1)	21 (2.8)
45歳以上	424 (68.4)	175 (28.2)	21 (3.4)

問5 以前よりイサン語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	415 (41.2)	539 (53.5)	54 (5.4)
25～44歳	414 (55.4)	291 (39.0)	42 (5.6)
45歳以上	401 (64.7)	190 (30.6)	29 (4.7)



問23 以前よりラオ語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	232 (23.0)	743 (73.7)	33 (3.3)
25～44歳	144 (19.3)	568 (76.0)	35 (4.7)
45歳以上	143 (23.1)	464 (74.8)	13 (2.1)

言語の異同認識

問28 タイ語とイサン語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	449 (44.5)	508 (50.4)	51 (5.1)
25～44歳	329 (44.0)	371 (49.7)	47 (6.3)
45歳以上	307 (49.5)	283 (45.6)	30 (4.8)

問4 イサン語とラオ語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	534 (53.0)	385 (38.2)	89 (8.8)
25～44歳	402 (53.8)	265 (35.5)	80 (10.7)
45歳以上	321 (51.8)	232 (37.4)	67 (10.8)

問12 ラオ語とタイ語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	282 (28.0)	692 (68.7)	34 (3.4)
25～44歳	215 (28.8)	492 (65.9)	40 (5.4)
45歳以上	171 (27.6)	409 (66.0)	40 (6.5)

言語の異同認識の確からしさ

問12 ラオ語とタイ語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	282 (28.0)	692 (68.7)	34 (3.4)
25～44歳	215 (28.8)	492 (65.9)	40 (5.4)
45歳以上	171 (27.6)	409 (66.0)	40 (6.5)

問16 タイ語とラオ語は違う言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	558 (55.4)	431 (42.8)	19 (1.9)
25～44歳	428 (57.3)	279 (37.3)	40 (5.4)
45歳以上	393 (63.4)	206 (33.2)	21 (3.4)

言語の包含関係

問9 イサン語はタイ語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	747 (74.1)	237 (23.5)	24 (2.4)
25～44歳	566 (75.8)	162 (21.7)	19 (2.5)
45歳以上	468 (75.5)	136 (21.9)	16 (2.6)

問30 イサン語はラオ語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	542 (53.8)	437 (43.4)	29 (2.9)
25～44歳	379 (50.7)	334 (44.7)	34 (4.6)
45歳以上	297 (47.9)	300 (48.4)	23 (3.7)

問17 ラオ語はタイ語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	408 (40.5)	575 (57.0)	25 (2.5)
25～44歳	289 (38.7)	435 (58.2)	23 (3.1)
45歳以上	229 (36.9)	370 (59.7)	21 (3.4)

呼称

問29 自分をタイ人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	912 (90.5)	77 (7.6)	19 (1.9)
25～44歳	706 (94.5)	28 (3.7)	13 (1.7)
45歳以上	581 (93.7)	33 (5.3)	6 (1.0)

問11 自分をイサン人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	752 (74.6)	242 (24.0)	14 (1.4)
25～44歳	637 (85.3)	95 (12.7)	15 (2.0)
45歳以上	551 (88.9)	63 (10.2)	6 (1.0)

問8 自分をラオ人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	243 (24.1)	751 (74.5)	14 (1.4)
25～44歳	167 (22.4)	565 (75.6)	15 (2.0)
45歳以上	150 (24.2)	458 (73.9)	12 (1.9)

帰属意識

問31 タイ人というよりむしろイサン人だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	403 (40.0)	571 (56.6)	34 (3.4)
25～44歳	384 (51.4)	333 (44.6)	30 (4.0)
45歳以上	421 (67.9)	172 (27.7)	27 (4.4)

問6 イサン人というよりむしろラオ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	105 (10.4)	876 (86.9)	27 (2.7)
25～44歳	67 (9.0)	662 (88.6)	18 (2.4)
45歳以上	73 (11.8)	529 (85.3)	18 (2.9)

問24 ラオ人というよりむしろタイ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	791 (78.5)	197 (19.5)	20 (2.0)
25～44歳	669 (89.6)	70 (9.4)	8 (1.1)
45歳以上	565 (91.1)	44 (7.1)	11 (1.8)

呼称の異同認識

問19 タイ人はイサン人だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	796 (79.0)	187 (18.6)	25 (2.5)
25～44歳	577 (77.2)	144 (19.3)	26 (3.5)
45歳以上	461 (74.4)	146 (23.5)	13 (2.1)

問21 イサン人はラオ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	613 (60.8)	361 (35.8)	34 (3.4)
25～44歳	493 (66.0)	222 (29.7)	32 (4.3)
45歳以上	404 (65.2)	180 (29.0)	36 (5.8)

問14 ラオ人はタイ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	643 (63.8)	333 (33.0)	32 (3.2)
25～44歳	515 (68.9)	191 (25.6)	41 (5.5)
45歳以上	407 (65.6)	193 (31.1)	20 (3.2)

その他

問2 都市と農村とどちらに住みたいか

	都市	農村	その他
24歳以下	336 (33.3)	636 (63.1)	36 (3.6)
25～44歳	163 (21.8)	558 (74.7)	26 (3.5)
45歳以上	78 (12.6)	527 (85.0)	15 (2.4)

問3 うるち米ともち米とどちらが好きか

	うるち米	もち米	その他
24歳以下	738 (73.2)	223 (22.1)	47 (4.7)
25～44歳	410 (54.9)	280 (37.5)	57 (7.6)
45歳以上	230 (37.1)	320 (51.6)	70 (11.3)

問13 夫は結婚後妻方の両親と住むべきか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	385 (38.2)	484 (48.0)	139 (13.8)
25～44歳	229 (30.7)	364 (48.7)	154 (20.6)
45歳以上	235 (37.9)	235 (37.9)	150 (24.2)

問22 チャオファークム伝説を知っているか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	302 (30.0)	672 (66.7)	34 (3.4)
25～44歳	138 (18.5)	553 (74.0)	56 (7.5)
45歳以上	123 (19.8)	477 (76.9)	20 (3.2)

・コラート語話者のみに対する設問

言語の使用頻度

問33 以前よりコラート語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	365 (62.4)	209 (35.7)	11 (1.9)
25～44歳	213 (66.4)	102 (31.8)	6 (1.9)
45歳以上	123 (73.7)	38 (22.8)	6 (3.6)

言語の異同認識

問32 イサン語とコラート語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	294 (50.3)	275 (47.0)	16 (2.7)
25～44歳	135 (42.1)	177 (55.1)	9 (2.8)
45歳以上	80 (47.9)	87 (52.1)	0 (0.0)

言語の包含関係

問36 コラート語はイサン語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	362 (61.9)	218 (37.3)	5 (0.9)
25～44歳	205 (63.9)	108 (33.6)	8 (2.5)
45歳以上	115 (68.9)	49 (29.3)	3 (1.8)

呼称

問35 自分をコラート人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	462 (79.0)	114 (19.5)	9 (1.5)
25～44歳	263 (81.9)	54 (16.8)	4 (1.2)
45歳以上	149 (89.2)	16 (9.6)	2 (1.2)

帰属意識

問34 イサン人というよりむしろコラート人だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	426 (72.8)	152 (26.0)	7 (1.2)
25～44歳	234 (72.9)	81 (25.2)	6 (1.9)
45歳以上	140 (83.8)	25 (15.0)	2 (1.2)

呼称の異同認識

問37 コラート人はイサン人だと思うか

	はい	いいえ	その他
24歳以下	416 (71.1)	155 (26.5)	14 (2.4)
25～44歳	264 (82.2)	51 (15.9)	6 (1.9)
45歳以上	132 (79.0)	31 (18.6)	4 (2.4)

付録G  
居住地別

## 付録G. 居住地別

数値は回答者数、( )は行の百分比、すなわち、都市部 584 人、中間部 938 人、農村部 853 人に対する百分比。

### 地域別

居住地	コーンケン地域	ナコンラチャシマ地域
都市部	328 (56.2)	256 (43.8)
中間部	316 (33.7)	622 (66.3)
農村部	456 (53.5)	397 (46.5)

### 性別

性別	男性	女性
都市部	290 (49.7)	294 (50.3)
中間部	481 (51.3)	457 (48.7)
農村部	426 (49.9)	427 (50.1)

### 年齢別

年齢	24歳以下	25～44歳	45歳以上
都市部	303 (51.9)	191 (32.7)	90 (15.4)
中間部	393 (41.9)	280 (29.9)	265 (28.3)
農村部	312 (36.6)	276 (32.4)	265 (31.1)

### 家庭言語別

	タイ語	イサン語	コラート語	その他
都市部	177 (30.3)	186 (31.8)	52 (8.9)	169 (28.9)
中間部	148 (16.0)	294 (31.3)	218 (23.2)	278 (29.6)
農村部	101 (11.8)	507 (59.4)	86 (10.1)	159 (18.6)

### 言語能力

問20 自由に話せるのは何語か(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
都市部	530 (90.8)	295 (50.5)	54 (9.2)	7 (1.2)	20 (3.4)	111 (19.0)	5 (0.9)
中間部	783 (83.5)	426 (45.4)	91 (9.7)	32 (3.4)	14 (1.5)	373 (39.8)	3 (0.3)
農村部	676 (79.2)	576 (67.5)	79 (9.3)	2 (0.2)	16 (1.9)	177 (20.8)	7 (0.8)

問25 少しでも話せるのは何語か(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
都市部	556 (95.2)	429 (73.5)	189 (32.4)	36 (6.2)	81 (13.9)	175 (30.0)	8 (1.4)
中間部	872 (93.0)	640 (68.2)	341 (36.4)	72 (7.7)	98 (10.4)	468 (49.9)	4 (0.4)
農村部	794 (93.1)	701 (82.2)	306 (35.9)	32 (3.8)	104 (12.2)	267 (31.3)	14 (1.6)

### 言語使用

問18 役場で役人と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
都市部	557 (95.4)	91 (15.6)	16 (2.7)	1 (0.2)	11 (1.9)	35 (6.0)	2 (0.3)
中間部	826 (88.1)	142 (15.1)	13 (1.4)	3 (0.3)	19 (2.0)	146 (15.6)	4 (0.4)
農村部	750 (87.9)	249 (29.2)	14 (1.6)	2 (0.2)	7 (0.8)	55 (6.4)	3 (0.4)

問1 僧侶と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
都市部	449 (76.9)	213 (36.5)	35 (6.0)	4 (0.7)	12 (2.1)	79 (13.5)	2 (0.3)
中間部	509 (54.3)	325 (34.6)	28 (3.0)	29 (3.1)	9 (1.0)	305 (32.5)	2 (0.2)
農村部	360 (42.2)	519 (60.8)	24 (2.8)	4 (0.5)	5 (0.6)	122 (14.3)	5 (0.6)

問27 友人と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
都市部	452 (77.4)	311 (53.3)	38 (6.5)	7 (1.2)	13 (2.2)	116 (19.9)	6 (1.0)
中間部	567 (60.4)	389 (41.5)	49 (5.2)	37 (3.9)	15 (1.6)	382 (40.7)	2 (0.2)
農村部	415 (48.7)	606 (71.0)	46 (5.4)	7 (0.8)	10 (1.2)	183 (21.5)	2 (0.2)

問10 父親と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
都市部	310 (53.1)	289 (49.5)	29 (5.0)	6 (1.0)	16 (2.7)	97 (16.6)	2 (0.3)
中間部	350 (37.3)	386 (41.2)	42 (4.5)	33 (3.5)	6 (0.6)	364 (38.8)	2 (0.2)
農村部	209 (24.5)	613 (71.9)	30 (3.5)	3 (0.4)	2 (0.2)	134 (15.7)	4 (0.5)

問15 母親と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
都市部	325 (55.7)	291 (49.8)	32 (5.5)	6 (1.0)	12 (2.1)	102 (17.5)	1 (0.2)
中間部	366 (39.0)	387 (41.3)	41 (4.4)	31 (3.3)	8 (0.9)	376 (40.1)	4 (0.4)
農村部	230 (27.0)	606 (71.0)	26 (3.0)	2 (0.2)	3 (0.4)	146 (17.1)	1 (0.1)

問7 子どもと何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
都市部	452 (77.4)	217 (37.2)	29 (5.0)	5 (0.9)	11 (1.9)	82 (14.0)	3 (0.5)
中間部	530 (56.5)	315 (33.6)	31 (3.3)	27 (2.9)	9 (1.0)	330 (35.2)	7 (0.7)
農村部	370 (43.4)	525 (61.5)	22 (2.6)	2 (0.2)	3 (0.4)	132 (15.5)	9 (1.1)

言語の使用頻度

問26 以前よりタイ語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
都市部	477 (81.7)	85 (14.6)	22 (3.8)
中間部	707 (75.4)	203 (21.6)	28 (3.0)
農村部	628 (73.6)	202 (23.7)	23 (2.7)

問5 以前よりイサン語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
都市部	239 (40.9)	307 (52.6)	38 (6.5)
中間部	461 (49.1)	423 (45.1)	54 (5.8)
農村部	530 (62.1)	290 (34.0)	33 (3.9)

問23 以前よりラオ語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
都市部	128 (21.9)	426 (72.9)	30 (5.1)
中間部	183 (19.5)	725 (77.3)	30 (3.2)
農村部	208 (24.4)	624 (73.2)	21 (2.5)

言語の異同認識

問28 タイ語とイサン語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	272 (46.6)	274 (46.9)	38 (6.5)
中間部	429 (45.7)	461 (49.1)	48 (5.1)
農村部	384 (45.0)	427 (50.1)	42 (4.9)

問4 イサン語とラオ語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	292 (50.0)	220 (37.7)	72 (12.3)
中間部	518 (55.2)	346 (36.9)	74 (7.9)
農村部	447 (52.4)	316 (37.0)	90 (10.6)

問12 ラオ語とタイ語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	155 (26.5)	391 (67.0)	38 (6.5)
中間部	297 (31.7)	603 (64.3)	38 (4.1)
農村部	216 (25.3)	599 (70.2)	38 (4.5)

言語の異同認識の確からしさ

問12 ラオ語とタイ語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	155 (26.5)	391 (67.0)	38 (6.5)
中間部	297 (31.7)	603 (64.3)	38 (4.1)
農村部	216 (25.3)	599 (70.2)	38 (4.5)

問16 タイ語とラオ語は違う言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	339 (58.0)	215 (36.8)	30 (5.1)
中間部	515 (54.9)	398 (42.4)	25 (2.7)
農村部	525 (61.5)	303 (35.5)	25 (2.9)

言語の包含関係

問9 イサン語はタイ語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	434 (74.3)	131 (22.4)	19 (3.3)
中間部	700 (74.6)	214 (22.8)	24 (2.6)
農村部	647 (75.8)	190 (22.3)	16 (1.9)

問30 イサン語はラオ語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	275 (47.1)	277 (47.4)	32 (5.5)
中間部	514 (54.8)	391 (41.7)	33 (3.5)
農村部	429 (50.3)	403 (47.2)	21 (2.5)

問17 ラオ語はタイ語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	213 (36.5)	354 (60.6)	17 (2.9)
中間部	393 (41.9)	517 (55.1)	28 (3.0)
農村部	320 (37.5)	509 (59.7)	24 (2.8)



呼称

問29 自分をタイ人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
都市部	538 (92.1)	39 (6.7)	7 (1.2)
中間部	880 (93.8)	41 (4.4)	17 (1.8)
農村部	781 (91.6)	58 (6.8)	14 (1.6)

問11 自分をイサン人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
都市部	442 (75.7)	131 (22.4)	11 (1.9)
中間部	758 (80.8)	169 (18.0)	11 (1.2)
農村部	740 (86.8)	100 (11.7)	13 (1.5)

問8 自分をラオ人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
都市部	148 (25.3)	428 (73.3)	8 (1.4)
中間部	177 (18.9)	740 (78.9)	21 (2.2)
農村部	235 (27.5)	606 (71.0)	12 (1.4)

帰属意識

問31 タイ人というよりむしろイサン人だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	250 (42.8)	309 (52.9)	25 (4.3)
中間部	459 (48.9)	445 (47.4)	34 (3.6)
農村部	499 (58.5)	322 (37.7)	32 (3.8)

問6 イサン人というよりむしろラオ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	73 (12.5)	494 (84.6)	17 (2.9)
中間部	94 (10.0)	817 (87.1)	27 (2.9)
農村部	78 (9.1)	756 (88.6)	19 (2.2)

問24 ラオ人というよりむしろタイ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	494 (84.6)	80 (13.7)	10 (1.7)
中間部	791 (84.3)	124 (13.2)	23 (2.5)
農村部	740 (86.8)	107 (12.5)	6 (0.7)

呼称の異同認識

問19 タイ人はイサン人だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	446 (76.4)	116 (19.9)	22 (3.8)
中間部	735 (78.4)	179 (19.1)	24 (2.6)
農村部	653 (76.6)	182 (21.3)	18 (2.1)

問21 イサン人はラオ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	353 (60.4)	204 (34.9)	27 (4.6)
中間部	627 (66.8)	276 (29.4)	35 (3.7)
農村部	530 (62.1)	283 (33.2)	40 (4.7)

問14 ラオ人はタイ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	378 (64.7)	181 (31.0)	25 (4.3)
中間部	636 (67.8)	264 (28.1)	38 (4.1)
農村部	551 (64.6)	272 (31.9)	30 (3.5)

その他

問2 都市と農村とどちらに住みたいか

	都市	農村	その他
都市部	260 (44.5)	299 (51.2)	25 (4.3)
中間部	182 (19.4)	728 (77.6)	28 (3.0)
農村部	135 (15.8)	694 (81.4)	24 (2.8)

問3 うるち米ともち米とどちらが好きか

	うるち米	もち米	その他
都市部	381 (65.2)	158 (27.1)	45 (7.7)
中間部	634 (67.6)	253 (27.0)	51 (5.4)
農村部	363 (42.6)	412 (48.3)	78 (9.1)

問13 夫は結婚後妻方の両親と住むべきか

	はい	いいえ	その他
都市部	167 (28.6)	303 (51.9)	114 (19.5)
中間部	359 (38.3)	408 (43.5)	171 (18.2)
農村部	323 (37.9)	372 (43.6)	158 (18.5)

問22 チャオファークム伝説を知っているか

	はい	いいえ	その他
都市部	145 (24.8)	411 (70.4)	28 (4.8)
中間部	230 (24.5)	651 (69.4)	57 (6.1)
農村部	188 (22.0)	640 (75.0)	25 (2.9)

・コラート語話者のみに対する設問

言語の使用頻度

問33 以前よりコラート語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
都市部	121 (55.8)	90 (41.5)	6 (2.8)
中間部	400 (71.7)	147 (26.3)	11 (2.0)
農村部	180 (60.4)	112 (37.6)	6 (2.0)

言語の異同認識

問32 イサン語とコラート語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	93 (42.9)	115 (53.0)	9 (4.1)
中間部	283 (50.7)	263 (47.1)	12 (2.1)
農村部	133 (44.6)	161 (54.0)	4 (1.3)

言語の包含関係

問36 コラート語はイサン語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	124 (57.1)	87 (40.1)	6 (2.8)
中間部	384 (68.8)	167 (29.9)	7 (1.3)
農村部	174 (58.4)	121 (40.6)	3 (1.0)

呼称

問35 自分をコラート人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
都市部	172 (79.3)	39 (18.0)	6 (2.8)
中間部	494 (88.5)	59 (10.6)	5 (0.9)
農村部	208 (69.8)	86 (28.9)	4 (1.3)

帰属意識

問34 イサン人というよりむしろコラート人だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	163 (75.1)	50 (23.0)	4 (1.8)
中間部	449 (80.5)	103 (18.5)	6 (1.0)
農村部	188 (63.1)	105 (35.2)	5 (1.7)

呼称の異同認識

問37 コラート人はイサン人だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	157 (72.4)	54 (24.9)	6 (2.8)
中間部	430 (77.1)	118 (21.1)	10 (1.8)
農村部	225 (75.5)	65 (21.8)	8 (2.7)

付録H  
家庭言語別

## 付録H. 家庭言語別

数値は回答者数、( )は行の百分比、すなわち、タイ語 426 人、イサン語 987 人、コラート語 356 人、その他 606 人に対する百分比。

### 地域別

地域	コーンケン地域	ナコンラチャシマ地域
タイ語	122 (28.6)	304 (71.4)
イサン語	785 (79.5)	202 (20.5)
コラート語	0 (0.0)	356 (100.0)
その他	193 (31.8)	413 (68.2)

### 性別

	男性	女性
タイ語	237 (55.6)	189 (44.4)
イサン語	472 (47.8)	515 (52.2)
コラート語	186 (52.2)	170 (47.8)
その他	302 (49.8)	304 (50.2)

### 年齢別

	24歳以下	25～44歳	45歳以上
タイ語	266 (62.4)	107 (25.1)	53 (12.4)
イサン語	278 (28.2)	341 (34.5)	368 (37.3)
コラート語	138 (38.8)	128 (36.0)	90 (25.3)
その他	326 (53.8)	171 (28.2)	109 (18.0)

### 居住地別

	都市部	中間部	農村部
タイ語	177 (41.5)	148 (34.7)	101 (23.7)
イサン語	186 (18.8)	294 (29.8)	507 (51.4)
コラート語	52 (14.6)	218 (61.2)	86 (24.2)
その他	169 (27.9)	278 (45.9)	159 (26.2)

### 言語能力

#### 問20 自由に話せるのは何語か(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
タイ語	394 (92.5)	101 (23.7)	17 (4.0)	4 (0.9)	8 (1.9)	82 (19.2)	2 (0.5)
イサン語	787 (79.7)	820 (83.1)	102 (10.3)	1 (0.1)	12 (1.2)	45 (4.6)	8 (0.8)
コラート語	245 (68.8)	74 (20.8)	20 (5.6)	3 (0.8)	4 (1.1)	289 (81.2)	0 (0.0)
その他	563 (92.9)	302 (49.8)	85 (14.0)	33 (5.4)	26 (4.3)	245 (40.4)	5 (0.8)

#### 問25 少しでも話せるのは何語か(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
タイ語	411 (96.5)	239 (56.1)	84 (19.7)	16 (3.8)	37 (8.7)	167 (39.2)	6 (1.4)
イサン語	912 (92.4)	903 (91.5)	404 (40.9)	34 (3.4)	137 (13.9)	93 (9.4)	13 (1.3)
コラート語	302 (84.8)	183 (51.4)	112 (31.5)	17 (4.8)	21 (5.9)	326 (91.6)	0 (0.0)
その他	597 (98.5)	445 (73.4)	236 (38.9)	73 (12.0)	88 (14.5)	324 (53.5)	7 (1.2)

言語使用

問18 役場で役人と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
タイ語	414 (97.2)	9 (2.1)	1 (0.2)	0 (0.0)	5 (1.2)	13 (3.1)	1 (0.2)
イサン語	857 (86.8)	354 (35.9)	12 (1.2)	0 (0.0)	2 (0.2)	4 (0.4)	3 (0.3)
コラート語	285 (80.1)	2 (0.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (1.1)	108 (30.3)	1 (0.3)
その他	577 (95.2)	117 (19.3)	30 (5.0)	6 (1.0)	26 (4.3)	111 (18.3)	4 (0.7)

問1 僧侶と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
タイ語	391 (91.8)	38 (8.9)	9 (2.1)	3 (0.7)	1 (0.2)	30 (7.0)	1 (0.2)
イサン語	325 (32.9)	813 (82.4)	30 (3.0)	0 (0.0)	3 (0.3)	27 (2.7)	3 (0.3)
コラート語	154 (43.3)	10 (2.8)	2 (0.6)	0 (0.0)	2 (0.6)	261 (73.3)	1 (0.3)
その他	448 (73.9)	196 (32.3)	46 (7.6)	34 (5.6)	20 (3.3)	188 (31.0)	4 (0.7)

問27 友人と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
タイ語	388 (91.1)	96 (22.5)	18 (4.2)	7 (1.6)	5 (1.2)	71 (16.7)	3 (0.7)
イサン語	397 (40.2)	901 (91.3)	32 (3.2)	2 (0.2)	2 (0.2)	34 (3.4)	2 (0.2)
コラート語	153 (43.0)	26 (7.3)	9 (2.5)	4 (1.1)	4 (1.1)	312 (87.6)	0 (0.0)
その他	496 (81.8)	283 (46.7)	74 (12.2)	38 (6.3)	27 (4.5)	264 (43.6)	5 (0.8)

問10 父親と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
タイ語	388 (91.1)	29 (6.8)	6 (1.4)	3 (0.7)	3 (0.7)	19 (4.5)	1 (0.2)
イサン語	40 (4.1)	961 (97.4)	12 (1.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (0.2)	1 (0.1)
コラート語	22 (6.2)	12 (3.4)	2 (0.6)	1 (0.3)	1 (0.3)	335 (94.1)	2 (0.6)
その他	419 (69.1)	286 (47.2)	81 (13.4)	38 (6.3)	20 (3.3)	239 (39.4)	4 (0.7)

問15 母親と何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
タイ語	426 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
イサン語	0 (0.0)	987 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
コラート語	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	356 (100.0)	0 (0.0)
その他	495 (81.7)	297 (49.0)	99 (16.3)	39 (6.4)	23 (3.8)	268 (44.2)	6 (1.0)

問7 子どもと何語で話すか(複数回答あり)

	タイ語	イサン語	ラオ語	クメール語	カムムアン語	コラート語	その他
タイ語	392 (92.0)	27 (6.3)	6 (1.4)	2 (0.5)	2 (0.5)	30 (7.0)	5 (1.2)
イサン語	350 (35.5)	801 (81.2)	16 (1.6)	1 (0.1)	0 (0.0)	15 (1.5)	8 (0.8)
コラート語	122 (34.3)	5 (1.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (1.1)	285 (80.1)	2 (0.6)
その他	488 (80.5)	224 (37.0)	60 (9.9)	31 (5.1)	17 (2.8)	214 (35.3)	4 (0.7)

言語の使用頻度

問26 以前よりタイ語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
タイ語	354 (83.1)	52 (12.2)	20 (4.7)
イサン語	689 (69.8)	274 (27.8)	24 (2.4)
コラート語	285 (80.1)	58 (16.3)	13 (3.7)
その他	484 (79.9)	106 (17.5)	16 (2.6)

問5 以前よりイサン語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
タイ語	140 (32.9)	255 (59.9)	31 (7.3)
イサン語	677 (68.6)	260 (26.3)	50 (5.1)
コラート語	116 (32.6)	219 (61.5)	21 (5.9)
その他	297 (49.0)	286 (47.2)	23 (3.8)

問23 以前よりラオ語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
タイ語	79 (18.5)	327 (76.8)	20 (4.7)
イサン語	231 (23.4)	724 (73.4)	32 (3.2)
コラート語	47 (13.2)	302 (84.8)	7 (2.0)
その他	162 (26.7)	422 (69.6)	22 (3.6)

言語の異同認識

問28 タイ語とイサン語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
タイ語	197 (46.2)	212 (49.8)	17 (4.0)
イサン語	428 (43.4)	491 (49.7)	68 (6.9)
コラート語	156 (43.8)	186 (52.2)	14 (3.9)
その他	304 (50.2)	273 (45.0)	29 (4.8)

問4 イサン語とラオ語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
タイ語	214 (50.2)	173 (40.6)	39 (9.2)
イサン語	486 (49.2)	371 (37.6)	130 (13.2)
コラート語	208 (58.4)	133 (37.4)	15 (4.2)
その他	349 (57.6)	205 (33.8)	52 (8.6)

問12 ラオ語とタイ語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
タイ語	126 (29.6)	279 (65.5)	21 (4.9)
イサン語	245 (24.8)	690 (69.9)	52 (5.3)
コラート語	116 (32.6)	222 (62.4)	18 (5.1)
その他	181 (29.9)	402 (66.3)	23 (3.8)

言語の異同認識の確からしさ

問12 ラオ語とタイ語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
タイ語	126 (29.6)	279 (65.5)	21 (4.9)
イサン語	245 (24.8)	690 (69.9)	52 (5.3)
コラート語	116 (32.6)	222 (62.4)	18 (5.1)
その他	181 (29.9)	402 (66.3)	23 (3.8)

問16 タイ語とラオ語は違う言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
タイ語	210 (49.3)	200 (46.9)	16 (3.8)
イサン語	644 (65.2)	317 (32.1)	26 (2.6)
コラート語	202 (56.7)	142 (39.9)	12 (3.4)
その他	323 (53.3)	257 (42.4)	26 (4.3)

言語の包含関係

問9 イサン語はタイ語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
タイ語	299 (70.2)	116 (27.2)	11 (2.6)
イサン語	768 (77.8)	194 (19.7)	25 (2.5)
コラート語	257 (72.2)	87 (24.4)	12 (3.4)
その他	457 (75.4)	138 (22.8)	11 (1.8)

問30 イサン語はラオ語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
都市部	275 (47.1)	277 (47.4)	32 (5.5)
中間部	514 (54.8)	391 (41.7)	33 (3.5)
農村部	429 (50.3)	403 (47.2)	21 (2.5)

問17 ラオ語はタイ語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
タイ語	169 (39.7)	245 (57.5)	12 (2.8)
イサン語	345 (35.0)	612 (62.0)	30 (3.0)
コラート語	159 (44.7)	186 (52.2)	11 (3.1)
その他	253 (41.7)	337 (55.6)	16 (2.6)

呼称

問29 自分をタイ人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
タイ語	387 (90.8)	31 (7.3)	8 (1.9)
イサン語	919 (93.1)	57 (5.8)	11 (1.1)
コラート語	336 (94.4)	12 (3.4)	8 (2.2)
その他	557 (91.9)	38 (6.3)	11 (1.8)

問11 自分をイサン人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
タイ語	257 (60.3)	159 (37.3)	10 (2.3)
イサン語	929 (94.1)	48 (4.9)	10 (1.0)
コラート語	277 (77.8)	73 (20.5)	6 (1.7)
その他	477 (78.7)	120 (19.8)	9 (1.5)

問8 自分をラオ人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
タイ語	70 (16.4)	348 (81.7)	8 (1.9)
イサン語	276 (28.0)	698 (70.7)	13 (1.3)
コラート語	36 (10.1)	311 (87.4)	9 (2.5)
その他	178 (29.4)	417 (68.8)	11 (1.8)



帰属意識

問31 タイ人というよりむしろイサン人だと思うか

	はい	いいえ	その他
タイ語	126 (29.6)	286 (67.1)	14 (3.3)
イサン語	660 (66.9)	283 (28.7)	44 (4.5)
コラート語	164 (46.1)	177 (49.7)	15 (4.2)
その他	258 (42.6)	330 (54.5)	18 (3.0)

問6 イサン人というよりむしろラオ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
タイ語	43 (10.1)	366 (85.9)	17 (4.0)
イサン語	83 (8.4)	885 (89.7)	19 (1.9)
コラート語	36 (10.1)	311 (87.4)	9 (2.5)
その他	83 (13.7)	505 (83.3)	18 (3.0)

問24 ラオ人というよりむしろタイ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
タイ語	349 (81.9)	67 (15.7)	10 (2.3)
イサン語	879 (89.1)	99 (10.0)	9 (0.9)
コラート語	309 (86.8)	37 (10.4)	10 (2.8)
その他	488 (80.5)	108 (17.8)	10 (1.7)

呼称の異同認識

問19 タイ人はイサン人だと思うか

	はい	いいえ	その他
タイ語	334 (78.4)	79 (18.5)	13 (3.1)
イサン語	730 (74.0)	230 (23.3)	27 (2.7)
コラート語	282 (79.2)	66 (18.5)	8 (2.2)
その他	488 (80.5)	102 (16.8)	16 (2.6)

問21 イサン人はラオ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
タイ語	259 (60.8)	147 (34.5)	20 (4.7)
イサン語	611 (61.9)	325 (32.9)	51 (5.2)
コラート語	243 (68.3)	104 (29.2)	9 (2.5)
その他	397 (65.5)	187 (30.9)	22 (3.6)

問14 ラオ人はタイ人だと思うか

	はい	いいえ	その他
タイ語	269 (63.1)	137 (32.2)	20 (4.7)
イサン語	631 (63.9)	318 (32.2)	38 (3.9)
コラート語	262 (73.6)	83 (23.3)	11 (3.1)
その他	403 (66.5)	179 (29.5)	24 (4.0)

その他

問2 都市と農村とどちらに住みたいか

	都市	農村	その他
タイ語	202 (47.4)	204 (47.9)	20 (4.7)
イサン語	129 (13.1)	837 (84.8)	21 (2.1)
コラート語	66 (18.5)	283 (79.5)	7 (2.0)
その他	180 (29.7)	397 (65.5)	29 (4.8)

問3 うるち米ともち米とどちらが好きか

	うるち米	もち米	その他
タイ語	360 (84.5)	47 (11.0)	19 (4.5)
イサン語	250 (25.3)	646 (65.5)	91 (9.2)
コラート語	339 (95.2)	6 (1.7)	11 (3.1)
その他	429 (70.8)	124 (20.5)	53 (8.7)

問13 夫は結婚後妻方の両親と住むべきか

	はい	いいえ	その他
タイ語	128 (30.0)	234 (54.9)	64 (15.0)
イサン語	410 (41.5)	358 (36.3)	219 (22.2)
コラート語	114 (32.0)	176 (49.4)	66 (18.5)
その他	197 (32.5)	315 (52.0)	94 (15.5)

問22 チャオファークム伝説を知っているか

	はい	いいえ	その他
タイ語	119 (27.9)	285 (66.9)	22 (5.2)
イサン語	191 (19.4)	767 (77.7)	29 (2.9)
コラート語	73 (20.5)	260 (73.0)	23 (6.5)
その他	180 (29.7)	390 (64.4)	36 (5.9)

・コラート語話者のみに対する設問

言語の使用頻度

問33 以前よりコラート語を多く使うようになったか

	はい	いいえ	その他
タイ語	122 (49.4)	122 (49.4)	3 (1.2)
イサン語	50 (40.7)	70 (56.9)	3 (2.4)
コラート語	297 (84.9)	45 (12.9)	8 (2.3)
その他	232 (65.7)	112 (31.7)	9 (2.5)

言語の異同認識

問32 イサン語とコラート語は同じ言語だと思うか

	はい	いいえ	その他
タイ語	117 (47.4)	121 (49.0)	9 (3.6)
イサン語	48 (39.0)	72 (58.5)	3 (2.4)
コラート語	167 (47.7)	176 (50.3)	7 (2.0)
その他	177 (50.1)	170 (48.2)	6 (1.7)

言語の包含関係

問36 コラート語はイサン語の方言だと思うか

	はい	いいえ	その他
タイ語	148 (59.9)	95 (38.5)	4 (1.6)
イサン語	70 (56.9)	50 (40.7)	3 (2.4)
コラート語	224 (64.0)	119 (34.0)	7 (2.0)
その他	240 (68.0)	111 (31.4)	2 (0.6)

呼称

問35 自分をコラート人と呼ぶことがあるか

	はい	いいえ	その他
タイ語	187 (75.7)	55 (22.3)	5 (2.0)
イサン語	68 (55.3)	52 (42.3)	3 (2.4)
コラート語	328 (93.7)	19 (5.4)	3 (0.9)
その他	291 (82.4)	58 (16.4)	4 (1.1)

帰属意識

問34 イサン人というよりむしろコラート人だと思うか

	はい	いいえ	その他
タイ語	170 (68.8)	72 (29.1)	5 (2.0)
イサン語	52 (42.3)	69 (56.1)	2 (1.6)
コラート語	316 (90.3)	32 (9.1)	2 (0.6)
その他	262 (74.2)	85 (24.1)	6 (1.7)

呼称の異同認識

問37 コラート人はイサン人だと思うか

	はい	いいえ	その他
タイ語	180 (72.9)	59 (23.9)	8 (3.2)
イサン語	96 (78.0)	26 (21.1)	1 (0.8)
コラート語	279 (79.7)	64 (18.3)	7 (2.0)
その他	257 (72.8)	88 (24.9)	8 (2.2)

## 付録 I

### タイ語ラオ語仮想キーボードの開発

## 付録I. タイ語ラオ語仮想キーボードの開発

### 目 次

- 1 はじめに
- 2 タイ文字とラオ文字の関係
- 3 タイ文字とラオ文字の比較
  3. 1 子音文字
  3. 2 母音文字
  3. 3 音節子母文字
  3. 4 声調記号
  3. 5 特殊文字・特殊記号
  3. 6 数字
- 4 UNICODEにおけるタイ文字とラオ文字
  4. 1 UNICODE とその問題点
  4. 2 UNICODE 上のタイ文字コードとラオ文字コード
    4. 2. 1 タイ文字コードとラオ文字コードが対応する文字群 (文字群A)
    4. 2. 2 タイ文字コードのみに存在するパーリ語・サンスクリット語系文字群 (文字群B)
    4. 2. 3 タイ文字コードのみに存在するその他の文字群 (文字群C)
    4. 2. 4 ラオ文字のみに存在する文字群 (文字群D)
    4. 2. 5 タイ文字コードとラオ文字コードの対応に意味がない文字群 (文字群E)
- 5 UNICODE 拡張ラオ文字コード体系の提案
  5. 1 ラオスにおけるタイ語の影響
  5. 2 UNICODE におけるパーリ語・サンスクリット語系文字の扱い
  5. 3 タイ文字とラオ文字の共存を考慮した UNICODE 拡張ラオ文字コード体系
  5. 4 タイ文字とラオ文字の共存を考慮したラオ語キーボード
- 6 日本語、英語、タイ語、ラオ語混在文書作成環境の開発
  6. 1 タイ語フォントおよびラオ語フォントの開発
  6. 2 タイ語仮想キーボードおよび語仮想キーボードの開発
  6. 3 日本語・英語・タイ語・ラオ語キーボード切替機能の開発
  6. 4 「タイ語ラオ語仮想キーボード」の使用方法
  6. 5 試用評価
- 7 結論

## 1 はじめに

東北タイには、ラオ語を家庭言語として使用する住民が多く存在する。1. 4. 1で述べたように、かつて、東北タイにおいてラオ語の表記には、ラオ文字が用いられてきた。しかし、タイ政府は、タイ国内において、ラオ語を表記するときに、タイ文字を使うことを奨励し、ラオ文字を使用した出版を禁じた。これにより、現在では、ラオ語の表記にラオ文字が次第に使われなくなり、代わりに、タイ文字が使われるようになっている。

本来、ラオ語はラオ文字で表記することが自然であり合理的である。ラオ語をタイ文字で表記する場合、声調を正確に表現することができないという問題が生じる。

筆者は従来から、日本語・英語・タイ語が混在した文書を、日本語ワープロであるMSWord<sup>1</sup>上で作成する技法の開発を行ってきた(山下 1999: 71-79)。これは、「タイ語仮想キーボード」及び TrueType フォント<sup>2</sup>のタイ語フォントを使用するものである。これにより、日本語・英語・タイ語が混在した文書を作成できるようにした。

そして今回、筆者は、コンピュータ上において、タイ語とラオ語の表記を、それぞれタイ文字、ラオ文字で行うことを目的に、日本語・英語・タイ語・ラオ語を同時に使用できる環境を構築することを目指した。しかし、そのためには、いくつかの解決しなければならない問題が存在する。

まず、現在 UNICODE という文字コード体系には、タイ文字、ラオ文字に別々の文字コードが割り当てられている。そして、タイ文字とラオ文字の対応が、ある程度考慮されている。しかし、コンピュータ上で作成したタイ文字の文書をラオ文字に変換したり、ラオ文字の文書をタイ文字に変換するために必要な考慮はなされていない。

また、現在、タイ語のために開発されたキーボードのキー配置と、ラオ語のために開発されたキーボードのキー配置との間に互換性がないため、タイ語キーボードのキー配置を暗記し、タッチタイピングを行っている人が、ラオ語キーボードを使用してラオ語を入力しようとする、また最初からキー配置を暗記しなければならない。

このような問題を解決し、両文字を同時に使用できる環境を構築するために、筆者は、UNICODE 拡張ラオ文字コード体系を提案し、また、タイ語ラオ語互換キーボード配置を提案する。

さらに、上記提案の有効性を確認するために、タイ文字フォント、ラオ文字フォント、タイ語仮想キーボード、ラオ語仮想キーボード、及び、日本語・英語・タイ語・ラオ語混在文書作成環境を開発し、これらの試用評価を行った。

そこで、付録 I において、タイ語とラオ語の関係、及び、タイ文字とラオ文字の関係を

---

<sup>1</sup> MSWord は、Microsoft 社の開発したワープロソフトの製品名である。本論文が対象とするのは、MSWord95 日本語版、MSWord97 日本語版、MSWord98 日本語版という 3 つのバージョンである。

<sup>2</sup> 文字を拡大・縮小しても、滑らかな輪郭を保つことのできるフォントである。

明らかにし、次いで、タイ文字とラオ文字を詳細に比較する。さらに、UNICODE<sup>3</sup>上でタイ文字コードとラオ文字コードを比較し、分類を行う。そして、UNICODE 上のラオ文字コードに、タイ文字のパーリ語・サンスクリット語 (Sanskrit)<sup>4</sup>系の文字コードを加えた拡張ラオ語文字コード体系およびラオ語キーボードのキー配置を提案し、これらの提案の有効性を確認するために開発した、「SimpleThai」「SimpleLao」という TrueType フォント、タイ語仮想キーボード、ラオ語仮想キーボード、日本語・英語・タイ語・ラオ語混在文書作成環境について述べる。

## 2 タイ文字とラオ文字の関係

最初に、タイ語の表記体系であるタイ文字と、ラオ語の表記体系であるラオ文字の関係について述べる。

タイ文字とラオ文字は、既述のように、共にスコタイ文字の流れを汲む表記体系である。スコタイ王朝のラムカムヘン王は、スコタイ文字を国字として採用し (西田 1981: 254)、その後、16世紀末期まで、タイとラオスの北方で使用されていた。タイ人は、そこにサンスクリット系の文字を取り入れ、44の子音文字から構成される現代タイ文字へと発展させてきた。他方、現代ラオ文字も、スコタイ文字を発展させてできたものであり、現代ラオ文字は、33の子音文字から構成されている。

このように、タイ文字、ラオ文字ともに、スコタイ文字の流れを汲んでおり、共通性が高い文字であるといえることができる。ただし、タイ人は、パーリ語・サンスクリット語系の文字をタイ文字に組み込んできたが、ラオ語には、パーリ語・サンスクリット語系の文字は存在しないという相違点は存在する。

## 3 タイ文字とラオ文字の比較

ここで、タイ文字の文字体系とラオ文字の文字体系を、子音文字、母音文字、音節子母文字、声調記号、特殊文字・特殊記号、数字に分類し、それぞれの文字を比較する。

### 3.1 子音文字

---

<sup>3</sup> UNICODE については、3章で詳述する。

<sup>4</sup> サンスクリット語は、広義には、インドで使用されていた古代インド・アーリア語全体を指す (長柄 1998: 62-63)。

タイ文字の子音文字は、現在は使われず廃字となった2個を含め、44個である。表I. 1に、タイ文字の子音文字を示す。

表I. 1 タイ文字の子音文字

ก	ข	ค	ฌ	ง	จ	ฉ	ช	ฌ	ญ	ฎ	ฏ	ฐ	ฑ		
ฒ	ณ	ด	ต	ถ	ท	ธ	น	บ	ป	ผ	ฝ	พ	ฟ	ภ	
ม	ย	ร	ล	ว	ศ	ษ	ส	ห	ฬ	อ	ฮ	廢字	ค	ข	

他方、ラオ語の子音文字は、現在は使われず廃字となった1個を含め、33個である。ただし、最後の6文字は合字体<sup>5</sup>である。表I. 2に、タイ文字の子音文字を示す。

表I. 2 ラオ文字の子音文字

ກ	ຂ	ຄ	ງ	ຈ	ສ	ຊ	ຍ	ດ	ຕ	ຖ	ທ	ນ	ບ	ປ	
ຜ	ຝ	ພ	ຟ	ມ	ຢ	ລ	ວ	ຫ	ອ	ຮ	ຫງ	ຫຍ	ໝ	ໜ	
ຫອ	ຫຼ											廢字	ຮ		

これらの子音文字を、タイ文字とラオ文字で対応させてみる。

まず、タイ文字とラオ文字で対応関係が認められるのは、26個の子音文字である。表I. 3に、タイ文字とラオ文字で対応関係にある子音文字を示す。

表I. 3 タイ文字とラオ文字で対応関係にある子音文字

タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ
ก	ກ	ข	ຂ	ค	ຄ	ง	ງ	จ	ຈ	ช	ຊ	ด	ດ
ต	ຕ	ถ	ຖ	ท	ທ	น	ນ	บ	ບ	ป	ປ	ผ	ຜ
ฝ	ຝ	พ	ພ	ฟ	ຟ	ม	ມ	ย	ຍ	ร	ຮ	ล	ລ
ว	ວ	ศ	ຮ	ห	ຫ	อ	ອ	ฮ	ຮ				

また、タイ文字にしか存在しない子音文字は16個である。表I. 4に、タイ文字にし

<sup>5</sup> 合字体はラオ語の子音の声調変更のための字体である。ラオ語には5~6種の声調が存在する。そして、ある子音の声調を強制的に変更したいとき、**ຫ** という文字を子音の前に置くという規則がある。これが合字体である。合字体は、**ຫ+ງ→ຫງ**, **ຫ+ຍ→ຫຍ**, **ຫ+ນ→ໝ**, **ຫ+ມ→ໜ**, **ຫ+ວ→ຫວ**, **ຫ+ລ→ຫຼ** の6種類である。





表I. 8 タイ文字とラオ文字で対応関係にある母音文字

タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ
๒	ຮ	๓	ຮ	๔	ຮ	๕	ຮ	๖	ຮ	๗	ຮ	๘	ຮ
๙	ຮ	๑	ຮ	๒	ຮ	๓	ຮ	๔	ຮ	๕	ຮ	๖	ຮ
๗	ຮ												

また、タイ文字にしか存在しない母音文字はない。

さらに、ラオ文字にしか存在しない母音文字は2個である。ラオ文字にしか存在しない母音文字を、表I. 9に示す。

表I. 9 ラオ文字にしか存在しない母音文字

ຮ	ຮ
---	---

### 3. 3 音節子母文字

タイ文字には、音節子母と呼ばれる文字が4個ある。そのうち、2個は廃字となっている。表I. 10に、タイ文字の音節子母文字を示す。

表I. 10 タイ文字の音節子母文字

๓	๔	廃字	๕	๖
---	---	----	---	---

ラオ文字には、音節子母は存在しない。

### 3. 4 声調記号

タイ文字には、子音文字に付加することにより、声調を変更することができる声調記号が4個存在する。タイ文字の声調記号を、表I. 11に示す。

表I. 11 タイ文字の声調記号

๑	๒	๓	๔
---	---	---	---

他方、ラオ文字にも、声調記号が4個存在する。ラオ文字の声調記号を、表I. 12に示す。

表I. 12 ラオ文字の声調記号

ˊ	ˊ	ˊ	+
---	---	---	---

タイ語とラオ語では、声調記号の形は似ているが、それにより変更される声調の規則は互いに異なる。ここで、声調記号を、タイ文字とラオ文字で対応させてみる。

タイ文字とラオ文字の声調記号は、それぞれ対応関係が認められる

3. 5 特殊文字・特殊記号

タイ文字には、特殊な目的のために使用される特殊文字・特殊記号が4個存在する。タイ文字の特殊文字・特殊記号調を、表I. 13に示す。

表I. 13 タイ文字の特殊文字・特殊記号

◌̂	◌̃	◌̄	◌̅
----	----	----	----

他方、ラオ語にも、特殊文字・特殊記号が3個存在する。ラオ文字の特殊文字・特殊記号調を、表I. 14に示す。

表I. 14 ラオ文字の特殊文字・特殊記号

◌̂	◌̃	◌̄
----	----	----

タイ文字とラオ文字で対応関係が認められる特殊文字・特殊記号は、3個である。表I. 15に、タイ文字とラオ文字で対応関係にある特殊文字・特殊記号を示す。

表I. 15 タイ文字とラオ文字で対応関係にある特殊文字・特殊記号

タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ
◌̂	◌̂	◌̃	◌̃	◌̄	◌̄								

また、タイ文字にしか存在しない特殊文字・特殊記号は、1個である。タイ文字にしか

存在しない特殊文字・特殊記号調を、表 I. 16 に示す。

表 I. 16 タイ文字にしか存在しない特殊文字・特殊記号

๓
---

ラオ文字にしか存在しない特殊文字・特殊記号はない。

### 3. 6 数字

タイ語の数字は10個である。これらは、アラビア数字の1～9と0に対応している。表 I. 17 に、タイ文字の数字を示す。

表 I. 17 タイ文字の数字

๐	๑	๒	๓	๔	๕	๖	๗	๘	๙	๐
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

他方、ラオ語の数字は、以下の10個である。表 I. 18 に、ラオ文字の数字を示す。

表 I. 18 ラオ文字の数字

໐	໑	໒	໓	໔	໕	໖	໗	໘	໙	໐
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

タイ文字とラオ文字の数字は、10個とも対応関係が認められる。

## 4 UNICODE におけるタイ文字とラオ文字

### 4. 1 UNICODE とその問題点

インターネットの急速な普及に伴い、コンピュータ上で、複数の言語を同時に取り扱う必要性が高まってきた。しかし、これまで世界的に使用されてきた ASCII 文字コード体系といった1バイトの文字コードでは、英語、日本語、タイ語などといった世界の主要な言語を同時に表示させることが困難であった。また、日本語をコンピュータ上で取り扱うために制定された JIS コード体系に代表される、2バイトの文字コード体系は、日本語、中国語といった言語毎に別々にコードが決定されたため、同じコードが異なる文字に割り当てられる結果となった。

そこで、このような問題を解決するため、UNICODE という文字コード体系が国際標準

として提唱された。これは、英語、日本語、タイ語などの世界の主要な言語の文字コードが重複しないように、2バイトの文字コードに割り振るという仕組みである。UNICODEの推進者は、2バイトで表現できる文字コード数は約65,000個と、世界中の言語の文字を表現するには十分の大きさであるとし、将来UNICODEに対応したワープロが発売され、一般化すれば、文字コードの切換えシーケンスを利用することなく世界中の言語の文字が利用でき、文字コードの重複という問題点は解決されるとしている。そしてUNICODEは、WindowsNT、Windows2000、WindowsXPといったパソコン用OSに採用されるようになってきた。

この中で、タイ語のタイ文字には、16進数で0E00～0E7F、ラオ語のラオ文字には、16進数で0E80～0EFFの文字コードが割り当てられている。

#### 4. 2 UNICODE上のタイ文字コードとラオ文字コード

UNICODEにおけるタイ文字コードとラオ文字コードは、隣接する領域に割り当てられており、前章で述べたタイ文字とラオ文字の対応関係が考慮されている。

##### 4. 2. 1 タイ文字コードとラオ文字コードが対応する文字群（文字群A）

両コードを比較した場合、タイ文字コードに16進数で0080のオフセットを加えた値がラオ文字コードに対応しているものが58組ある。これらを文字群Aと定義する。表I.19に、タイ文字コードとラオ文字コードが対応する文字とそのUNICODEを示す。

表I. 19 文字群 A(タイ文字コードとラオ文字コードが対応する文字と UNICODE)

タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ
ก	ກ	ข	ຂ	ค	ຄ	ง	ງ	จ	ຈ	ช	ຊ	ด	ດ
0E01	0E81	0E02	0E82	0E04	0E84	0E07	0E87	0E08	0E88	0E0A	0E8A	0E14	0E94
ต	ຕ	ถ	ຸ	ท	ທ	น	ນ	ป	ປ	ป	ປ	ผ	ຜ
0E15	0E95	0E16	0E96	0E17	0E97	0E19	0E99	0E1A	0E9A	0E1B	0E9B	0E1C	0E9C
ฝ	ຝ	พ	ພ	ฟ	ຟ	ม	ມ	ย	ຢ	ร	ຣ	ล	ລ
0E1D	0E9D	0E1E	0E9E	0E1F	0E9F	0E21	0EA1	0E22	0EA2	0E23	0EA3	0E25	0EA5
ว	ວ	ส	ສ	ห	ຫ	อ	ອ	ฮ	ຮ	ย	ຢ	ะ	ະ
0E27	0EA7	0E2A	0EAA	0E2B	0EAB	0E2D	0EAD	0E2E	0EAE	0E2F	0EAF	0E30	0EB0
๗	໗	๘	໘	๙	໙	๐	໐	๑	໑	๒	໒	๓	໓
0E31	0EB1	0E32	0EB2	0E33	0EB3	0E34	0EB4	0E35	0EB5	0E36	0EB6	0E37	0EB7
๔	໔	๕	໕	๖	໖	๗	໗	๘	໘	๙	໙	๐	໐
0E38	0EB8	0E39	0EB9	0E40	0EC0	0E41	0EC1	0E42	0EC2	0E43	0EC3	0E44	0EC4
๑	໑	๒	໒	๓	໓	๔	໔	๕	໕	๖	໖	๗	໗
0E46	0EC6	0E48	0EC8	0E49	0EC9	0E4A	0ECA	0E4B	0ECB	0E4C	0ECC	0E50	0ED0
๘	໘	๙	໙	๐	໐	๑	໑	๒	໒	๓	໓	๔	໔
0E51	0ED1	0E52	0ED2	0E53	0ED3	0E54	0ED4	0E55	0ED5	0E56	0ED6	0E57	0ED7
๙	໙	๐	໐										
0E58	0ED8	0E59	0ED9										

4. 2. 2 タイ文字コードのみに存在するパーリ語・サンスクリット語系文字群 (文字群 B)

タイ文字コードとラオ文字コードの対応を考えたとき、タイ文字コードのみに存在するものが 27 個ある。これらのうち、パーリ語・サンスクリット語に由来するもの 20 個を文字群 B と定義する。

表 I. 20 に、タイ文字コードのみに存在するパーリ語・サンスクリット語系文字とその UNICODE を示す。

表I. 20 文字群 B(タイ文字コードのみに存在するパーリ語・サンスクリット語系文字と UNICODE)

๑	๒	๓	๔	๕	๖	๗	๘	๙	๐	๑	๒	๓
0E03	0E05	0E06	0E09	0E0B	0E0C	0E0D	0E0E	0E0F	0E10	0E11	0E12	0E13
๔	๕	๖	๗	๘	๙	๐						
0E18	0E20	0E24	0E26	0E28	0E29	0E2C						

4. 2. 3 タイ文字コードのみに存在するその他の文字群 (文字群C)

タイ文字コードとラオ文字コードの対応を考えたとき、タイ文字コードのみに存在するものが27個ある。これらのうち、パーリ語・サンスクリット語に由来するもの以外の7個を文字群Cと定義する。

表I. 21に、タイ文字コードのみに存在する文字とそのUNICODEを示す。

表I. 21 文字群 C(タイ文字コードのみに存在する文字と UNICODE)

฿	๒	๓	๔	๕	๖	๗						
0E3F	0E45	0E47	0E4E	0E4F	0E5A	0E5B						

4. 2. 4 ラオ文字のみに存在する文字群 (文字群D)

タイ文字コードとラオ文字コードの対応を考えたとき、ラオ文字コードのみに存在するものが5個ある。これらを文字群Dと定義する。

表I. 22に、ラオ文字コードのみに存在する文字とそのUNICODEを示す。

表I. 22 文字群 D(ラオ文字コードのみに存在する文字と UNICODE)

ຢ	~	໓	໔	໕								
0E8D	0EBC	0EBD	0EDC	0EDD								

4. 2. 5 タイ文字コードとラオ文字コードの対応に意味がない文字群 (文字群E)

タイ文字とラオ文字で全く関係がないにもかかわらず、タイ文字コードとラオ文字コードタイ文字コードとラオ文字コードに対応が付けられた組合せが1組ある。これを、文字群Eと定義する。

表I. 23に、タイ文字・ラオ文字無関係にコードが対応する組合せとそのUNICODEを示す。

表I. 23 文字群E(タイ文字・ラオ文字無関係にコードが対応する組合せと UNICODE)

タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ	タイ	ラオ
ญ	ຍ												
0E0D	0E8D												

## 5 UNICODE 拡張ラオ文字コード体系の提案

### 5. 1 ラオスにおけるタイ語の影響

最初に、ラオスにおけるタイ語の影響について述べる。ラオスと、1986年に経済開放化政策を開始して以降、タイとの交流が次第に活発になってきたことは、本論文で述べた通りである。また、1994年には、タイとラオスの間に初めての橋がかかり、両国間の交流はさらに加速している。

それに伴い、タイ語に代表されるタイの文化が、直接ラオスに流れ込むことになった。国境のメコン (Mekong) 河を越えて、ラオスでは、タイのテレビ番組を見ることができ、FMラジオの番組も聞くことができる。また、ラオスの図書館や書店ではタイ語の書物が並んでいる。教育の面においても、ラオスでは、タイから派遣された先生の技術協力を受けた教科書の改訂が1993年から実施されている。そこでは、タイの教科書を参考に、科目名や教科書の構成がタイの教科書に類似したラオ語の教科書が作られ、それを使った教育が始まっている (鈴木 1999)。

### 5. 2 UNICODE におけるパーリ語・サンスクリット語系文字の扱い

UNICODE においては、ラオ文字の中に、パーリ語・サンスクリット語系の文字は含まれていない。これは、ある意味で当然のことといえる。しかし、今後タイ人とラオ人との間の交流がさらに深まり、コンピュータ上で作成した文書をやりとりする機会が増加したとき、ラオ人がサンスクリット系の文字を記述する機会は多くなると考えられる。また、タイ人がコンピュータ上で作成したタイ語の文書をラオ語に変換するとき、対応する文字が存在しないのは非常に不便である。

### 5. 3 タイ文字とラオ文字の共存を考慮した UNICODE 拡張ラオ文字コード体系



そこで、筆者は、タイ文字とラオ文字の共存を考慮し、拡張を加えた UNICODE のラオ文字コード体系を考えた。

これは、UNICODE の中でラオ文字コードが使用していない部分に、タイ文字の中のパーリ語・サンスクリット語系の文字を割当てることによって実現するものである。

前章の文字群の定義を使用して、タイ文字およびラオ文字を式で表現すると、

$$(\text{タイ文字}) = (\text{文字群A}) \cup (\text{文字群B}) \cup (\text{文字群C}) \quad \dots (1)$$

$$(\text{ラオ文字}) = (\text{文字群A}) \cup (\text{文字群D}) \quad \dots (2)$$

となる。現在 UNICODE で定義されているタイ文字コードは式 (1)、ラオ文字コードは式 (2) である。

筆者が提案するのは、ラオ文字コードを

$$(\text{ラオ文字}') = (\text{文字群A}) \cup (\text{文字群D}) \cup (\text{文字群B}) \quad \dots (3)$$

とするものである。

具体的には、ラオ文字コードの中で、タイ文字コードと共通な文字群Aと、ラオ文字のみに存在する文字群Dに加え、タイ文字のみに存在しパーリ・サンスクリット系である文字の文字コードに16進数でオフセット0080を加算した文字群Bの総和を、ラオ文字コードとするというものである。

ただし、文字群Eについては、タイ文字とラオ文字で全く関係がないにもかかわらず、タイ文字コードとラオ文字コード対応が付けられた組合せになっているため、文字群Eのように、文字コードが重複してしまう。

そこで、文字群Eについては、重複しない別の文字コードを割り当てる。具体的には、表I. 24のように割り当てる。

なお、表I. 24は、上段が文字、下段がUNICODEを16進数で示したものである。また、文字群A、文字群B、文字群C、文字群D、文字群E、文字群E'は、式(3)において、(ラオ文字')を構成する文字群である。

表I. 24 UNICODE 拡張ラオ文字コード体系

文字群 A										文字群 B			
ᨀ	ᨁ	ᨂ	ᨃ	ᨄ	ᨅ	ᨆ	ᨇ	ᨈ	ᨉ	ᨊ	ᨋ	ᨌ	ᨍ
0E81	0E82	0E84	0E87	0E88	0E8A	0E94	0E95	0E96	0E97	0E83	0E85	0E86	0E89
ᨎ	ᨏ	ᨐ	ᨑ	ᨒ	ᨓ	ᨔ	ᨕ	ᨖ	ᨗ	ᨘ	ᨙ	ᨚ	ᨛ
0E99	0E9A	0E9B	0E9C	0E9D	0E9E	0E9F	0EA1	0EA2	0EA3	0E8B	0E8C	0E8E	0E8F
᨜	᨝	᨞	᨟	ᨠ	ᨡ	ᨢ	ᨣ	ᨤ	ᨥ	ᨦ	ᨧ	ᨨ	ᨩ
0EA5	0EA7	0EAA	0EAB	0EAD	0EAE	0EAF	0EB0	0EB1	0EB2	0E90	0E91	0E92	0E93
ᨦ	ᨧ	ᨨ	ᨩ	ᨪ	ᨫ	ᨬ	ᨭ	ᨮ	ᨯ	ᨰ	ᨱ	ᨲ	ᨳ
0EB3	0EB4	0EB5	0EB6	0EB7	0EB8	0EB9	0EC0	0EC1	0EC2	0E98	0EA0	0EA4	0EA6
ᨰ	ᨱ	ᨲ	ᨳ	ᨴ	ᨵ	ᨶ	ᨷ	ᨸ	ᨹ	ᨺ	ᨻ	ᨼ	
0EC3	0EC4	0EC6	0EC8	0EC9	0ECA	0ECB	0ECC	0ED0	0ED1	0EA8	0EA9	0EAC	
ᨺ	ᨻ	ᨼ	ᨽ	ᨿ	ᨾ	ᨿ	ᨾ	ᨿ					文字群 E
0ED2	0ED3	0ED4	0ED5	0ED6	0ED7	0ED8	0ED9						ᨾ
文字群 D													
ᨾ	ᨿ	ᨾ	ᨿ										0EBE
0EBC	0EBD	0EDC	0EDD										
文字群 E													
ᨾ													
0E8D													

5. 4 タイ文字とラオ文字の共存を考慮したラオ語キーボード

また、筆者は、前節で提案した UNICODE 拡張ラオ文字コード体系を効果的に活用するために、タイ文字とラオ文字の共存を考慮したラオ語キーボードのキー配置を考えた。

現在、タイ語のために開発されたキーボードのキー配置と、ラオ語のために開発されたキーボードのキー配置との間に互換性はない。これは、タイ語とラオ語のキーボードの開発がそれぞれ別に行われたことから、当然の結果といえる。

ここで、タイ語キーボードのキー配置を暗記し、タッチタイピングを行っている人が、ラオ語キーボードを使用してラオ語を入力しようとする、また最初からキー配置を暗記しなければならないという問題がある。

もし、タイ語キーボードのキー配置と、ラオ語キーボードのキー配置が対応していれば、

ラオ語キーボードを使用してラオ語を入力するときに、最初からキー配置を暗記する必要がなくなる。

そこで、タイ語キーボードのキー配置のうち、タイ語とラオ語の文字コードが対応している部分を、ラオ文字に置き換えたキーボードを提案する。

## 6 日本語、英語、タイ語、ラオ語混在文書作成環境の開発

これまで述べた機能を実現するためには、以下の要素をそろえる必要がある。

- (1) タイ語フォント
- (2) ラオ語フォント
- (3) タイ語仮想キーボード
- (4) ラオ語仮想キーボード
- (5) 日本語・英語・タイ語・ラオ語キーボード切替機能

筆者は、上記5要素をすべて開発し、日本語・英語・タイ語・ラオ語が混在する文書を作成する環境を実現した。以下、その実現方法を示す。

### 6. 1 タイ語フォントおよびラオ語フォントの開発

筆者は、まず、タイ語 TrueType フォント「SimpleThai」を開発した。続いて、前章の提案に基づき、タイ語 TrueType フォント「SimpleThai」に改変を加える形で、UNICODE 拡張ラオ文字コード体系に合致した TrueType フォント「SimpleLao」を開発した。これは、表 I. 24 に示したすべての文字を網羅したフォントである。

### 6. 2 タイ語仮想キーボードおよび語仮想キーボードの開発

筆者は、さらに、タイ文字を入力できる「タイ語仮想キーボード」を開発した。そして、前章の提案に基づき、タイ文字とラオ文字の共存を考慮した「ラオ語仮想キーボード」を引き続き開発した。

具体的には、図 I. 1 に示すタイ語仮想キーボードを基本に、すでにタイ語キーボードのキー配置を暗記した人でもラオ文字が容易に入力できるよう、図 I. 2 のように、ラオ語の文字を配置した。また、ラオ語とタイ語の文字を区別するために、ラオ文字のキー表記は細字、タイ文字のキー表記は太字で表示することにした。なお、図 I. 1、図 I. 2 において、「Shift

On」と記した部分は、キーボードのシフトキーを押しているときに入力される文字、「Shift Off」と記した部分は、キーボードのシフトキーを押していないときに入力される文字を示す。



図I. 1 タイ語仮想キーボード



図I. 2 ラオ語仮想キーボード

### 6. 3 日本語・英語・タイ語・ラオ語キーボード切替機能の開発

筆者は、タイ語仮想キーボード、ラオ語仮想キーボードを、日本語ワードプロセッサであるMSWord日本語版上で自由に呼び出し、日本語・英語・タイ語・ラオ語キーボードを自由に切替ができる機能を開発した。そして、これによって、日本語、英語、タイ語、ラオ語を混在させた文書を作成するための環境を完成させた。

従来、日本語・英語・タイ語・ラオ語を混在させた文書をパソコン上で作成するためには、フォントの入手や入力方法など、様々な問題を解決しなければならなかった。特に、



ここで、表示されているタイ文字をマウスでクリックするか、実際のキーボードからキーを押すことにより、タイ文字を文書に入力することができる。

また、右のボタンをクリックすると、図 I. 2 の「ラオ語仮想キーボード」が表示される。そこで、表示されているラオ文字をマウスでクリックするか、実際のキーボードからキーを押すことにより、ラオ文字を文書に入力することができる。

どちらの仮想キーボードも、「ESC」キーを押すか、ウィンドウの右上の X をクリックすることにより表示されなくなる。

## 6. 5 試用評価

筆者は、「タイ語ラオ語仮想キーボード」を開発した後、このソフトウェアを使用して、タイ語・ラオ語が混在する文書を作成し、操作性を評価した。また、本論文も、「タイ語ラオ語仮想キーボード」を使用して、日本語・英語・タイ語・ラオ語を混在させ、作成したものである。

その結果、「タイ語ラオ語仮想キーボード」を用いることによって、高速に、日本語・英語・タイ語・ラオ語混在の文書を作成することができ、その実用性を確認することができた。

また、実際のタイ語キーボードやラオ語キーボードを使用しなくとも、タイ語とラオ語のキー配置を覚えることができ、タイ語・ラオ語を容易に入力できるようになった。

その一方で、以下の2点が問題であることが判明した。

第1は、ソフトウェアの導入が容易ではないという点である。このソフトウェアの導入に際しては、まず、MSWord 日本語版のサブディレクトリ内の1個のファイルを置換し、次にタイ語フォントをインストール、さらにラオ語フォントをインストールするという3段階の作業が必要となる。

第2は、タイ語・ラオ語と日本語・英語のフォントの高さが異なるため、4言語混在文書を作成したときに、改行幅が揃わないという点である。これについては、改行幅を統一する範囲をマウスで選択し、MSWord で、書式/段落/インデントと行間隔/行間＝「固定値」・間隔＝「21pt」と指定し直さなければならない。

## 7 結論

今回提案した、タイ文字とラオ文字の共存を考慮した UNICODE 拡張ラオ文字コード体系とそれに対応したラオ語キーボードのキー配置は、すでにタイ語キーボードをコンピュータ上で使用している利用者にとって、キーボード配置を暗記し直さなくても容易にラオ

語の入力ができるという点から、極めて有用であると考ええる。

また、タイ語ラオ語仮想キーボードは、タイ語とラオ語を、マウスを使用して容易に入力できることから、タイ・ラオスからの留学生、タイ・ラオス研究者、そして、タイ語・ラオ語の学習者といった様々な利用者にとって有用であると考ええる。現在、タイ語ラオ語仮想キーボードは、天理大学国際文化学部タイ学科で採用されている。

さらに、今後は、国際化の進展に伴い、留学生以外にも、数多くのタイ人やラオス人が日本を訪れると予測され、タイ語ラオ語仮想キーボードの利用価値は、より一層高まるものと考えられる。

そこで、今後は、試用評価で判明した2つの問題点に対する対処、すなわち、インストールを簡素化し、改行幅を揃える機能を追加するという開発を行うことにより、より利用者に優しいソフトウェアへと発展させていきたい。さらに、このソフトウェアを、カンボジアのクメール語やミャンマーのビルマ語といった、さらに多くの言語に対応させることによって、実用性を一層高めていきたい。

## 付録 I における引用文献

- 橋本萬太郎 (1981), 「シナ・チベット諸語」, 北村 (編) (1998), 153.
- 北村 甫 (編) (1981), 『世界の言語』, 東京: 大修館書店.
- 長柄 行光 (1998), 「サンスクリット語」, 東京外国語大学語学研究所 (編) (1998), 62-63.
- 西田 龍雄 (編) (1981), 『世界の文字』, 東京: 大修館書店.
- 太田 昌孝 (1995), 「文字コードと国際化」, 『bit』, 1995(6), 4-10.
- Smalley, William A. (1994), *Linguistic Diversity and National Unity: Language Ecology in Thailand*, Chicago & London: University of Chicago Press.
- 鈴木 玲子 (1999), 『ラオスにおけるラオ語の現状: ラオ語とタイ語の語彙比較から』, 京都: 京都大学東南アジア研究センター「民族間関係・異動・分化再編」第5回研究会配布資料.
- 東京外国語大学語学研究所 (編) (1998), 『世界の言語ガイドブック 2: アジア・アフリカ地域』, 東京: 三省堂.
- 土屋 俊 (1994), 「電子化された世界の言語問題」, 『月刊言語』, 1994(5), 86-91.
- 山下 明博 (1999), 「日本語ワープロにおける多言語混在文書作成技法: タイ語仮想キーボードソフトの開発」, 『パーソナルコンピュータユーザ利用技術協会論文誌』, 9(1).